九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—54—

下　巻

朝倉郡朝倉町所在

金　場　遺　跡

1999

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—54—

下　巻

朝倉郡朝倉町所在

金　場　遺　跡

本 文 目 次

〈下 巻〉 頁

C 土壙 ……199
D 石棺系竪穴式石室 ……256
E 中原1号墳 ……262
F その他の遺構出土遺物 ……270

V 各 論 ……285
A 土壌中火山灰抽出分析報告（株式会社 京都フィッション・トラック） …285
B 金場遺跡の炭化米特性と稲作起源（和佐野喜久生・真鍋智子） ……291
C 金場遺跡における種実同定（株式会社 古環境研究所） ……303
D 集落の変遷 ……309
E 旧石器グリッド ……320
F 弥生中期初葉土器について ……326

VI 補 遺 ……329

C 土 壙

第1号土壙 (Fig.130, PL.37)

I区中央付近の，第1号住居跡の東隣に位置する。南北に長い不整形土壙で，320×146cmで深さ20cm程となる。底面は北東から南西方向へ傾斜している。小ピットが5個みられるが，その性格は不明。

出土遺物

甕（Fig.131-1）幾らか長めに開く如意形口縁に，沈線1条を有するもの。外面下半は剝げており，胴部内面は丁寧なナデ。焼成良好で淡橙褐色をなす。

敲石（Fig.195-1）長く重量のある敲石で，硬質の片岩系石材。上下端に潰れ部分が認められる。両側面は敲打により整形調整されている。長さ270mm，幅59mm，厚さ43mm，重さ1,305.8gとなる。

以上の出土遺物から，当土壙は弥生中期初葉のもので，その性格は，住居近くの廃棄土壙になると推定される。

第2号土壙 (Fig.130, PL.38)

I区の中央付近に位置する，東西に長い不整形土壙である。西側で第1号住居跡を切る。長さ404cm，幅146～78cm，深さ35cm程となる。底面は西半で擂鉢状となり，遺物もそのカーブに沿ってレンズ状に堆積したもののようである。中からは片岩板石や河原石，安山岩質塊石とともに弥生土器がかなり出土した。土器類の大半は底面から10～20cm程浮いている。

出土遺物（土器はFig.131-2～11）

甕（2～8）2は口唇外下端にのみ小さな刻目を施す如意形口縁類。口縁内面に横ハケ，胴部外面に縦ハケを施す。口唇外面は凹状。焼成良好で内面は淡橙褐色，外面は口縁部に煤が付着して褐色をなす。3は内面に稜を作り外折する口縁となる異類。直線的で全く張らない胴部を持ち，内面は丁寧なナデ。外面はわりと細かいハケ。焼成良好で内面は黄褐色，外面は煤が付着し，黄褐～褐色。4は口径23cmで，胴部内面はナデ，口縁内面には横ハケが残る。焼成良好で内外褐色。5は口径27.8cmで，丸く屈曲反転する口縁となる。胴部内面はナデ，口縁部内面横ハケ。焼成良好で内面は褐色，外面は淡橙褐色。外面上半には煤付着。6は底径7cmで，内面はナデで炭化物付着。底外面はナデ。上げ底となるか。焼成良好で内外とも淡橙褐色。7は底径7cmで，内面と底外面はナデ。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外黄褐色。8は底径6cmで，内面と底外面はナデ。外側面はハケをナデ消す。大きな上げ底となり，焼成良好で内面は褐色，外面は黄褐色をなす。

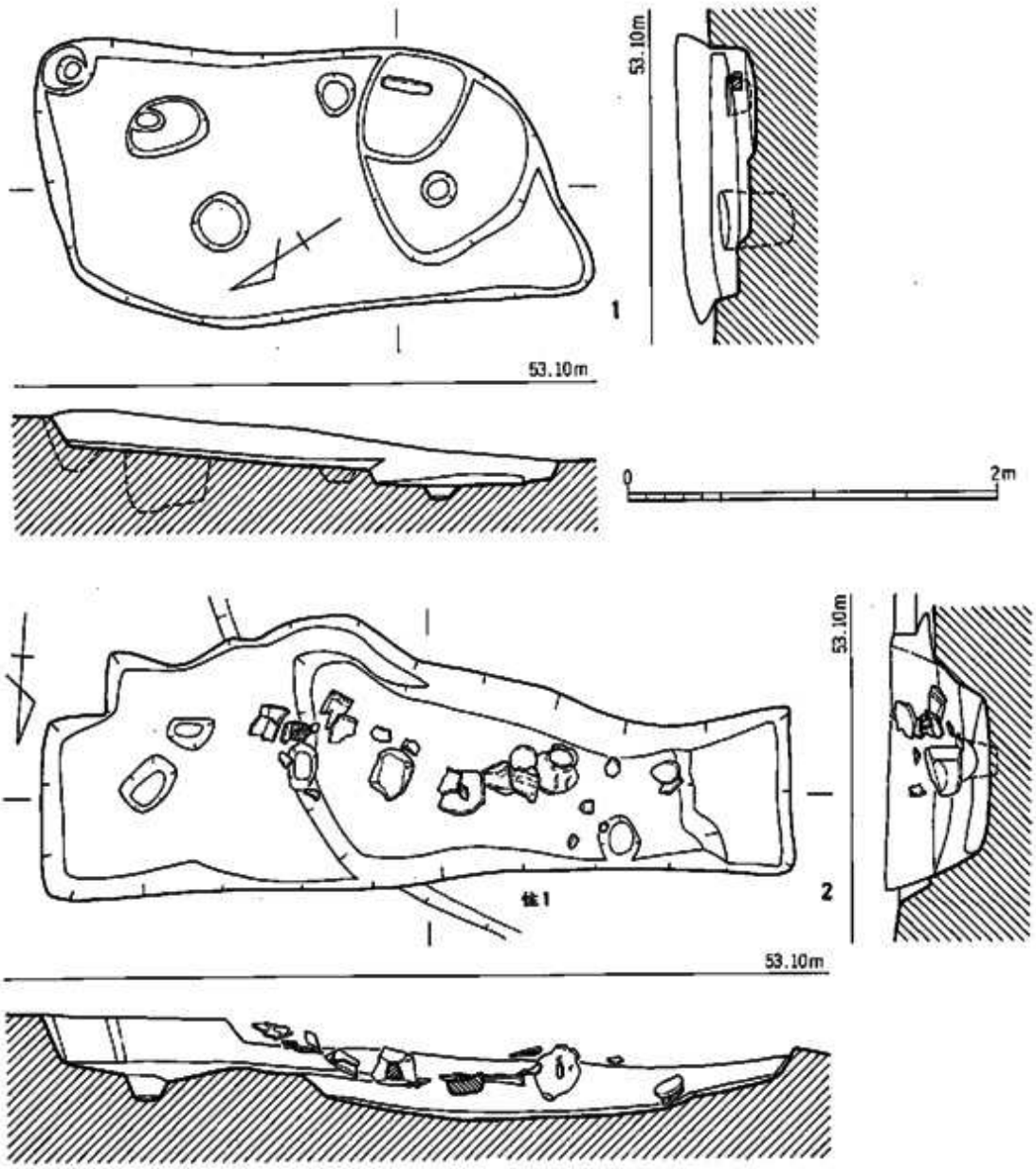


Fig. 130　第1・2号土壙実測図（1/40）

壺（9～11）9は口径10cmの小壺で，内面は丁寧なナデ，外面は横ナデ。焼成良好で内外とも淡橙褐色。10は口径16.2cm，器高27.1cm，胴部最大径23.6cm，底径7.8cm。口頸部外面は縦ハケの上を横ヘラ磨き。他内外面はすべて横ヘラ磨き。胴部上半には縦3本ずつのヘラ沈線による縦位弧状文が施されている。稀例である。ほぼ完形で，胴部下半に焼成後の打ち欠き状穿孔

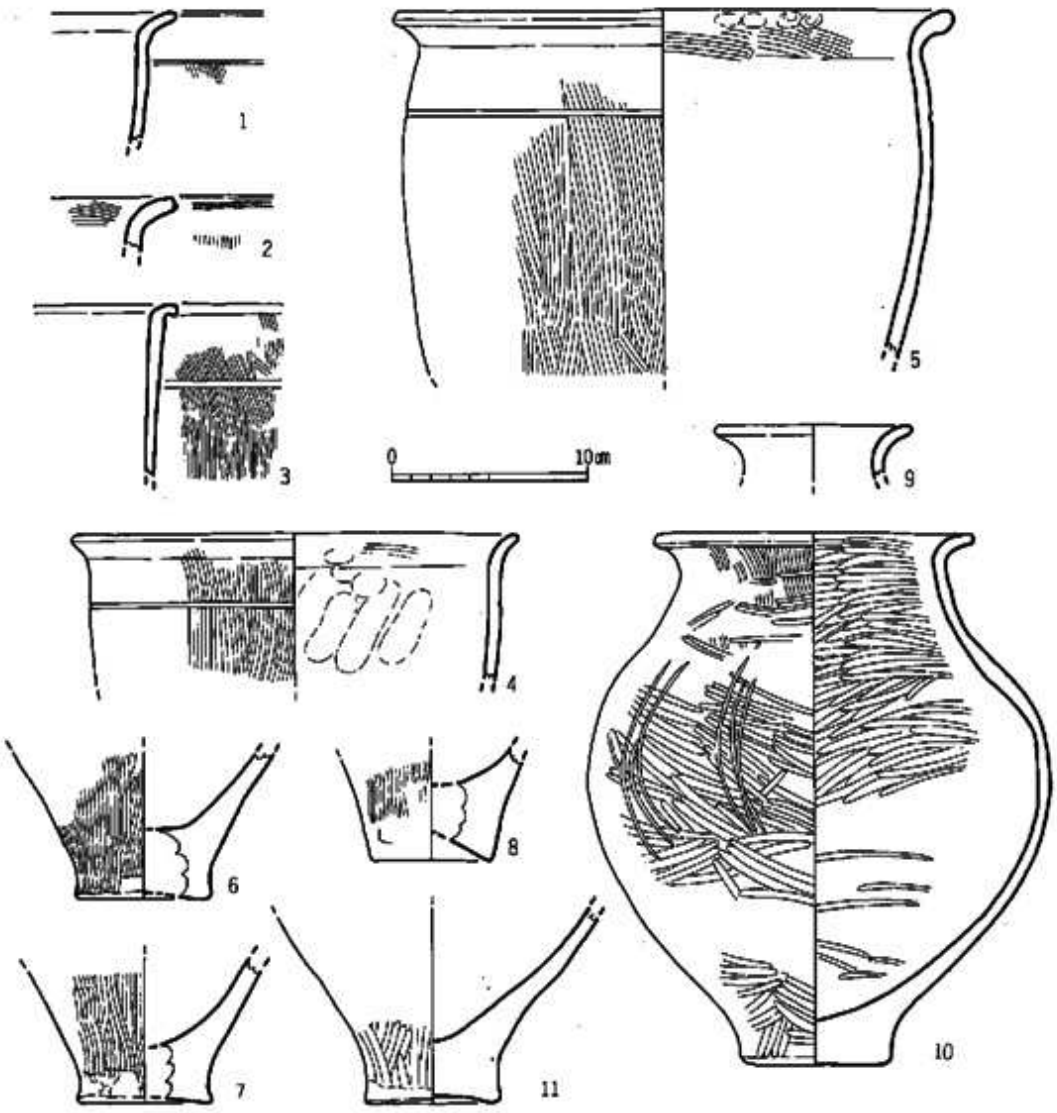


Fig. 131　第1号土壙(1)，第2号土壙(2～11)出土土器実測図 (1/4)

がみられる。焼成良好で褐色をなす。11は底径7cmで僅かな上げ底。内面はナデ，外面上半は磨滅，下半は縦ヘラ磨き。底外面はナデ。焼成良好で内外淡橙褐色。

使用剝片（Fig.70-150）良質の腰岳系黒曜石の縦長不定形剝片に縁辺調整を加えただけのもの。打面は礫面で，縁辺チッピングは鈍角で，全体にプランティング的。何ケ所かに潰れた部分がみられ，掻器的使用が考えられる。長さ30mm，幅23mm，厚さ3mm，重さ2.4gとなる。

以上の出土遺物のうち，甕2は刻目を持ち，弥生前期末葉的だが，他の3のような異類や，外面沈線類，底部肥厚類などから見て，弥生中期初葉のものが大半である。よって当土壙は弥

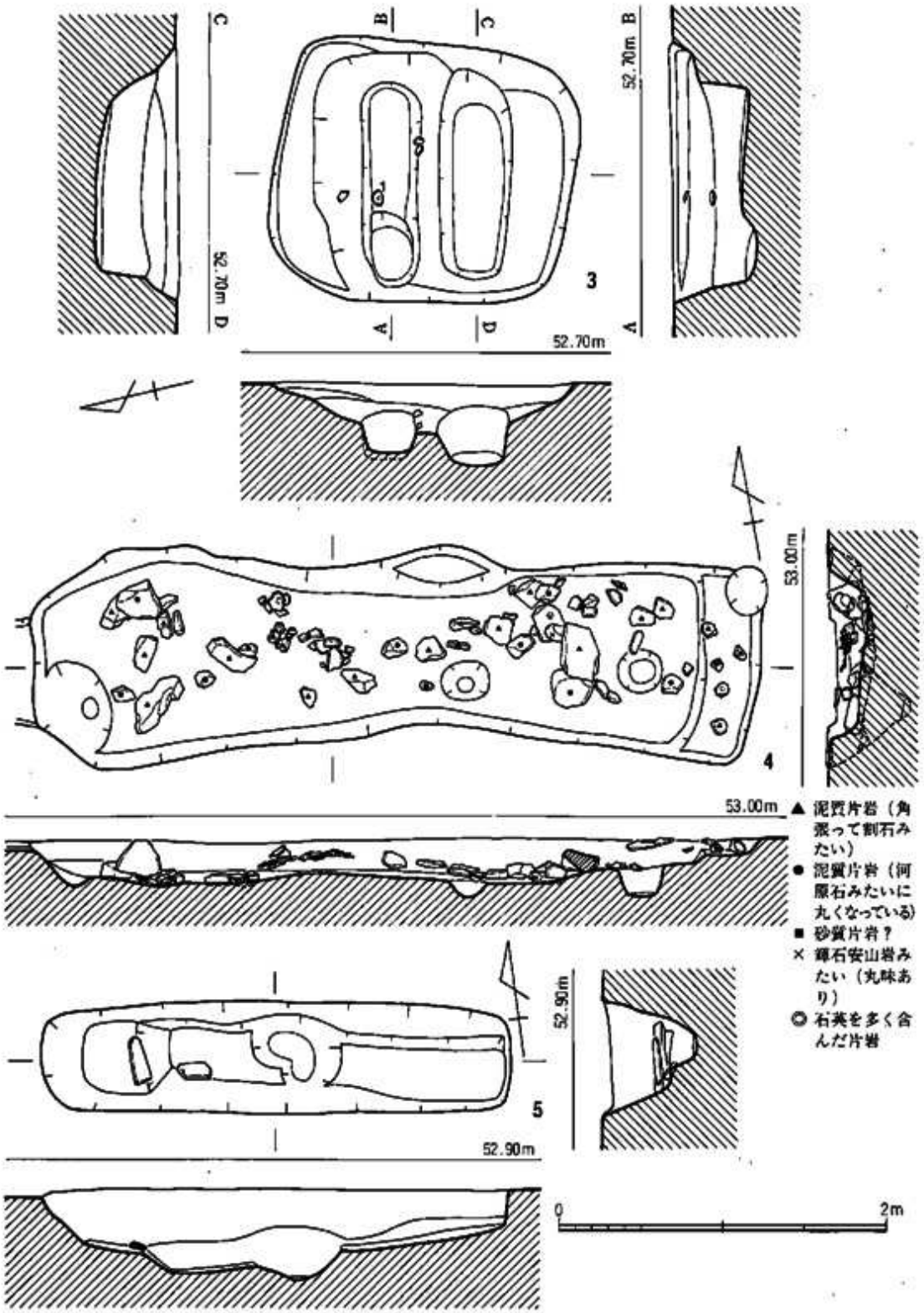


Fig. 132　第3～5号土壙実測図（1/40）

Fig. 133　第3号土壙出土土器実測図（1/3）

生中期初葉の廃棄土壙と考えられる。

第3号土壙（Fig.132, PL.38）

Ⅱ区の北端近くに位置する2連土壙墓である。南北にやや長い隅丸方形の掘方の中に，東西に主軸を同じくする土壙墓2基を平行させて同時埋葬したものである。埋土は上半が黒色土，下半が暗褐色土。掘方全体は185×160cmで，北側の土壙墓は長さ125cm，幅38cm，深さ30cmで，西側端底面が所謂足元掘り込みとなっている。南側の土壙墓は長さ125cm，幅45cm，深さ37cmとなる。底面は東側が高くなっている。南北両土壙墓ともに底面が東側が幅広くなっている事等から，頭位は東と推定できる。また，両土壙墓ともに主軸方位はN76°Wである。出土遺物は，北側土壙墓の上面から土師器杯や初期須恵器片が出土したが，明らかに副葬されたものではなく，埋葬中途で破砕品を投入したもの，或いは埋土中への混入品とみられる。

出土土器（Fig.133）

須恵器甕（1）胴部最大径10.8cmとなる。上端付近の内外面は回転ナデ，以下底部までの内外面は手持ちナデ。底内面には灰かぶりがみられる。焼成堅緻で灰色をなす。

土師器杯（2）口径14.4cm，器高3.6cmで，全体が底部から丸味を帯びて開いている。内外磨滅するが，底部と体部の境が僅かに不明瞭な稜として認められる。焼成良好で淡茶褐色をなす。

以上の出土土器は，2が4C代の大きく直線状に開く薄手鉢状品と，5C中葉頃の体部全体が丸味を持ち深い器形となるものとの中間形態を示している。1の全容が判からないので残念だが，底外面の敲き，内面のあて具痕をナデ消している事から，平底ではないが陶質土器的な焼成とともに5C前半代の可能性がある。以上のことから，当2連土壙墓は5C前葉で，隣接するC1・C2と密接な関係を持って墓地を形成するものと考えられる。

第4号土壙（Fig.132, PL.39）

Ⅱ区の最北端に位置する，東西に長い長方形土壙で，主軸をN80°Wにとる。長さ445cm，幅135～108cm，深さ28cmとなる。底面は波打っており，中には片岩・安山岩等の大小の礫が散在していた。弥生土器片・打製石斧2点等も全体に点在して出土した。礫の中には中央から東半にかけて赤く焼けたものが9点ほどみられ，集石炉に用いられたものが混入したものかと思われる。

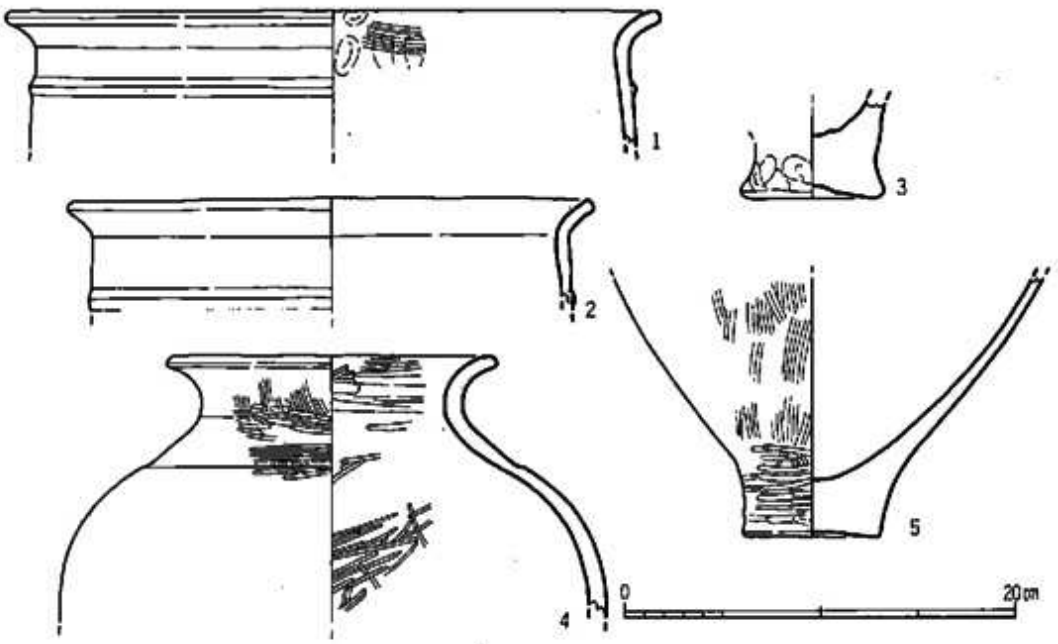


Fig. 134　第4号土壙出土土器実測図（1/4）

出土土器（Fig.134）

甕（1～3）1は復原口径33.6cmの如意形口縁類で，三角凸帯を付ける。胴部内面は丁寧なナデ，外面は磨滅。頸部内面は横ハケ。焼成良好で内外橙褐色。2は口径27cmの如意形口縁類だが，頸でくの字にはっきりと屈折する類。口縁内外面横ナデ，胴部内面は丁寧なナデ。外面は磨滅するがナデか。焼成良好で橙褐色をなす。3は充実した脚台状で，内面はナデ，外側面は指オサエ痕の多いナデ。細砂多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は橙褐色をなす。底径7.4cmで，中央が丸くくぼむ上げ底となる。

壺（4・5）4は口径17cm，胴部最大径28cmとなる中型類で，肩部に段をつくる。内面は横ヘラ磨き，頸部外面は縦ハケの上を横ヘラ磨き。胴部外面は磨滅。焼成良好で内外褐色。5は底径7cmで僅かな上げ底となる類。内面は磨滅。胴部外面は縦ハケの上をナデ，底部外側面は横ヘラ磨き。底外面はナデ。胎土に細砂粒を多く含み，焼成良好で褐色をなす。

以上の出土土器は，壺は肩に段を作るなど，前期的特徴を残すが，甕は刻目無しの凸帯類で，弥生中期初葉とされよう。第2号土壙出土土器よりも古い様相を持つ。

第5号土壙（Fig.132，PL.39）

Ⅱ区北端近くに位置する，東西に長い長方形土壙墓である。黒色土の埋土で，長軸をN82°Wにとる。長さ287cm，幅70cm，深さ54cmとなるが，底面中央が穴状に低くなる。或は下層の

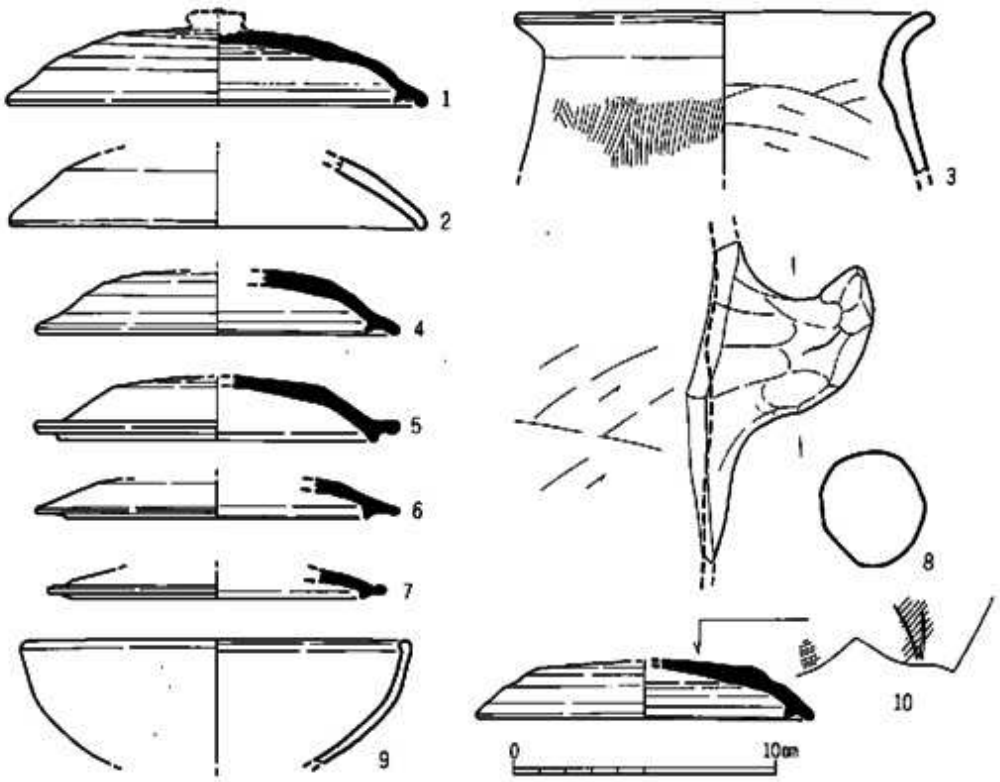


Fig. 135　第5号土壙(1～3)，第6号土壙(4～8)，第7号土壙(9)，第8号土壙(10)
出土土器実測図 (1/3)

縄文遺構まで掘り過ぎたのかもしれない。底面は東側が高くなっているため，頭位は東かと思われる。副葬品は無いが，埋土中から土器片少数が出土した。

出土土器（Fig.135-1～3）

須恵器杯蓋（1）口径16.2cm，返り端部径13.6cmとなり，天井部の撮が剝げている。天井外面は回転ヘラ削り，同内面はナデツケ。焼成堅緻で内面は青灰色，外面は灰褐色をなす。1/2強が残存している。

土師器蓋（2）口径16cmで内外とも磨滅している。焼成良好で内面は黄褐色，外面は淡橙色～黒灰色をなす。

土師器甕（3）口径16cmで，口縁内外面横ナデ，胴部内面は横位ヘラ削り，外面は粗い縦ハケを施す。焼成良好で内面は黄橙褐色，外面は褐色をなす。

以上の出土土器から，この土壙墓は7C後葉のもので，当遺跡でのカマド付住居群や掘立柱建物群とほぼ同時期の集落内（屋敷内）墓地と言える。

第6号土壙（Fig.136，PL.40）

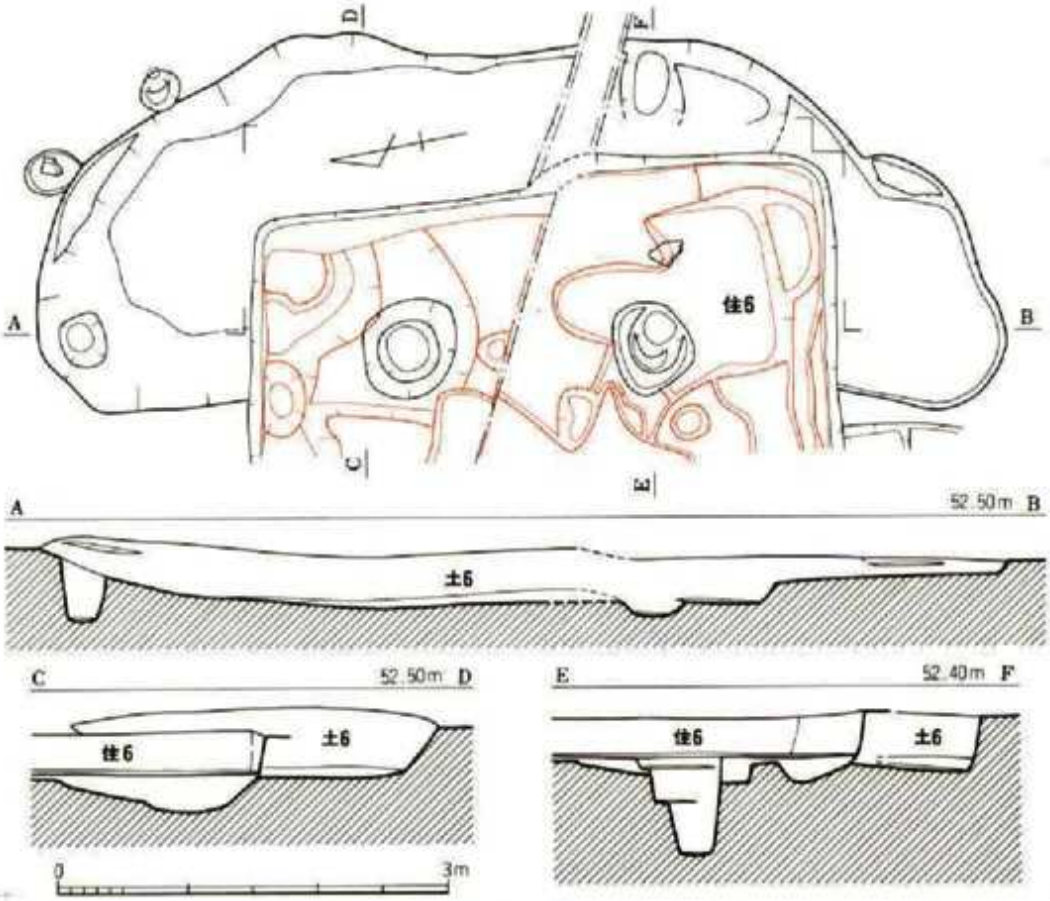


Fig. 136　第6号土壙実測図（1/60）

Ⅱ区の中央やや北寄りに位置する，南北に長い大型不整形土壙である。西半中央を第6号住居跡に切られる。南北の長さ744cm，東西幅が295cm，深さ56cmとなる。底面は緩やかに凹凸がある。同じような南北に長い大型土壙が，東隣に第10号土壙，西方に第15号土壙，南方に第16土壙と見られるが，詳細なその配置の意味は見当がつかない。

出土遺物（土器はFig.135-4～8）

須恵器杯蓋（4～7）4は口径14.0cm，返り端部径11.4cm，器高2.4cmとなる。天井外面は回転ヘラ削り，同内面はナデツケ。焼成堅緻で内面は青灰色，外面は暗青灰色をなす。5は口径14cm，返り端部径12cm，器高2.4cmとなる。外面はすべて灰かぶり。天井内面はナデツケ。焼成堅緻で内面は暗灰色，外面は灰褐色。6は口径14cm，返り端部径13.6cm。残存部は内外面ともに回転ナデ。焼成堅緻で内外面灰色。7は口径13cm，返り部径11.2cm，器高1cm強の低い偏平な類。外面は灰かぶり，内面は回転ナデ。焼成堅緻で内面は灰色，外面は灰褐色をなす。

土師器甕（8）把手部片で，断面が丸い牛角状類。胴部内面は斜位のヘラ削り，把手外面は指

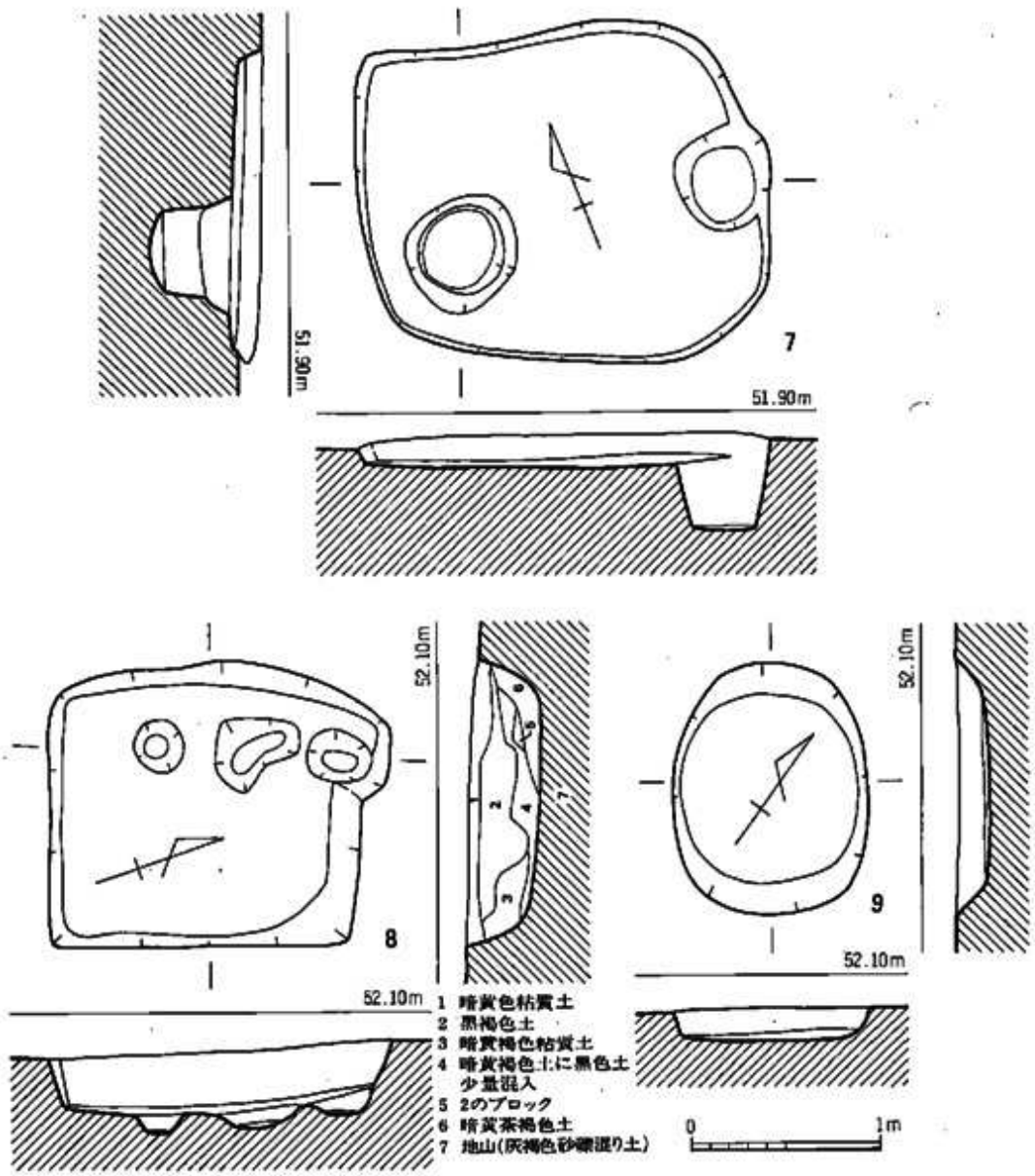


Fig. 137　第7～9号土壙実測図（1/40）

オサエ痕が明瞭。焼成良好で，内外ともに淡橙色をなす。

土錘（Fig.196-6）半欠品だが，葉巻形の大型品となりそうである。現存長39㎜，最大径22㎜，孔径6㎜，重さ12.8gとなる。

鉄滓（PL.120）小ぶりのもの2点が出土している。各々21g，12gとなる。これら以外に鍛冶関連遺物は出土しておらず，当土壙そのものが鍛冶遺構とは言えないが，近隣に存在していた

可能性が考えられる。

以上の出土遺物のうち，杯蓋類は7C中～後葉のものであり，当土壙は7C後葉の廃棄土壙であったと推定できよう。

第7号土壙（Fig.137，PL.40・41）

Ⅱ区中央やや南寄りに位置する小型隅丸方形土壙である。周辺に同様な規模で浅い類が，第8・17号土壙と見られる。東西に218cm，南北が178cm，深さ16cmとなる。底面はほぼ平らで，内側に2個の円形小ピットが見られるが，その性格は不明。

出土土器（Fig.135-9）

土師器杯（9）口径15cmとなる薄手類で，口縁内側を玉縁状に突出させ，体部と口縁部の境に不明瞭乍ら屈折部をつくる。口縁内外面は横ナデ，体部内面はナデ，同外面は磨滅して調整不明。焼成良好で内外面ともに橙色をなす。

出土品のうち実測可能なものは上記1点しか無いが，口縁部の特徴は8Cに入ってしまうことを示している。よって当土壙は8C前葉代の所産と考えられる。

第8号土壙（Fig.137，PL.41）

Ⅱ区中央やや南寄りに位置する小型方形土壙である。第7号土壙の東隣に位置し，第7号住居跡の西隣となる。規模は南北に164cm，東西に150cm，深さ32cmとなる。底面には浅い小穴3個が見られるが性格は不明。

出土土器（Fig.135-10）

須恵器杯蓋　口径13cm，返り端部径10.8cm，器高2.2cmとなる。天井外面は磨滅するが，一部にハケ状調整がみられ，ヘラ記号も記される。天井内面はナデツケ。焼成堅緻で内面は青灰色，外面は淡灰色。1/2弱残存。

以上の土器は，口径がやや小さめで，天井外面の雑な調整等から，7C中葉の特徴に近い。よって当土壙は上限を7C中葉におく時期のものと考えられる。

第9号土壙（Fig.137，PL.42）

Ⅱ区の中央部のやや南東寄りに位置する楕円形土壙である。第7号住居跡内の南半に位置し，住居より新しい。黒色土の埋土で，南北径が133cm，東西径が102cm，深さ17cmとなる。底面はほぼ平らで，南・北の壁は緩やかである。

実測に供し得る遺物は無いが，第7号住居跡出土品として取り上げたFig.104—7の土師器高台椀が，この土壙に関連する遺物ではないかと推測する。高台の高さが2cm程と高く，平安時代の10c前半代のものと考えられ，当土壙の時期を示す可能性があると考える。

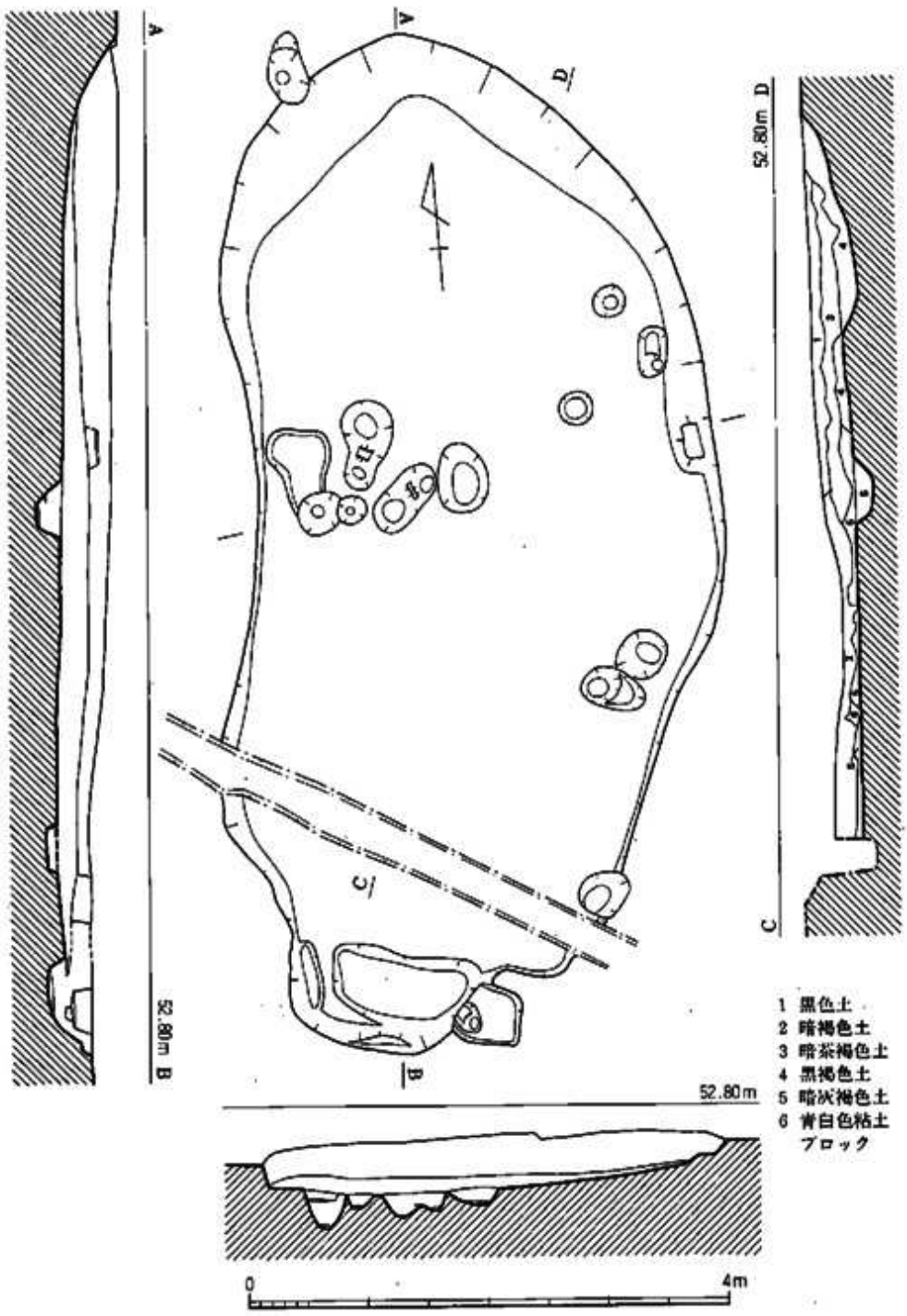


Fig. 138　第10号土壙実測図（1/60）

第10号土壙（Fig.138, PL.42）

Ⅱ区の中央東寄りに位置する南北に長い大型不整形土壙である。南北の長さ844cm，東西の幅391cmで，深さ42cmとなる。底面は皿状になって，西南付近が最も深くなっている。土層断面を見ると，大旨自然堆積であるが，掘り直しがあったような部分も見られる。

出土土器（Fig.139）

須恵器杯蓋（1）口径16cm，返り端部径13.4cm，器高2.2cmとなる。天井外面はカキ目，同内面はナデツケ。摘部が付くであろう。焼成堅緻で，口縁～体部内外面は回転ナデ。

須恵器杯（2～4）2は口径13.6cm，器高5cm，高台径8.1cm。体部下半外面は回転ヘラ削り，内底面はナデツケ。高台付近～底外面は回転ナデ。焼成堅緻で内面は灰色，外面は黒色。3は口径16cmとなる大型品。内外回転ナデ。焼成堅緻で灰褐色をなす。4は高台径10.8cmで長く外方に踏ん張る高台となる。内面はナデツケ。外面はすべて回転ナデ。焼成堅緻で内面は暗茶褐色，外面は茶褐～黒灰色。

須恵器高杯（7）口径14cm，杯部高3.8cmで，内底面はナデツケ。底外面は回転ヘラ削り。焼成堅緻で内面は青灰色，外面は黒色。細身の脚柱部を付ける部類。

土師器杯（5・6）5は体部と口縁部との境の屈折が全く無く，皿状に開くもの。内外磨滅するが，焼成良好で橙色をなす。6は口縁が丸く屈曲する類で，内外磨滅するが焼成良好で内外淡橙色をなす。

土師器高杯（8・9）8は脚柱上端径3.2cmで，脚柱内面は横方向ヘラ削り。外面は磨滅。焼成良好で内外とも橙色。9は脚柱上端部径3.2cmで，全面磨滅。焼成良好で内外橙色。

土師器甕（10～19）10は口径12cmの特小甕。胴部内面はヘラ削り上げ。他面は磨滅。口頸部が寸詰まりで短く，胴の張らない類。焼成良好で内面暗茶褐色，外面は橙褐色をなす。11は口径14cmで胴部内面ヘラ削り上げ。焼成良好で内外とも淡橙色。12は口径12.8cmで胴部内面をヘラ削りする小甕。焼成良好で内面は淡橙色，外面は橙褐色。13は口径16cmで内外面磨滅。大きく外反して開く口縁となる。焼成良好で内面は淡黄褐色，外面は褐色。14は口径21cmとなる中型類。内外磨滅しており，焼成良好で黄橙色をなす。15は頸部径20cmとなる，強い胴張り類。胴部内面はヘラ削り，外面は磨滅。焼成良好で内外面ともに橙色。口縁部は殆ど肥厚しない。16は胴部内面のかなり上までヘラ削り上げ。外面は磨滅。焼成良好で内外とも淡橙色。17は口径32cmで，大きく開く口縁となる。口縁の肥厚は殆ど見られず，外面下半は縦ハケを横ナデで消している。焼成良好で内外とも淡橙色。18はやや肥厚する口縁類で内外磨滅。焼成良好で淡橙色をなす。19は復原底径8.2cmとなる平底類小型品で，甕ではなく壺状の器形になるかもしれない。内面はヘラ削り上げ，底外面はナデ。焼成良好で淡橙色をなす。

土師器甑（20）直線的に下方へすぼまる類で，底部断面形が尖る。内外磨滅するが外面には煤が付着する。焼成良好で，内面は淡黄褐色，外面は黒～淡橙色をなす。

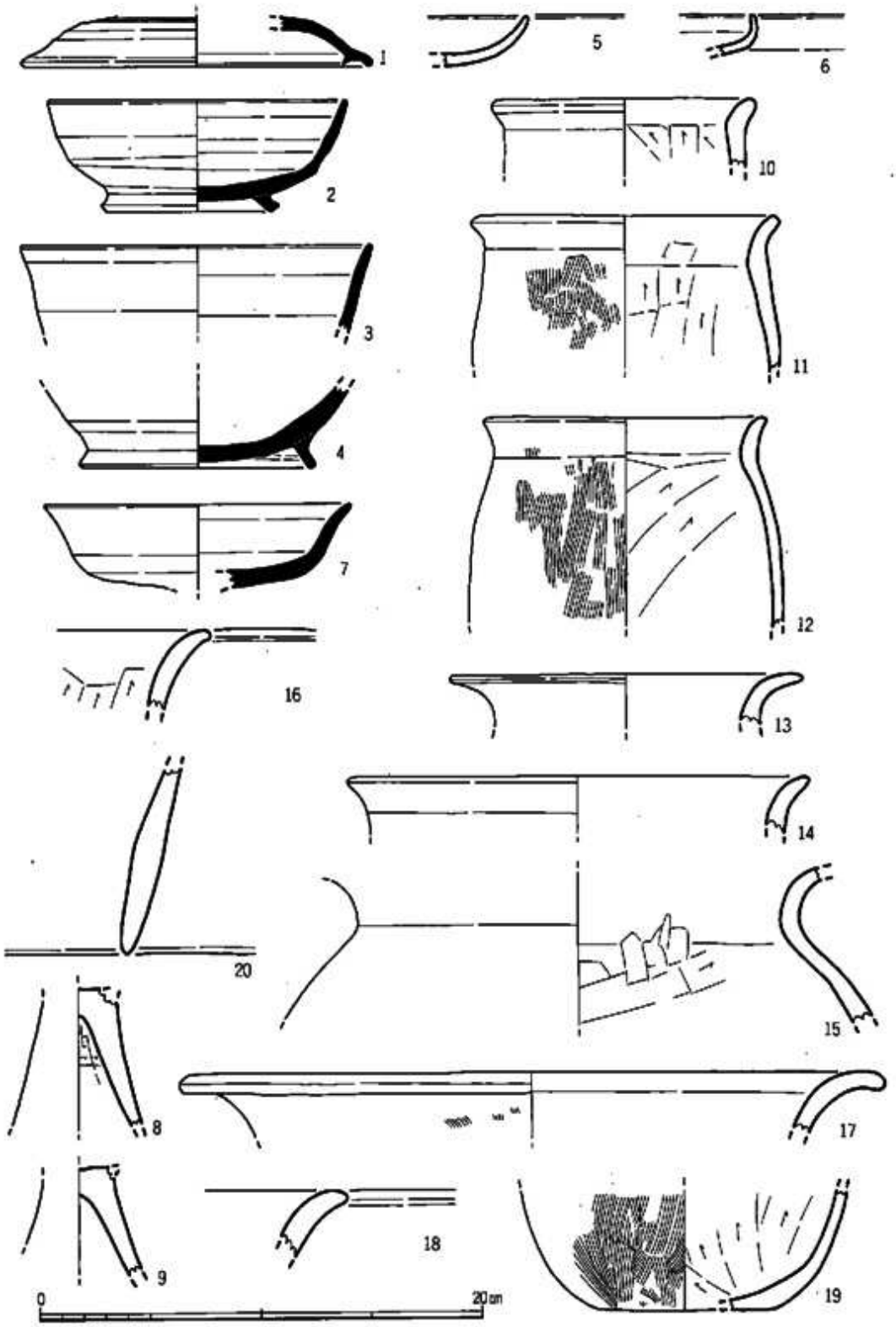


Fig. 139　第10号土壙出土土器実測図（1/3）

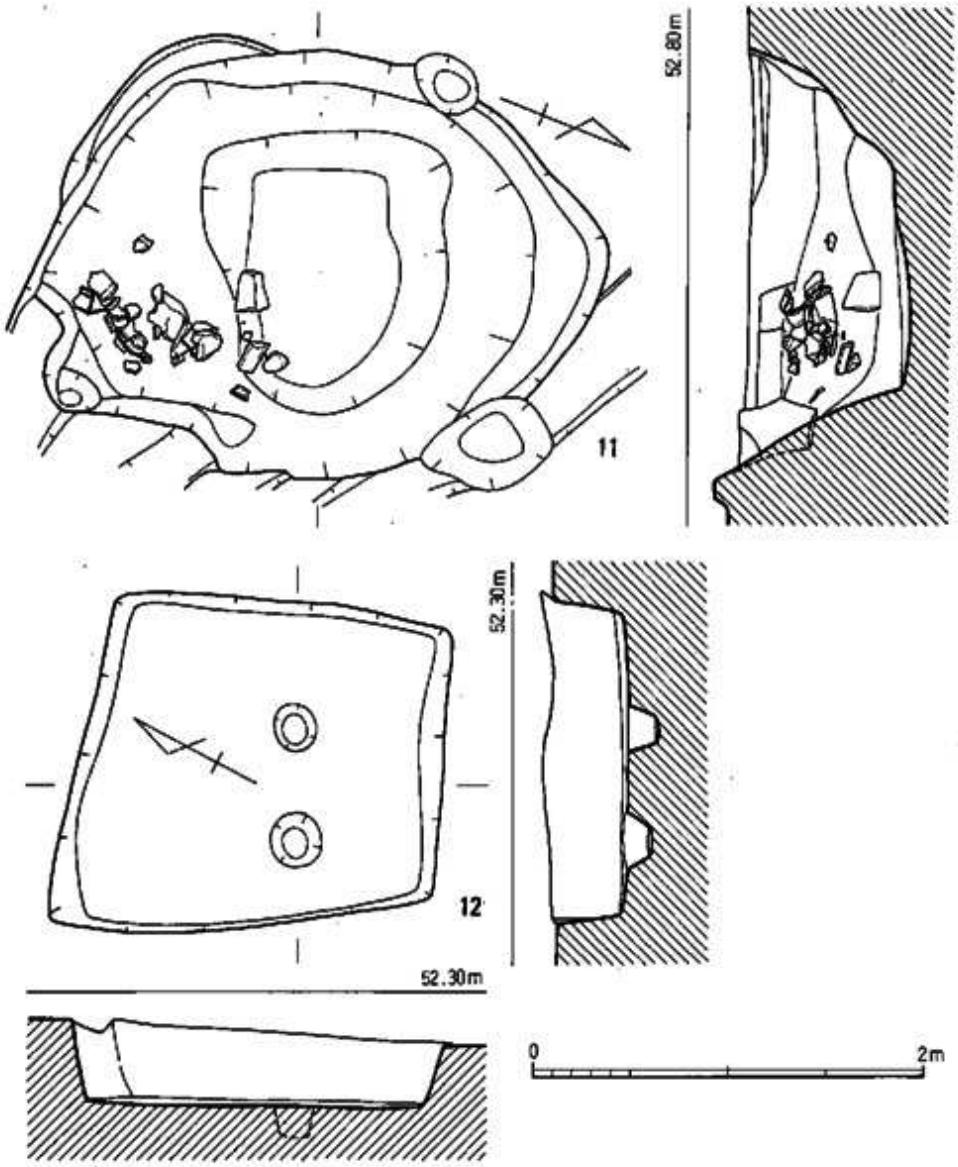


Fig. 140　第11・12号土壙実測図（1/40）

以上の出土土器を見てみると，各器種が揃っており，生活の場における廃棄土壙としての性格が見えてくる。須恵器杯類は明らかに7C後葉代を代表するタイプで，土師器甕の13・15・17などの口縁が強く外反し胴部が張る類も同様の時期の特徴を良く示している。以上のことから当土壙は7C後葉の廃棄土壙と判断できる。

第11号土壙（Fig.140, PL.43）

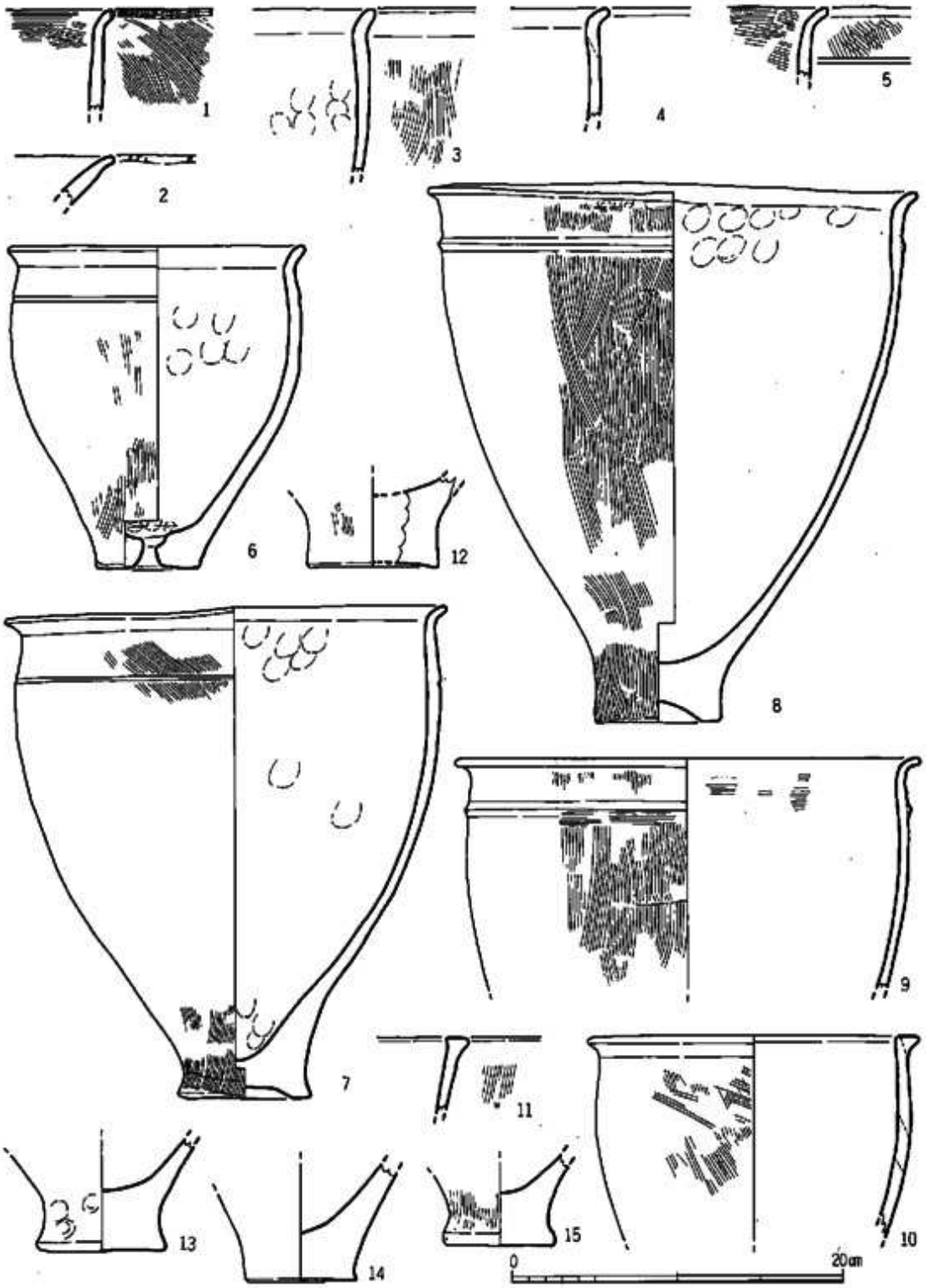


Fig. 141　第11号土壙出土土器実測図（1/4）

Ⅱ区の北半中央に位置する略楕円形土壙である。南北に298cm，東西に217cm，深さ102cmとなる。壁面は上半では緩やかであるが，下半では更に直に掘り込んでおり，言わば2段掘り状になっている。深くしっかりした土壙だが，底面は凹凸があり，平面形もきちんとしたものではない。土壙内からは北東隅を中心に多くの土器が出土したが，中層から片岩の丸味を帯びた塊石や礫等と共に北東側から投棄されたような状況がみられた。

出土土器（Fig.141）

甕（1～10・13～15）1は如意形口縁の口唇外面に刻目を施す類。胴部内面は丁寧なナデ。口縁内面と外面は細かいハケ。焼成良好で内面は橙褐色，外面は褐色をなす。2は傾きが不明確だが，長めの口縁で頸部で屈折する類か。口唇端面に刻目を施し，内面はナデ，外面は磨滅。胎土に粗・細砂を多く含む。焼成良好で内外淡橙褐色をなす。3は頸部で外傾して折れる類。胴部内面は丁寧なナデ，外面は粗いハケ。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外橙褐色。4は内外磨滅するが，粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は橙褐色，外面は黒斑で黒色をなす。5は外面に沈線1条を巡らす如意形口縁類で，焼成良好。内面褐色，外面は暗茶褐色。6は口径17.5cm，器高19.4cm，底径6.4cmの小型品。底部に焼成後の穿孔あり。内面は丁寧なナデ。胎土に粗・細砂を多量に含む。焼成良好で，内外橙褐色。7は口径26.8cm，器高29.7cm，底径8cmで胴部内面は丁寧なナデ。底外面はナデで中央部だけが丸く窪む類。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は黄褐～橙褐色をなす。8は口径29.5cm，器高32.4cm，底径7.6cmで胴部内面は丁寧なナデ。底部は充実した脚台状をなし，底外面はナデ。丸く中央部が窪む類。焼成良好で内面は黄褐色，外面は橙褐色。9は口径28cmで，胴部内面はナデ。焼成良好で内面は黄褐色，外面は暗褐色。10は亀ノ甲タイプで，口径20cm。口縁上面は水平。胴部内面はナデ，外面は斜位のハケ。焼成良好で内面は黄褐色，外面は黄褐～暗褐色をなす。13は底径7.8cmで平底。内外面ともに丁寧なナデ。焼成良好で内外とも淡橙褐色。14は底径6.7cmで，僅かな上げ底類。全面磨滅。粗・細砂を多く含む。焼成良好で内外とも橙褐色。15は底径6.8cmで，内面はナデ，底外面と底外側面もナデ調整。焼成良好で内外面ともに橙褐色。

壺（11・12）11は口縁内端に突出が見え始めた類で，内面は丁寧なナデ，口縁上面から外面上端部は横ナデ。焼成良好で内外とも褐色。12は底径8cmで僅かな上げ底となる類。内面と底外面は丁寧なナデ，脚台部外面は縦ハケをナデ消す。粗砂多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は黒茶～淡橙褐色をなす。

以上の出土土器は，甕だけでも多種に及ぶ。1・2のように弥生前期のものや，5～7のように沈線類，8・9の三角凸帯類，3・4のような無凸帯・無沈線類，10のような亀ノ甲系の中期初葉類等各種が揃っている。他の弥生中期初葉の土壙では見られない事で，この土壙が貯蔵穴等の規格的遺構ではなく，廃棄土壙として設けられた事を示す。当土壙の時期としては，10・11の示す，弥生中期初葉でも中葉に近い新段階と判断できる。

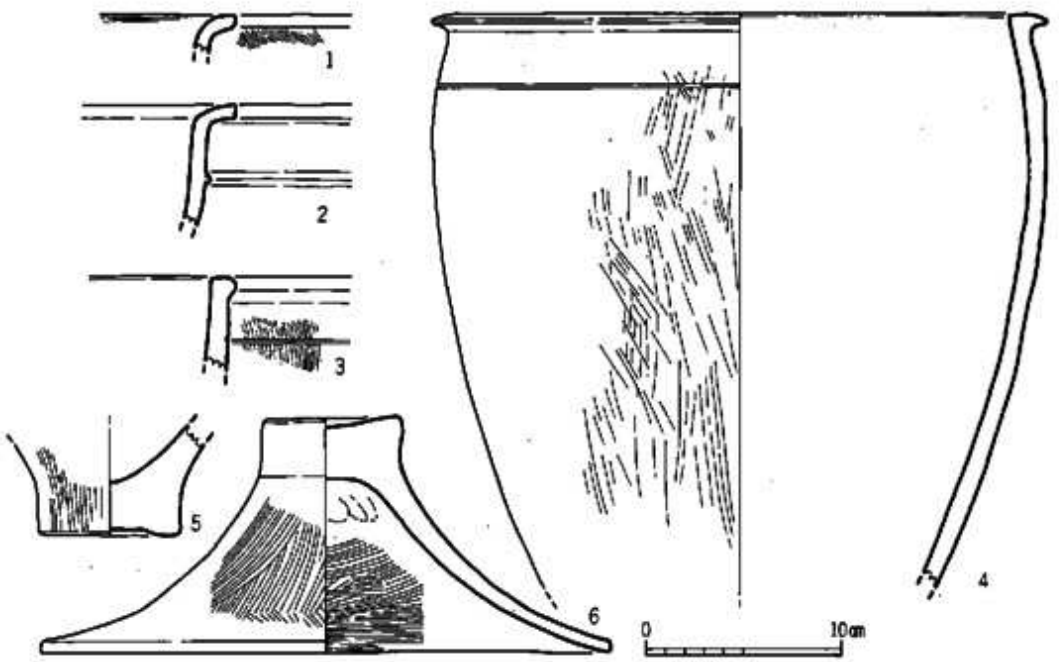


Fig. 142　第12号土壙出土土器実測図（1/4）

第12号土壙（Fig.140，PL.43）

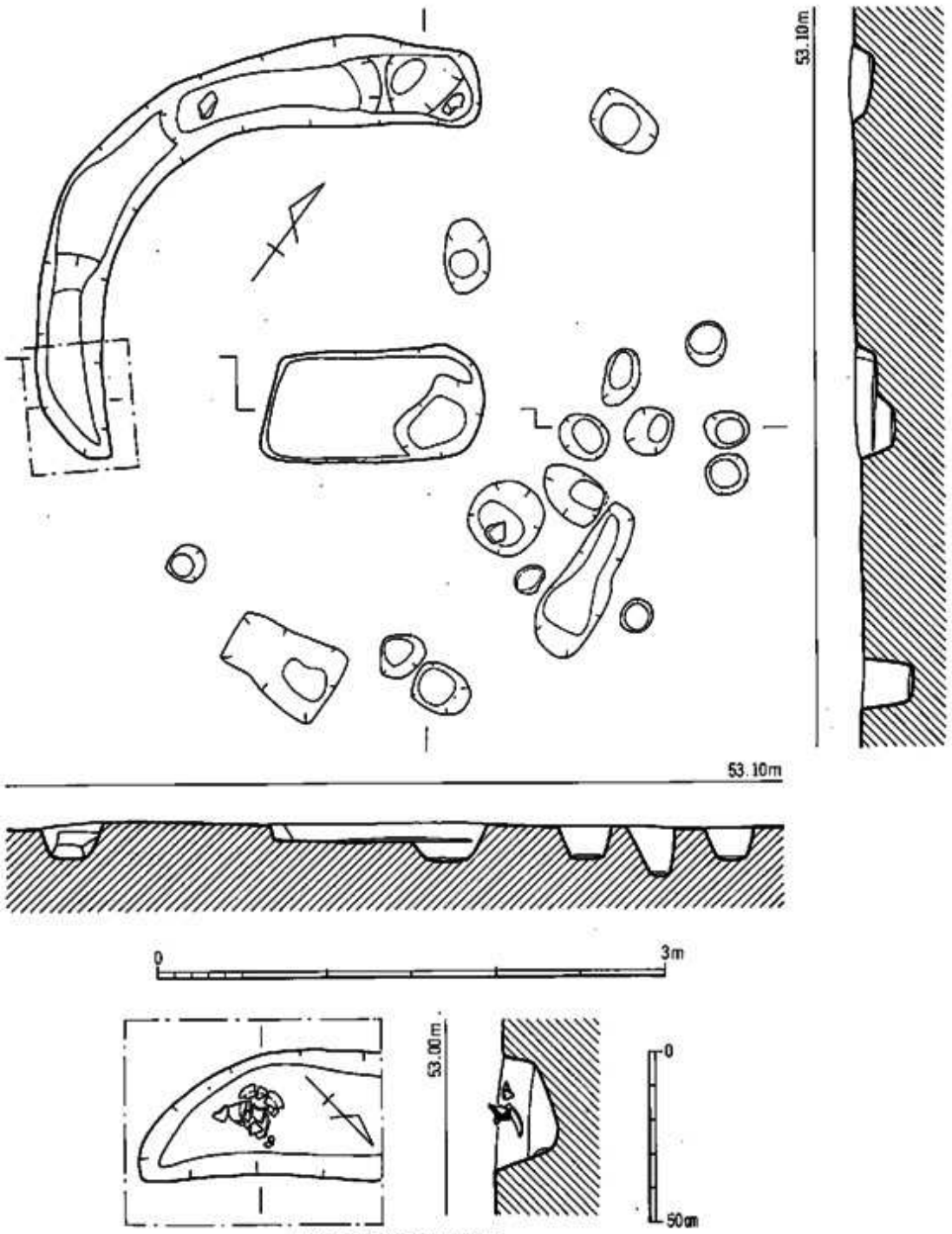
1区中央の南寄りに位置する方形土壙である。正確に言うと，西辺が長い台形状平面形となる。南北に196～175cm，東西に170cmの大きさで，深さ42cmとなる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，意図的である。底面は平坦で，中央南寄りに小穴が2個認められる。

出土土器（Fig.142）

甕（1～5）1は口縁上面に横ハケを残し，以下内面はナデ，外面は細かい斜位のハケ。焼成良好で内面は淡褐色，外面は茶褐色をなす。2は口唇外端を凹面状に作り，胴部内面は丁寧なナデ，他は外面まで横ナデ。焼成良好で内面は暗茶黄褐色，外面は暗灰黄褐色。3は亀ノ甲系口縁に沈線1条を施す類。内面は丁寧なナデ。4は口径31.4cmで，亀ノ甲タイプの口縁に沈線1条を巡らす類。口縁内外面は横ナデ，胴部内面は丁寧なナデ。焼成良好で内外とも茶色。5は底径7.2cmで，内面はナデ，底外面は中央部が僅かに上げ底となる。焼成やや良好で内外面ともにこげ茶色をなす。

蓋（6）口径29.3cm，器高12.1cm，上端部径7.3cmとなる。口唇外面から口縁外面まで横ナデ，上端部内面と外面はナデ。焼成やや良好で内外ともに淡橙色をなす。

以上の土器は，弥生中期初葉のもので，当土壙の時期を示すものであろう。土壙そのものの性格としては，遺構の形状から貯蔵穴と考えてよかろう。



周溝内土師器高杯出土状態

Fig. 143　第13号土壙実測図（1/40, 1/20）

第13号土壙（Fig.143，PL.44）

Ⅱ区北端にて検出された，埋葬主体を土壙墓とする円形周溝墓である。C1～3，第3号土壙墓とともに墓地を形成している。主体部の土壙墓は，長軸をN53°Eにとる略長方形をなし，長さ126cm，幅64cm，深さ12cmと残りは良くない。北東端に一段下がった穴があるが，下層の縄文期の部分を掘ってしまった可能性がある。寸詰まりで短いため，小児用土壙墓と考える事もできる。周溝は全周の1/4の西側部分しか残っていなかった。幅45cm，深さ10～20cm程で，主体部とともに上半を大きく削平されている事が推定できる。残る周溝部分から周溝全体を復原すると，周溝外縁で直径4.4mとなる小規模な周溝墓であったと考えられる。墳丘が在った証拠は全く無いが，周溝底面レベルより土壙墓底面の方が高いため，墳丘が存在したと想定した方が合理的であろう。周溝内からは，主体部の長軸を南西方向へ延ばした位置に，土師器高杯1点がつぶれた状態で出土した。明らかな周溝内供献と思われる。

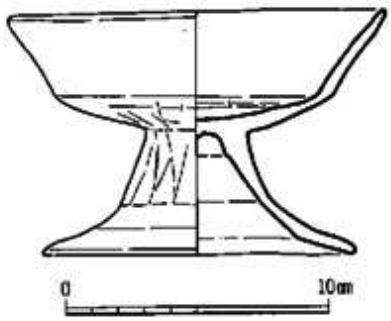


Fig. 144　第13号土壙周溝内出土土器実測図（1/3）

出土土器（Fig.144）

土師器高杯　口径14.4cm，器高9.3cm，脚端径14cmとなる。杯部外面稜から上の内外面は横ナデ，脚部外面上半から杯部底外面は縦ヘラ削り，脚部外面下半から内面稜以下は横ナデ，脚柱内面の稜から上は横ヘラ削り。杯部内底面は丁寧なナデ。胎土精良で焼成良好。内外面ともに橙色をなす。

この出土土器は，まだ体部と杯底部との境の屈折が明瞭で5C代の特徴を残してはいるが，口径も小さくなり，脚部も低く，外面に縦ヘラ削りが入るなど，新しい様相が既に定着している。類例としては，近隣の甘木市柿原Ⅰ2号墳出土品が掲げられるが，それよりもやや古段階を示す。よって当円形周溝墓の時期は6C後葉代と考えられる。

第14号土壙（Fig.145，PL.44・45・46）

Ⅱ区中央に位置する南北に長い大型土壙である。南北に703cm，東西幅が314cm，深さ70cmとなる。底面は凹凸がかなりあり，西側は浅く，北端あたりが最も深くなっている。これらの形状からみて，何度かの掘り直しが行われているようで，廃棄土壙の様相が覗われる。中からは上～下層に万遍無く遺物が出土しており，また，黒色片岩を主として，丸味のある河原石，石英混りの片岩，それらが焼けた類等の大小の塊石・礫類が投棄されている。

出土遺物（土器はFig.146～148）

甕（1～34・39～55）1は口径29.6cmで，口唇外下端に細い刻目を施し，外面に沈線1条を巡

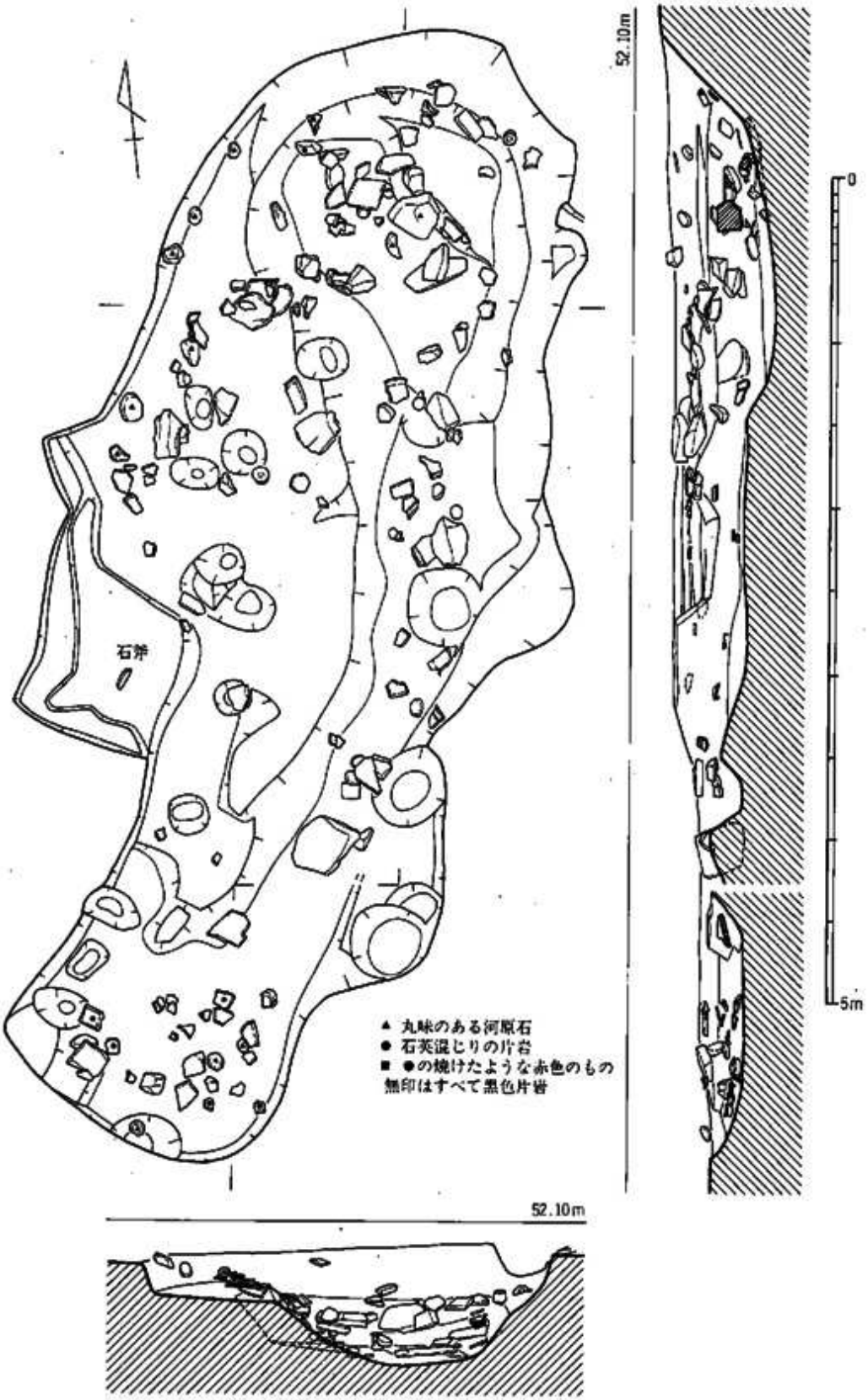


Fig. 145　第14号土壙実測図（1/40）

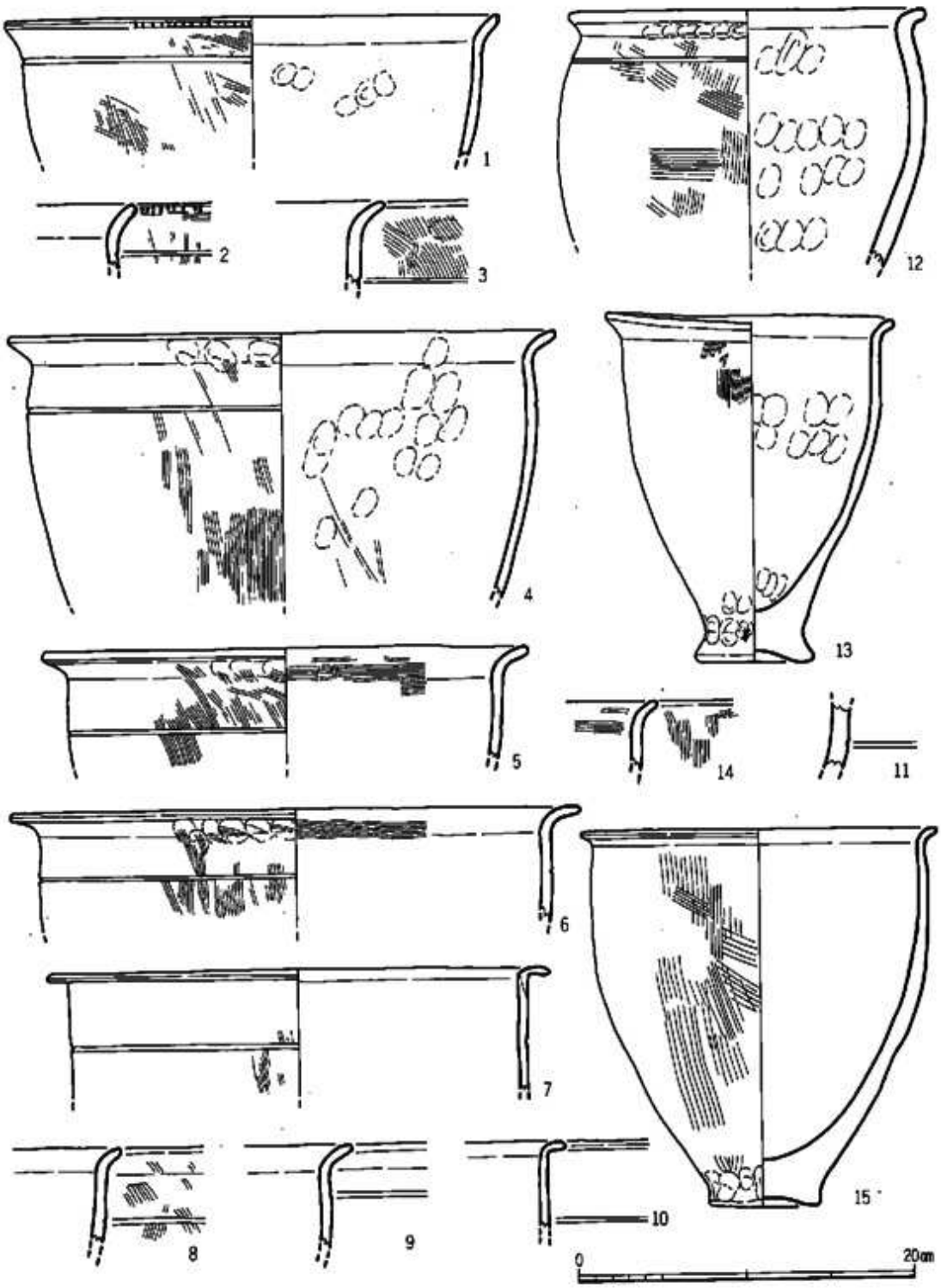


Fig. 146　第14号土壙出土土器実測図（その1）(1/4)

らす類。胎土に粗・細砂粒を多量に含み，焼成良好で内面は褐色，外面は淡橙褐色をなす。2は口縁外下端に細身の刻目を施し，外面に沈線を施す如意形口縁類。焼成良好で内外白褐色。3は胴の張らない器形で，外面に沈線1条を巡らす。焼成良好で，内面は褐色，外面は茶褐色。4は口径32.6cmの大ぶり品で，胴部内面は丁寧なナデ。焼成良好で内外とも橙褐色をなす。5は口径29cmで，胴部外面に1条の沈線を施す如意形口縁類。胴部内面はナデ。焼成良好で内外とも橙褐色をなす。6は口径34cmで，頸部内面に横ハケ，胴部内面は丁寧なナデ調整を施す。焼成良好で内外ともに淡橙褐色。7は口径30cmで，胴部内面はナデ，外面は磨滅気味。細砂粒を多量に含み，焼成良好で内面は淡橙褐色，外面は暗褐色をなす。口縁がほぼ直角に曲がって開く類。8は外面に沈線を施す類で，内面は縦方向のナデ。焼成良好で内外面ともに淡褐色。9は内外面ともに磨滅するが，外面に沈線を施す如意形口縁類。焼成良好で内外面ともに黄橙褐色。10は口縁が直角に折れて開く類で，外面に沈線を巡らす。胴部は内外面ともに丁寧なナデ。焼成良好で内面は黄褐色，外面は褐色をなす。11は胴部小片で，沈線1条を施す。内面は丁寧なナデ，外面は横ナデで煤が付着。焼成良好で内面は淡橙褐色，外面は褐色をなす。12は口径21.2cm，胴部最大径22.9cmとなる。丸く張った胴部に短く屈曲外反する口縁を付ける。胴部内面はナデ，外面は不定方向の雑なハケ調整。粗砂粒を多く含み，焼成良好で内外ともに橙褐色をなす。器壁が厚く，雑なつくり。13は口径17.1cm，器高20.8cm，底径7cmの小型品。頸部で内面に稜を作り折れて外反する口縁となる。胴部内面は丁寧なナデ。外面は著しい磨滅。底外面は中央部が丸く窪む上げ底。粗砂粒を多量に含み，焼成良好で内外ともに橙褐色をなす。14は丸味を持って緩やかに外反する口縁で，胴部内面はナデ，外面は縦ハケをナデ消している。焼成良好で内外面ともに淡橙褐色。15は口径21.1cm，器高22.4cm，底径6.6cmとなるやや小型品。胴部内面はナデ，外面は粗い縦ハケの上をナデ。底外面はナデで，中央部のみが丸く窪む上げ底類。焼成良好で内外面ともに橙褐色をなす。16は短く屈曲外反して下方へ垂れる口縁となる類。内外面ともに磨滅しており，粗・細砂多量に含む。焼成良好で内外橙褐色。17は頸部内面に稜を作り，短く外傾気味に開く類。胴部内面は丁寧なナデ。焼成良好で内外淡橙褐色。18は口径28cmで胴部内面はナデ調整。粗・細砂粒を多量含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は褐色をなす。19は口径23cmで内外面ともに磨滅。短く外折気味に開く口縁で，胴部は直線的に開く類。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内外橙色。20は緩く外傾気味に開く口縁に三角凸帯を付ける類。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は淡橙褐色，外面は黄褐色をなす。内面は磨滅，外面の凸帯より上は丁寧なナデ。21は低い三角凸帯を付ける類で，胴部内面はナデ，他は磨滅。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は淡橙色，外面は橙褐色をなす。22は内面はナデ，外面はやや密な縦ハケ。粗砂多く含み，焼成良好で内面は暗茶褐～橙褐色，外面は褐色をなす。23は外面に三角凸帯を付け，内面はナデ。粗・細砂を多量に含み，焼成良好で内外面ともに黄橙褐色をなす。24は口径25cm，胴部最大径24cmで，長く緩やかに外傾気味に開く口

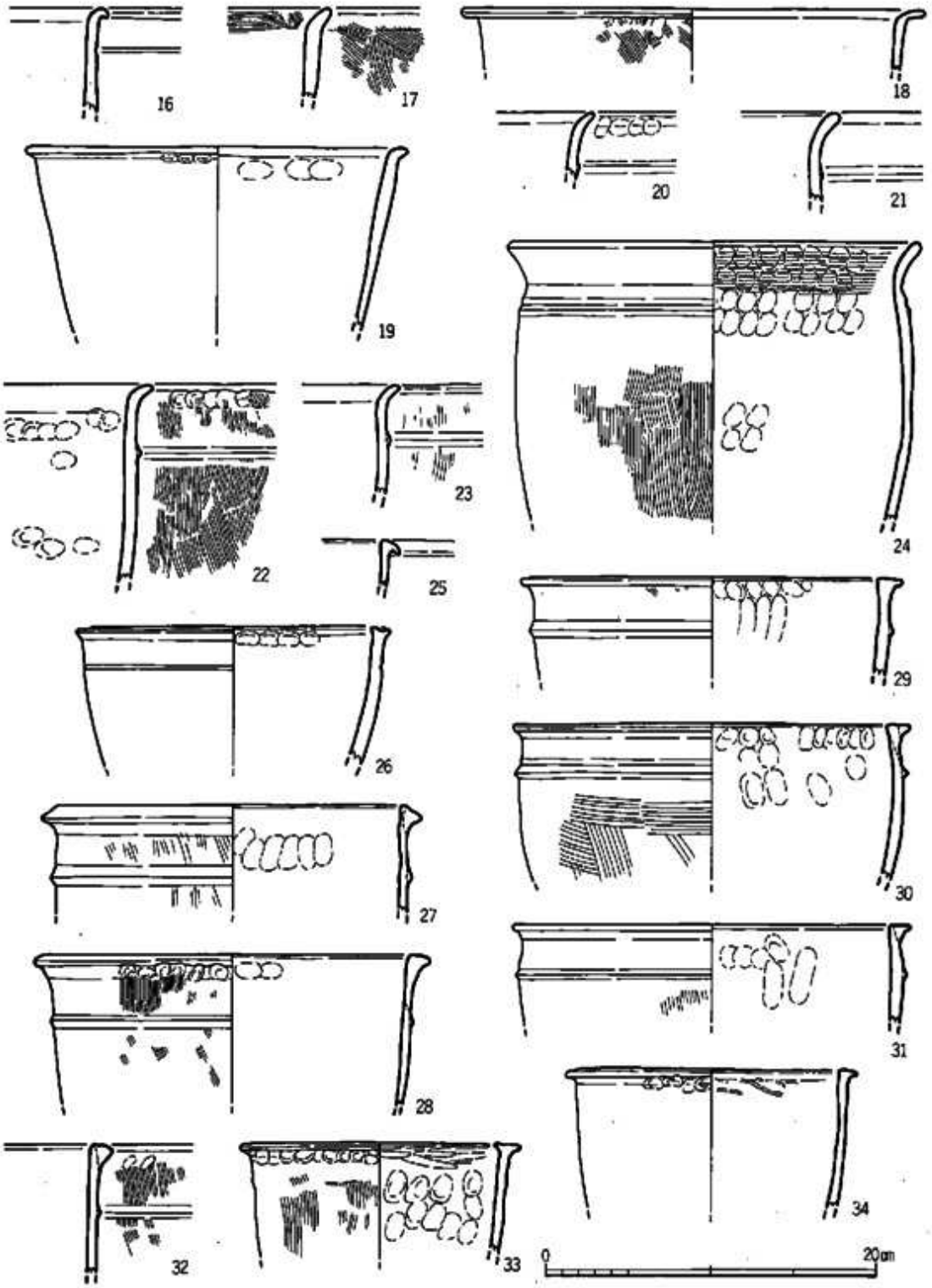


Fig. 147　第14号土壙出土土器実測図（その２）(1/4)

縁となる。口縁内面は粗い横ハケ，胴部内面は丁寧なナデ。焼成良好で内面は橙黄褐色，外面は下半に煤が付着しているが橙褐色をなす。25は口縁が下がってはいるが，形態上亀ノ甲タイプと中期前葉の逆Ｌ字口縁の中間的な感じとなる。内外面磨滅しており，粗砂多く含む。焼成良好で内外とも橙褐色。26は口径19cmで口縁が内外双方に突出する異類。内面はナデ，外面は磨滅。粗砂多く含み，焼成良好で内面は淡橙褐色，外面は黄橙褐～褐色をなす。27は口径23cmで，内面はナデ，外面は縦ハケの上をナデ。胎土に細砂粒を多く含み，焼成良好で内外ともに淡褐色。28は口径24cmで内面磨滅。凸帯以下の外面もかなり磨滅。細砂多量に含み，焼成良好で内面は褐～橙褐色，外面は黄褐色。29は口径23cmの亀ノ甲新期類。内面は丁寧なナデ。外面は横ナデ。細砂粒を多量に含み，焼成良好で内外とも黄褐色。30は口径24cmで内面は丁寧なナデ，外面は凸帯下までは横ナデ，それ以下は不定方向の粗く雑なハケ。焼成良好で内面は橙褐色，外面は褐色をなす。31は口径24cmで内面は丁寧なナデ，外面の凸帯下までは横ナデ，以下は粗い縦ハケ。焼成良好で内面は黄褐色，外面は淡褐色。32は内面はナデ，外面下半は磨滅。焼成良好で内面は黄橙褐色，外面は黄褐色をなす。33は口径17cmで，基本的には中期初葉だが，口縁内端の突出が明瞭となる類。口縁内面は粗いヘラナデ状，以下胴部内面はナデ。焼成良好で内面は黄褐色，外面は橙褐色をなす。34は口径17.6cmで，口縁内端が小さく突出する。内面はナデ，外面は磨滅。焼成良好で内面は赤橙色，外面は淡赤橙色をなす。39は底径7.4cmで内面はナデ。外面は縦ハケ，底外面はナデ。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は黒色，外面は淡橙褐色。外面には煤が付着する。40は底径7.6cmで内面は磨滅，底外面はナデ。粗砂多く含み，焼成良好で内面は黄橙褐色，外面は橙褐色。41は底径８cmで底部に焼成後の穿孔がみられる。内面はナデで炭化物が付着。底外面は中央部のみが僅かに上げ底となる類。焼成良好で内面は黒～褐色，外面は黄褐色。42は底径7.4cmで内面と底外面はナデ。粗・細砂多量に含み，焼成良好で内面は黒褐色，外面は橙褐色をなす。43は底径6.4cmで内面はナデ，底外面は磨滅。焼成良好で内面は褐色，外面は黄褐色をなす。44は底径8.8cmで底部中央のみが丸く窪む上げ底。内面はナデ，底外面はナデだが中央部は強い指ナデ痕がみられる。焼成良好で内外とも淡橙褐色。45は底径5.8cmで内面はナデ，他外面は磨滅。底外面中央は大きく窪む。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は橙褐色をなす。46は底径6.4cmで内面は欠損，脚台部外側面は縦ハケの上を横ナデ。底外面は中央のみ窪む類でナデ調整。焼成良好で側面は黄褐色，底外面は黒色。47は底径7.4cmで内面はナデ，外側面は整美な縦ハケ。底外面中央が窪む類。焼成良好で内面は黄褐色，外面は橙褐色をなす。48は底径7.4cmで内面は磨滅，外側面と底外面はナデ。粗・細砂多量含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は橙褐色をなす。49は底径８cmで内面はヘラナデ状，底外面はナデ。粗砂多く含み，焼成良好で内面は褐色，外面は黄褐色をなす。50は底径８cmで内面はナデで下半はヘラナデ状。外面は細かいハケ，底外面はナデ。焼成良好で内面は黒色，外面は橙褐色。51は底径８cmで内面と底外面はナデ。焼成良好

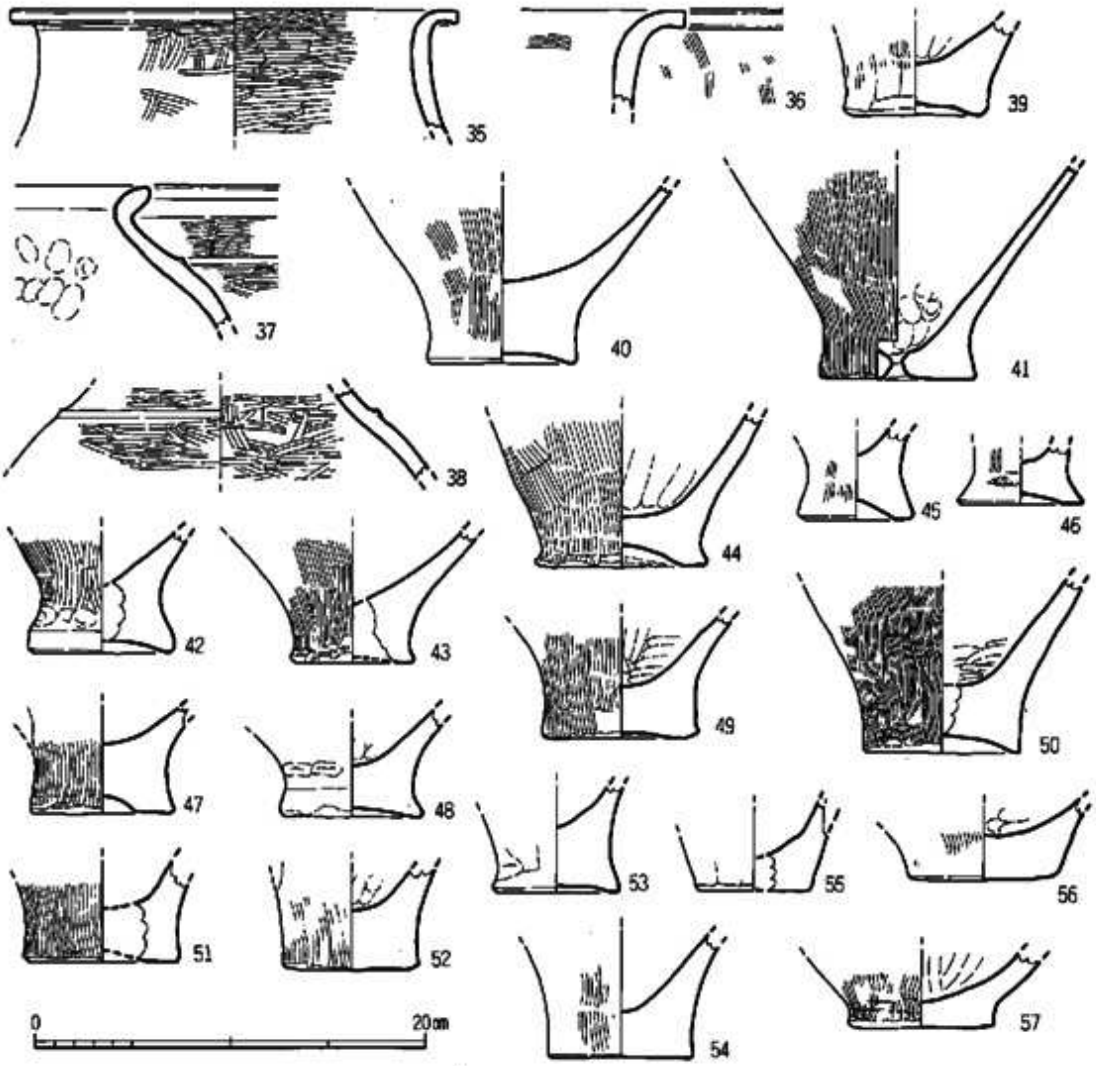


Fig. 148　第14号土壙出土土器実測図（その３）(1/4)

で内外とも淡橙褐色。52は底径７cmで内面と底外面はナデ。外側面は磨滅気味。焼成良好で内外とも橙褐色。53は底径6.6cmで全面磨滅。細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は橙褐色，外面は黒～橙褐色をなす。54は底径7.4cmの平底類。内面と底外面はナデ。粗砂多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は橙褐色をなす。55は底径６cmの小型類。内外面磨滅。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外橙褐色。

壺（35～38・56・57）35は口径23cmで口唇部のみ横ナデで他はヘラ磨き。焼成良好で内外とも暗褐色をなす。36は頸部内面に横ハケを残すが，以下内面はヘラ磨きか。外面は縦ハケをナデ消す。細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は褐～黒褐色，外面は暗褐～橙褐色をなす。37は頸

部下端に三角凸帯を付ける類で，頸～胴部外面は横ヘラ磨き，内面はナデ。細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は黒塗り状で黒褐色をなす。38は頸部下端に三角凸帯を施す類で，内外面横ヘラ磨き。細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は黒灰褐色，外面は暗褐色をなす。56は底径7.6cmで内面と底外面はナデ。焼成良好で内外とも淡橙褐色。57は底径7.4cmで細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は茶褐色，外面は橙褐～黄褐色をなす。内面は指ナデ，底外面は磨滅。

磨製石斧（Fig.194-1）土壙内出土品取上げ番号№45で，灰色の硬質粘板岩系の石材。珍しく縦に半截されてしまっている。ほぼ全面を丁寧に研磨した蛤刃石斧であるが，側面には整形時剝離と敲打痕が残る。長さ127mm，残存幅31mm，厚さ36mm，重さ206.4gとなる。

石錘（Fig.79-8）凝灰岩質の小河原石の両端を打ち欠いただけの簡単なもの。長さ60mm，幅44mm，厚さ19mm，重さ67.8gとなる。

石錐（Fig.66-117）良質の腰岳系黒曜石製で，断面長方形の方柱状のもの。下端は回転方向の磨面が明確に認められ，直径で最大7.5mmの穿孔作業が行われたことが判かる。4側面は横剝ぎが基本となっているが，それらの角のうち3つの稜は面取り的に横剝ぎで角を落としている。この方柱状の形状製作技法が今ひとつ理解できないが，筑紫野市貝元遺跡（県文化課調査分で1999年3月刊行予定分）から類似品が出土している。貝元例はより長大で，穿孔具であるという確証は無いが，4側面の横剝ぎや面取り状況等酷似している。類例の増加を待ちたい。当土壙のものは，先端部は新しい欠損であるが，他はかなり風化しており，縄文期のものの混入品である可能性も考えられる。現存長27mm，幅7.5mm，厚さ5mm，重さ1.3gとなる。

打製石鏃（Fig.78-215）腰岳系黒曜石製の剝片鏃。不定形剝片の表面縁辺のみに雑な細調整を施しただけのもので，主要剝離面側には殆ど調整剝離が施されていない。長さ25mm，幅20mm，厚さ4mm，重さ2.1gとなる。

以上の第14号土壙出土遺物は多種多量であり，土器においてもかなりのバラエティーが見られる。刻目を持つ類（1・2），如意形口縁で沈線を施す類（3～12・16），同じく沈線を持たない類（13～15・17～19），三角凸帯を付ける類（20～24），亀ノ甲系で沈線類（26），同じく凸帯を付ける類（27～32），同じく凸帯・沈線を持たずに内端が張り出す類（33・34）など，弥生前期末～中期初葉，特に中期初葉の中でも古～最新段階までのものをほぼ全て含んでいる。この事は遺構の説明でも考察した如く，何回かの掘り直しのあった廃棄土壙としての性格を良く表している。以上の事から，当土壙は弥生中期初葉のものであり，最終埋没はその最新段階であったと考えられる。

第15号土壙（Fig.149，PL.44・46・47）

Ⅱ区の中央やや西寄りに位置する，南北に長い大型不整形土壙である。北端でC3を切る。

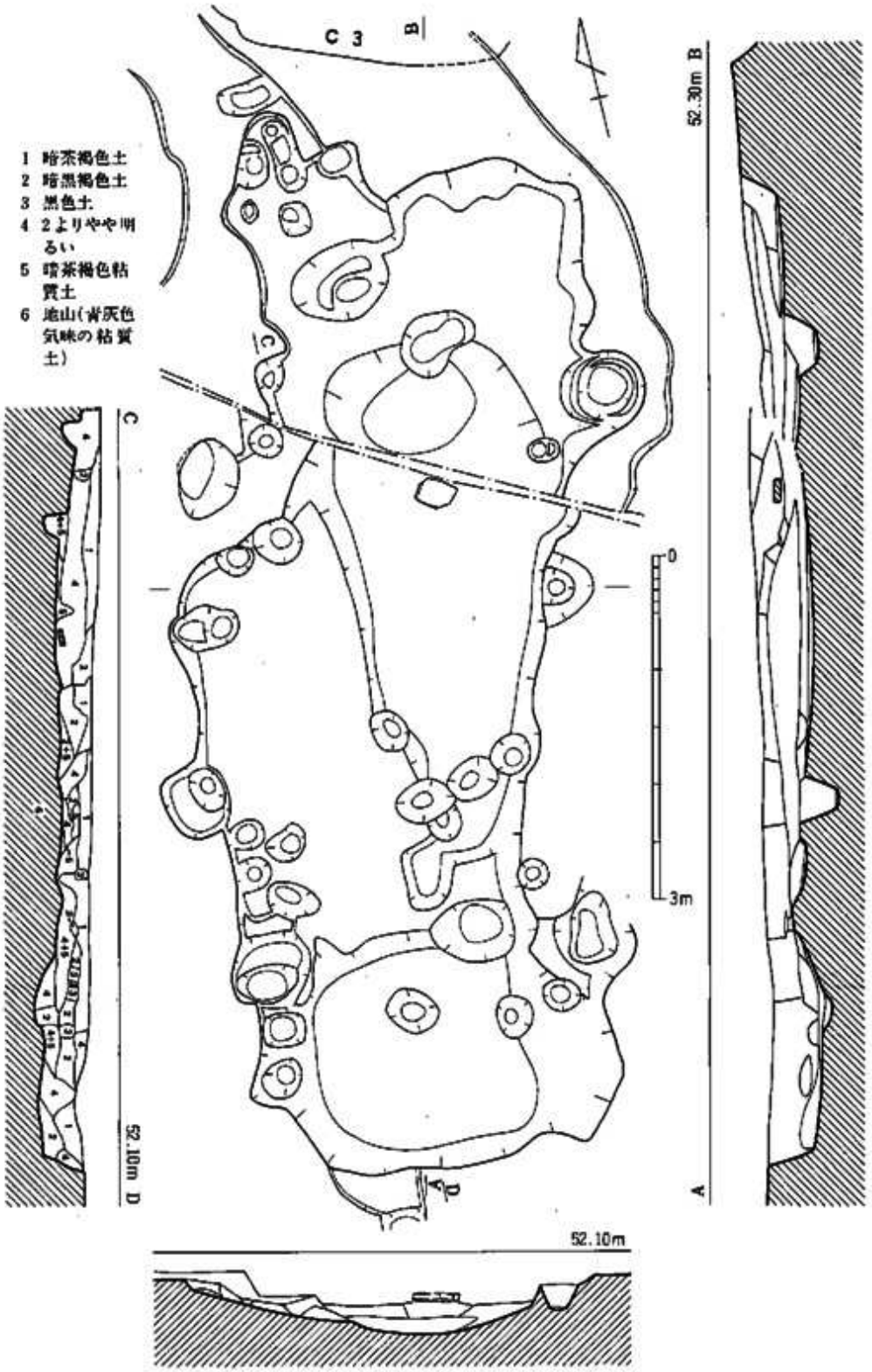


Fig. 149　第15号土壙実測図（1/60）

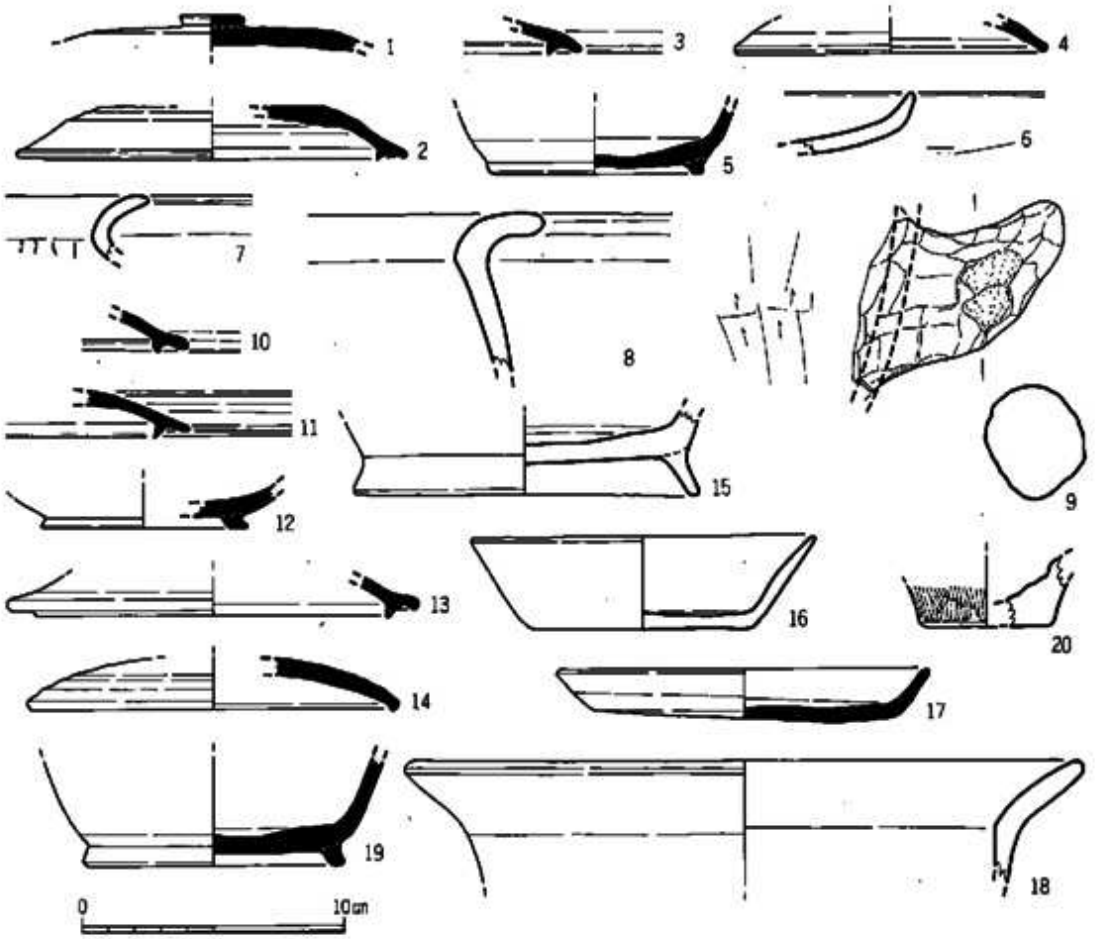


Fig. 150　第15号土壙(1～9)，第16号土壙(10～12)，第17号土壙(13～18)，第19号土壙(19)，第20号土壙(20)出土土器実測図 (1/3)

南北の長さ990cm，東西幅252～330cm，深さ45cmとなる。底面は凹凸が激しく，南端と北側に深みがある。土層縦断面でも判かるように，最低5回の掘り直しが観察できる。以上の事から，集落の中の廃棄土壙として短期間に何回も掘り直された大型土壙と把握できる。

出土土器（Fig.150-1～9）

須恵器杯蓋（1～4）1は釦状摘を付ける類で天井外面は回転ナデ，同内面はナデツケ。焼成堅緻で内外灰色をなす。2は口径15cmで，返り端部径12.7cmとなる。天井外面は磨滅，内面はナデツケ。焼成堅緻で内面は暗灰色，外面は淡灰色をなす。3は内外面ともに回転ナデで，焼成やや堅緻で，内外面ともに灰褐色をなす。4は口径12cmで返り部を持たない類。内外回転ナデで，焼成軟質で内外とも灰褐色をなす。

須恵器杯（5）高台径8.2cmで，低い台形状高台を付ける。底内面はナデツケ，外面は磨滅。

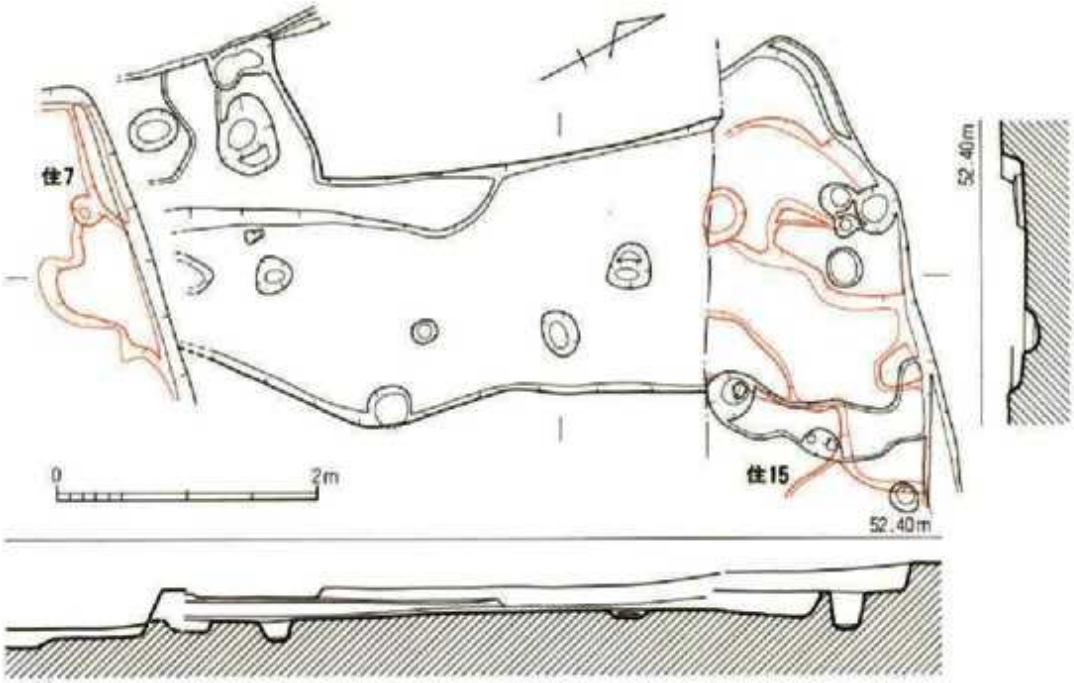


Fig. 151　第16号土壙実測図（1/60）

焼成軟質で内面は褐色，外面は灰褐色をなす。体部下端の屈折がまだ残り，底部へ丸味を帯びて続く類である。

土師器杯（6）体部と口縁部の境に明瞭な屈折を見せていない類で，内面と口縁外面は横ナデ，体部外面はヘラ削り。焼成良好で内外面ともに淡橙色をなす。

土師器甕（7～9）7は薄手で強く外反する口縁となる。口縁内外面横ナデ，胴部内面はヘラ削り。焼成良好で内面は黄橙色，外面は淡橙褐色をなす。8は胴部内面はヘラ削り，同外面はナデ調整。焼成良好で内面は黄褐色，外面は明橙褐色。9は断面の丸い把手部分で，胴部内面はヘラ削り上げ。焼成良好で橙褐色をなす。

以上の出土土器のうち，2・3は7C後葉，5は7C末～8C初，4は8C末までは下がるもので，当土壙の使用時期がこれらの時期幅の中でおさえられよう。

第16号土壙（Fig.151，PL.47）

Ⅱ区中央の東寄りに位置する，南北に長い不整形大型土壙である。北側の大半が第15号住居跡と重複して切られ，南端を第7号住居跡に切られる。南北の長さ600cm以上，東西幅245～114cm，深さ33cmと浅い。底面はやや高低があるが大旨平坦である。

出土土器（Fig.150-10～12）

須恵器杯蓋（10・11）10は内外回転ナデで，焼成堅緻。内外灰色をなす。11は天井外面はヘラ削り，他内外面は回転ナデ。焼成堅緻で内外面ともに灰色をなす。返り部は長めでシャープ。
須恵器杯（12）高台径7.8cmで，外方へ踏ん張る高台を付ける。内外面ともに回転ナデ。焼成堅緻で内外面ともに灰色をなす。

以上の出土土器のうち11は７Ｃ中葉の様相を持っており，12は７Ｃ後葉代に比定される。よって当土壙は７Ｃ後葉の廃棄土壙であったと考えられる

第17号土壙（Fig.32，PL.48）

Ⅱ区の南半東端に位置する略方形小型土壙である。南北の長さ280cm，東西が240cm，深さ40cm程の規模の不整方形プランをなす。底面は凹凸があり，西側へ低くなる。東南部を中心に角礫等とともに土器類が，底面より若干浮いて出土した。

出土土器（Fig.150-13～18）

須恵器杯蓋（13・14）13は口径15.8cm，返り端部径13.4cmで，内外とも回転ナデ調整。焼成堅緻で灰～淡灰色をなす。14は口径14.2cm，器高２cmの，鳥嘴状口縁が丸くなった類。天井外面は回転ヘラ削りの上をナデ，他内外面は回転ナデ。焼成堅緻で灰色をなす。
須恵器皿（17）口径14.3cm，器高2.2cm，底径11.7cmで，底内面中央と底外面はナデ，体部内外面は回転ナデ。焼成堅緻で淡灰色。完形品。
土師器杯（15・16）15は高台径13.3cmで，内底面はナデツケ，底外面はヘラ削り。高台の高さ1.5cm程あり，底部外端に接して付けられている。焼成良好で橙褐色をなす。16は口径13.2cm，器高3.7cm，底径8.4cmで，底外面はヘラ切り。内面すべてと体部外面は横ナデ。口縁内側には油煙が付着している。焼成良好で内外とも橙色をなす。
土師器甕（18）口径26cmで，頸部内面に稜をつくり，折れて長く直線的に外反して開く口縁となる。口唇端面は平坦面をなし，口縁の肥厚は少ない。焼成良好で内外とも黄褐色をなす。全面磨滅して調整不明。

以上の出土土器のうち，13は７Ｃ後葉だが，14は８Ｃ後半代，15は８Ｃ末前後，16・17は８Ｃ末～９Ｃ初頃で，18も８Ｃ後半以降のものである。以上のことから，当土壙は８Ｃ末～９Ｃ初の廃棄土壙と考えられる。

第19号土壙（Fig.152，PL.49）

Ⅱ区の南端近くに位置する２段掘土壙墓である。長軸をN81°30′Wにとり，全体の墓壙は244×149cm，テラスまでの深さ20cmで，下段の墓壙は長さが187cm，幅46cm，深さ16cmとなる。底面の幅が東側が僅かに広いため，頭位は東と考えられる。底面の東寄り中央から鉄刀子１点が出土した。西南付近のテラスと同じレベルから須恵器杯１点が出土したが，これは新しい上

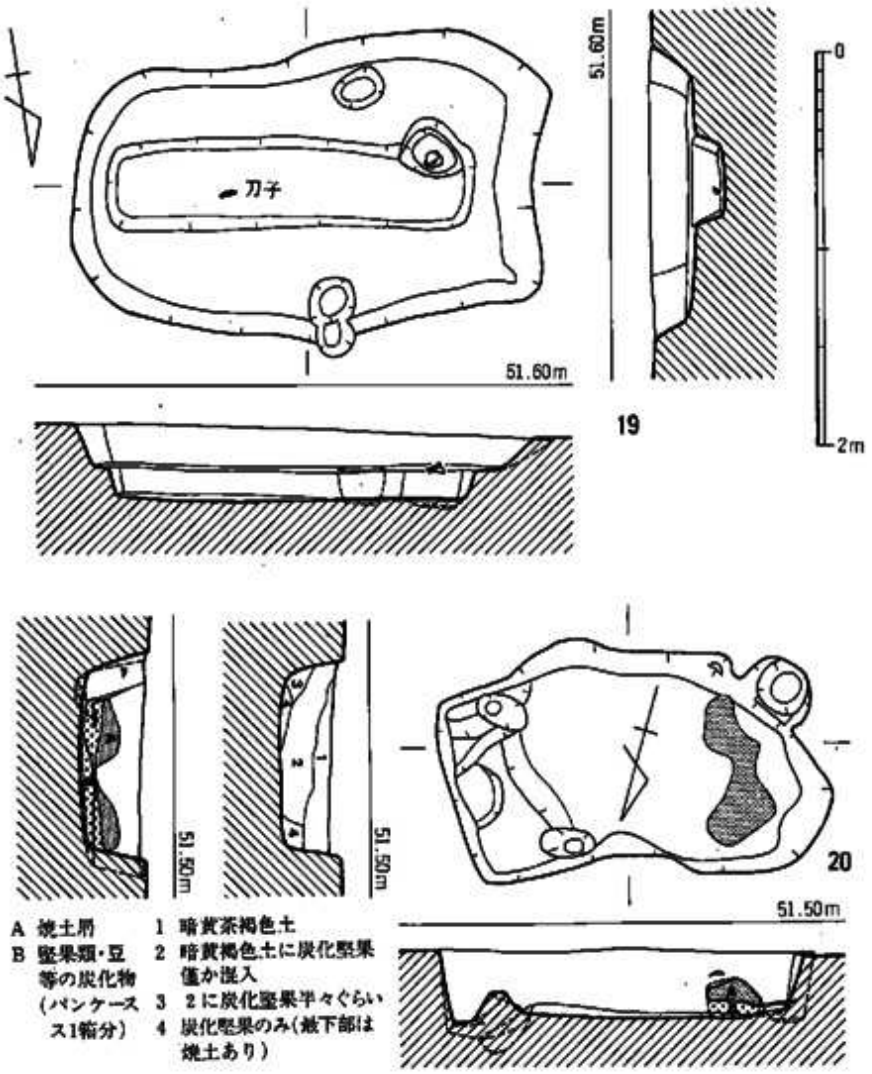


Fig. 152　第19・20号土壙実測図（1/40）

からの掘り込みによる穴に伴うものであろう。

出土遺物（土器はFig.150-19）

須恵器杯　高台径10cmで，短かめだが外方に踏ん張った高台を付ける。内底面中央と底外面中央はともにナデツケ。他内外面は回転ナデ。焼成堅緻で内外面ともに青灰色をなす。

刀子（Fig.175-3）全長83mm，身長58mm，関部幅16mm，背厚さ2mmの，寸詰りの短い類である。柄部分には一部に樺巻的な痕跡が残るが，明確ではない。形態は古墳時代前期の特徴を有している。

以上の出土遺物のうち，須恵器は8C初のものであり，既述した如く，新しい穴に伴うもの

であろう。鉄刀子は副葬品として，他の石棺系竪穴式石室の副葬儀礼と全く同じであることから，当土壙墓も５Ｃ代のものと推定できる。なお，この第19号土壙墓は，Ⅱ区北端に形成された墓地とは明らかに離れており，群を別にする。Ⅱ区の南端から発掘範囲外の南側にかけて，もう１つ別の墓地があるのかもしれない。

第20号土壙（Fig.152，PL.50）

Ⅱ区の南端近くで，上述の第19号土壙の北西隣に位置する。東西に長い不整形プランの土壙だが，底面の状況からみて，本来は東側の一段高い部分を除いた楕円形土壙であったと思われる。東西の長さ206cm，南北幅106cmで，深さ34cmとなる。土壙壁はわりと直に掘り込まれ，底面は東端を除いては平坦である。西端付近に焼土層があり，その下に厚さ10cm程の炭化堅果類の層がみられた。ササゲ属の豆類多量，コナラ属・イチイガシのドングリ類多量である。その種類・量等の詳細については後の章で㈱古環境研究所による自然科学的分析の報告を掲載したので参照されたい。(303頁)

出土土器（Fig.150-20）

壺　底径７cmの底部小片である。外側面は縦位のヘラ磨き，底外面はナデ，内面は剥離している。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は橙褐色，外面は褐色をなす。底外面は僅かに上げ底となりそう。

以上の土器１点のみであるが，当土壙は弥生中期初葉の楕円形貯蔵穴であったことが推定できる。ドングリ類が確実にこの時期まで，食糧として大量に採集・貯蔵されていたことが判かる好資料である。

第21号土壙（Fig.153，PL.50）

Ⅰ区の南半に位置する隅丸長方形プランの小型土壙である。東西に長く，167×125cmで，深さ27cm程となる。壁はしっかりと掘り込まれ，底面はほぼ平らであるが，東西両端に小ピットが検出された。上屋構造に伴う支柱の穴となるか。中からは炭化した板状のものや炭片，砂岩・片岩等の礫，土器が多量出土した。明らかにこの土壙内で火を焚いたもので，それと前後して土器類が投棄されたものであろう。炭化米が８cc分，及びササゲ属豆類少量が出土したが，詳細な分析は後章に掲載したので参照されたい。(303頁)

出土土器（Fig.154・155）

鉢（１）口径26.8cm，器高16cm，頂部径7.3cmで，鉢にしては深めの器形で古相を持つ。口縁部は短く折れて外反し，内外ともに横ナデ。体部内面はナデ，外面はハケがかすかに残るが大半磨滅。頂部側の体部内面は横ヘラ磨き，頂部内面はナデ，外面凹部もナデ。細砂粒を多く含み，焼成良好で内外ともに赤橙褐色をなす。

甕（２～９）２は口径32.8cm，器高32.6cm，底径8.4cmで，口唇外下端と三角凸帯上とに刻目

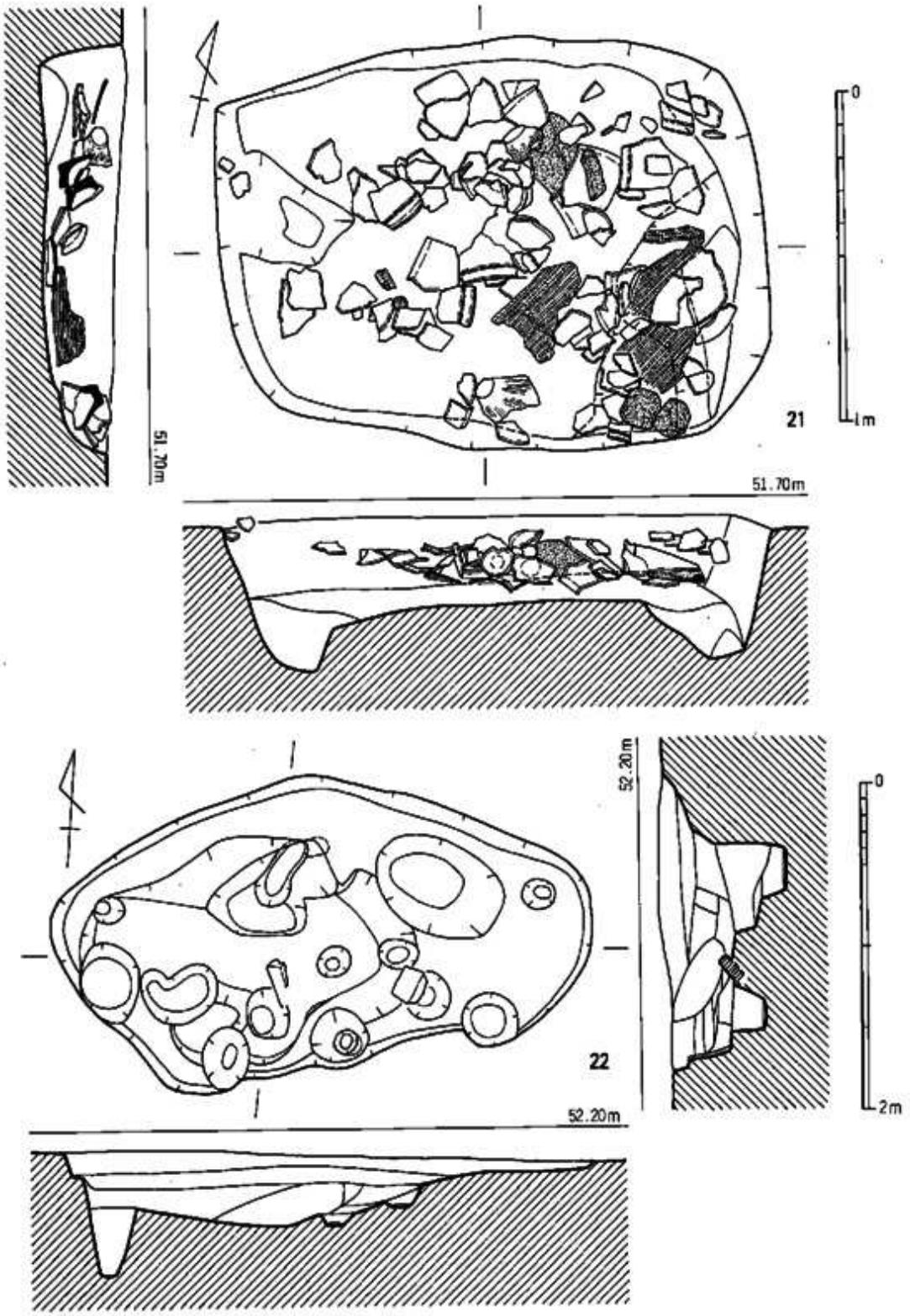


Fig. 153　第21・22号土壙実測図（1/20, 1/40）

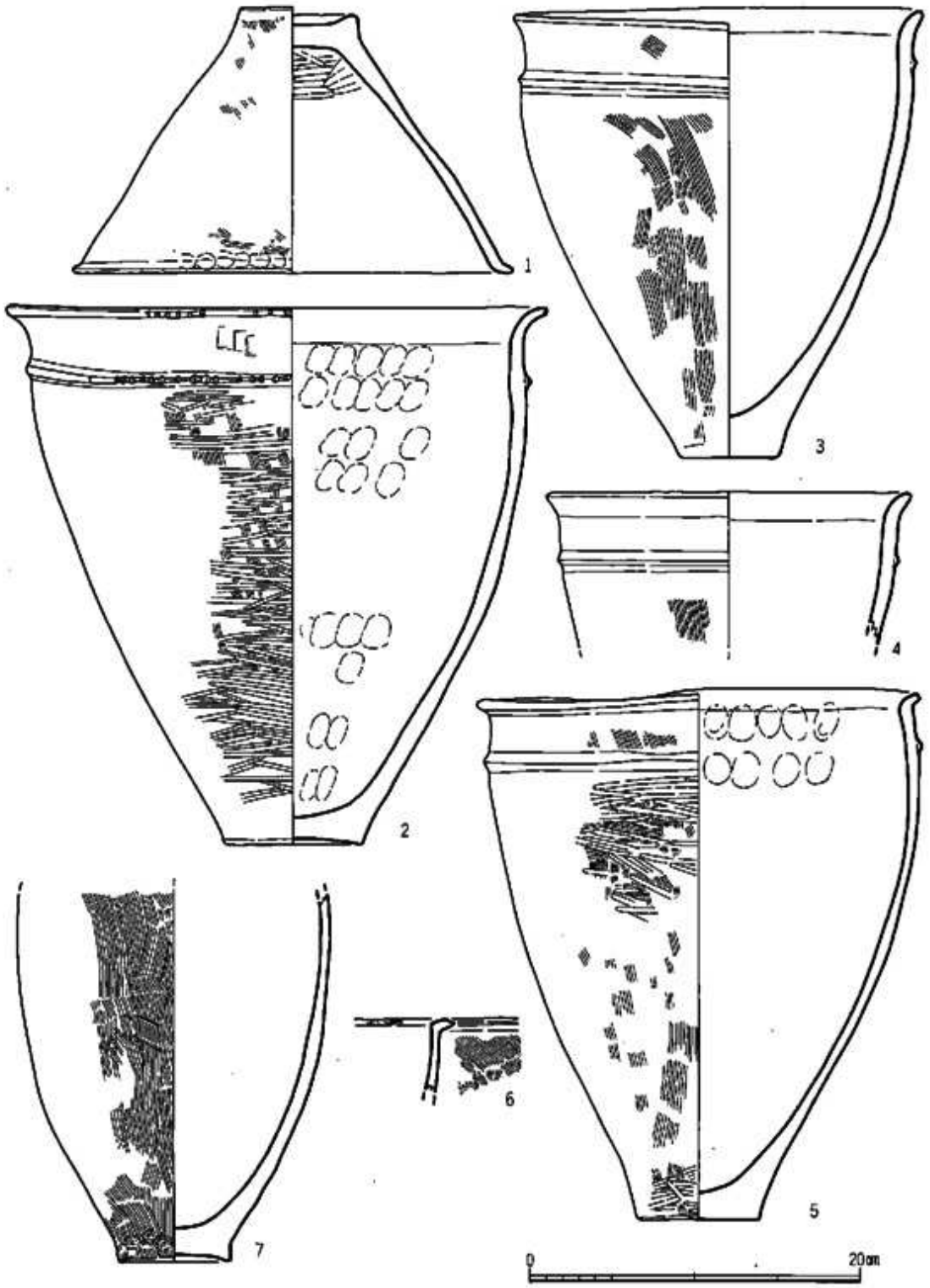


Fig. 154　第21号土壙出土土器実測図（その1）(1/4)

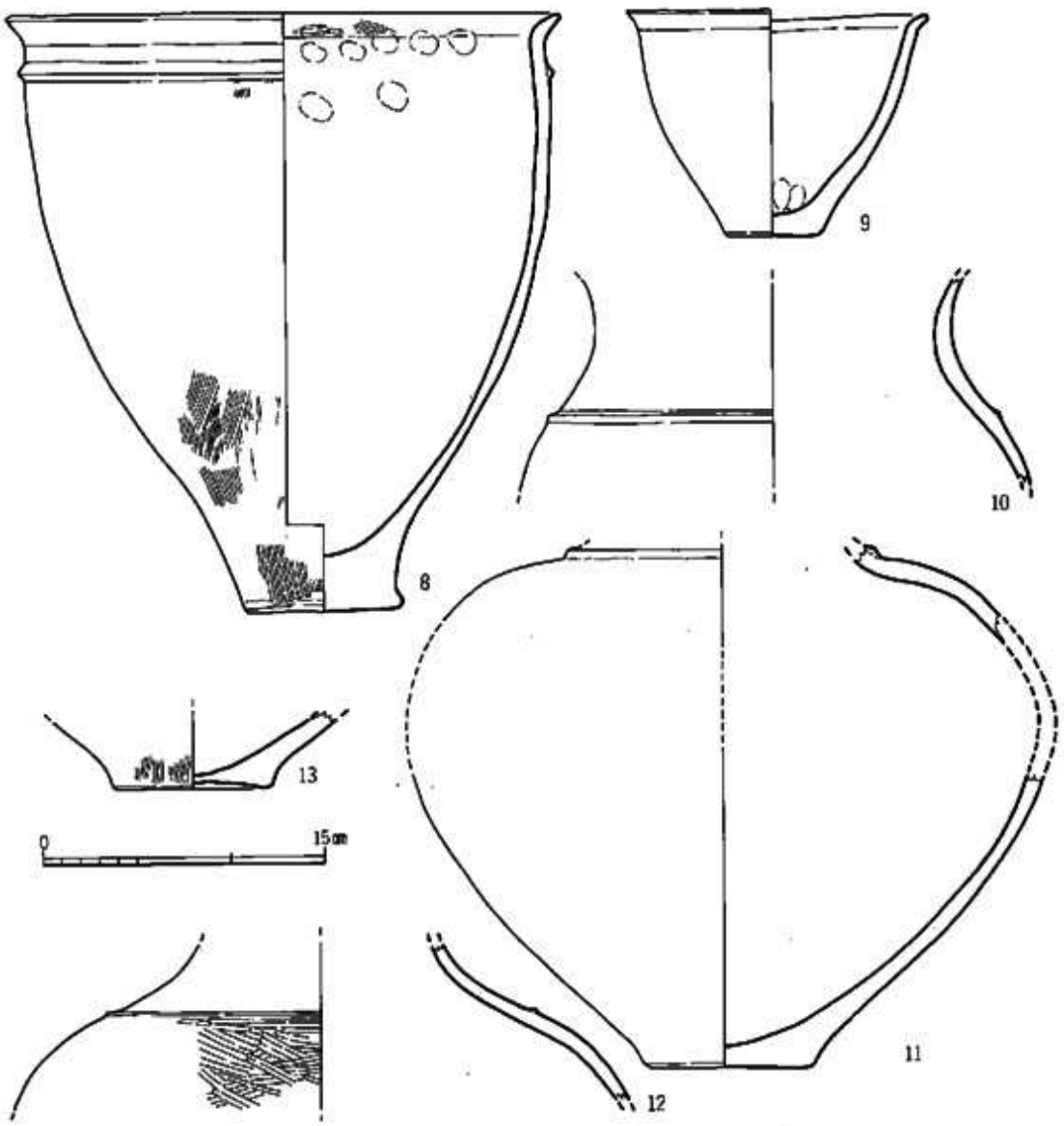


Fig. 155　第21号土壙出土土器実測図（その２）(1/4)

を施す如意形口縁類。胴部内面は丁寧なナデ，外面は細かい縦ハケの上を横ヘラ磨き。外面中位に煤が付着。細砂粒を多量に含み，焼成良好で内外面ともに橙褐～褐色。３は口径24.7cm，器高27.2cm，底径6.1cmとなる。体部内面はナデ，底外面から側面にかけてはナデ。内面下半には炭化物が付着し，外面上半には煤が付着している。粗・細砂粒を多量に含み，焼成良好で内外面ともに淡橙褐～褐色をなす。４は口径22cmで，内面は丁寧なナデ，外面の凸帯下方までは横ナデ。以下外面には細かい縦ハケを施す。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内外面とも

に褐色をなす。5は口径29.9cm，器高32.2cm，底径7.4cm。内面は丁寧なナデ，外面上半には縦ハケの上に横ヘラ磨きが施される。底部外側面も同様。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は暗褐色，外面は淡橙褐～褐色をなす。6は口縁上面の外周沿いが段をなす異類で，内面にはシャープな稜を作る。胴部内面は丁寧なナデ，口縁上面内側には横ハケを施す。焼成良好で，内面は暗褐色，外面は褐色をなす。外面上半には煤付着。7は底径6.8cm，胴部最大径19cmで，胴部内面はナデ。底部は浅い上げ底状となり，ナデ調整。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外橙褐色。8は口径29.6cm，器高31.7cm，底径8.4cmとなる。内面は丁寧なナデ，底外面もナデ。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は橙褐～黒～黄褐色，外面は橙褐色をなす。9は口径16cm，器高12cm，底径5cmとなる小型鉢状品である。内面下半と底外面はナデ，他面は磨滅。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外橙褐色。

壺（10～13）10は頸部下端に三角凸帯を付け，頸部が中途で直立してから外反する口縁となる類。凸帯部分のみが横ナデで，他は内外面ともに丁寧なナデ。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は黄橙褐色，外面は白黄褐～黄橙褐色をなす。11は推定胴部最大径34.4cm，底径9.1cmとなる。内面は丁寧なナデ，外面は全て磨滅。粗砂粒を多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は黄褐～橙褐色をなす。12は内面と外面の三角凸帯より上は丁寧なナデ。以下外面は横ヘラ磨き。焼成良好で内面は暗褐色，外面は黄褐～黒色をなす。13は底径8.6cmで内面と底外面は器表剝落。細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は白黄灰色，外面は黄灰色をなす。

以上の出土土器のうち，2は前期後葉だが，他は中期初葉の如意形口縁に三角凸帯を付ける同じ系列の類で占められており，一括品として扱える。当土壙は形態上，本来は貯蔵穴として設けられたものであろうが，その用途を失った時点で廃棄土壙として弥生中期初葉の古段階の土器類が一括投棄されたものと考えられる。

第22号土壙（Fig.153，PL.51）

Ⅰ区の南半に位置する，東西に長い楕円形土壙である。長さ329cm，幅180cm，深さ46cm程だが，底面は凹凸があり，小ピット状の穴も多く見られる。整美とはとても言えず，見るからに廃棄土壙的な感じである。埋土中からは弥生土器片が多く出土した。

出土土器（Fig.156）

壺（1）小破片だが，内外面ともに丁寧なナデ調整。焼成やや良好で，内外ともにこげ茶色。

甕（2～15・17～20）2は口径22cmで口唇外下端に小さな刻目を密に施す。胴部内面はナデ。焼成良好で内面は淡橙色，外面は煤が付着してこげ茶色。3は口径24cmで胴部内面はナデ。焼成良好で茶褐色。4は胴部内外面ともに丁寧なナデ。焼成良好で内面は茶褐色，外面はこげ茶色。5は胴部内面はナデ，外面には煤付着。焼成良好で内外面ともにこげ茶色。6は口径24.6cmで，胴部内面はナデ。同外面はかなり磨滅。焼成やや良好で内面は暗茶褐色，外面は橙褐色。

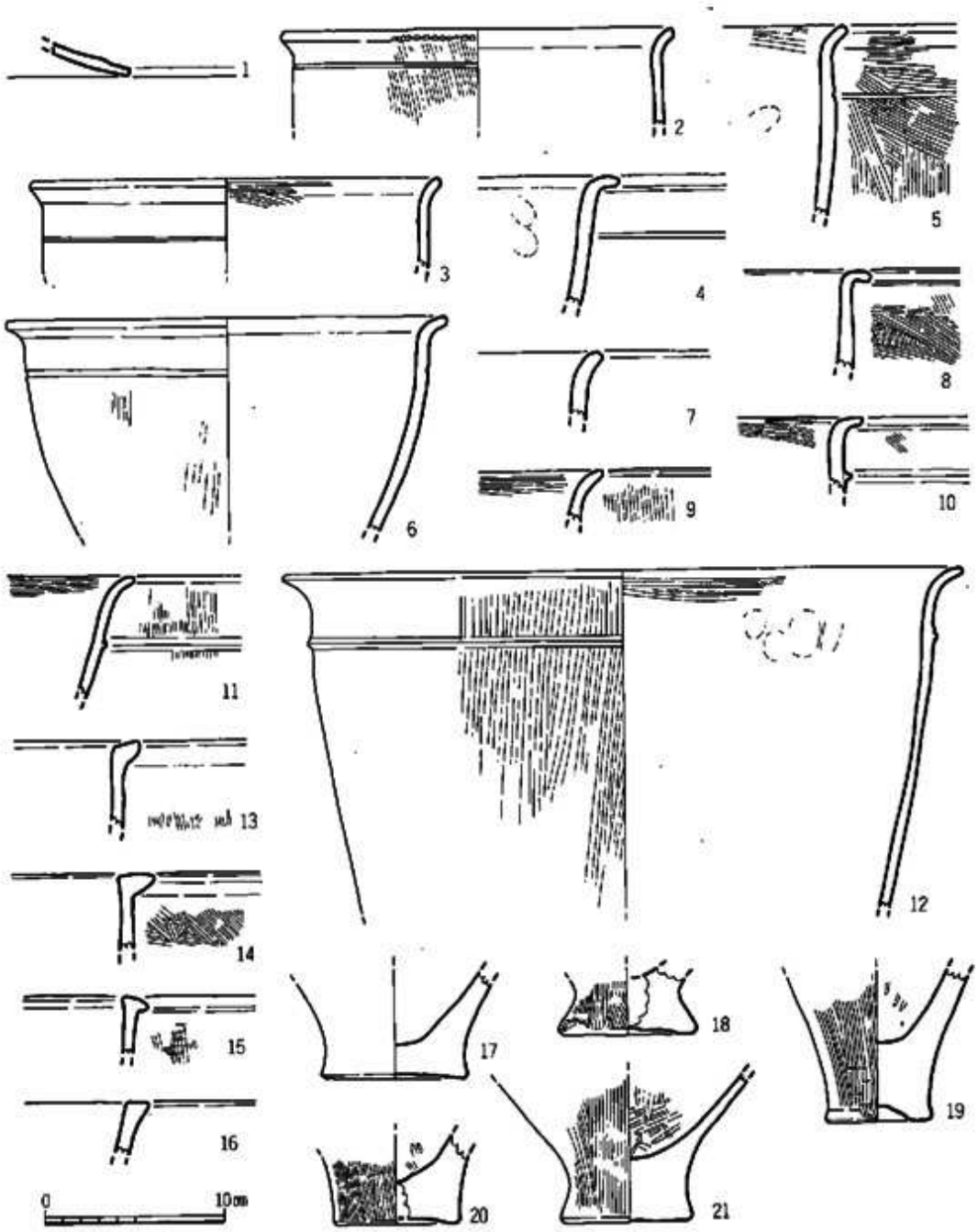


Fig. 156　第22号土壙出土土器実測図（1/4）

外面上半には煤付着。7はあまり外反しない頸で，内外面磨滅。粗砂粒を多く含み，焼成やや不良で，内外とも暗灰黄褐色をなす。8は強く屈曲する口縁で，胴部内面はナデ。焼成良好で

内面は茶色，外面は煤が付着してこげ茶色。9は胴部内面はナデ。焼成良好で橙褐色をなす。10は胴部内面はナデ，焼成良好で茶褐色。11は胴部内面はナデ，外面下半は器表剥落。焼成やや良好で内面は赤褐色，外面は茶褐色。12は口径38cmで，胴部内面はナデ。外面は粗い縦ハケ。焼成良好で内外とも茶色。13は如意形系とも亀ノ甲系ともつかない口縁で，胴部内面はナデ。外面のかなり下まで横ナデ。焼成良好で暗茶色をなす。14は口縁上面が水平で，内端が僅かに突出気味となる類。内面はナデ。焼成良好で暗灰黄褐色をなす。15は内端がかなり突出する類で，内面はナデ，外面は雑なハケ。焼成良好で内面は茶色，外面はこげ茶色。17は底径8.2cmで内外面ともに丁寧なナデ。焼成良好で内外こげ茶色。粗砂粒を多く含む。18は底径7.8cmで内面と底外面はナデ。焼成良好で，内面は淡灰黄色，外面は橙色。19は底径6cmで，内面はナデで一部ヘラ磨き。底外面はナデ。焼成良好で暗橙褐色。内底面に煤付着。蓋になるかもしれない。20は内面はヘラ磨き，底外面はナデ。底径7cmで焼成良好。内外とも暗茶褐色。蓋になるかもしれない。

壺（16・21）16は口縁を外面側に肥厚させ，上面を水平につくる類。内面は丁寧なナデ，外面は横ナデ。焼成良好で内面は暗黄茶褐色，外面はこげ茶色。21は底径7.4cmで，内面はヘラ磨き，底外面はナデ。焼成良好で内面は明茶褐色，外面は茶褐色。蓋になるかもしれない。

以上の出土土器は各種が混在しており，弥生中期初葉の新段階まで見られる。小破片が多く，この期の廃棄土壙そのものであろう。

第23号土壙（Fig.157，PL.51）

Ⅰ区の中央やや南寄りに位置する方形的小土壙である。遺構の南西半は発掘調査範囲外にあり，その全容は不明。現状での長さ300cm，幅166cm，深さ30cmとなる。東側の隅が直角になり，長方形プランをなすかと思われたが，北西側が丸くなり，平面形状を確定できない。壁は直に掘られ，底面も平らで，全体にしっかりした土壙である。東隅に深い小穴が検出されたが，上屋構造の支柱となるかもしれない。土壙内からは片岩や砂岩の河原石，焼土等とともに弥生土器が多量に出土した。いずれも底面から10cm程浮いた状態であった。すべてが投棄された状況と看取された。

出土土器（Fig.158～160）

甕（1～17・22～31）1は口径25cmで胴部内面は丁寧なナデ。胴部内面下端には炭化物が付着し，外面上半には煤がこびり付く。焼成良好で内面は黄褐色，外面は褐色をなす。2は口径28cmで，胴部内面は丁寧なナデ。焼成良好で内面は暗黄茶褐色，外面は灰橙褐色をなす。3は口径27cmで，胴部内面はハケをナデ消す。焼成良好で内面は灰黄褐色，外面は暗灰黄褐色をなす。4は口径24cmで，胴部内面はナデ，外面は雑な横～斜位のハケ調整。焼成良好で内外ともに灰黄褐色。5は胴部内面に強い指ナデ上げがみられ，外面には煤が付着。焼成良好で内外淡橙色。

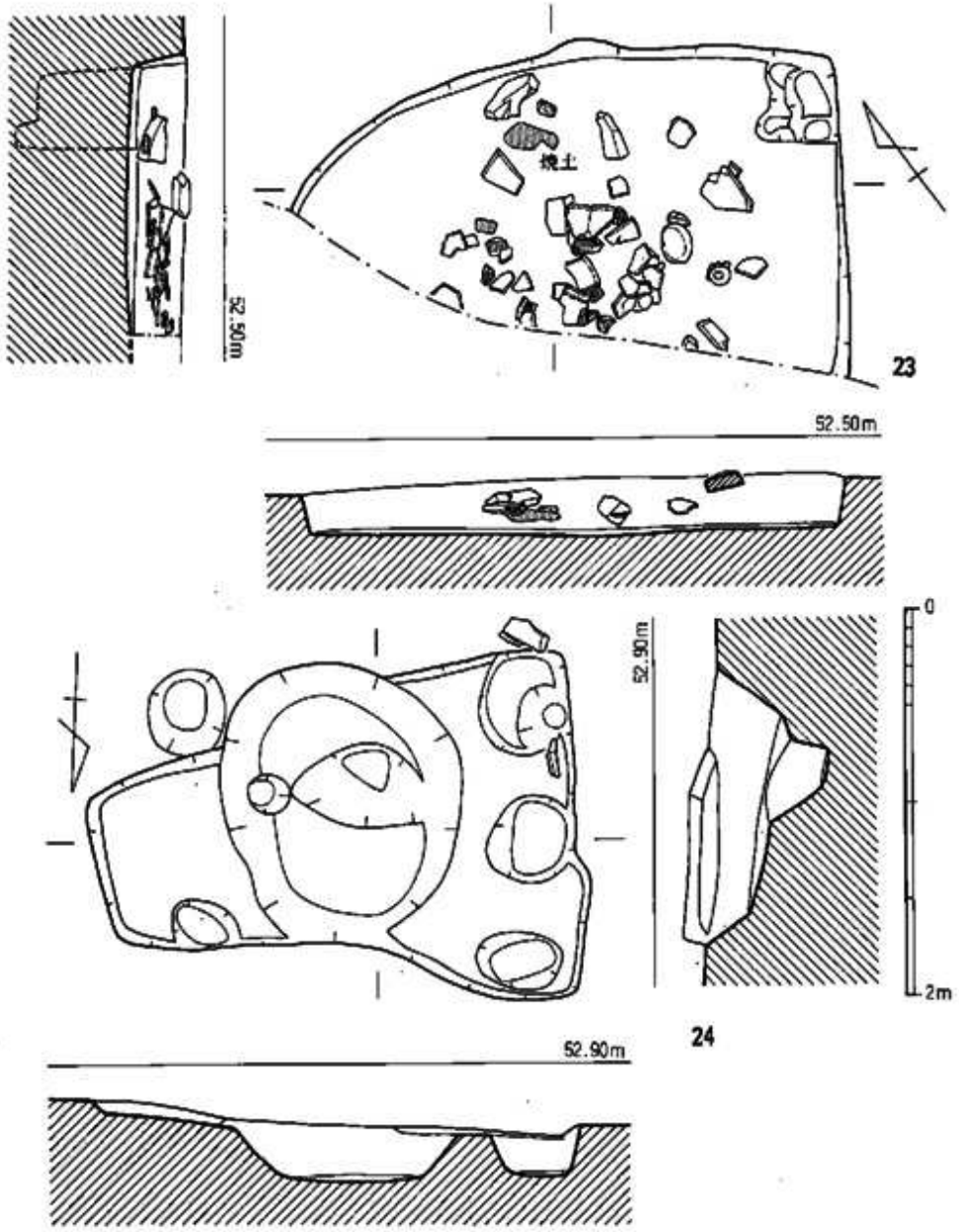


Fig. 157　第23・24号土壙実測図（1/40）

6は口径27cmで，胴部内面はナデ。外面の沈線は切れ切れとなる。外面上半には部分的に煤付着。焼成良好で淡橙褐色をなす。7は口径24cmで胴部内面上半は横ハケ，以下はナデ。焼成良好で内外面ともに暗黄茶褐色。8は胴部内面上端は板ナデ状，以下は丁寧なナデ。外面の沈線は雑でややよたる。焼成良好で内外灰黄褐色をなす。9は胴部内面をナデた後にヘラ磨きを雑

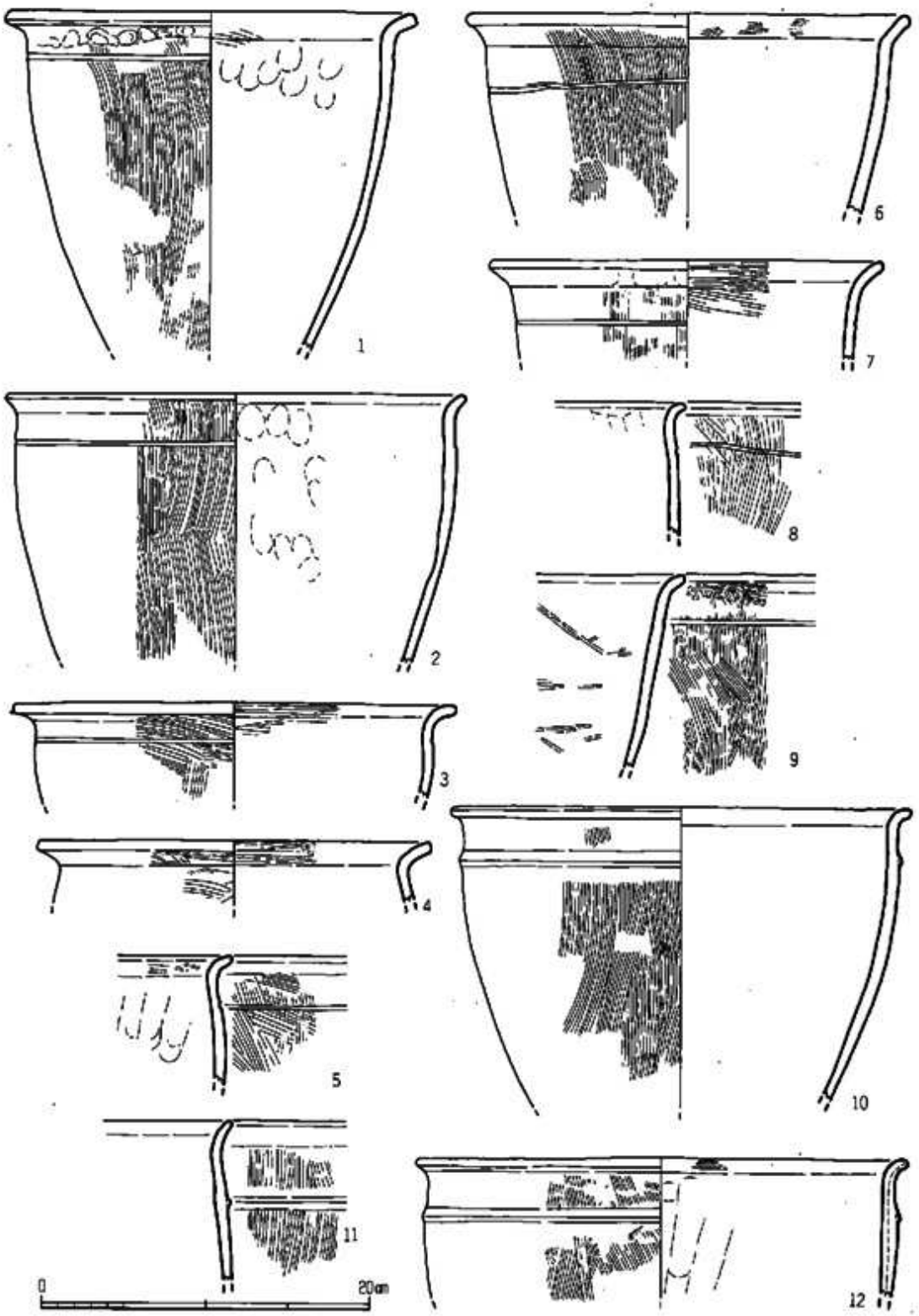


Fig. 158　第23号土壙出土土器実測図（その1）(1/4)

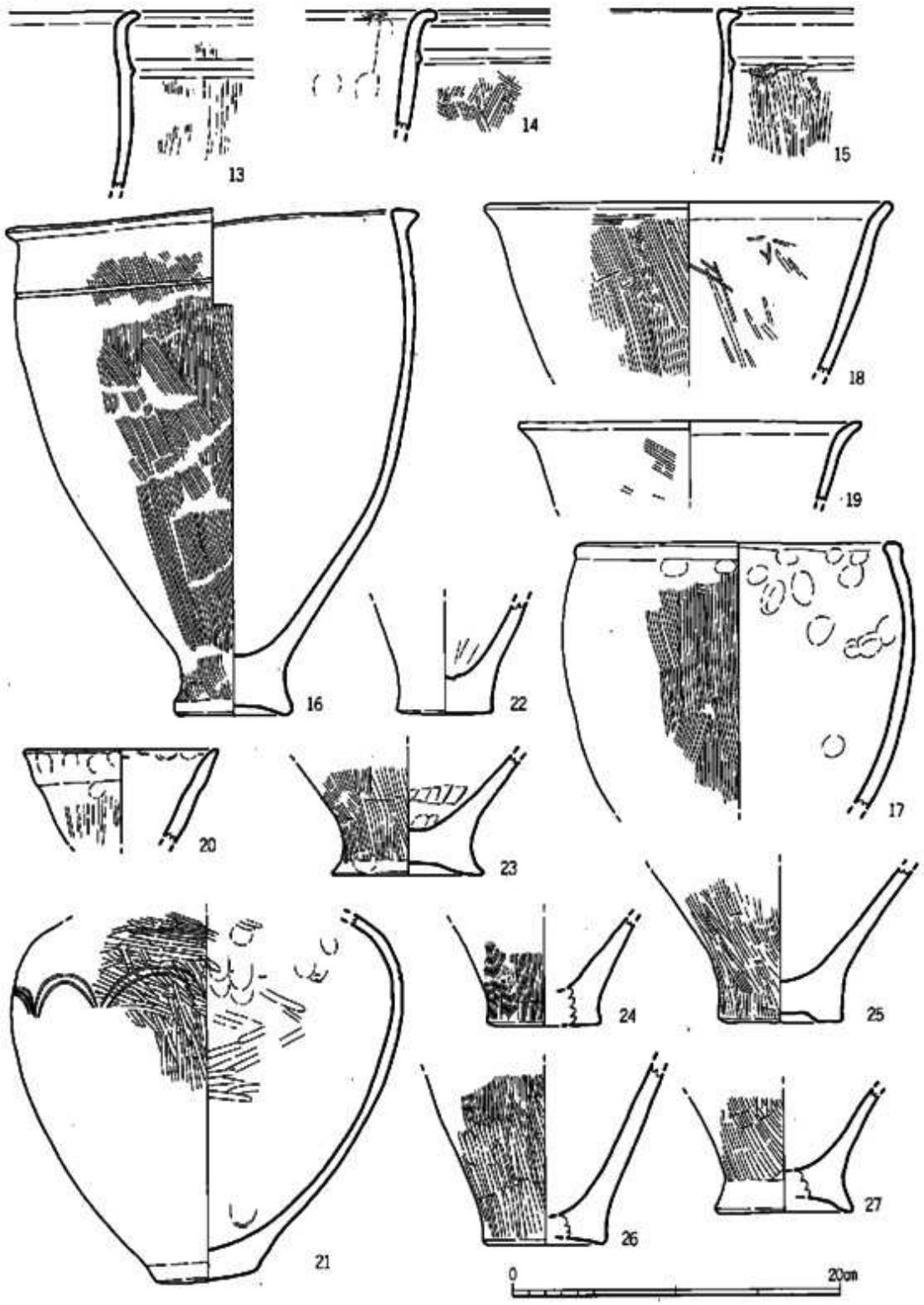


Fig. 159　第23号土壙出土土器実測図（その２）(1/4)

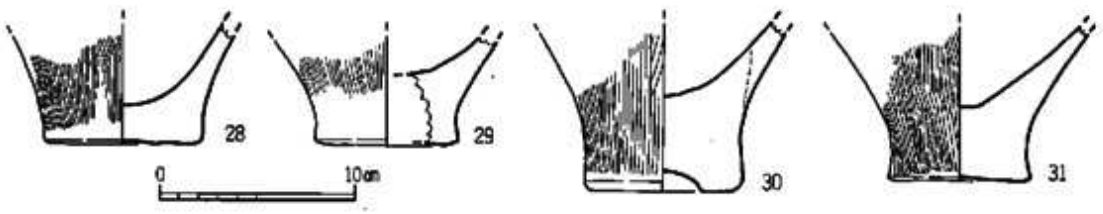


Fig. 160　第23号土壙出土土器実測図（その３）(1/4)

に施している。焼成良好で内外面ともにこげ茶色をなす。10は口径28cmで，内面は磨滅。外面には煤が付着。焼成良好で内面は黄橙褐色，外面は褐色をなす。11は胴部内面はナデ，外面には煤が付着する。焼成良好で暗黄茶褐色をなす。12は口径29.9cmで，内面は指ナデ上げ仕上げ。焼成良好で内外とも暗黄茶褐色をなす。13は胴部内面は丁寧なナデ，外面はかなり磨滅する。焼成良好で内外暗黄茶褐色。14は丸く屈曲反転する口縁で，胴部内面はナデ。外面の三角凸帯下方までは横ナデ。外面には煤付着。焼成良好で黄茶色をなす。15は内面がナデ，口縁上面から外面の三角凸帯下まで横ナデ，以下は雑な縦ハケ。焼成良好で内外茶色をなす。16は口径25.2cmで，器高30.9cm，底径7.2cmで，胴部内面は丁寧なナデ。底部外側面と底外面はナデ。細砂粒を多量に含み，焼成良好で内外橙褐色。17は口縁断面が丸っこく，亀ノ甲タイプのくずれた類か。内側への張り出しが認められる。胴部内面はナデ，外面全体に煤付着。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は褐色，外面は淡橙褐色。22は底径5.8cmで，内面はナデだが，下半は板ナデ状。外面は磨滅，底外面はナデ。焼成やや良好で内面はこげ茶色，外面は暗橙黄褐色。23は底径9.4cmで，内面は板ナデ状。底外面はナデ。焼成良好で内面はこげ茶色，外面は赤茶褐色。24は底径７cmで，内面と底外面はナデ。焼成良好で内面は暗黄茶褐色，外面は茶褐色をなす。25は底径７cmで，内面と底外面はナデ。底部は中央のみが丸く窪む類。焼成良好で内面は暗いこげ茶色，外面はこげ茶色。26は底径7.6cmで，内面と底外面はナデ。胴部外面下半は縦位ヘラ磨き。焼成良好で内面はこげ茶色，外面は茶褐色。27は底径8.4cmで，内面はナデ，下端外側面から底外面にかけてもナデ仕上げ。焼成やや良好で内外黄灰褐色。28は底径８cmで，内面と底外面はナデ。焼成良好で内外面ともにこげ茶色。29は底径7.4cmで，内面と底外面はナデ。下端外側面もハケをナデ消す。焼成良好で内外とも淡いこげ茶色。30は底径8.1cmで，内面と底外面はナデ。焼成良好で内面は暗茶褐色，外面は灰暗褐色。31は底径7.2cmで，内面と底外面はナデ。焼成良好で暗灰黄褐色をなす。

鉢（18～20）18は口径25cmで，内面はナデで一部ヘラ磨きを施している。焼成良好で内面は暗黄茶褐色，外面はこげ茶色をなす。19は口径21cmで胴部内面はナデ，外面は殆ど磨滅。焼成良好で内外とも黄茶褐色。20は口径12cmの小型手捏ね品。内面はナデ，外面下半は雑な縦ハケ。焼成良好で内面は茶色，外面はこげ茶色。

壺（21）第24号土壙出土品と接合したもので貴重な接合資料。第24号土壙とは12m 程離れて

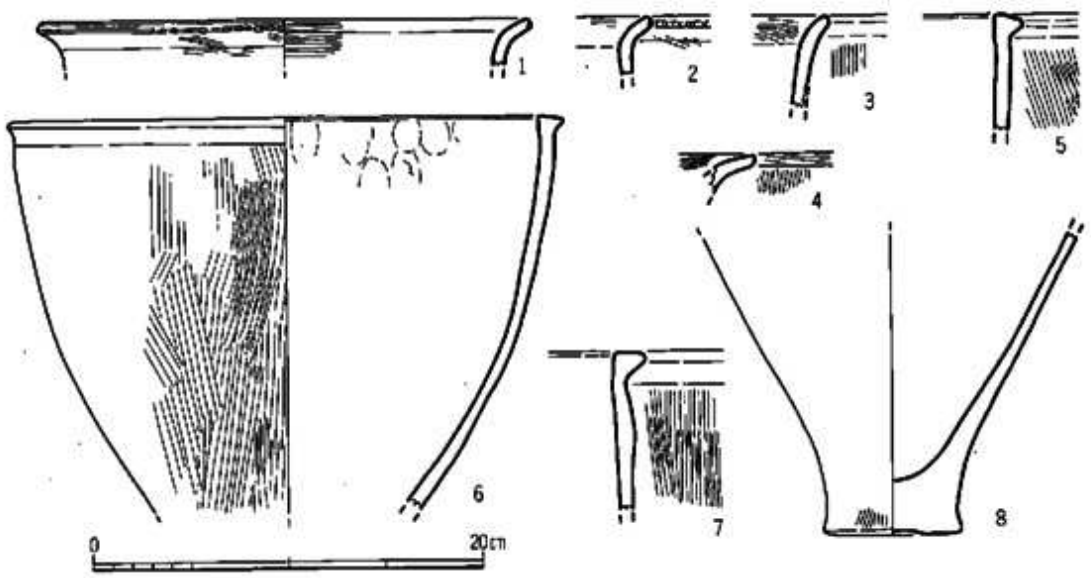


Fig. 161　第24号土壙出土土器実測図（1/4）

おり，両土壙への投棄がほぼ同時期に行われた事を示す。胴部最大径24cm，底径6.3cmで，内面上半はヘラ磨き，下半は磨滅。外面上半は横から縦へのヘラ磨き。以下外面は磨滅。焼成良好で暗褐色をなす。ヘラ描き弧状文は２本の所と３本の所がある。

以上の出土土器は，如意形口縁のものや亀ノ甲タイプのもの，それらに沈線や三角凸帯を付けるもの等々，バラエティーに富んだ各種が存在する。接合しない小破片も多い。これらの事から，当土壙は当初貯蔵穴として営まれていて，最終的には廃棄土壙として投棄がなされたと思われる。出土土器から弥生中期初葉の遺構と考えて良く，第24号土壙との時間的近似性も考えられる。

第24号土壙（Fig.157，PL.52）

Ｉ区中央に位置する，東西に長い不整形小土壙である。中央に大きな円形の穴があるが，これは当土壙と切り合ったもので，別の遺構であろう。長さ253cm，幅180～78cm，深さ８cm程と残りは良くない。底面は東側が高く，西端へ下がっている。これらの形態から，東隣の第２号土壙と同様の廃棄土壙と考えられる。

出土遺物（土器はFig.161）

甕（１～８）１は口径25.4cmで，口唇外下端に刻目を施す。内外面ともに横ハケ調整。焼成良好で内外ともに暗黄茶褐色をなす。２は内面は横ハケで，その下方はナデ。口唇外面下端に刻目を施す。外面かなり磨滅。焼成良好で暗褐色をなす。３は胴部内面はナデ，焼成良好で暗褐色をなす。４は強く外反する口縁の端面にまで横ハケを施す異類。焼成良好で褐色をなす。５

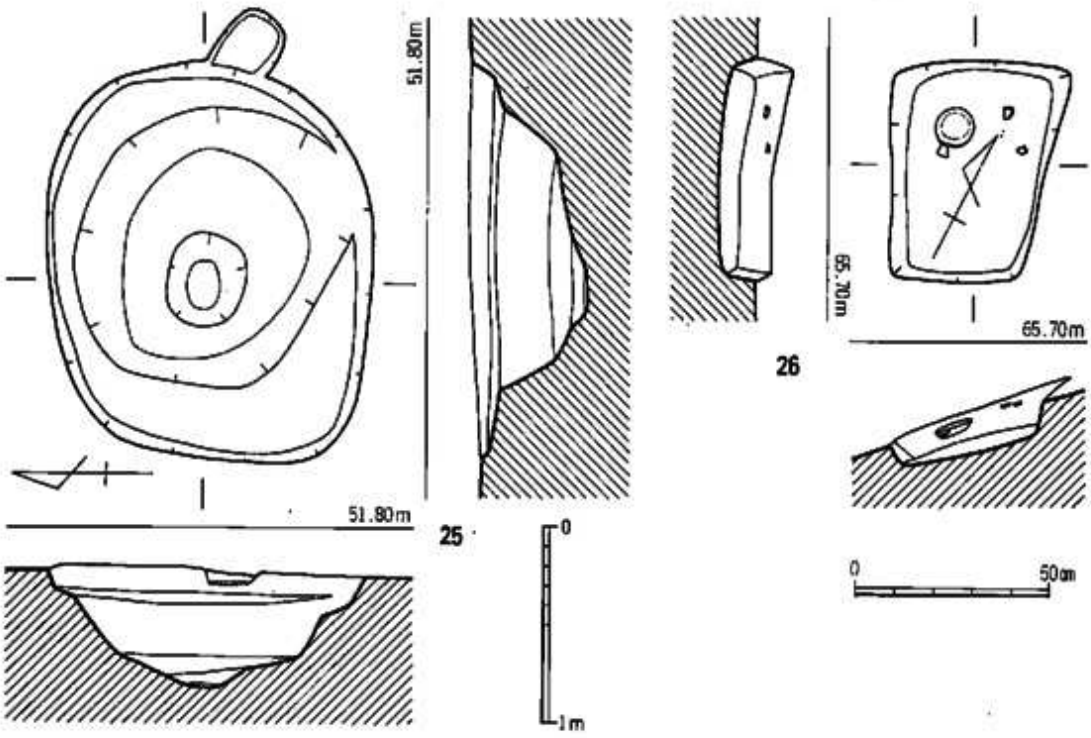


Fig. 162　第25・26号土壙実測図（1/40, 1/20）

は亀ノ甲タイプの口縁で，胴部内面はナデ。粗砂粒を多く含み，焼成良好で内面は暗褐色，外面は淡褐色をなす。6は口径28.6cmで，胴部内面はナデ。外面全体に煤が付着。焼成良好で内面は暗褐色，外面は淡いこげ茶褐色をなす。7は内面の口縁下1.9cmまで横ナデ。以下内面は丁寧なナデ。焼成良好で内面は暗褐色，外面は黄茶褐色をなす。8は底径7cmで，内面はナデ，外面は全体に磨滅著しい。焼成良好で内外面ともに暗褐色をなす。

石剣（Fig.194-4）頁岩質石材による大型石剣の中途片である。作りはシャープで，研磨は丁寧である。現存長59mm，幅39～42mm，厚さ12mm，重さ33.6gとなる。

磨石（Fig.79-14，Fig.80-27）14は凝灰岩質の河原小石の片面のみを磨石として利用したもの。直径45×40mm，厚さ30mm，重さ69.8gとなる。磨面は良く使用されて平坦面をなしている。このような小型品の用途は見当がつかないが，少くとも大型の通常のものとは用途が異っていたことは容易に推測できる。27は凝灰岩質の大ぶりの円礫の両面を使用したものである。側面の3ケ所に敲打部が認められるが，その意図については断定できない。直径130mm，厚さ35mm，重さ524.8gとなる。

砥石（Fig.195-4）砂岩製の粗砥で，表裏面と片側面を使用している。現存長41mm，幅63mm，厚さ26mm，重さ67.8gとなる。

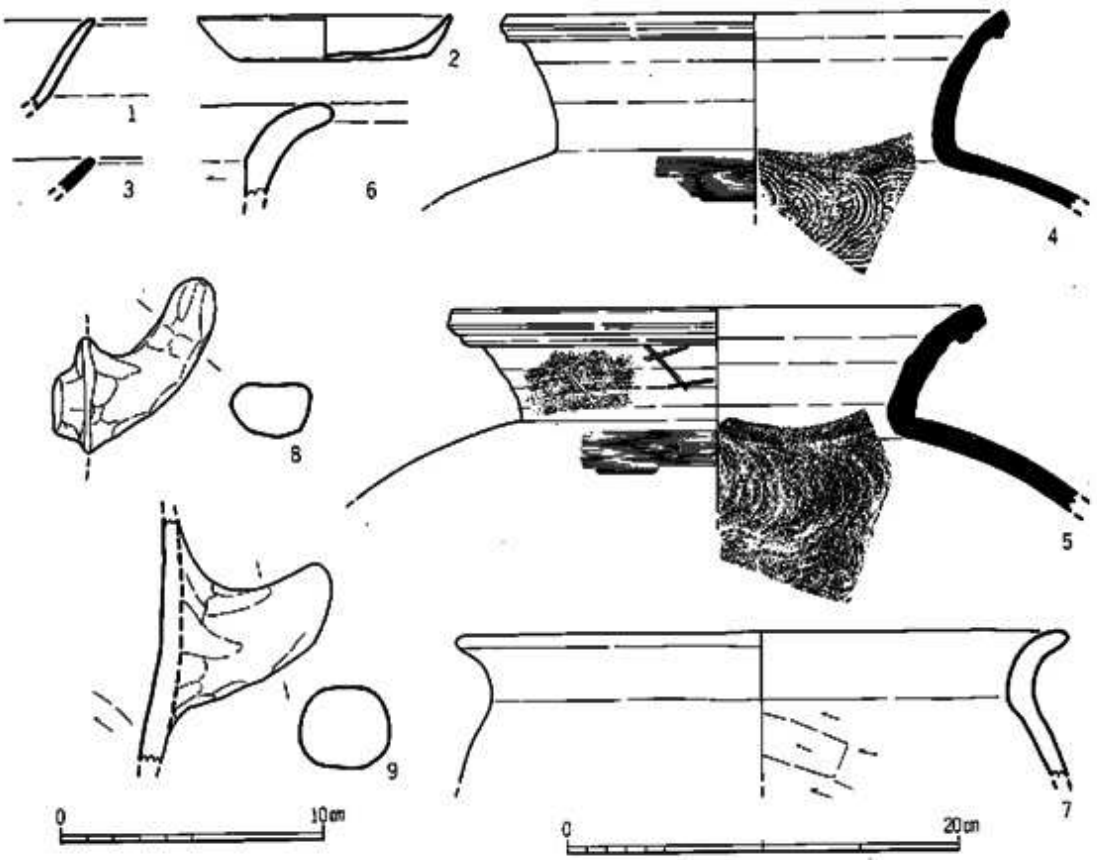


Fig. 163　第26号土壙(1～3)，第27号土壙(4～9)出土土器実測図(4・5・7は1/4，他は1/3)

以上の出土遺物のうち，土器は弥生前期末のものも含まれるが，他はすべて弥生中期初葉のものであり，当土壙の時期を示すものであろう。遺構の項でも記述した如く，その性格は近隣の円形住居群に伴う廃棄土壙であったろう。

第25号土壙（Fig.162，PL.52）

Ⅰ区南端に位置する，東西にやや長い楕円形土壙である。全体的には擂鉢状の断面形態になるが，実際には中途に2段のテラスがあって，都合3段掘り的になっている。土壙の規模は，径202×167cm，深さ60cmとなる。出土遺物も殆ど無かったが，土師器細片が数点みられ，それらからみると，平安後半～鎌倉期のものであった。遺構の性格は不明。

第26号土壙（Fig.162，PL.53）

Ⅲ区の東南端近く，即ち丘陵斜面の僅かに傾斜が緩やかになった部分に営まれた火葬土壙で

ある。直下のⅡ区の遺構面から13m程高い位置にあたる。長軸をN27°Wにとり，それは等高線に平行している。長さ57cm，幅45～33cmの略長方形プランをなし，深さは10cm程と浅い。底面も地形に沿って西側に傾斜している。壁は焼けていないが，中の埋土は炭・灰のみであり，極く僅かの焼骨片が出土した。底面から浮いて土師器小皿1点と，土師器杯・須恵器皿の破片が出土した。土師器・須恵器の破片は，周辺から流れ込むような状況は全くない事から，意図的に破砕したものを投入したと考えられる。

出土遺物（Fig.163-1～3）

土師器杯（1）口縁部の小破片で，口縁端が僅かに端反り気味となり，体部は僅かに外反り気味に開く。内外磨滅しており調整は不明。焼成良好で淡茶褐色をなす。

土師器小皿（2）口径9.8cm，器高1.7cm，底径7.5cmとなる。底外面はヘラ切であろう。胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成やや不良で，内外ともに淡橙色をなす。

須恵器皿（3）極く小片だが，かなり開く器形となろう。内外面ともに回転ナデ。焼成堅緻で内外面ともに灰色を呈する。

以上の出土土器は，1が8C後半～9C初頭頃のものと思われ，3の須恵器皿も同様の時期となろう。2は10C後半～11C前半代のものである。よって，当火葬土壙は10C後半～11C前半の平安時代中期のものであり，この時に集落近辺で拾ってきた奈良後半～平安初期のものを破砕して投入したのではないかと推測する。

第27号土壙（Fig.164，PL.53）

Ⅱ区の北側の東端に位置する，南北に長い大型不整形土壙である。東南半を第2号住居跡に切られる。南北に778cm，東西最大幅が460cm，深さ55cmとなる。底面は極めて凹凸が激しく，何回もの掘り直しを行っていることが判かる。埋土中からは，片岩・安山岩の大小の礫や河原石が散在した状態で出土し，土器類は大きな土壙の割には少なかった。

出土遺物（Fig.163-4～9）

須恵器甕（4・5）4は口径26cm，頸部径20.4cmで，口頸部内外面は回転ナデ。胴部外面はカキ目，内面は車輪文のあて具痕を明瞭に残す。焼成堅緻で，口頸部内外面は灰かぶりして灰色をなす。胴部内外面は黒灰色。5は口径27.5cm，頸部径20cmで，口頸部内外面は回転ナデ。胴部内面は浅い青海波文あて具痕，外面はカキ目。焼成堅緻で灰色をなす。胴部外面に灰かぶりがみられる。

土師器甕（6～9）6は胴部内面をヘラ削り，口縁内外面は横ナデ。焼成良好で灰黄褐色をなす。7は口径31.3cmで，胴の張る器形をなす。胴部内面はヘラ削り，同外面は磨滅。焼成良好で橙褐色をなす。8は横断面が偏平となる把手部分で，ヘソ挿入法で胴部に接合するタイプ。焼成良好で白黄茶色をなす。9は断面円形となる把手部分で，胴部内面はヘラ削り。焼成良好

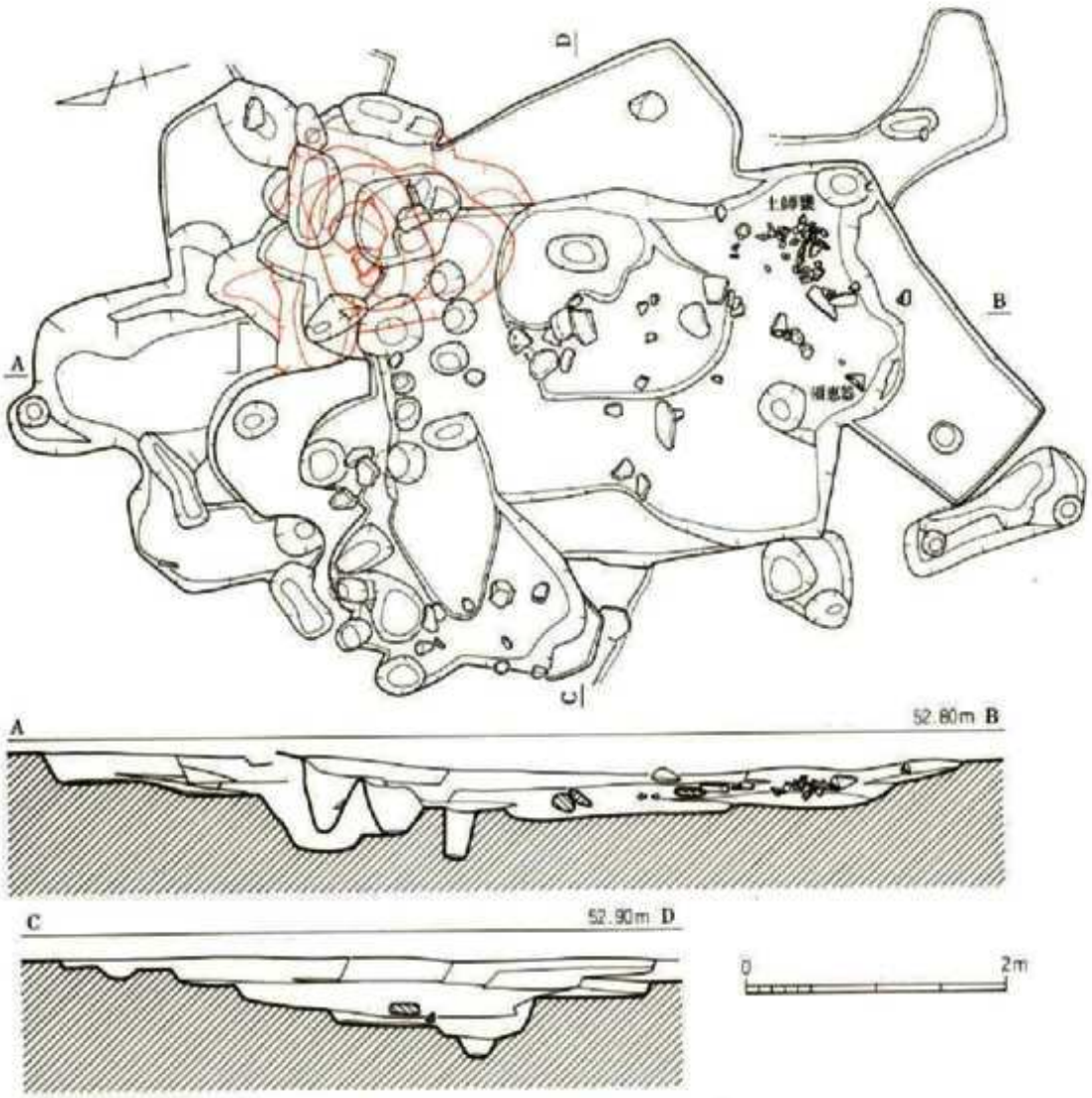


Fig. 164　第27号土壙実測図（1/60）

で淡橙褐色をなす。

以上の土器は，8が7C後葉を溯るものでは無いが，他の4・5・7はより古い様相を持っている。当土壙が7C後半代とする第2号住居跡に切られている事を併考すると，あまり時間差が無かったものかと考えざるを得ない。以上のことから，当土壙は7C後葉代の何度も掘り直しのあった大型廃棄土壙と考えられる。

第29号土壙（Fig.34，PL.55）

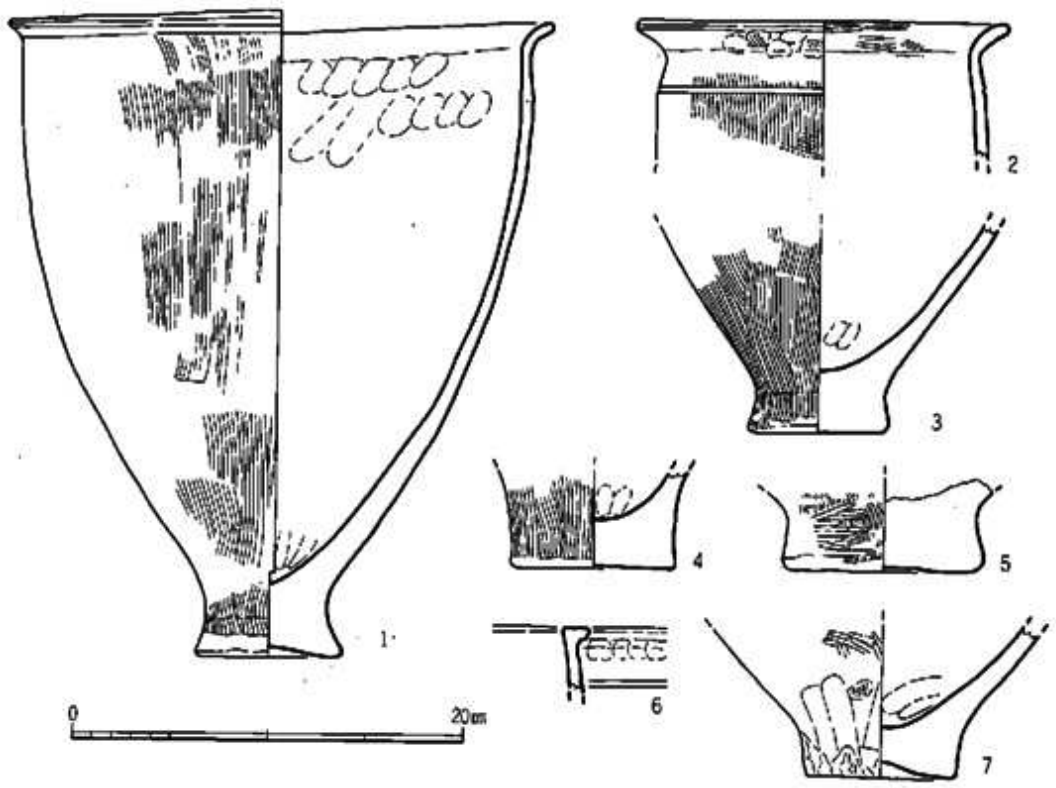


Fig. 165　第29号土壙(1～5)，第32号土壙(6・7)出土土器実測図（1/4）

Ⅱ区の最東端に位置する円形袋状竪穴である。上面径で200×188cm，底径で184×161cm，深さ83cmとなる。壁面は崩落部が認められ，本来は袋状の断面形態であったと推測される。中からは炭化したドングリ類（イチイガシ）が2,740cc分出土した。詳細については，後章の分析資料（303頁）を参照されたい。

出土遺物（Fig.165-1～5）

甕（1～4）1は口径27.9cm，器高32.9cm，底径7.4cmとなる。胴部内面は丁寧なナデ，外面は目の粗い縦ハケ。底外面はナデ。粗・細砂を多量に含む。焼成良好で内外とも橙褐～黒色をなす。外面上半には煤が付着し，内面の中位下半には炭化物が付着している。2は口径19cmで，胴部内面はナデ。胎土に粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は褐色をなす。3は底径7.3cmで，内面は磨滅，底外面は平底でナデ調整。粗・細砂粒を多量に含む。焼成良好で内面は暗茶褐～橙褐色，外面は橙褐色をなす。4は底径8.4cmで内面はナデ，外面は粗い縦ハケ。底外面は平底でナデ調整。胎土に細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は淡橙褐色をなす。

壺（5）底径10.3cmで，内面は器表剥落。底部外側面は縦ハケの上をヘラ磨き。底外面は中央

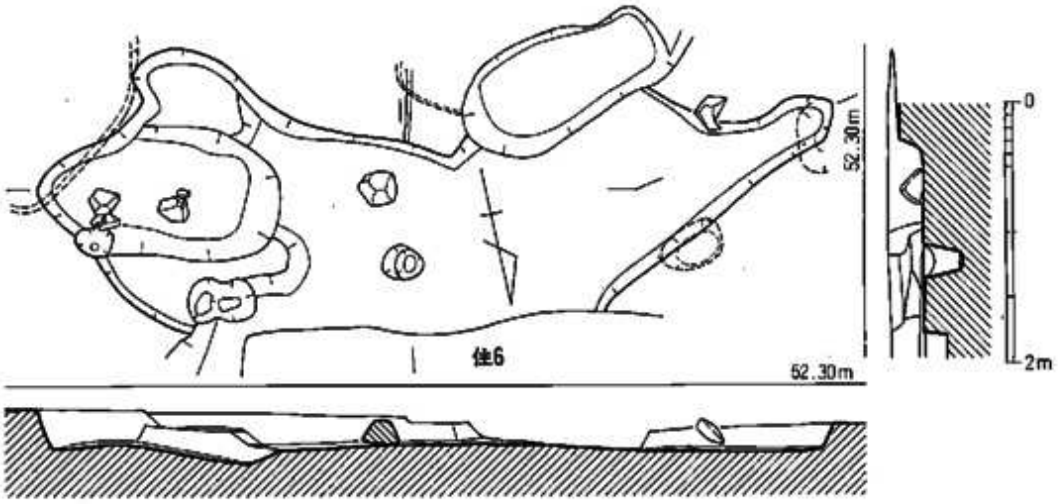


Fig. 166　第33号土壙実測図（1/60）

部のみが僅かに窪む類でナデ調整仕上げ。胎土に粗・細砂粒を多量に含み，焼成良好で内面は黄褐色，外面は黄橙褐色をなす。

以上の土器は，弥生中期初葉のものであり，当袋状竪穴の時期を示すものであろう。本遺跡では，円形袋状竪穴はこれが唯一の例であり，他の貯蔵穴と思われるものは，隅丸長方形や楕円形の恐らく袋状にはならないものばかりである。弥生前期後半に盛行した円形袋状竪穴が，中期初葉に至ってその規格性を失ってきた事を如実に示している好例と言えよう。

第32号土壙（Fig.36，PL.56）

Ⅱ区中央の東寄りに位置する，南北に長い小型不整形土壙である。北西端で第34号土壙（縄文晩期）を切る。下層で検出したので各辺の各所を新しい穴等で寸断されている。この上層には第10号土壙と第15号住居跡が在った。土壙の規模は，南北が238cm，東西幅142cm，深さ24cm程で，底面は中央東側が深く，西壁寄りが浅くなっている。出土遺物は少ない。

出土土器（Fig.165-6・7）

甕（6）亀ノ甲系甕の口縁上面が水平になった類の胴部外面に沈線を巡らすもの。内面は丁寧なナデ，口縁上面から外面直下までは横ナデ。以下外面は丁寧なナデ。細砂粒をかなり含み，焼成良好で内面は橙褐色，外面は褐色をなす。

壺（7）底径7.8cmで，内面は丁寧なナデ。胴部外面の上端はヘラ磨き，以下は粗いハケの上をナデ。下半部は強い指ナデ上げがみられる。底外側面から底外面はナデ。粗・細砂粒を多量に含み，焼成良好で内外面ともに橙褐色。

以上の出土土器は，弥生中期初葉のもので，当土壙の時期を示すものであろう。遺構の形状

から見て，その性格は廃棄土壙と考えられる。

第33号土壙（Fig.166，PL.57）

Ⅱ区の中央やや東寄りに位置する，東西に長い不整形大型土壙である。北側を第6号住居跡と第6号土壙に切られる。土壙の規模は，東西が612cm，南北幅が216cm，深さ38cmとなる。底面はやや波打っており，東端では深まりが見られる。中からは安山岩の塊石や片岩の礫等とともに，弥生土器片多量，石庖丁，スクレイパー，ドリルなどが出土した。

出土遺物（土器はFig.167）

壺（1～9・12～17）1は口径25.8cm，胴部最大径24.8cmとなる胴張り類。胴部内面は丁寧なナデ。外面には煤が付着する。焼成良好で内面は黄褐色，外面は褐色。2は胴部内面がナデ，外面は磨滅。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内外面ともに橙褐色。3は胴部外面に太めの沈線を巡らす類で，内外面かなり磨滅。外面下半には煤が付着。焼成良好で内面は淡橙褐色，外面は黄褐色。4は胴部内面はナデ，外面は目の粗い縦ハケ。焼成良好で内外面ともに黄褐色。5は胴部内面はナデ，外面は磨滅。内外橙褐色。6は内外面磨滅著しい。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は橙褐色，外面は褐色をなす。7は内外面磨滅著しく，細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は褐色，外面は黄褐色。8は内面はナデ，口縁上面から外面はすべて横ナデ。焼成良好で内外面ともに橙褐色をなす。9は口径21cmで，内端も小さく突出している。内面はナデ，口縁上面は横ナデ，以下外面は極めて雑なハケ。粗・細砂粒を多量含み，焼成良好で内面は暗黄褐色，外面は上半に煤が付着して橙褐～黒褐色をなす。12は底径5.4cmで，内面と底外面はナデ。粗・細砂多く含み，焼成良好で内面は黒褐色，外面は淡橙褐色をなす。13は底径7.9cmで，内面と底外面はナデ。胴部外面は磨滅。焼成良好で内面は褐色，外面は橙褐色。14は底径8cmで，内面はナデ，底外面は磨滅。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内外とも淡黄褐色。15は底径5cmで，内面はナデ，外面は縦ハケをナデ消す。底外面は僅かな上げ底でナデ仕上げ。粗・細砂を多く含み，焼成良好で内面は褐色，外面は褐～黒褐色をなす。16は底径7cmで，内面と底外面はナデ。焼成良好で内外ともに黄褐色。17は底径7cmで，内面と底外面はナデ。焼成良好で内外とも褐色をなす。

蓋（10・11）10は口縁部付近片で，内面は磨滅。焼成良好で内外黄褐色。11は底径7.2cmで，内面はナデ，体部外面は磨滅。頂部外面はナデ。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は褐色，外面は橙褐色をなす。

手捏ね土器（18）底径3.6cmの壺のミニチュア品か。内面はナデ，外面は磨滅。粗・細砂多量に含み，焼成良好で内外面ともに黄褐色をなす。指オサエ痕が多い。

石庖丁（Fig.194-3）小豆色の輝緑凝灰岩製で，全面丁寧な研磨を施している。裏面の左側部は欠損後再研磨している。残存長90mm，幅54mm，厚さ5mm，重さ35.8gとなる。2孔間は23

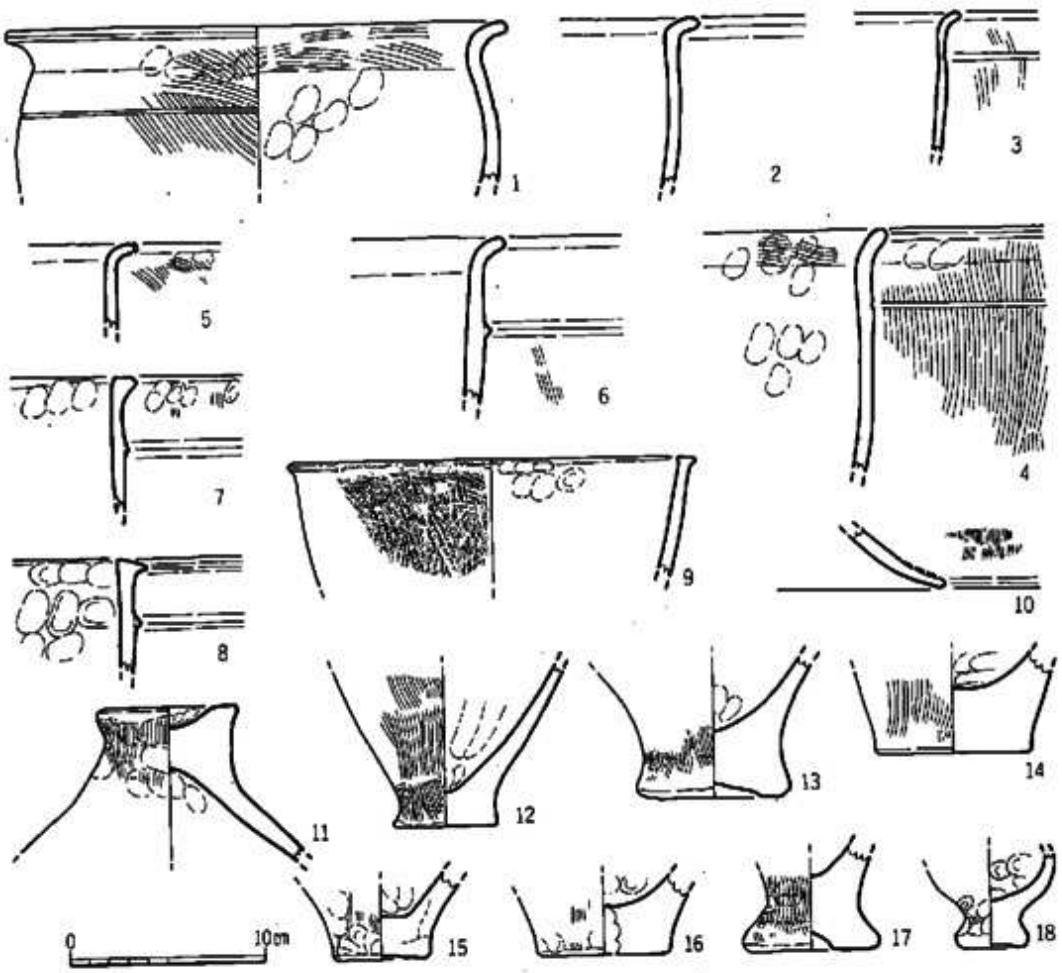


Fig. 167　第33号土壙出土土器実測図（1/4）

mmあり，両面からの穿孔。

石錐（Fig.66-118）安山岩製で，厚みのある縦長剝片を素材として，表裏面ともに丁寧な調整を加えている。打面は礫面で，先端は回転方向の磨面が明瞭に認められ，直径最大5mmの穿孔が行われたことが判かる。長さ30mm，幅11mm，厚さ7mm，重さ2.9gとなる。

削器（Fig.68-134）良質の腰岳系黒曜石製で，細身の石刃状剝片の片側縁と下辺縁にわりと丁寧な平坦剝離を施したもの。形態的には小刀的であり異質。長さ35mm，幅9mm，厚さ4mm，重さ1.3gとなる。

打製石鏃（Fig.77-197・207）197は腰岳系黒曜石製で，表裏ともにやや雑な調整。右脚側を大きく欠損している。長さ22mm，現存幅10mm，厚さ3mm，重さ0.6gとなる。207は腰岳系黒曜石製で，主要剝離面を大きく残す平基類。表裏とも調整はやや雑。長さ20mm，幅16mm，厚さ3

mm，重さ0.7gとなる。

以上の出土遺物のうち，土器は弥生中期初葉のものであるが，小片が多く，甕の中でも各類が混在している。遺構の形状と併考してみると，掘り直しの行われた廃棄土壙という性格が明らかになる。

第35号土壙（Fig.39，PL.58）

Ⅱ区の西端寄りに位置する，略楕円形小土壙である。径150×137cm，深さ33cmとなる。南側は一段高くテラスとなる。中からは，炭化したドングリ類7,780cc，炭化した豆類5cc，炭化米多量が出土した。まさに貯蔵庫そのものである。出土土器は少ない。炭化米については和佐野氏の（291頁），堅果類・豆類については古環境研究所の各々の分析結果（303頁）を後章に掲載したので参照されたい。

出土土器（Fig.168-1・2）

甕（1）底径7.8cmで，底面中央のみが丸く窪む類である。充実した脚台を持ち，内面はナデ。脚台部外側面は粗い縦ハケ，底部外面はナデ調整。内面には炭化物が付着している。粗砂粒を多く含み，焼成良好で内外ともに暗褐色を呈する。

壺（2）底径11.9cmで，内面はナデ，外面は横ヘラ磨き。底外面はヘラ削り後，ヘラ磨きを施す。外面には煤が付着する。細砂粒を多く含み，焼成良好で暗褐色をなす。

以上の土器は，弥生中期初葉のもので，当土壙の時期を示すものであろう。炭化米や豆・ドングリのいっぱいつまった当土壙は，小規模でやや不整形でありながら，貯蔵穴として機能していたことが判明し，前代の円形袋状竪穴からの変化が看取できる処である。

第36号土壙（Fig.39，PL.58）

Ⅱ区の最南端の，眼下に谷を見下ろす，台地のへりの部分に位置する。南北に長い土壙だが，北半は黄色土塊土の穴で，縄文期のものであろう。南半の長方形的な部分だけが，弥生期の貯蔵穴となろう。埋土は褐色土で，上半はかなり削平されてしまっている。長さ220cm，幅155cmで，深さ48cmとなる。底面は西側へやや下がるが，ほぼ平らである。東・北の壁は内湾気味に立ち上がっており，ひょっとしたら袋状断面となるかもしれない。

出土土器（Fig.168-3～9）

甕（3・4・9）3は口径23.8cmで，胴部外面に深いヘラ沈線を巡らす。胴部内面はナデ。焼成良好で白黄褐色をなす。4は口径26.6cmで，胴部内面はナデ。口縁外面に煤付着。粗砂粒を多く含み，焼成良好で褐～暗褐色をなす。9は底径7.4cmで，底外面中央が丸く窪む類。底外面はナデ仕上げ。焼成良好で茶褐色をなす。

鉢（5）口径35.6cmで，底部が丸くすぼまりつつあり，このまま丸底になるのではないかと思

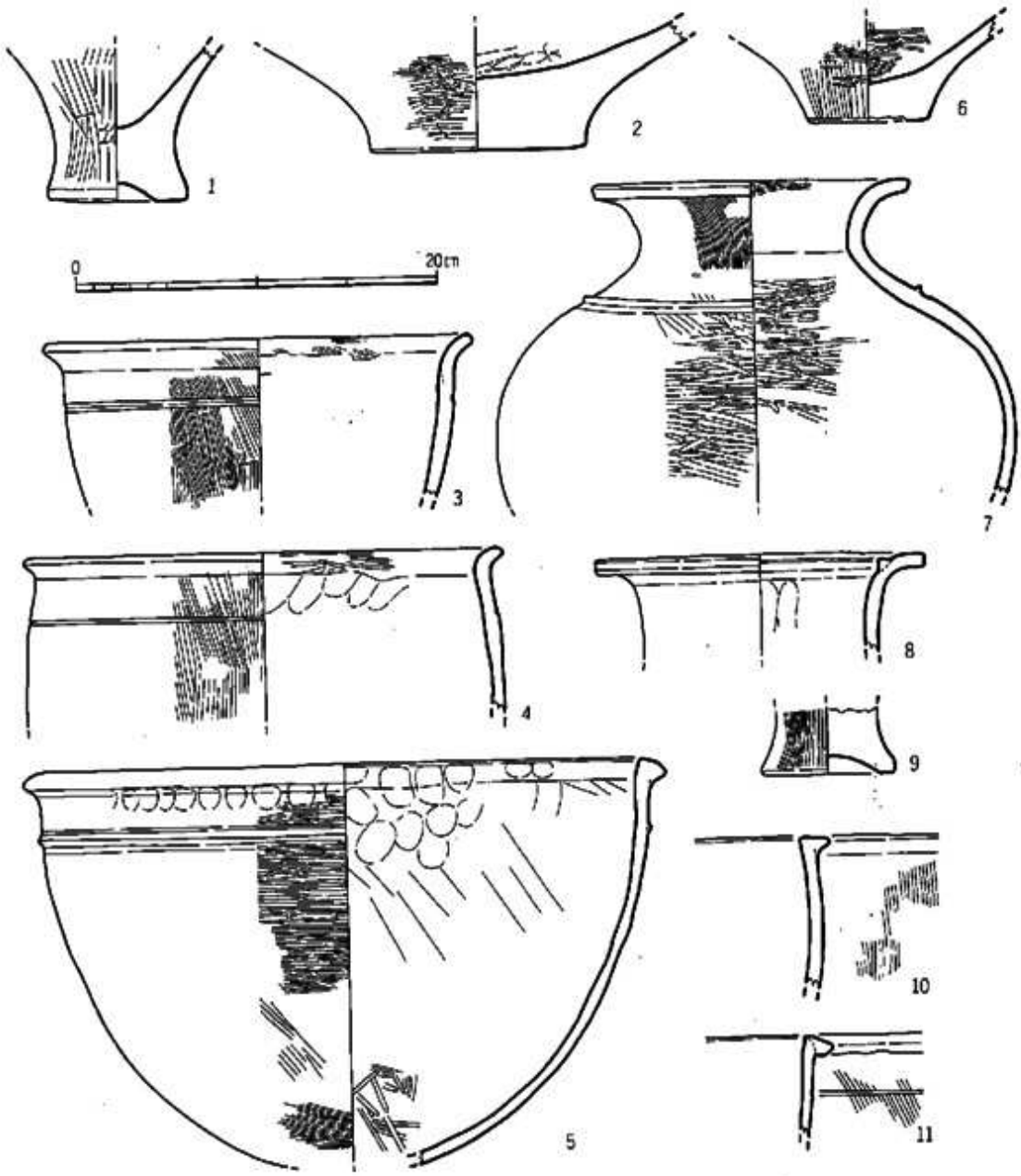
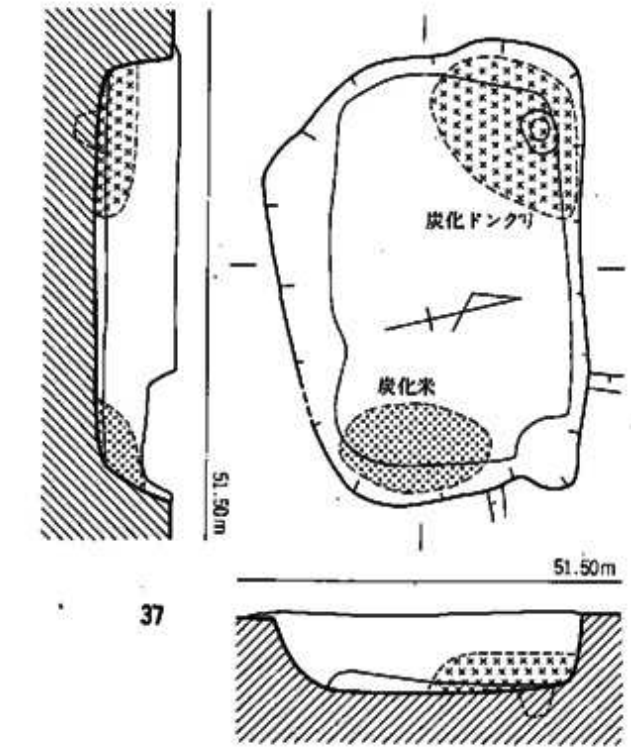


Fig. 168　第35号土壙(1・2)，第36号土壙(3～9)，第37号土壙(10・11)出土土器実測図 (1/4)

われる。他の通常の甕と調整も異るので，特異な鉢であると判断した。内面はハケの上を丁寧なナデだが，下端付近はヘラ磨きがみられる。口縁内面と上面は横ナデ，外面は横ヘラ磨き。胴中位に僅かに斜位ハケが残る。外面には煤が付着し，内面には炭化物が付着している。粗砂粒を含み，焼成良好。



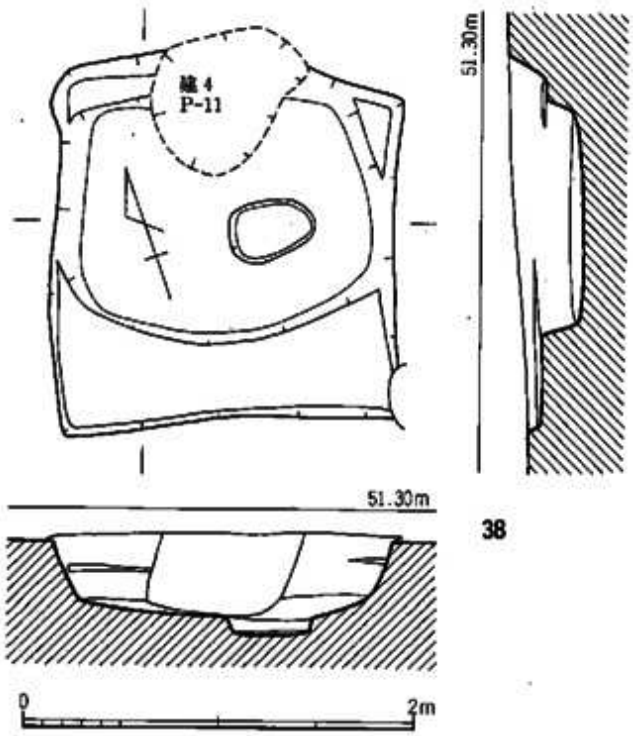


Fig. 169　第37・38号土壙実測図（1/40）

壺（6～8）6は底径6.8cmで，内面は横ヘラ磨き。外面は粗い縦ハケの上を横ヘラ磨き。底外面中央は剥落している。焼成良好で暗褐色。7は口径17.6cm，頸部径12.4cm，胴部最大径29cmとなる。頸部中位で外反して丸く開く類で，既に新しい様相を示す。口縁内面は横ヘラ磨き，以下頸部内面は丁寧なナデ。頸部外面は縦ハケ，胴部内外面は横ヘラ磨き。頸部外面には煤が付着し，胴部内面上半には炭化物が少し残っている。焼成良好で内外面ともに暗茶褐色をなす。8は口径18.2cmで，直立してから開く口頸部で，内面に三角凸帯を作る類。口唇外面は凹状となる。凸帯以下の内面は指ナデ上げ，口縁内外面は横ナデ，頸部外面はヘラ磨きか。口縁上面から外面全体にかけて煤が付着する。焼成良好で淡いこげ茶色を呈する。

以上の出土土器は，弥生中期初葉のものだが，5のような土鍋的な異類鉢や，8のような鎧受け凸帯を持つ山口系の類など，特殊な形態の土器が目立つ。土壙自体の性格は，その形状からみて隅丸長方形的な貯蔵穴であろう。

第37号土壙（Fig.169，PL.59）

Ⅱ区最東端に位置する，東西に長い隅丸長方形土壙である。上端

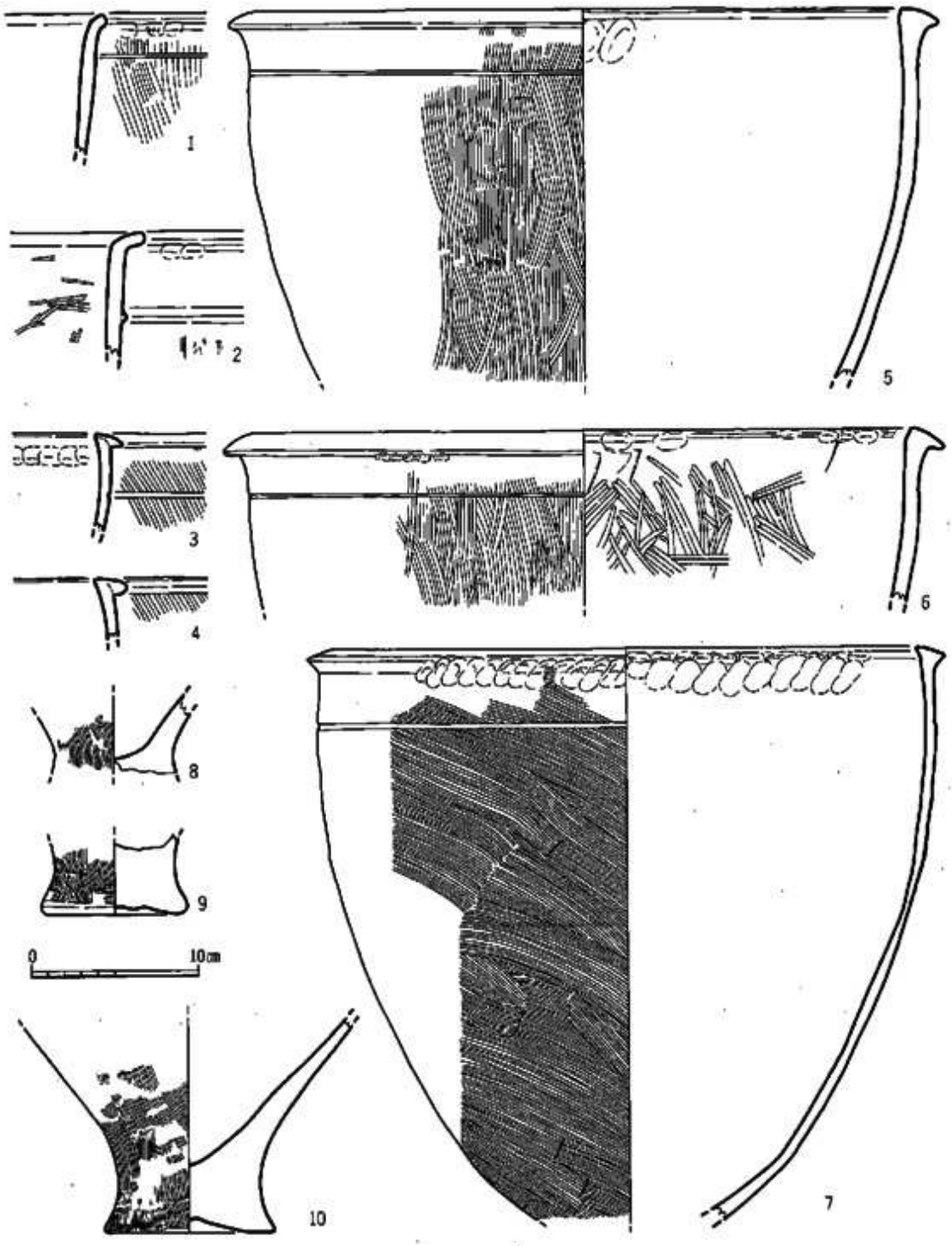


Fig. 170　第38号土壙出土土器実測図（その1）(1/4)

での長さ240cm，幅164cm，深さ42cmと残りは良くない。上面を第19号住居跡に切られている。底面は平坦で，全体に整美な感じを受ける。中からは，東壁沿いに炭化米が厚さ20cmほど堆積し，更に反対側の西北隅からは多量の炭化堅果類が厚さ15cmほど堆積していた。炭化堅果（3,900cc），炭化豆（1,410cc），炭化栗（80cc）については古環境研究所に（303頁），炭化米については和佐野氏に（291頁）各々分析を依頼して，後章に掲載したので参照されたい。

出土土器（Fig.168-10・11）

壺（10・11）10は亀ノ甲タイプの無沈線類で，内面はナデ，外面は磨滅するがやや粗い縦ハケ。胎土に粗・細砂粒を多量に含み，焼成良好で内外面ともに橙褐色をなす。11は口縁上面が下がり，沈線を胴部に施す類。内面はナデ，外面は粗い斜めハケ。焼成良好で内面は黄褐色，外面は淡黄褐～黒色をなす。

以上の土器は，弥生中期初葉のものであり，当土壙の時期を示すと思われる。ドングリと米が同じ貯蔵穴の中で別々に見つかったという事は，各々有機質の容器（袋）等に入れて保管してあった事が推定される。

第38号土壙（Fig.169，PL.59）

Ⅱ区の南寄り西端近くに位置する方形小土壙である。北側を第4号掘立柱建物P11に切られている。土壙の規模は，南北に194cm，東西に176cm，深さ28cmとなる。南側がテラス状に浅くなっており，北半の深い部分だけだとすると東西に長い略長方形プランとなる。底面はほぼ平坦で，貯蔵穴的形状をみせる。

出土土器（Fig.170・171）

壺（1～11）1は胴部内面はナデ，外面は粗く雑な縦ハケ。細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は黄橙褐色，外面は淡橙褐～黄褐色をなす。2は内面に横ヘラ磨きを幾らか施し，外面は三角凸帯下までが横ナデ，以下が縦ハケをナデ消す。焼成良好で内面は褐色，外面は暗褐色をなす。3は内面がナデ，外面は粗い斜めハケ。外面上半に煤が付着。焼成良好で内面は暗橙褐色，外面は橙褐色をなす。4は胴部内面はナデ，口縁直下の内面は横ナデ，口縁上面は横ハケ。焼成良好で内外橙褐色。5は口径42.4cmで，内面は丁寧なナデ。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は褐色，外面は褐色～黒色（黒斑）をなす。6は口径43cmで，胴部内面は縦～斜位のヘラ磨き。口縁直下内面には横位の板端圧痕が残る。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内面は褐色，外面は黄褐～黒色をなす。内面の磨きが異質で，鉢かと考えたが，外面にハケをちゃんと残している事から，取り敢えず壺と判断した。7は口径38cmで，内面は丁寧なナデ。胴部外面中位に煤が付着する。粗・細砂粒を多く含み，焼成良好で内外ともに淡橙褐色をなす。8は内面がナデ，胎土に粗・細砂を多量に含む。焼成良好で内面は褐色，外面は黄褐色。9は底径8.7cmで，底外面はナデ。粗・細砂を多く含み，焼成良好で内外ともに褐色。10は底径10.2

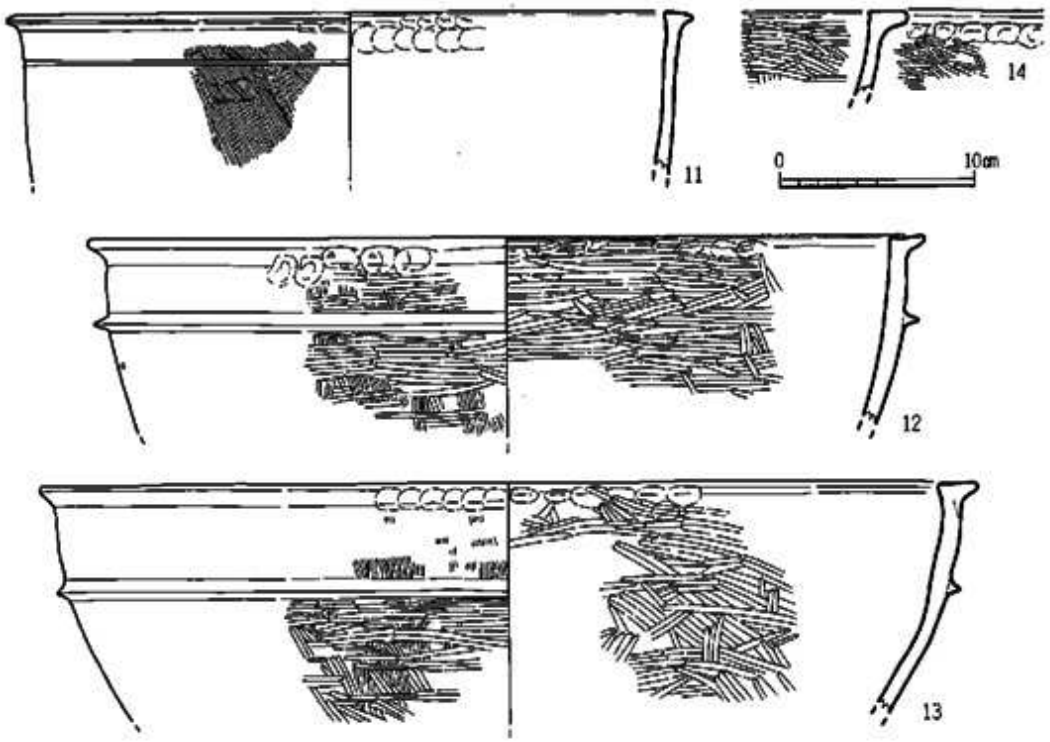


Fig. 171　第38号土壙出土土器実測図（その２）(1/4)

cmで内面はナデ，外面はハケを一部ナデ消し。底外面はナデ。粗・細砂多く含み，焼成良好で内外面ともに淡橙褐色。11は口径35.4cmで，内面はナデ。外面には細いハケを施し，煤が付着する。粗・細砂を多量に含み，焼成良好で内面は褐色，外面は黒褐色。

鉢（12～14）12は口径43cmで，内面は横ヘラ磨き，外面は縦ハケの上を横ヘラ磨き。凸帯部以上の外面に煤が付着。焼成良好で内面は褐色，外面は橙褐色。13は口径48cmで，内面は横ヘラ磨き，外面は縦ハケの上を上半はナデ，下半は横ヘラ磨き。焼成良好で内外面ともに褐色をなす。12と同一個体の可能性がある。14は内面は横ヘラ磨き，外面は縦ハケの上を横ヘラ磨き。焼成良好で内面は褐色，外面は淡褐色をなす。

以上の出土土器は，弥生中期初葉の亀ノ甲タイプを主とするもので，中でも内外ヘラ磨きの鉢（12～14）は注目すべき類である。当土壙は形態から見て，貯蔵穴と考えてよかろう。

D　石棺系竪穴式石室

C 1 (Fig.172・173, PL.60・61)

Ⅱ区北端にて周溝を巡らして，中央に長軸を東西にとる石棺系竪穴式石室である。主体部の内法は，長さ166cm，幅48～43cm，深さ69cmとなり，N88°Wに主軸を取り，東端に偏平な石枕を置く。全体の墓壙は長さ335cm，幅219cmの隅丸長方形で，それを17cm程掘り下げて，更にその中央に石室側壁構築のための墓壙を掘るという2段掘りを行っている。使用石材はすべて脆い灰黒色片岩の板石である。長側壁は両壁とも2枚の長い板石を立てているが，その上端面は揃っておらず，それを均すように板石を小口積みに4～6段重ねている。短側壁は両壁とも

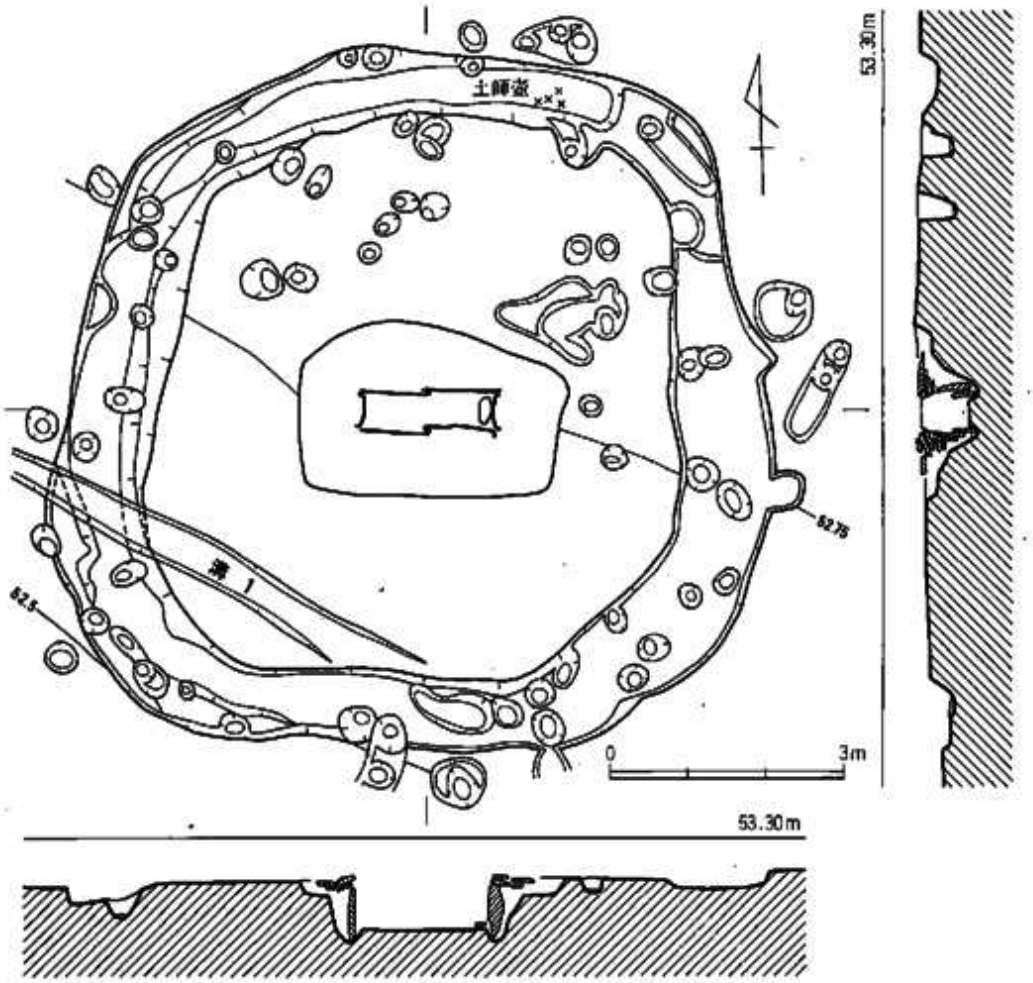


Fig. 172　C 1 実測図 (1/100)

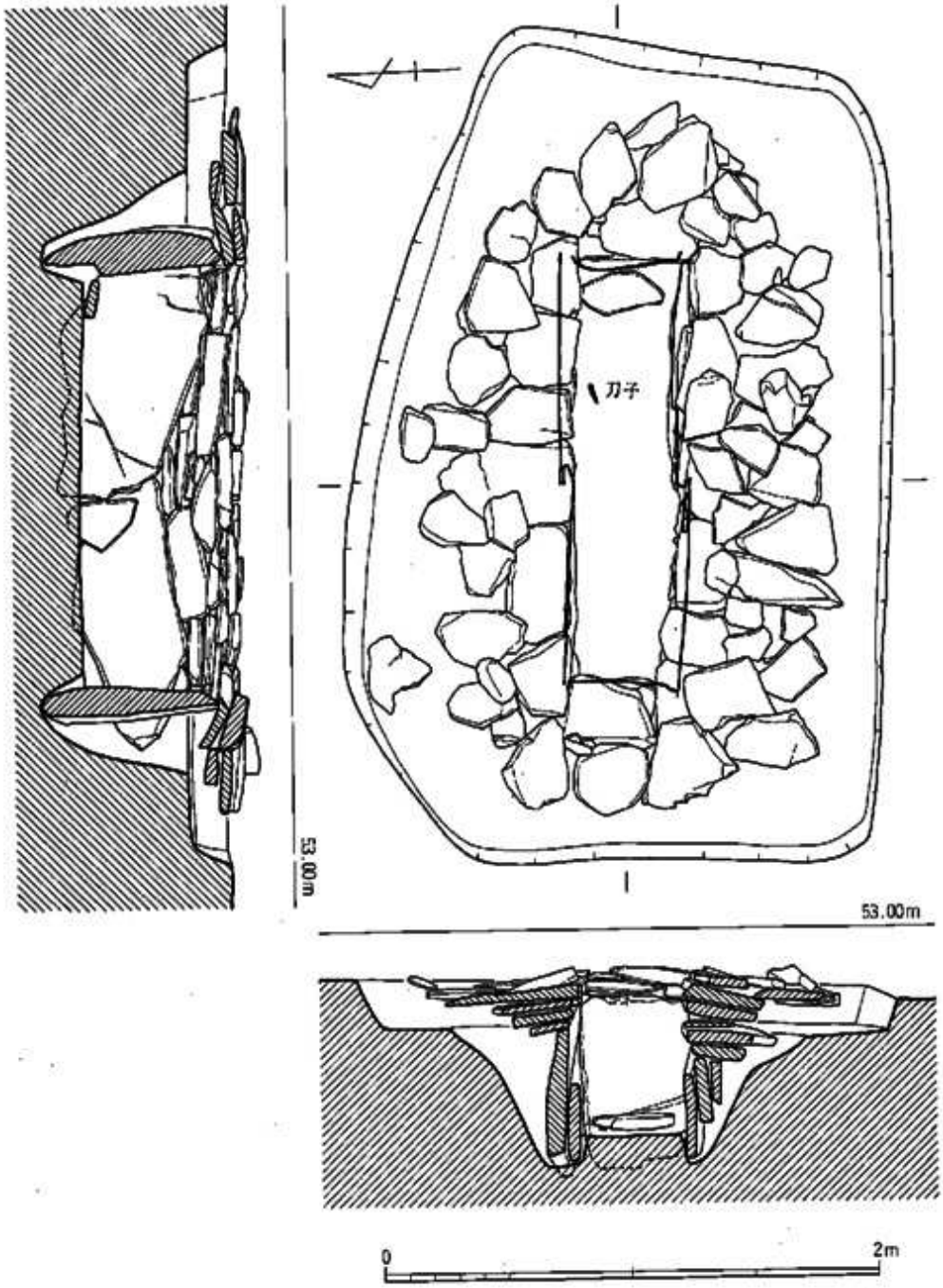


Fig. 173　C 1 主体部実測図（1/30）

Fig. 174　C1出土土器
実測図（1/3）

に縦長の板石を深く埋め込んで，その上面に板石を2段積み重ねている。各側壁の外方には2段位ずつの控え積みが施されている。壁面には各所に赤色顔料の塗布痕跡が認められる。底面には確認できなかった。底面の東寄りの胸の位置ぐらいの所から鉄刀子1点が出土した。周溝はやや隅丸方形的なプランをなすが，各辺ともにカーブを持つので，方墳とはならないだろう。周溝内径で700～750cm，外径で900cm前後の規模となり，溝の深さは20cm程と浅い。主体部の残存状況からみても，かなり後世の削平を受けている事がわかる。周溝内からは，北側から土師器壺片が幾らか，また，陶質土器片も出土したと記録しているが，現在，それらの所在不明であり，報告することができない。

出土遺物

土師器杯（Fig.174）周溝内出土品で，復原口径10.9cmとなり，内外面横ナデを施している。口縁が僅かに外反する特徴がある。胎土に雲母片・赤褐色粒・石英粒を少量含む。焼成良好で淡茶褐色をなす。

刀子（Fig.175-4）棺内副葬の細身類で，柄部側は欠損している。現存長78mm，最大幅10mm，背厚さ2mmとなる。意図的に折り取って副葬したものか，偶々欠損品であったのかは定かではないが，他の墓からの鉄刀子の出土状況からみて，折り取ったものではなさそうだ。

以上の出土遺物のうち，土師器杯は全容が定かでないが，通常の杯の系統に乗った小型品だとすると，4Cまでのものではなく，5C後半以降のものでも無い。よって5C前半代を中心とする時期のものではないかと思われる。この手の周辺遺跡の石棺系竪穴式石室の時期とも矛盾するものではない。

C2（Fig.176，PL.61・62）

Ⅱ区の北端近くの，C1周溝の西側に位置する組合わせ式箱式石棺墓である。長軸をN83°Wの略東西にとり，棺内東端に粘土枕があるので頭位は東となろう。棺の内法は，長さ118cm，幅は37～26cmで，深さは40cmとなる。長さから見て未成人者の可能性が強い。墓壙は長さ175cm，幅130cmの隅丸方形的平面形をなし，2段掘りをせずに墓壙底まで急傾斜で掘り込んでい

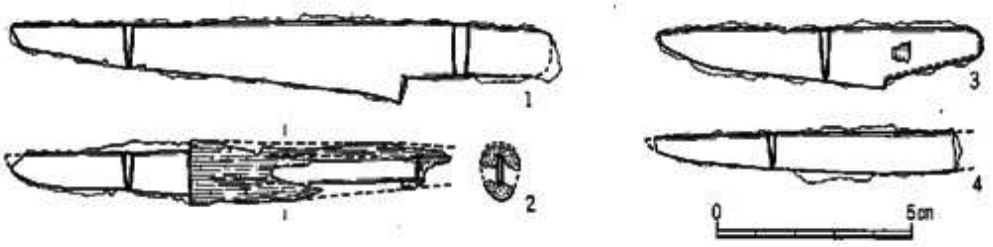


Fig. 175　金場遺跡出土刀子実測図（1/2）

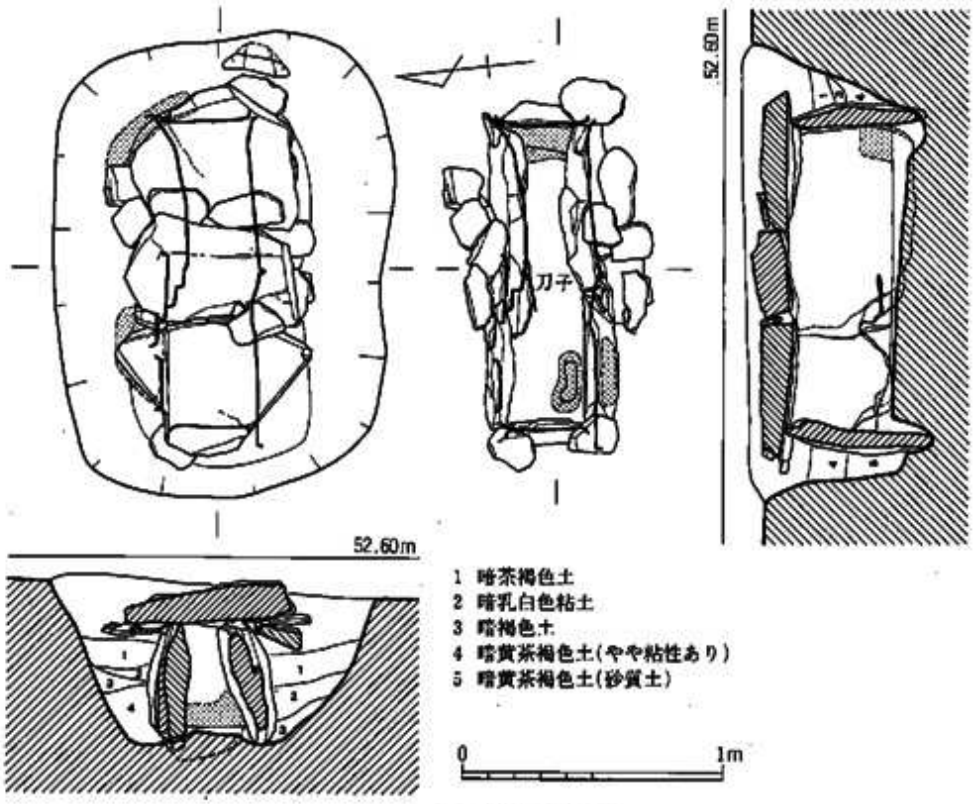


Fig. 176　C２実測図（1/30）

る。墓壙底自体は東へ傾斜しているが，石棺側壁を立ててから水平になるように土を盛って均している。両側壁ともに２枚の大きな板石を横長に立てている。短側壁は板石を縦長にして深く埋め込んでいる。蓋石をかぶせる前に，側壁の低い部分と中央の左右付近に小板石を控え積み風に敷き，更に乳白色粘土を部分的に側壁上面とその外側に敷いてから蓋石をかぶせている。蓋石は３枚だが，頭位である東端のものが最大で，しかも最初にかぶせている。蓋石の接する部位には小板石を縦につめ込んだり，平たく敷いたりして目貼りの役目をなしていた。棺内東端の粘土枕は蓋石下に敷かれたものと同じ乳白色粘土で，幅15cm，厚さ12cm程に積んでいた。底面の西端寄りにも粘土がみられたが，そこの直上の蓋石下の粘土が落ち込んだものか。なお，側壁の石の間の縦筋間隙への粘土目貼りは見られなかった。赤色顔料の使用は何処にも認められなかった。使用石材はすべて黒色片岩である。副葬品としては，北壁沿いの中央部付近から鉄刀子１点が出土した。

副葬品

刀子（Fig.175-１）棺内副葬された大型類であるが，身部長に比べ柄の茎部が短い。錆ふくらみが激しく，木質等の付着は認められない。全長138mm，身部長99mm，関部幅21mm，茎部幅

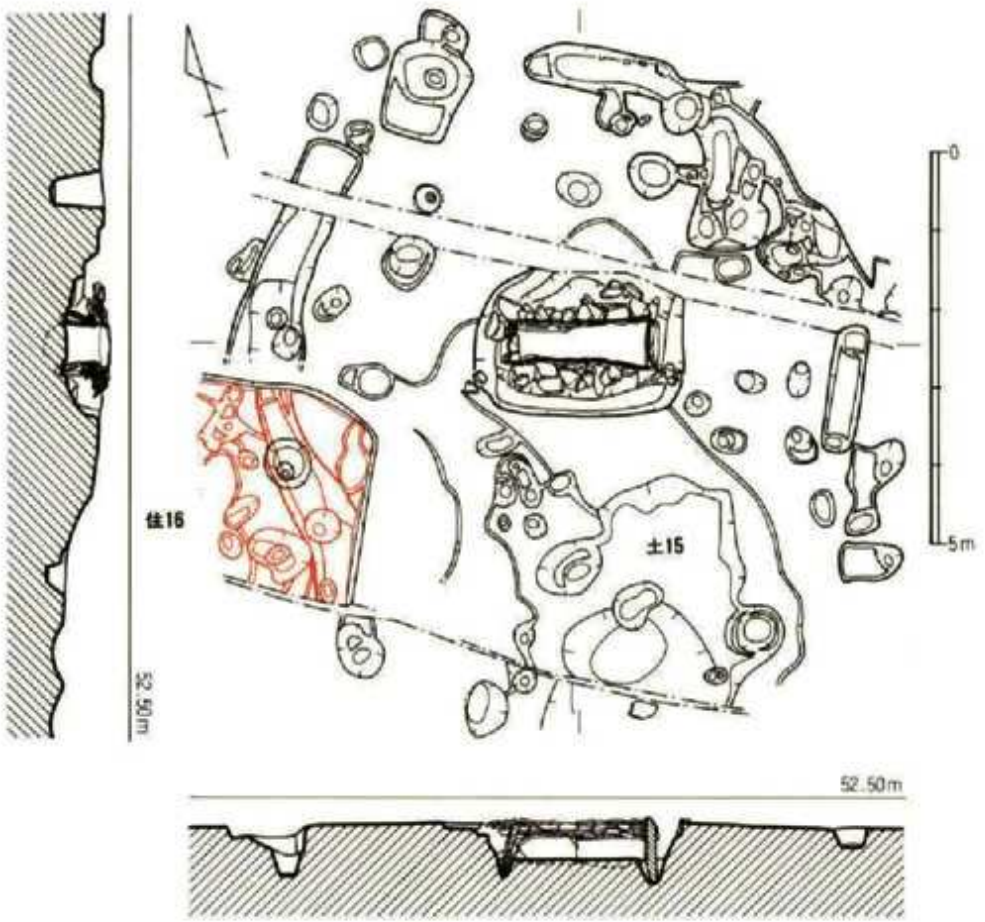


Fig. 177　C３実測図（1/100）

15㎜，身部背厚さ２㎜，茎部背厚さ４㎜となる。

この鉄刀子は，形態上古墳時代中期前後のものであり，また，近隣の他の石棺系竪穴式石室や第19号土壙墓において鉄刀子１本のみの副葬の習俗が共通している事も見ると，当石棺墓の時期も５C前半代を中心とする時期のものと推定することができる。

C３（Fig.177・178，PL.62）

Ⅱ区の北半に位置し，C１・C２・第３号土壙墓等と群をなす，主体部を石棺系竪穴式石室とする円形周溝墓である。遺構の切合いは，まず，主体部墓壙が南側で第15号土壙に切られ，西側で周溝が第16号住居跡に切られ，東側で周溝が第１号掘立柱建物に切られている。主体部はN74°Wに長軸をとり，東端に朱がみられる事や東側の内法幅が広い事などから，東に頭位をとると考えられる。内法寸法は，長さ177㎝，幅62～45㎝，深さ53㎝となる。長側壁は両壁

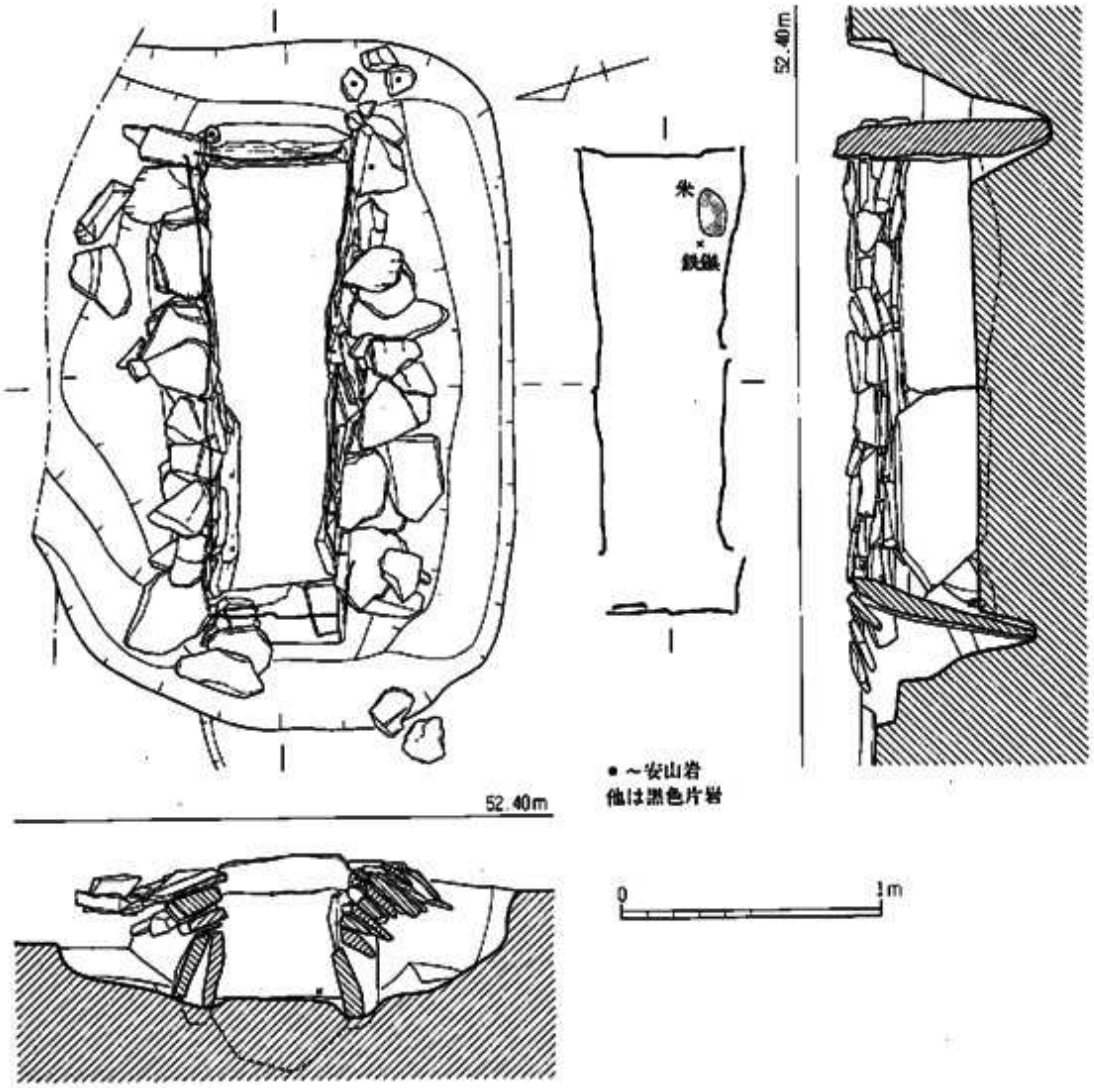


Fig. 178　C 3 主体部実測図（1/30）

ともに長い板石を２枚，横位に据えており，西端の足りない部分を小板石でふさいでいる。この２枚の大板石の上面は水平に揃えられており，この上に小板石を基本的に３段小口積みしている。短側壁は板石を縦長に用い，深く埋め込んでいる。特に東壁の板石は厚くて特に深く埋め込まれている。この両短側壁の板石の上には小板石の積み上げは無かったものと考えられる。石材は少数の安山岩の他は全て黒色片岩を用いる。底面の東端の南壁寄りに朱の散布が認められた。しかし，壁などへの赤色顔料の使用は見られなかった。朱の隣から鉄鏃１点が出土したが，現在所在不明であり報告できない。周溝は，西側と北東側にしか残っておらず，北側では

途切れ，南側では痕跡すら見出せない。周溝の直径は外側で790cmとなり，深さは20cm程と極めて残りが悪い。出土遺物が無いので，時期の決定ができない。ただ，北側にある，周溝を持ち石棺系竪穴式石室を主体部に持つC1と一連のものであると考えられることから，それ程時期差のあるものとは思われない。やはり5C初～前葉を中心とする時期のものかと推定される。

E 中原1号墳

占地（Fig.3・4・179，PL.63）

本遺跡のⅠ・Ⅱ区の北端は丘陵の急斜面の裾そのものであり，丘陵直下がⅠ・Ⅱ区であると言い換えることができる。Ⅲ区はその急斜面そのものであり，その斜面の中位に中原1号墳が位置する。標高61～64mの場所で，Ⅱ区の7C代遺構面から約10～15m高い位置にあたる。Ⅲ区の急斜面の中でも，やや傾斜が緩やかになった場所を選んで古墳造営がなされている。この丘陵頂部付近には，横穴式石室を主体部とする円墳群が確認されており，金場古墳群として知られている。中原1号墳は，これらの一支群の中でも斜面に占地せざるを得なかった，従たる位置付けを認めざるを得ないだろう。古墳群としての詳細は不明だが，時期的にも古墳群の中では新しい方になるのではなかろうか。

墳丘（Fig.179～182，PL.63・66・67）

発掘調査前の現況は，急斜面からやや緩斜面に変換する地点から，斜面下方へコブが出っ張っているような残り方であった。中央に盗掘壙かと思われる窪みがあり，古墳であると確信した次第であった。現況での墳丘の高さは，西裾部から見て2.75m，東側からは勿論高さは無い。ただ，東側でも，北から東南側へ続く周溝となるかと考えられる傾斜変換線は確認できた。実際に発掘して確認した墳丘の高さは，東側周溝底から30cm，北西側の周溝端の底からは240cm，南東部周溝端の底からは90cmとなる。これはひとえに，斜面下方からの見かけ上の高さのみをねらった，効率的な墳丘構築と言える。墳丘径は，周溝底内側で11.5mとなる。

周溝は，北側と東側しか掘削されておらず，その平面形は，斜面の古墳にしてはかなり整美な正円形をなしている。周溝掘削は，基本的に斜面上方側のみをカットするという，所謂三日月形周溝の類である。周溝底は玄室東側が最も高くなり，南方と北西方向へ傾斜している。その高低差は，南東周溝端とは60cm，北西周溝端とは210cmとなり，かなりの落差がある。周溝上端幅は，東側が最も広く330cm，北西端では130cmしか無い。周溝底幅は40～100cmで，狭い部分は北側の周溝底の傾斜が最もきつい部分にあたっている。周溝内からの供献土器等の出土

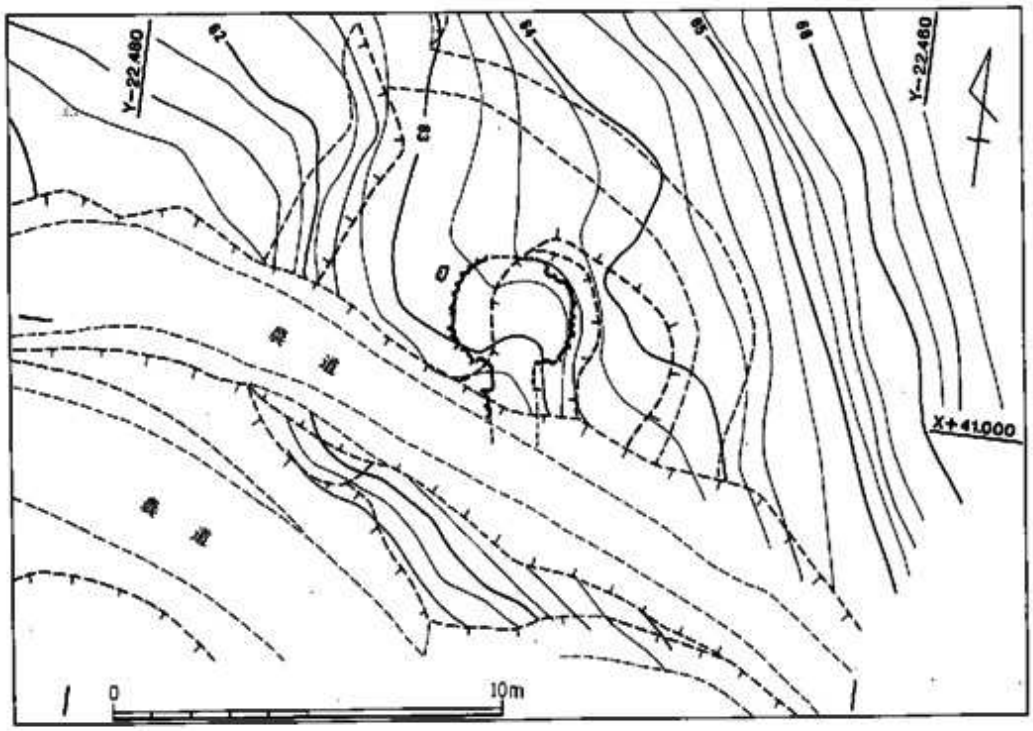


Fig. 179　中原1号墳(現況)墳丘測量図（1/200）

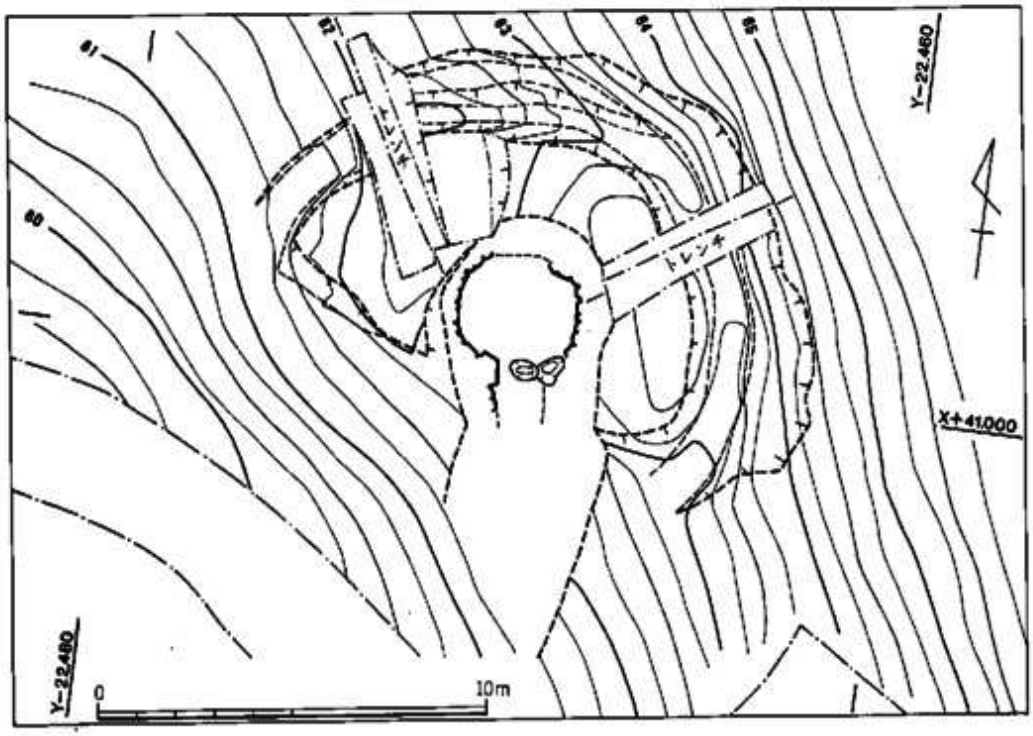


Fig. 180　中原1号墳(周溝掘削後)墳丘測量図（1/200）

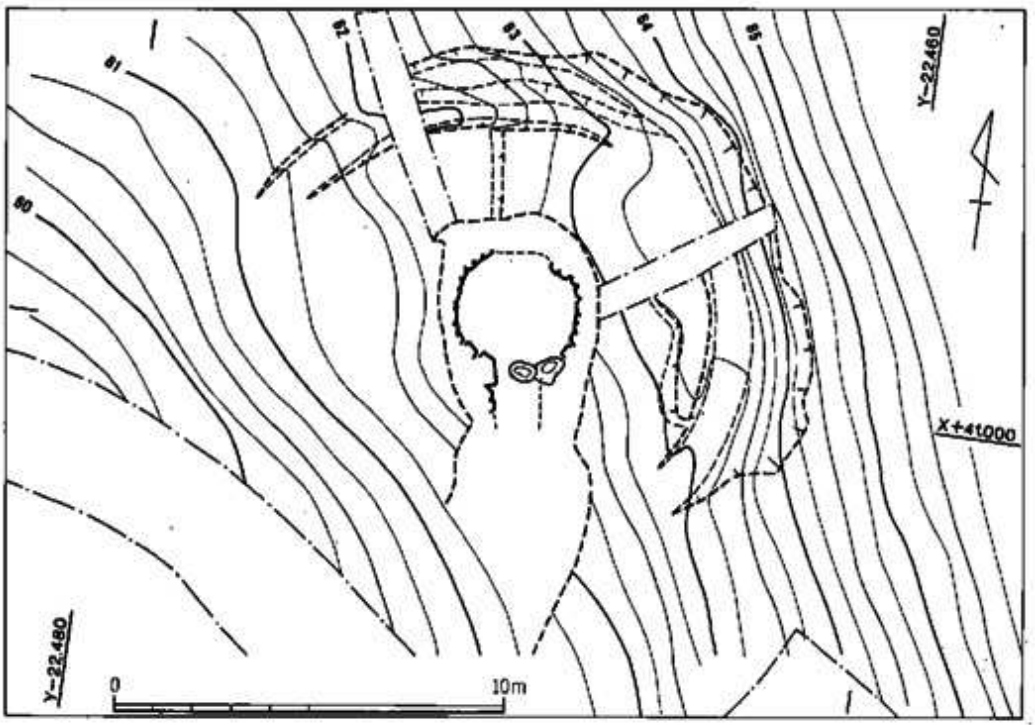


Fig. 181　中原1号墳(地山整形状況)墳丘測量図 (1/200)

は全く見られなかった。

墳丘封土は，北西側では旧表土が厚く残っており，その上に極めて大雑把に盛土が行われている。しかし東側では，旧表土が残存しておらず，腐り礫を多く含んだ赤褐色粘質土の地山の上に，玄室際にまず最初に，次にその背後に盛土が行われている。いずれも，極めて雑な盛土作業工程を観察出来た。

主体部 (Fig.183・184, PL.64・65)

主軸をN8°30′Wにとる，複室両袖式横穴式石室である。玄室が横長の楕円形気味となる点が大きな特徴となる。石室の残存状況は著しく良くない。石材の抜き取りが行われていて，石室右壁（東壁）側が特に徹底して抜かれてしまっており，玄室奥壁の大きな鏡石さえも外側に倒されてしまっている。

石室の規模は，全長については羨道部が全く残存していないので明らかにできない。玄室は幅295cm，長さは奥壁石が動いているので正確ではないが，およそ260cm。片岩の厚い板状の奥壁鏡石（幅155cm，高さ130cm，厚さ40cm）を据え，玄門袖石にも一辺70cm大の大きな安山岩を据える。その間の両側壁に安山岩を主とした30cm大の塊石を積む。その際に最下部の石もそれ

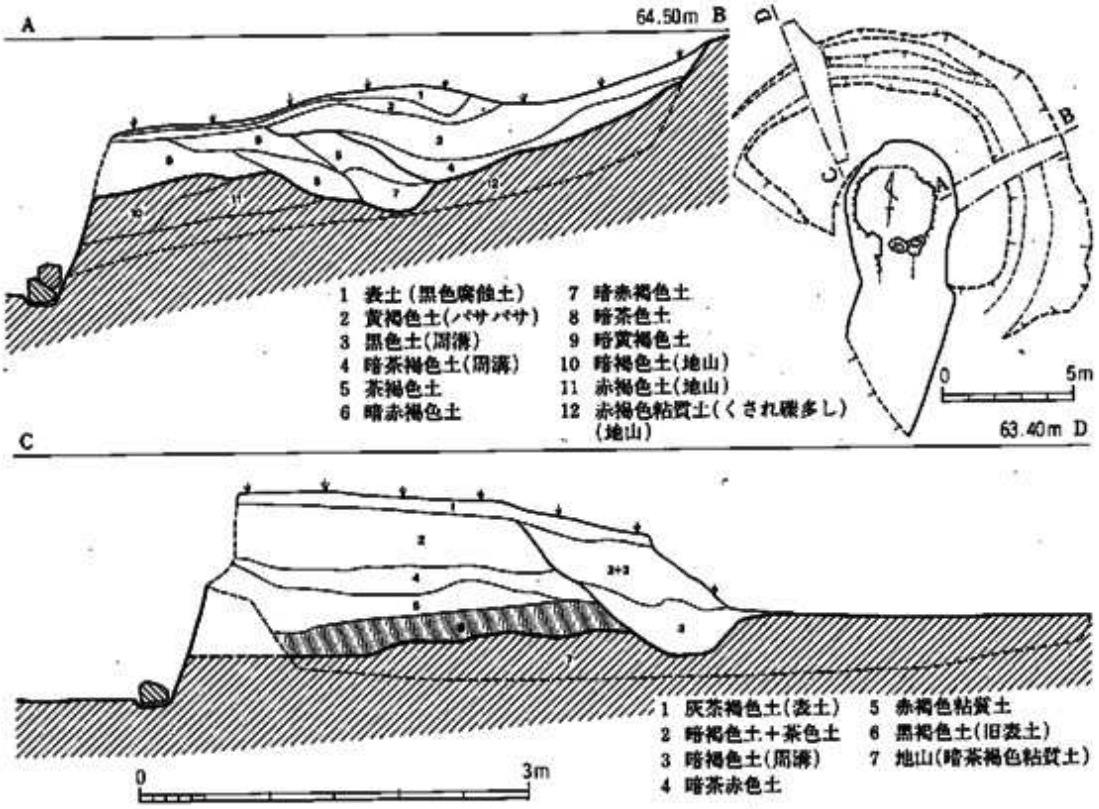


Fig. 182　中原1号墳墳丘断面実測図（1/60）

より上の積石も同類の石材で，腰石的なものは見られない。積み方は，板状ではない石材を内側からみて横長になるようにしており，板石の小口積の伝統を意識している。

前室は幅120cm，長さは170cm程と推定される。両側壁は僅かに胴張り気味になる程度で，石積みは玄室と同様である。左側の最も手前に長さ150cmもの大きな片岩石材が横長に倒れており，前室袖に立てられていたものと考えられる。羨道部は明確ではないが，最も手前に残った敷石からすると，最低でも長さ120cmはあったと思われる。羨道部側壁から連続して左右に開いた前庭部積石があったのではないかと想像される。推定羨道部前面付近から底面は墓道へと続く緩傾斜をなす。墓道側は農道開削により残っていないが，南西側へカーブして行くようである。前庭部土器群とした一括供献土器は，前庭部左側積石の直下にあったものであろう。

床面敷石は，玄室・前室・羨道部にまで敷かれていたようで，最初に安山岩の20～30cm大の大きめの石を適当に置き，その間隙に片岩の小板石，河原石（径10cm前後）を密に敷き詰めている。玄室左袖際から鉄鏃の一括品が出土したが，それらは河原石を一段剝がした下から出土したので，追葬の際に敷石の敷き直しが行われたものと思われる。

副葬品としては，玄門左側床面から鉄鏃8本ほどがみられる。前庭部左側には須恵器供献品

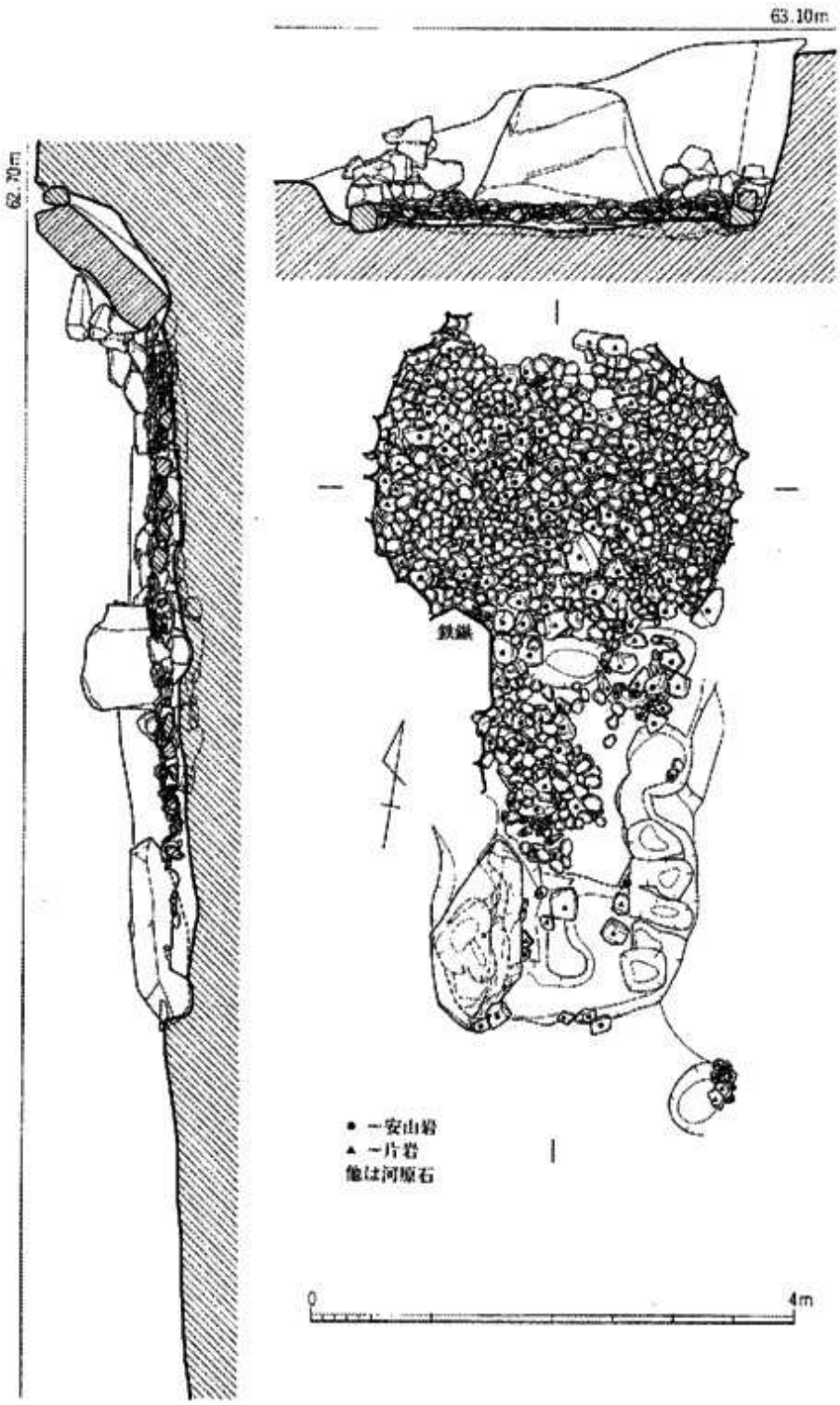


Fig. 183　中原1号墳石室実測図（その1）(1/60)

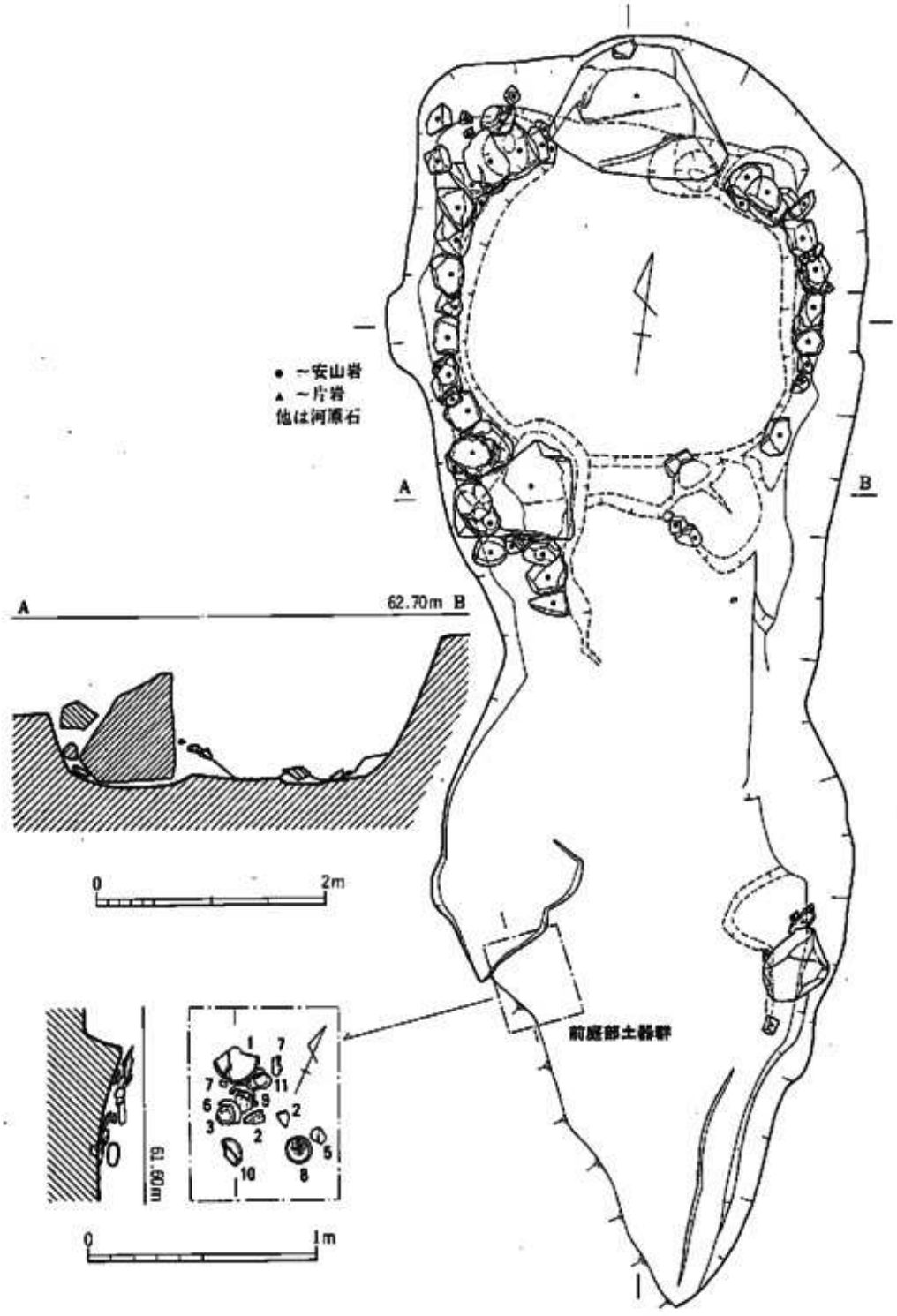


Fig. 184　中原1号墳石室実測図（その2）(1/60, 1/30)

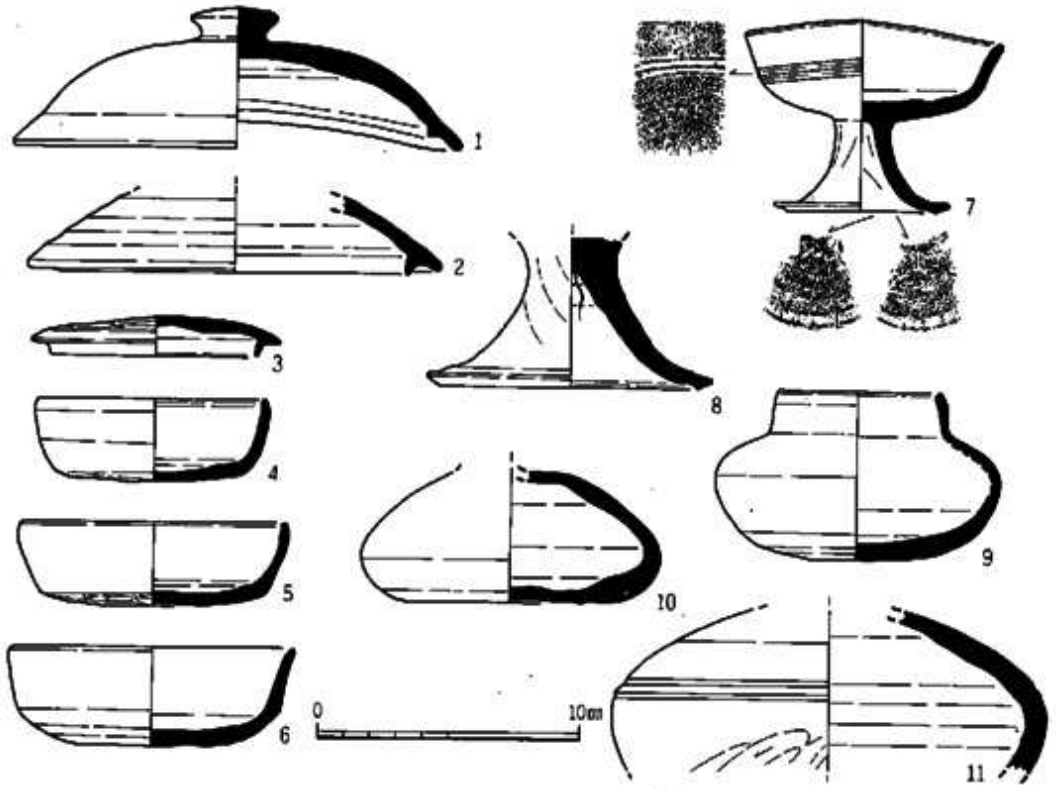


Fig. 185　中原1号墳出土土器実測図（1/3）

10個がある。また，羨道部埋土上層からは鉄釘11本が出土した。

出土遺物（Fig.185・186）

須恵器杯蓋（1～3）1は前庭部出土No.1で，口径17.2cm，器高6.3cm。頂部が丸味を持っただけの宝珠状摘を付け，外面は回転ナデ。内面は灰かぶり。全体に焼き歪みがひどい。焼成堅緻で内面は黄褐色，外面は灰黄褐色をなす。2は前庭部出土No.5で，口径15.8cm，返り端部径13.2cm。天井外面は回転ヘラ削り，他内外面は回転ナデ。焼成堅緻で灰色をなす。3は口径9.6cmで，返り端部径7.6cm，器高1.5cmの小型品。前庭部出土No.3で，天井外面の大半は手持ちヘラ削り，天井内面はナデツケ。焼成堅緻で内面は明灰色，外面は明青灰色。

須恵器杯（4～6）4は羨道部上層出土品で，口径8.7cm，器高3.2cm。底外面は手持ちヘラ削り，体部内外面は回転ナデ，底内面はナデツケ。焼成堅緻で内面は茶灰色，外面は灰茶色。5は前庭部出土No.8で，口径10.3cm，器高3.2cm。底外面は手持ちヘラ削り，体部内外面は回転ナデ，内底面はナデツケ。焼成堅緻で灰黄褐色をなす。6は前庭部出土No.2で，口径11cm，器高3.8cm。底外面は回転ヘラ削り，体部内外面は回転ナデ，底内面はナデツケ。焼成やや軟質で内外ともに緑灰色をなす。

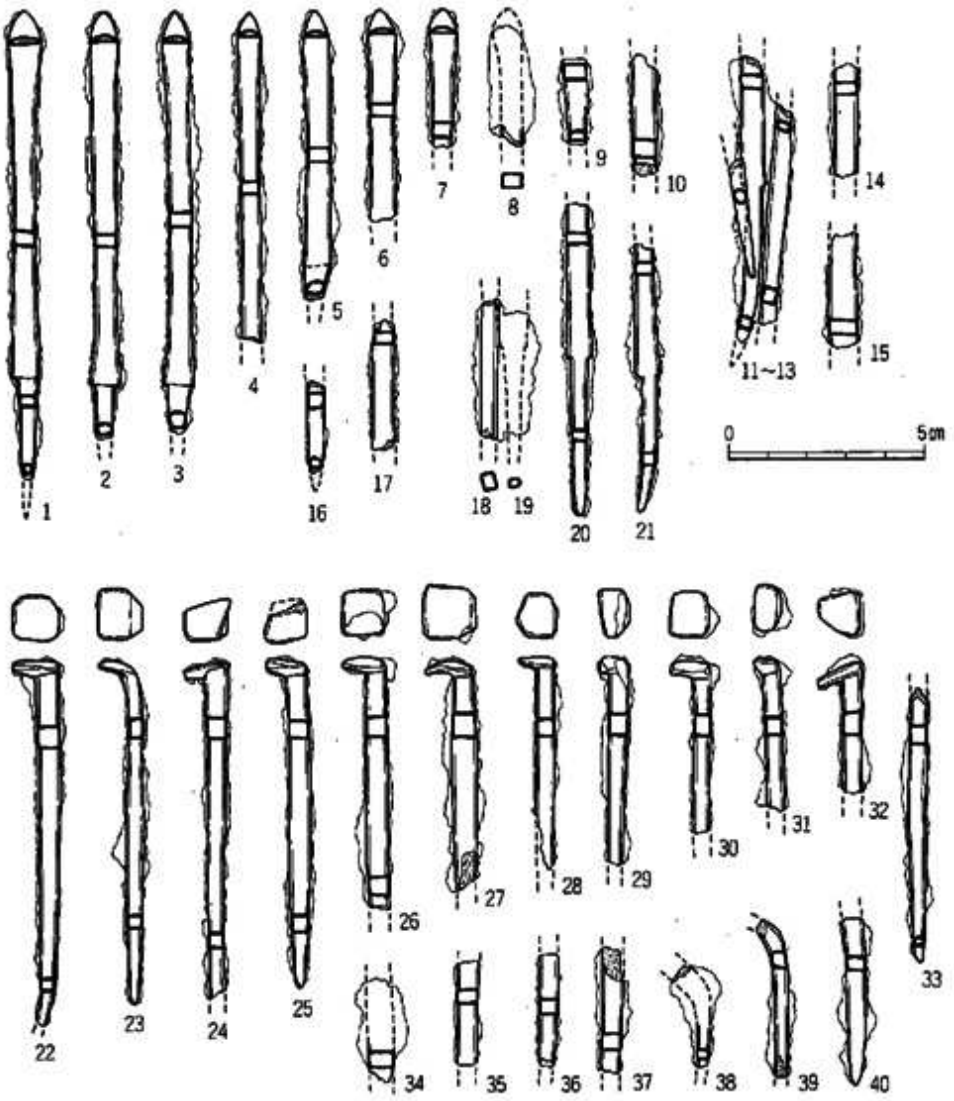


Fig. 186　中原1号墳出土鉄器実測図（1/2）

須恵器高杯（7・8）7は前庭部出土№9で，口径7.5～10cm，器高12.3cm，脚端径6.7cm。杯部外面に2条の沈線を持ち，内底面はナデツケ。体部内面から外面全体にかけて回転ナデ。脚部内外面にシボリ痕が残る。杯部外面下半に2ケ所，脚部内面に2ケ所ヘラ記号が施されている。脚内面のものは2つとも3本直線で同類。焼成堅緻で内外とも暗灰色をなす。8は前庭部出土№6で，脚端径10.9cm，脚柱上端径3.4cm。内外とも回転ナデで，シボリ痕を残す。焼成堅緻で淡灰～茶灰色をなす。

須恵器壺類（9～11）9は前庭部出土№10で，口径6.3cm，器高6.5cm，胴部最大径11cm。底外

面は手持ちヘラ削り，胴部内面下半はナデツケ，他面は回転ナデ。焼成堅緻で内面は紫灰色，外面は明紫灰～灰色をなす。10は前庭部出土№4で，偏平な下ぶくらみの小型稀例で，小さな口が片寄った位置に付くのではないかと考える。胴部最大径11.4cm，現存器高5cmとなる。外面は磨滅しているが，内面の上端の接合部の直下は回転ナデ，他内面は不定方向のナデ。焼成軟質で内面は灰黄褐色，外面は淡赤茶色をなす。水滴のような用途となるか。11は前庭部出土№7で，胴部最大径16.6cmとなる長頸壺片。外面下半は手持ちヘラ削り，他内外面は回転ナデ。焼成堅緻で内外灰色をなす。

鉄鏃（Fig.186-1～21）すべて玄室敷石下出土の一括品である。鋒先部の数からみて，少なくとも8本があったと推定される。鋒先部は片丸造の柳葉形のものだけで占められており，全長は130mm程となろう。ただ篦被部が下端近くまで断面方形をなすものと，下半で断面が丸くなるものとがあり，また，篦被部の長短の差もあり，細部では最低2種類の違いは認められる。

鉄釘（Fig.186-22～40）羨道部上層出土品で，頭部の数からすると，最低11本は在ると考えられる。いずれも頭部を片側へ打ち延ばして，上面観を方形に作ったもので，最大一辺長6mmの断面方形をなす角釘である。全長は94mm強のものと88・84mmのものなど不揃いであるが，大旨三寸釘の類と思われる。中には22・38・39などのように明らかに曲げられたものもみられる。31の頭部直下付近と，32の身部下半の片面には木質が付着しているが，いずれも杢目方向等は不明。以上のような鉄釘の状況からみて，これらは木棺に使用されたものであることは間違いなかろう。

以上の出土品のうち，須恵器杯4だけは羨道部上層出土品だが，他の土器は一括出土品で，時期的にも7C中葉とよくまとまっている。出土鉄器のうち，鉄釘については既に述べたように，新しい時期の羨道部の再利用と考えられ，鉄鏃は当石室初築時の一括副葬品である。以上の事と，石室の形態を併考するに，当古墳の初築は前庭部の供献土器の示す7C中葉として矛盾は無い。

F　その他の遺構出土遺物

ここでは，既報告の主要遺構出土遺物以外のもの，即ち，小ピット，包含層，遺構検出時に取り上げたものや，住居跡や土壙から出土したものでも明らかに他の時期の遺構に混入していたものを，ここでまとめて報告する。

弥生土器（Fig.187～189）

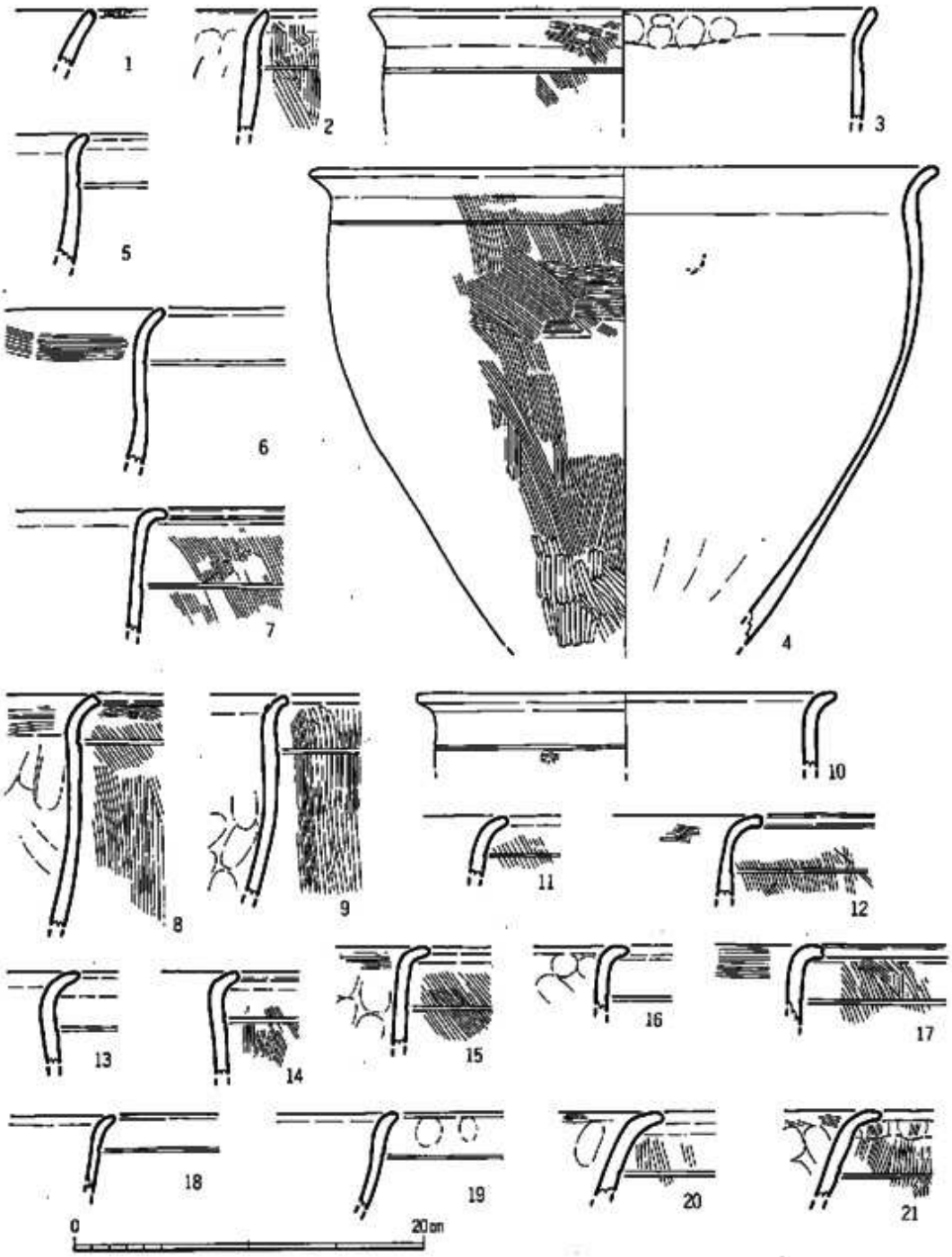


Fig. 187　その他の遺構出土弥生土器実測図（その1）(1/4)

甕（1～43・45～62）1はP288出土品で，口唇面に刻目を施す類。内外面磨滅。弥生前期後半。2はC1周溝内出土品で，胴部内面はナデ，外面は粗い縦ハケ。中期初葉。3はII区遺構検出時出土品で，口径29cm。胴部内面はナデ。4は第15号土壙北半出土品で，胴部内面は磨滅。胴外面下端は縦ヘラ磨き。口径36cm。5はII区遺構検出時包含層出土品で，内外面ともに磨滅。6は第15号土壙北半出土品で，胴部は内外面ともに丁寧なナデ。7は第15号土壙出土品で，胴部内面はナデ。外面もハケの上をナデ。8はP970出土品で，胴部内面はナデ。外面は粗い縦ハケ。9はI区表採品で，内面は磨滅。外面は雑な縦ハケ。10はP471出土品で，内面はナデ，外面は磨滅。口径24cm。11は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，胴部内面はナデ，外面は粗い斜めハケ。12は第15号土壙北半出土品で，胴部内面はナデ。口唇外面は平坦面をなす。13はII区南半包含層出土品で，やや胴が張る類。内外面ともに磨滅。14は第15号住居跡出土品で，胴部内面はナデ。15はC1周溝内出土品で，胴部内面はナデ，外面は粗い斜位のハケ。16はII区表採品で，内面はナデ，口縁内面から外面全体は横ナデ。17は第7号住居跡出土品で，口唇外端面は凹状。胴部内面は磨滅。18は第6号住居跡周辺黄褐色包含層出土品で，胴部内面はナデ，外面は磨滅。19はP222出土品で，内外面ともに磨滅。20はI区表採品で，胴部内面はナデ。図の傾きが違う可能性が強い。21はI区表採品で，胴部内面はナデ。口縁外面に煤が付着。傾きが違う可能性が強い。22はP660出土品で，内外面ともに目の粗いハケ。23はP230出土品で，胴部内面はナデ。24はII区検出時包含層出土品で，内外面ともに磨滅。口唇外面が平坦面をなす。25はP685出土品で，胴部内面上半まで斜位の粗いハケ，以下内面はナデ。外面も粗いハケで煤が付着する。26はP1061出土品で，内面下端に炭化物付着。外面上半には煤が付着。27はP957出土品で，外面は粗い縦ハケ。28は第6号住居跡出土品で，胴部内面はナデ。やや胴の張る器形となる。29はP653出土品で，内外面ともに磨滅。30はP665出土品で，胴部内面はナデ。外面は磨滅。31はP215出土品で，口径30.8cm。内面はナデで，外面は粗い縦ハケ。口縁が僅かに外傾的に開くのみ。32はP452出土品で，内面はナデで一部にハケを残す。外面は横ナデ。33はP560出土品で，口径29cm。胴部内面はナデで部分的にヘラ磨き。34はI区表採品で，口径27.8cm。外面の三角凸帯下までは横ナデ，内面は磨滅。35はII区表採品で，口径28cm。胴部内面はナデ，外面は粗い縦ハケ。口頸部外面には煤が付着。36はI区表採品で，胴部内面はナデ。頸部外面もナデ。37はI区表採品で，胴部内面はナデ。傾き不明確。38はP223出土品で，口径20cm。口頸部内外面横ナデ，胴部内面はナデ。39は第6号住居跡出土品で，内面はナデ。口縁外側の接合面にも縦ハケが施されている。40はP470出土品で，胴部内面はナデ，外面はハケだがかなり磨滅。41は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，内面はナデ。42はP540出土品で，内面はナデ，外面は横ナデ。砂粒をやや多く含む。43は第15号土壙北半出土品で，内面はナデ。口縁上面から外面全体は横ナデ。45はI区表採品で，底径8.6cm。内面はヘラ磨きで，底外面は指ナデ。内底面には炭化物が付着。内面を磨くことから，

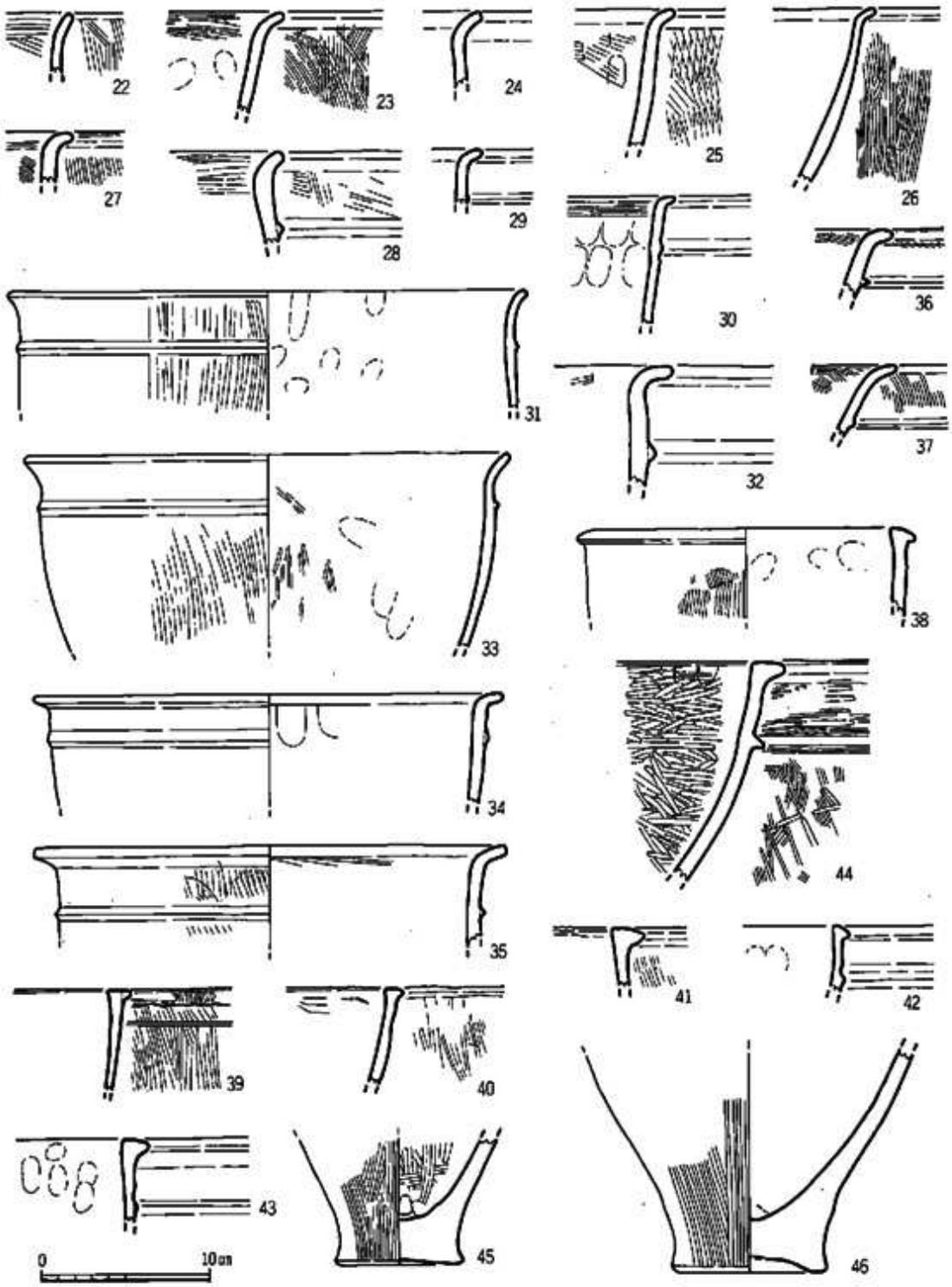


Fig. 188　その他の遺構出土弥生土器実測図（その２）(1/4)

蓋形土器の可能性も強い。46はⅠ区表採品で，内面と底外面は磨滅。底径9.1cm。47は第10号土壙出土品で，底径5cm。内面はナデ，外面は磨滅。48は第15号土壙北半出土品で，底径7.2cm。粗・細砂粒を多く含み，内面はナデ。49はⅡ区南半包含層出土品で，底径7.4cm。外面は粗い縦ハケ。50は第15号住居跡内P1出土品で，底径7.3cm。粗砂多く含み，内面はナデ，外面はかなり磨滅。51はP966出土品で，底径7.2cm。内面と底外面は磨滅。52はⅡ区包含層出土品で，内面は磨滅。底径10cmで，底外面は擦過状。外面は煤が少量付着。53はP686出土品で，底径8cm。内面は磨滅，底外面は擦過状。54はP471出土品で，底径8.4cm。内面と底外面はナデ。55はⅡ区検出時包含層出土品で，底径7cm。内面は磨滅，底外面はナデ。56はP537出土品で，底径6.3cm。内面はナデ，外面はかなり磨滅。底外面は凸状となり，ナデ仕上げ。粗砂多く含む。57はP215出土品で，底径7.6cm。内面と底外面はナデ。58は第10号土壙出土品で，底径10cm。内面はナデ，外面はすべてかなり磨滅。59はP491出土品で底径6.8cm。粗砂粒を多く含み，内面はナデ。他の外面は磨滅。60はⅡ区包含層出土品で，底径7.6cm。内面と底外面はナデ。61はⅠ区表採品で，底径6.4cm。底部中央のみが小さくへこむ類で，内面と底外面は磨滅。62は第15号土壙出土品で，底径5.8cm。内面と底外面はナデ，底部外側面は粗い縦ハケ。

鉢（44）第4号掘立柱建物P11出土品で，内面は横ヘラ磨き，外面の三角凸帯から上は縦ハケの上を横ヘラ磨き，凸帯以下の外面は斜位の粗いヘラ磨き。三角凸帯はシャープで高い。

壺（63～72）63はⅠ区グリッド出土品で，口径17cm。口唇外面は凹状となる。内面は横ヘラ磨き，外面口縁直下も横ヘラ磨き。頸部外面は縦ハケの上を横ナデ。粗砂かなり含み，焼成不良。64は第11号住居跡西側暗褐色包含層出土品で，口径19cm。内外磨滅する。粗砂粒を多く含む。65は第17号住居跡出土品で，内面上半は横ナデ，外面は粗い縦ハケ。口唇面は凹状をなす。66はⅡ区遺構検出時出土品で，頸部内外面は横ヘラ磨き，胴部内面は磨滅。肩部外面の文様帯は，頸部との境に段を作り，以下に2・2・3条のヘラ沈線を巡らし，各々の間にヘラによる無軸羽状文を施している。67はP748出土品で，内外面ともにヘラ磨き。底径7cmで，外面には煤付着。68はP1040出土品で，底径7.2cm。内面と底外面はヘラ磨き。底部外側面は縦ハケの上を横ヘラ磨き。外面のほぼ全面に煤付着。69はⅡ区南半包含層出土品で，内面と底外面はナデ。大型品であろう。70はP222出土品で，底径4.6cm。内外全面ナデ調整で細砂粒を多く含む。71はC1周溝内出土品で，底径7.5cm。内面は磨滅，外面上半も磨滅。72は第6号住居跡出土品で，底径7.9cm。内外面ともナデ調整。

蓋（73・74）73は第15号住居跡出土品で，口径20cm。端部外面は凹状となり，外面は雑なナデで凹凸多し。口唇内外面から内面は丁寧な横ナデ。粗砂幾らか含み，焼成やや良好。内面は煤が付着して黒褐色。74はP485出土品で，外面は横ハケ，内面は丁寧なナデ。内面下半には煤が付着する。

以上の弥生土器は，1を除いて大旨弥生中期初葉のものであり，本遺跡で検出した住居跡・

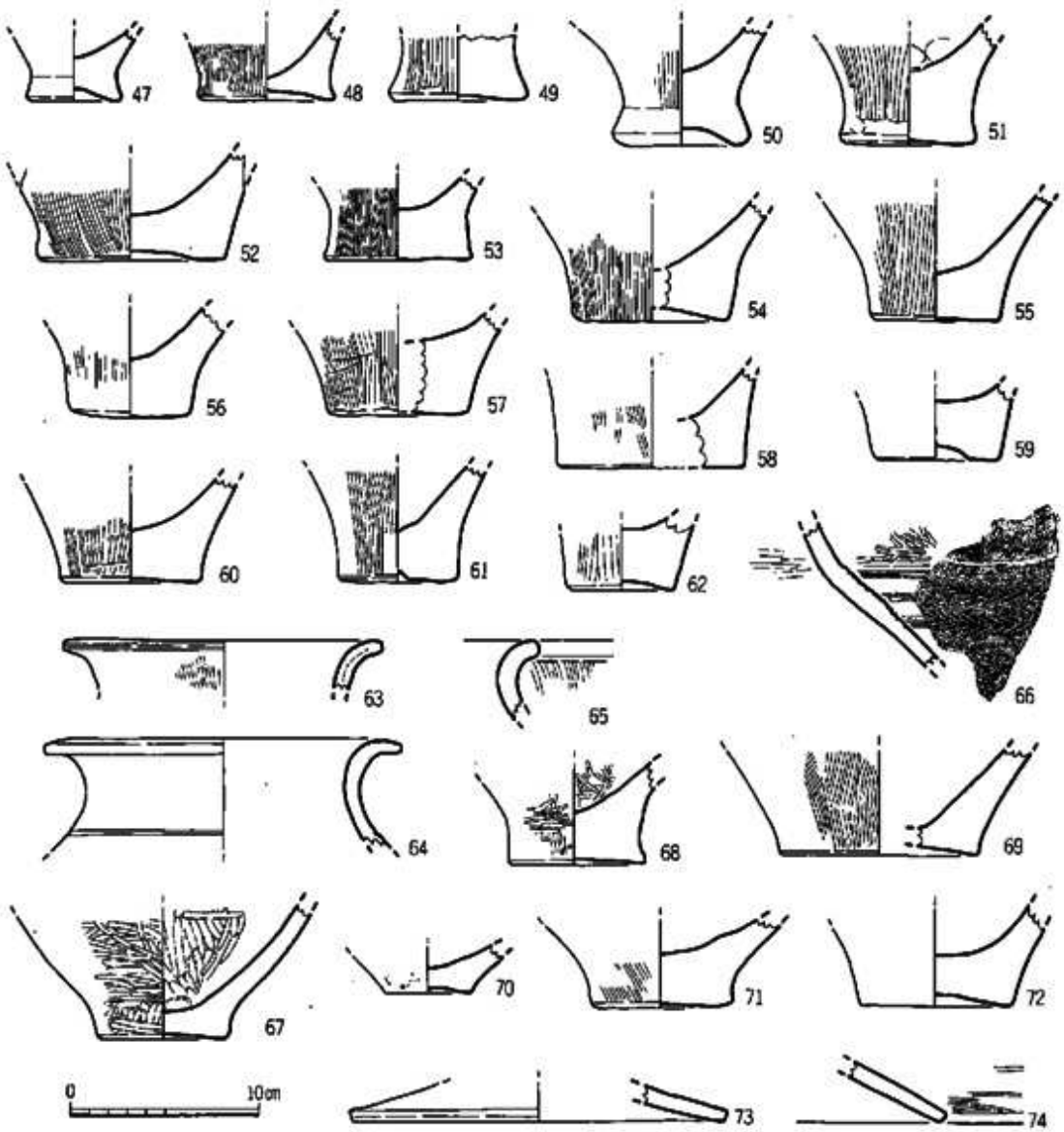


Fig. 189　その他の遺構出土弥生土器実測図（その3）(1/4)

貯蔵穴・廃棄土壙の時期と合致している。44の磨きのかかった鉢は，第36・38号土壙出土品の中にも同種品がみられ，用途の限られた特殊品であったと考えられる。

須恵器（Fig.190・191）

杯蓋（1～19）1はP489出土品で，口径11cm。天井内面はナデツケ，他内外面は回転ナデ。2はP258出土品で，口径12cm。内外面とも回転ナデで，焼成やや軟質。3はP657出土品で，

口径11.2cm，返り端部径9.8cm，器高1.6cm。天井外面の大半は雑なナデ。天井内面はナデツケ。口縁内外は回転ナデ。4はP106出土品で天井外面は手持ちヘラ削り，天井内面中央のみナデツケ。口径12.6cm，返り端部径10.6cm，器高2.2cm。焼成やや堅緻。5はP227出土品で，口径12.6cm，返り端部径10.7cm，器高2.2cm。天井外面は回転ヘラ削り，天井内面中央はナデツケ。生焼け品で白灰色をなす。6はP114出土品で，口径13cm，返り端部径10.6cm，器高1.9cm。天井外面は雑なナデ，同内面はナデツケ。7はⅡ区南半包含層出土品で，口径13.2cm，器高2.1cm。天井外面は回転ヘラ削り，同内面はナデツケ。8はⅡ区表採品で，口径15.4cm，器高2.6cm。天井外面は回転ヘラ削り，同内面はナデツケ。9は第1号溝（新溝）出土品で，内外面ともに回転ナデ。口径18cmで，焼成堅緻で淡煉瓦色。10はP138出土品で，内外面ともに回転ナデ。11はP286出土品で，内外面ともに回転ナデ。12はP489出土品で，外面は回転ナデの上を雑なナデ。焼成やや甘い。13はP283出土品で，内外とも回転ナデ。焼成やや甘い。14はP276出土品で，内外とも回転ナデ。生焼け品で淡橙色。15はP973出土品で，内外とも回転ナデ。焼成やや堅緻で内外灰色。16はP481出土品で，外面は灰かぶり，内面は回転ナデ。17はP286出土品で，内外面とも回転ナデ。18はP291出土品で，鳥嘴状口縁類。天井内面はナデツケ，他内外面は回転ナデ。19はP114出土品で，各稜のシャープな角張った鳥嘴状口縁。天井外面は回転ヘラ削り，他内外面は回転ナデ。

杯（20～26）20はⅡ区包含層出土品で，体部内外面は回転ナデ，底外面は回転ヘラ削り。口径14cmで，高台の付く類となろう。21はP699出土品で，口径16.2cm，器高4.1cm，高台径10.8cm。内底面と高台の内側の底外面はナデツケ。他は回転ナデ。22はP529出土品で，高台径9.8cm。底外面中央のみナデツケ，他内外面は回転ナデ。23はP13出土品で，外面は灰かぶり。高杯の可能性が強い。24はP286出土品で，内外面とも回転ナデ。25はP13出土品で，内外面ともに回転ナデ。26はP1129出土品で，高台径8cm。内面は磨滅，底外面中央のみナデ。

高杯（27～31）27はP286出土品で，内外とも回転ナデ。体部外面中途に段を作る類。28はⅡ区検出時包含層出土品で，杯部内底面はナデツケ。杯部底外面は回転ヘラ削り。他内外面は回転ナデ。29はP9出土品で，底外面はカキ目。内底面中央のみと，外面底部外周が回転ナデ。30はP513出土で，脚端部径15.6cm。外面は回転ナデ，内面は灰かぶりのため調整不明。31はⅡ区包含層出土品で，脚端部径11cm。鳥嘴状をなす端部で，内外面ともに回転ナデ。

壺類（32～38）32はⅡ区表採品で，口径11.8cm。内外とも回転ナデで，灰かぶりして自然釉がかかる。傾きがもう少し立つかもしれない。33はP598出土品で，口径9cm。薄手で内外とも回転ナデ。34はP9出土品で，外面に沈線2条を施す。頸部内面下半はナデ上げ，他内外面は回転ナデ。長頸壺となろう。35はP286出土品で，頸部周縁の胴上端に2条の沈線とその間に短沈線状刺突文を施す。以下胴部外面は回転ナデの上を間隔を置いてカキ目を施す。内面は回転ナデ。焼成やや甘く，内面は暗青灰色，外面は暗茶褐色。36はP506出土品で，頸部外面に

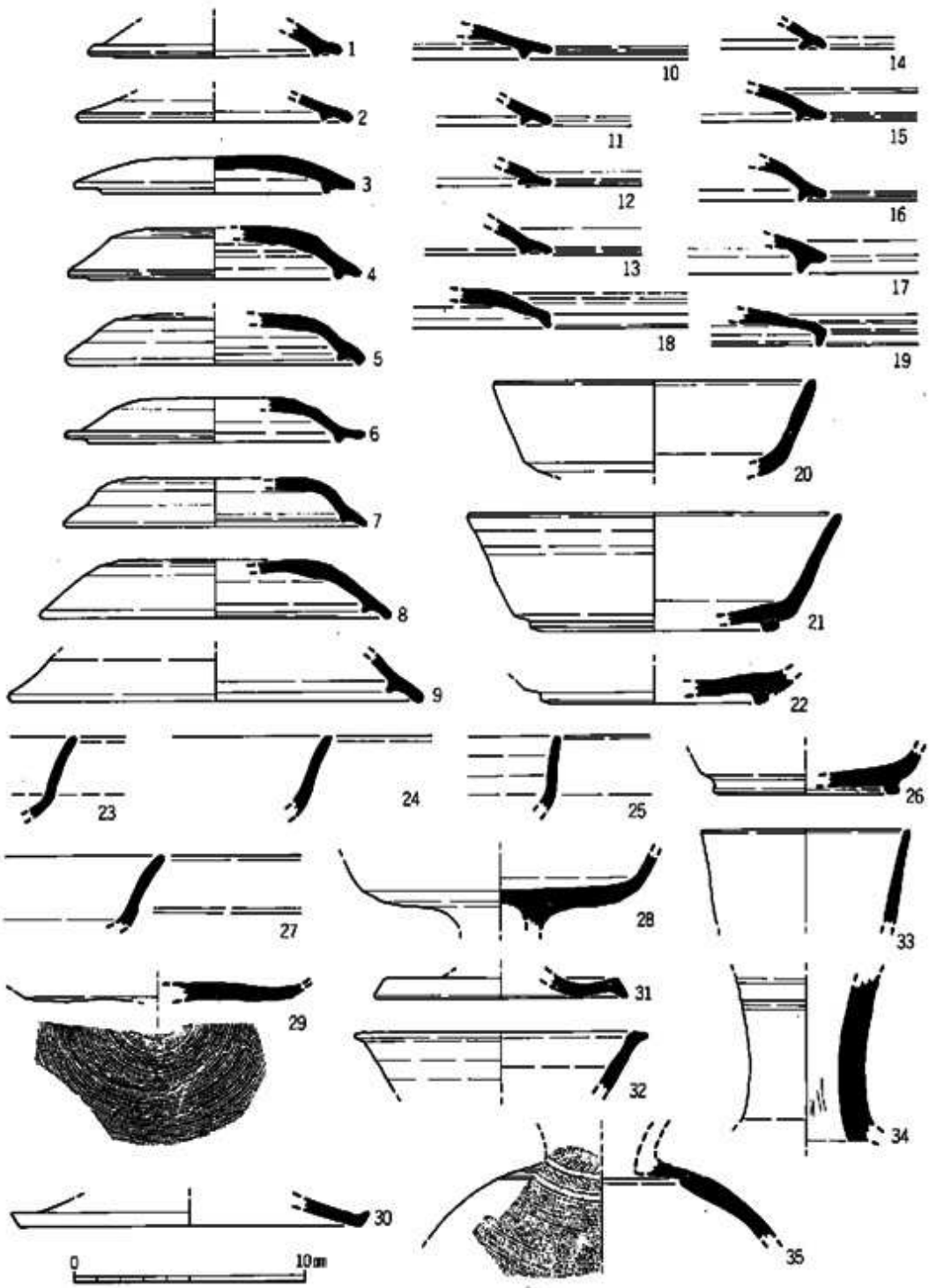


Fig. 190　その他の遺構出土須恵器実測図（その１）(1/3)

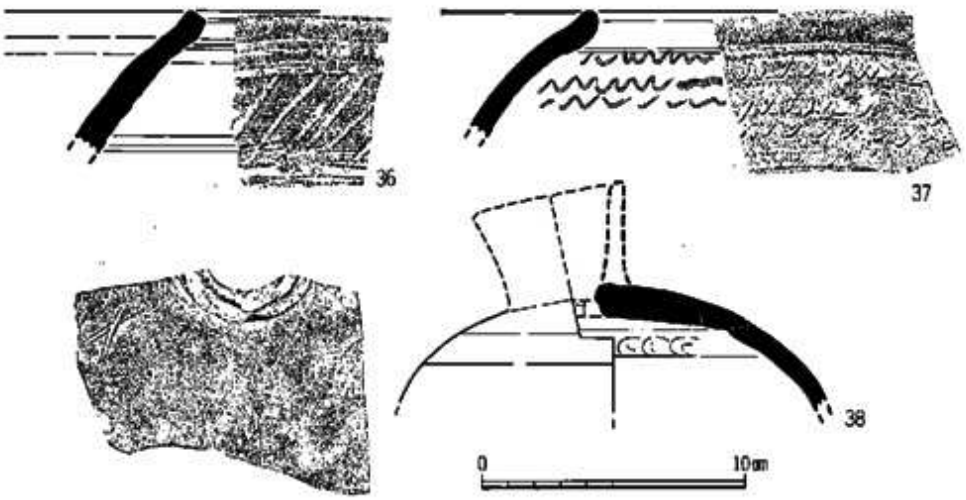


Fig. 191　その他の遺構出土須恵器実測図（その２）(1/3)

カキ目の上に斜めの直線文を施す。内外面ともに灰かぶり。37はⅡ区南半包含層出土品で，頸部外面にヘラ描き波状文を施す。口縁内面から外面は回転ナデ，頸部内面は丁寧なナデ。頸部外面は灰かぶり。38はP123出土品で，平瓶胴部片。外面と内面下半は回転ナデ。外面の肩部に×印のヘラ記号あり。

以上の須恵器は，１～５・25・35が７Ｃ中葉のもので，８・９・20・24が７Ｃ後葉，18・19が８Ｃ代，26が８Ｃ前葉，21・22が８Ｃ後葉となる。全体としては，７Ｃ後葉代のものが多いが，これは本遺跡のカマド付住居跡の多さから見て当然のことであろう。しかし，明らかに７Ｃ中葉のものもあり，本遺跡では中原１号墳とⅡ区の小土壙のみしか検出されていない事を考えると，近辺に該期の集落が存在すると推測できよう。また，８Ｃ後半段階の遺構も検出されておらず，近隣での集落の存在が予測される。

土師器（Fig.192・193）

杯（１～11）１はⅡ区包含層出土品で，口径10.3cm。内面下半はナデ，外面下半は横ヘラ削り。口縁内外面は横ナデ。２はP518出土品で，内面は強いナデ。外面下半はヘラ削り。３はⅡ区表採品で口縁外面から内面は横ナデ。４～６は皿となろう。４はP491出土品で，底部内外面ともに磨滅。５はP501出土品で，内外面ともに磨滅。６はP224出土品で，底内面はナデ。体部内外面は横ナデ。７はP474出土品で，口径17cm。体部外面上半には横ハケが残り，下半はヘラ削り。内面上半は横ナデ，下半はナデツケ。８はP1091出土品で，口径19.6cm。内面は横ナデ，外面下半はヘラ削り。９はP304出土品で，口径20.9cm。外面上半は横ナデ，他内外面は磨滅。10はⅡ区包含層出土品で，内面は横ナデ，他外面は磨滅。11は椀状の器形で，P486

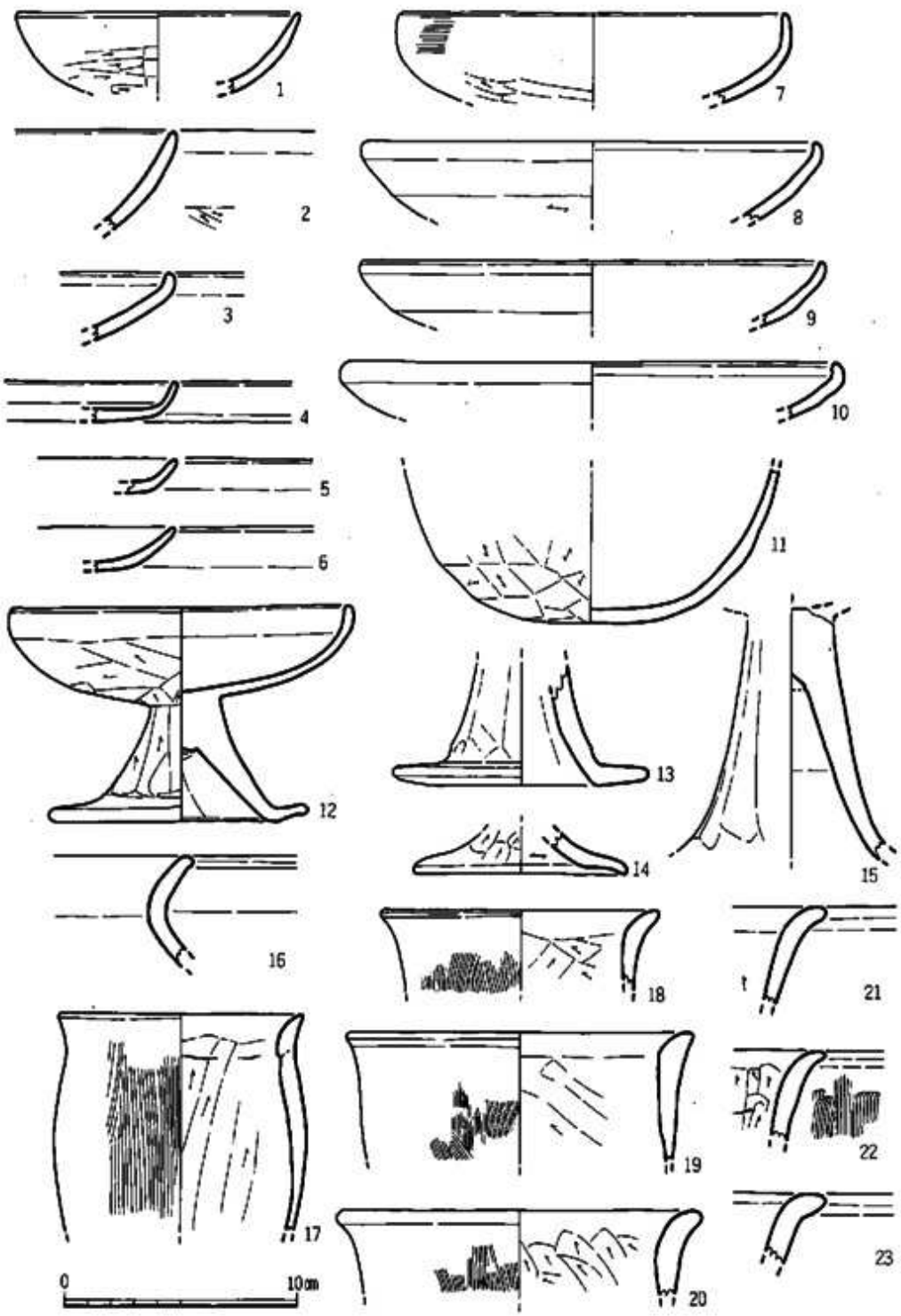


Fig. 192　その他の遺構出土土師器等実測図（その１）(1/3)

出土品。内面はナデ，外面はかなり磨滅するが，ヘラ削りが幾らか残る。

高杯（12～15）12はP759出土品で，口径14.8cm，器高9.3cm，脚端径10.2cm。口縁内外面と脚端部内外面は横ナデ。杯部外面はヘラ削り，内面はナデ。脚柱部外面は縦ヘラ削り，同内面は横方向のヘラ削り。13はP491出土品で，脚端径は11cm。脚柱部外面は縦ヘラ削り，内面は横ヘラ削り。14はP601出土品で，脚端径9.2cm。脚柱部内面は横ヘラ削り，外面は縦ヘラ削り。15はP555出土品で，長脚類。脚柱部外面は縦ヘラ削り，同内面は横ヘラ削り。

甕（16～30）16はP1090出土品で，これのみ5C初前後。胴部内面はナデ，口縁内外面と胴部外面は横ナデ。胎土精良。17は第16号住居跡西側茶褐色包含層出土品。口径10.6cmの小甕。胴部内面はヘラ削り上げ，外面は粗い縦ハケ。18はP63出土品で，口径12cmの小甕。胴部内面はヘラ削り。外面は細かい縦ハケ。19はP504出土品で，口径15cm。胴部内面はヘラ削り。20はⅡ区遺構検出時出土品で，口径15.8cm。胴部内面はヘラ削り。21はP733出土品で，内外面とも磨滅。22はP1172出土品で，外面は煤が付着してこげ茶色。胴部内面はヘラ削り上げ。23はⅠ区表採品で，外面は横ナデ。内面は磨滅。24はP1071出土品で，胴部が強く張る類。内外面横ナデ。25はP509出土品で，胴部内面はヘラ削り。粗砂多く含み，外面は磨滅。26はⅡ区遺構検出時出土品で，胴部内面ヘラ削り。27はP286出土品で口径11cm。小型鉢状品か。胴部内面はヘラ削り，他内外面は磨滅。28はP421出土品で，内面に横ハケが施されており，器種が違うかもしれない。29はⅡ区包含層出土品で，内面はヘラ削り。30はP1057出土品で，口径22.8cmで，胴が強く張る類。胴部内面はヘラ削り，他は磨滅。

甑（31～38）31はP455出土品で，口径30cm。緩やかに外傾するだけの口縁で，胴部内面はヘラ削り。32はP491出土品で，口径36cm。丸味を帯びて長く開く口縁で，内面は磨滅。33はC2棺内埋土中出土品で，甕かもしれない。横断面がやや偏平な類で，胴部内面はヘラ削り。34はP1090出土品で，横断面が偏平となる類。胴部内面はナデ。35はP1071出土品で，横断面がやや偏平になる類。胴部内面はヘラ削りで，把手部には一部にハケが残る。36はP491出土品で，内外面ともにかなり磨滅。37はP542出土品で，胴部内面はヘラ削り。38はP509出土品で，底部内外面に煤付着。内外面ともにかなり磨滅していて調整は不明。

手捏ね土器（39・40）39はP457出土品で，口径14cm。内外磨滅しており，詳細な器形・用途は見当がつかない。40はⅡ区遺構検出時包含層出土品で，口径5.7cm，器高2.4cm程となるミニチュア品。4～5C代のものか。

瓦質土器（41）P376出土品で，凸帯のみの破片で，かなり大口径の甕となろう。凸帯外面は横ナデ，接合面には上半が横ハケ，下端が縦ハケの圧痕が転写されている。胎土精良で焼成瓦質。外面は灰黒色をなす。中世末～近世頃のものとなろう。

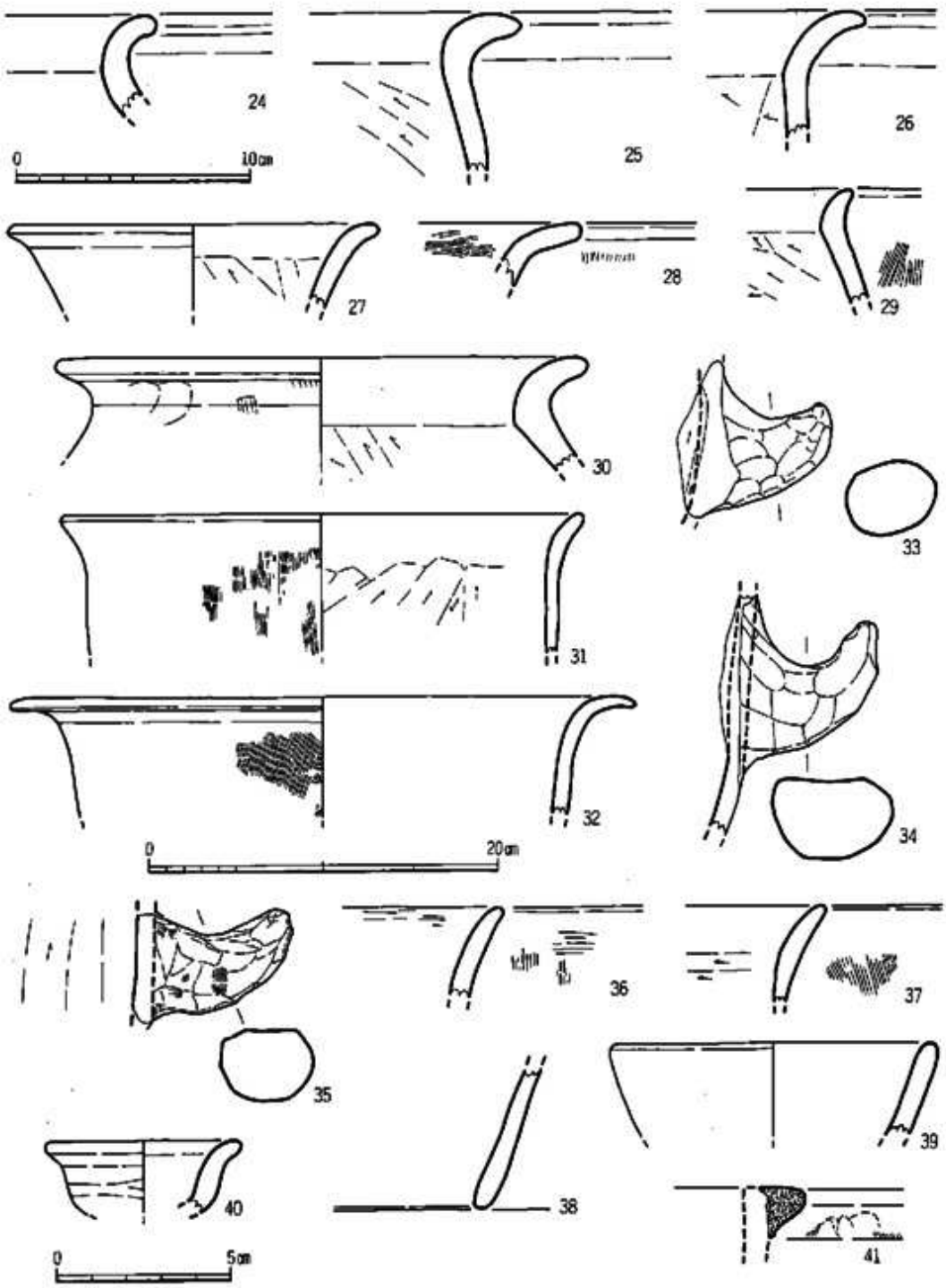


Fig. 193 その他の遺構出土土師器等実測図（その２）
(31・32は1/4, 40は1/2, 他は1/3)

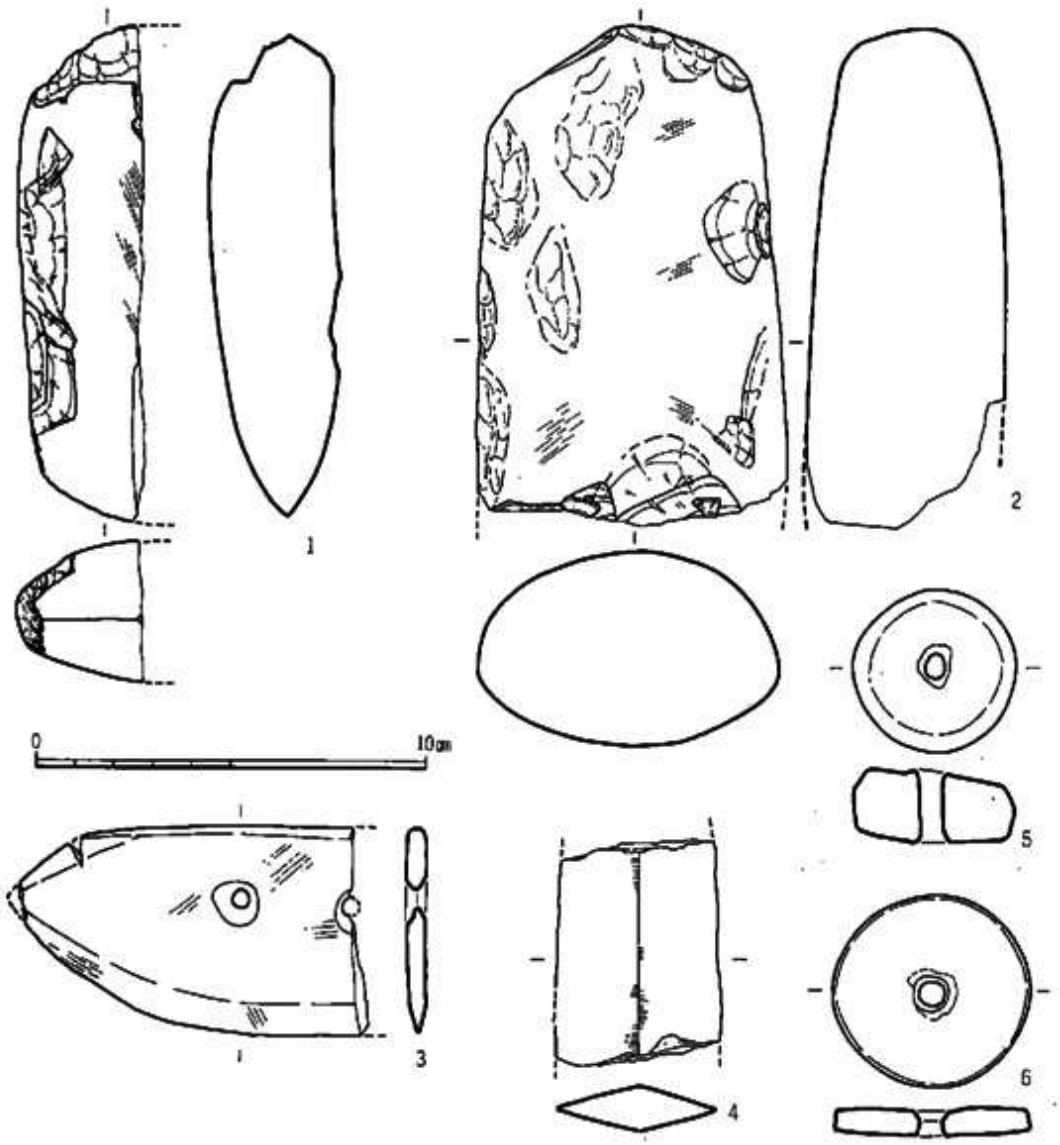


Fig. 194　磨製石斧・石鹿丁・紡錘車等実測図（1/2）

磨製石斧（Fig.194-1・2）

1は第14号土壙出土品で，既にその項で報告済。2は中原1号墳墳丘内出土品で，玄武岩製太型蛤刃石斧。全面丁寧に研磨されているが，いくらか敲打時の凹部が残る。長さ127mm，幅79mm，厚さ50mm，重さ803.2gとなる。今山産太型蛤刃石斧の分布地として新たに確認されたことは意義深いものである。

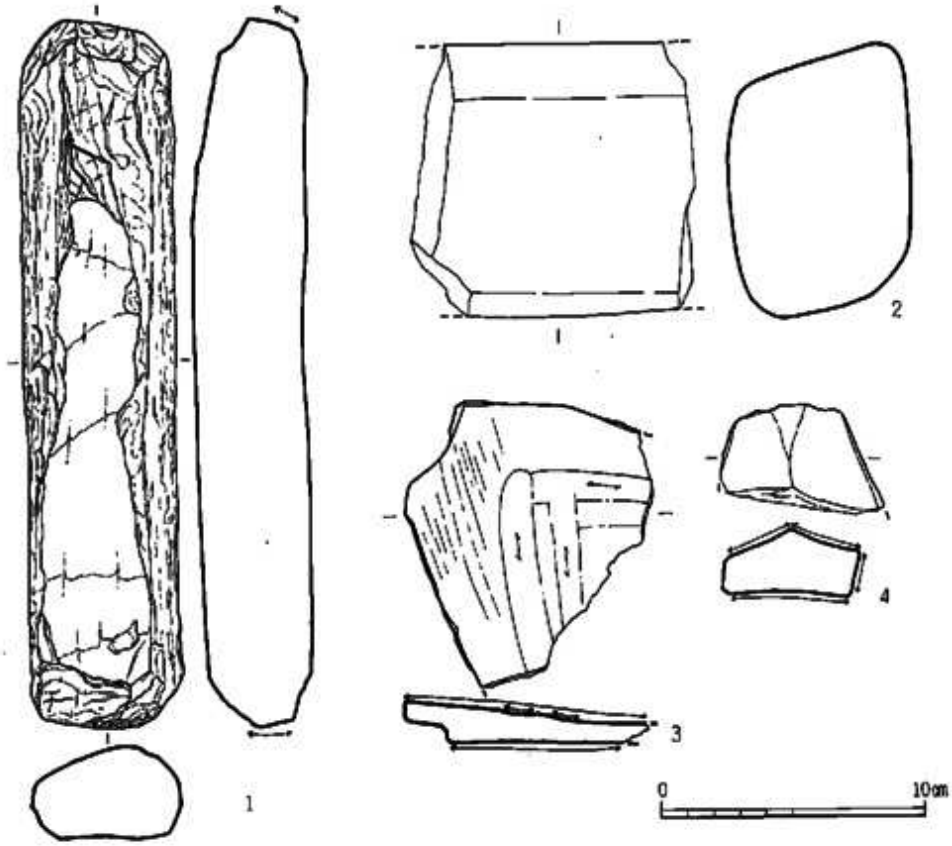


Fig. 195　敲石・砥石実測図（1/3）

石庖丁・石剣・紡錘車（Fig.194-3～6）

3の石庖丁は第33号土壙出土品で，その項で既に報告済。4の石剣は第24号土壙出土品で，既にその項で報告済。5は土製紡錘車で，P441出土品。直径41mm，厚さ20mm，孔径6mm，重さ37.7gとなる。弥生前期末前後のもの。6は第11号住居跡床面出土の石製紡錘車で，既に当該遺構の項で報告済。

敲石・砥石（Fig.195）

1は第1号土壙山土の敲石。2は第6号住居跡煙道部から出土した砥石。3は第1号住居跡出土の中砥。4は第24号土壙出土の粗砥。以上のいずれも既に各遺構の項で報告済。

玉・土錘・鞘羽口等（Fig.196）

1はI区の遺構検出作業中に出土したNo.2で，こげ茶色をした瑪瑙製の太い棗玉的異形品。

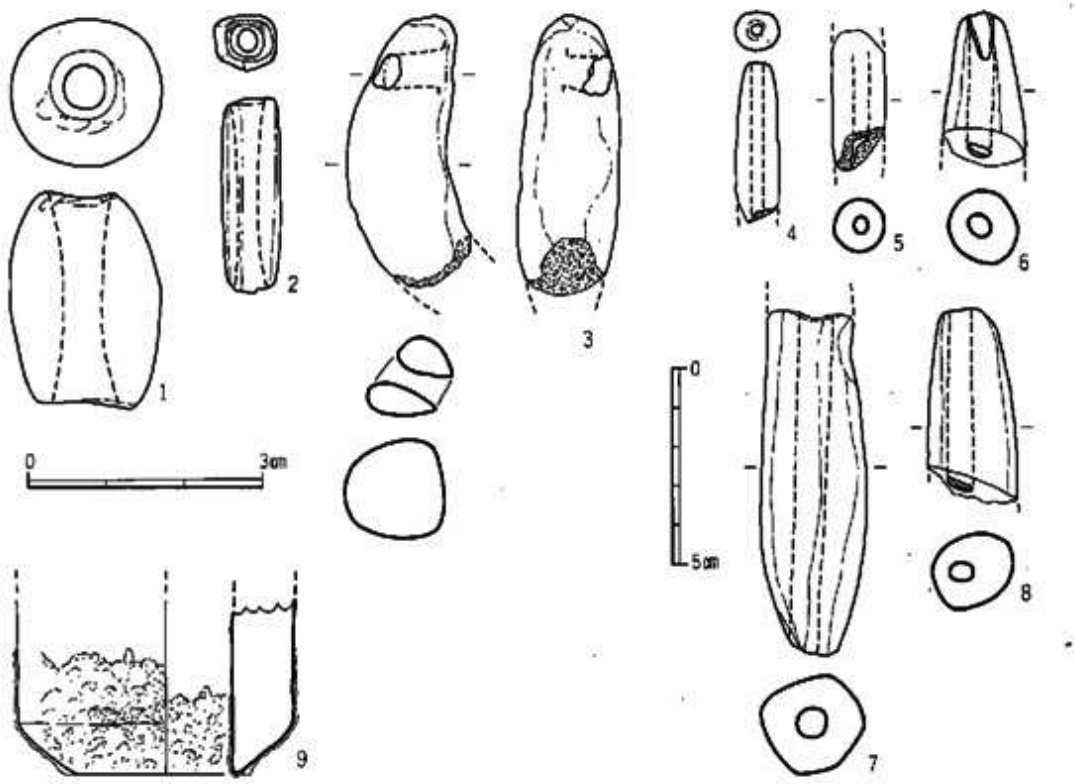


Fig. 196　玉・土錘・鞴羽口実測図（1～3は実大，他は1/2）

孔は両面から穿孔しており，裏側の一部は欠損している。長さ27㎜，最大径19㎜，孔径5㎜，重さ13.9gと大きい。形状や穿孔の状況などからみて，縄文晩期のものと考えられる。2は第6号住居跡出土品で，既に当該遺構の項で報告した。これも縄文晩期のものと推定され，いずれも貴重な出土例である。3は第11号住居跡床面出土品で，既に当該遺構の項で報告済。4はP613出土の土錘で，葉巻形の細身小型類。断面がやや偏平となる。胎土精良で焼成良好。淡白褐色をなす。現存長41㎜，径11×10㎜，孔径3㎜，重さ4g。5はP76出土の土錘で，胎土に微細砂多く含み，焼成良好で淡灰褐色をなす。外面は丁寧なナデ仕上げ。現存長35㎜，径14㎜，孔径4㎜，重さ4.6g。6は第6号土壙出土土錘で，既に当該遺構の項で報告済。7は表採品の土錘で，葉巻形の大型品。手捏ね的で，断面が多角形になる。現存長88㎜，最大径27㎜，孔径8㎜，重さ53.8gと大きい。8は第3号住居跡出土品で，既にその項で報告済。9の鞴羽口片は第17号住居跡出土品で，これも既に報告済。

鉄刀子（Fig.175）

1はC2棺内副葬。3は第19号土壙出土。4はC1棺内副葬品で，いずれも各遺構の中で報

告した。ここでは2のみを報告する。2はP972出土品で，身部が短く，茎部の方が長いタイプ。柄の木質が良く残っており，断面倒卵形の柄の形状がよく判かる。関部の形状は木質に隠れて不明。身部長45㎜，全長（茎部端まで）104㎜，身幅11㎜，背厚さ2㎜となる。

V 各 論

A 土壌中火山灰抽出分析報告

1989年3月15日

株式会社 京都フィッション・トラック

Tab.2 数量一覧表

（単位：個数）

試料名	色調判定	土壌中火山灰抽出分析			重鉱物分析
		前処理	火山ガラス分析	火山ガラス屈折率測定	
金場遺跡	23	23	23	23	23

〈Fig.197の説明〉

＊1 主要重鉱物の略称と鉱物名

Ol：カンラン石 Opx：斜方輝石 Cpx：単斜輝石 GHo：緑色普通角閃石 BHo：褐色普通角閃石

Bi：黒雲母 Gar：ザクロ石 Zr：ジルコン Id：イディングサイト Opq：不透明鉱物

＊2 PO：プラント・オパール含有率 or 有無

＊3 主要ガラス型の名称（吉川，1976）

Ha, Hb：扁平型（バブルウォール型） Ca, Cb：中間型（軽石型） Ta, Tb：多孔質型（軽石・繊維状型）

＊4 （吉川，1976）以外のガラス型の略称

SG：スコリア質ガラス IT：不規則型

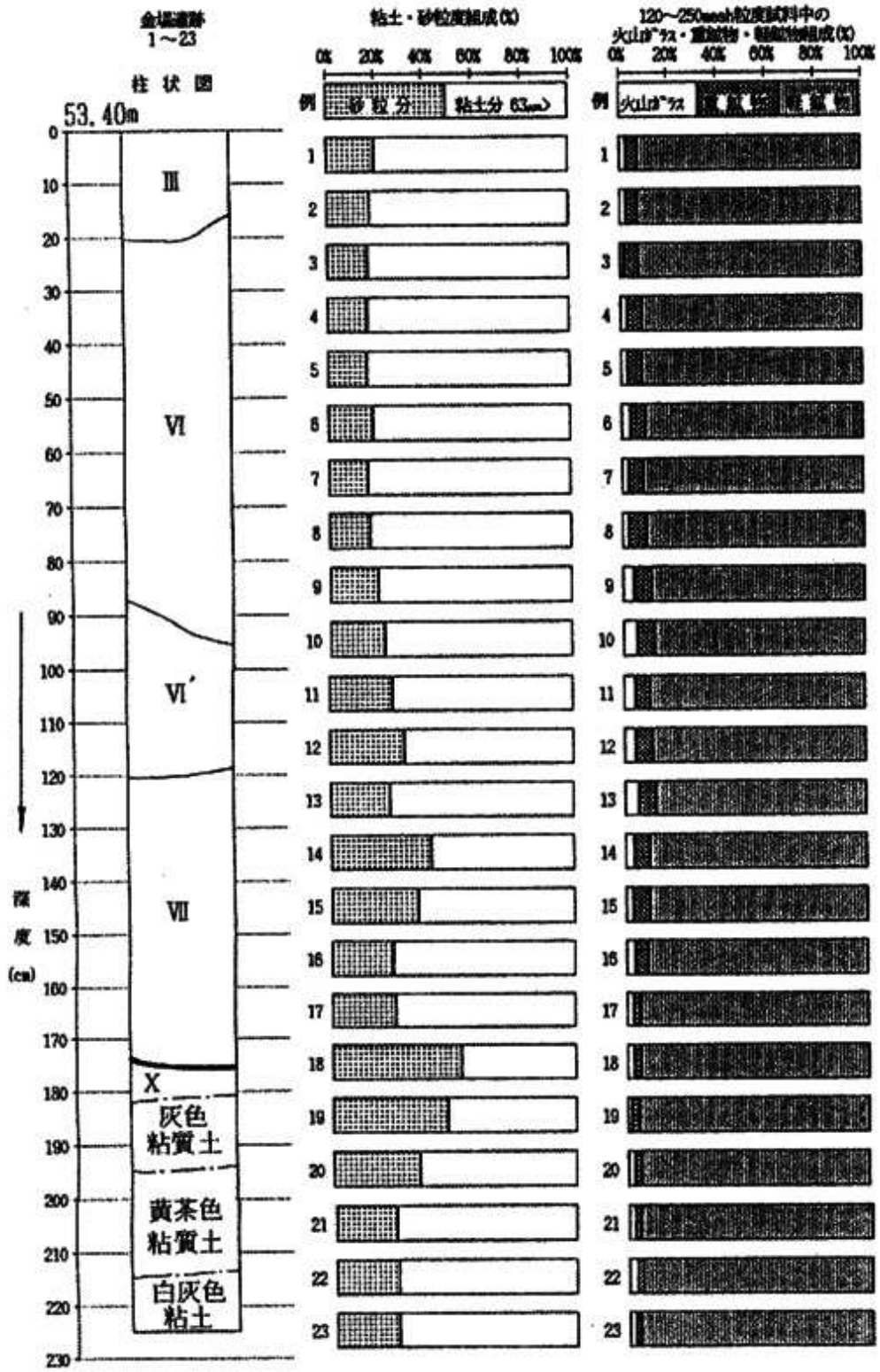
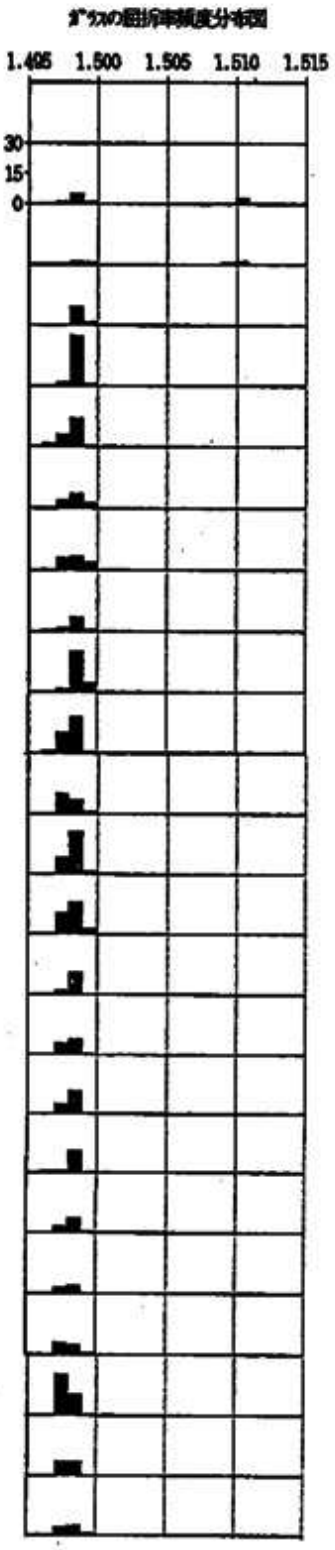


Fig. 197　火山灰試料採取地点土層模式柱状図および分析結果（0～230cm，10cm間隔）



※1 主要重鉱物および備考	※2 PO含有(%)	※3 ※4 主要火山ｶﾞﾗｽ型	色付ｶﾞﾗｽの有無
Opq.GHo.Opx.Cpx.Zr.	+	Hb.Ha.Cb.Ca.	+
Opq.GHo.Bi.Cpx.Opx.Id.	+	Hb.Ha.Cb.Ca.	+
Opq.GHo.Opx.Cpx.Bi.Zr.BHo.Id.	+	Hb.Ha.	+
Opq.GHo.Opx.Bi.Zr.Cpx.	+	Hb.Ha.Cb.	−
Opq.GHo.Opx.Cpx.Bi.BHo.	−	Hb.Ha.Ca.Cb.	−
Opq.GHo.Opx.Cpx.Bi.BHo.Zr.	+	Hb.Ha.Cb.	+
Opq.GHo.Opx.Bi.Cpx.BHo.Zr.	−	Hb.Ha.Cb.	−
Opq.GHo.Opx.Bi.BHo.Cpx.	−	Hb.Ha.Cb.	−
Opq.Opx.GHo.Cpx.Zr.Bi.	+	Hb.Cb.Ha.It.	−
Opq.GHo.Opx.Bi.	−	Hb.Ha.Cb.	+
Opq.GHo.Opx.Bi.Cpx.BHo.Zr.	+	Hb.Ha.Cb.	−
Opq.GHo.Opx.Bi.Zr.BHo.	−	Hb.Ha.Ca.Cb.	+
Opq.Bi.GHo.BHo.	−	Hb.Ha.Cb.Ca.	−
Opq.Opx.Cpx.GHo.	−	Hb.Ha.Ca.Cb.	−
Opq.GHo.Opx.Zr.Cpx.Bi.BHo.	+	Hb.Cb.Ha.	−
Opq.GHo.Opx.Cpx.Bi.	−	Hb.Ha.Cb.	−
Opq.GHo.Opx.Bi.	−	Hb.Ha.Cb.	+
Opq.GHo.Opx.Bi.Zr.	−	Hb.Ha.Cb.Ca.	−
Opq.GHo.Opx.Cpx.Bi.BHo.	−	Hb.Ha.Cb.Ca.	−
Opq.GHo.Opx.Bi.Zr.	−	Hb.Cb.Ha.Ca.It.	−
Opq.GHo.Opx.Cpx.Bi.Zr.BHo.	−	Hb.Ha.Cb.	−
GHo.Bi.Opq.	−	Hb.Cb.Ha.	−
GHo.Opq.Bi.	−	Hb.Cb.Ha.Ta.	+

Tab.3　金場遺跡Ⅰ区グリッド㉒北壁地点ガラス濃集層準とその特徴

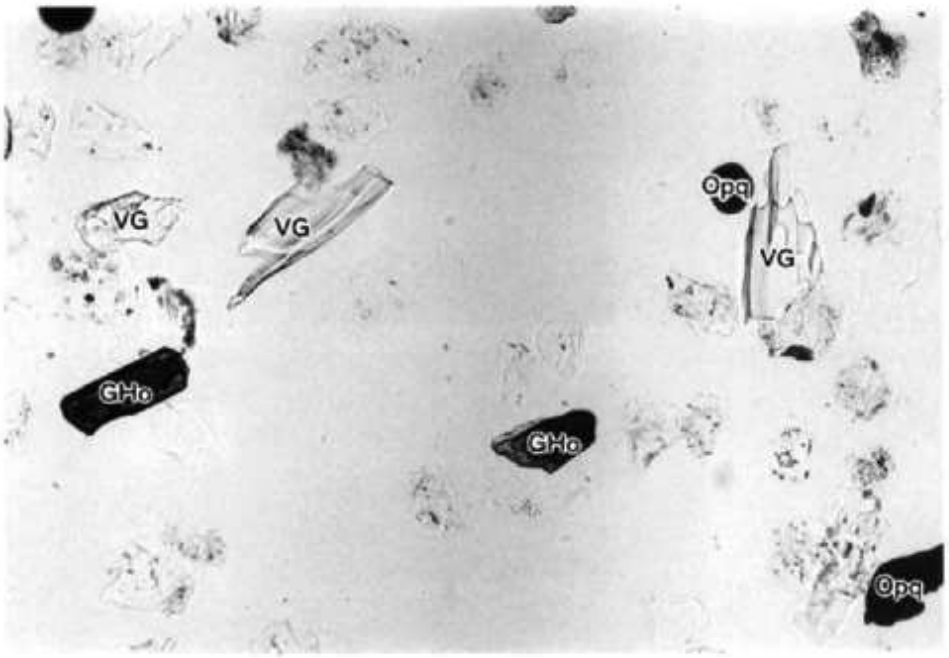
火山ガラス検出層準					屈折率 (Nd)	主な火山ガラス型	文(6) 対比される広域テフラ	文(6) 降灰年代	備　考
分布層準		最大濃集層準							
サンプルNo.	深　度	サンプルNo.	深　度	地　層　名					
No.1 ～ No.2	0cm ～ 20cm	—	—	Ⅲ　層	1.508 ～ 1.514 最頻値 1.510	H　型 (扁平型)	鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	下位層準の火山ガラス(AT)と混在しつつ表層部(Ⅲ層)のみに分布する。含有量が少なく降灰層準の認定は困難。ガラス形態はH型を主とし，濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高いのが特徴。分布層準付近でプラント・オパール含有量が多いのが注目される。
No.1 ～ No.23	0 cm ～ 225cm	—	—	—	1.498 ～ 1.501 最頻値 1.500	H　型 (扁平型)	姶良Tn火山灰 (AT)	21,000 ～ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが，No.9～13試料中で相対的にやや濃集する。しかしガラス含有量が数%以下と小さく，全層準を通して降灰層準を認定するのは困難。逆に全層準にわたり含有率や岩相がほとんど変化しないところから，土壌の攪乱の恐れがあると推定される。無色透明な扁平（バブル・ウォール）型ガラスを主とするが，亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。

文(6)町田　洋ほか(1984)：テフラと日本考古学――考古学研究と関係するテフラのカタログ――．古文化財の自然科学的研究．865-928．

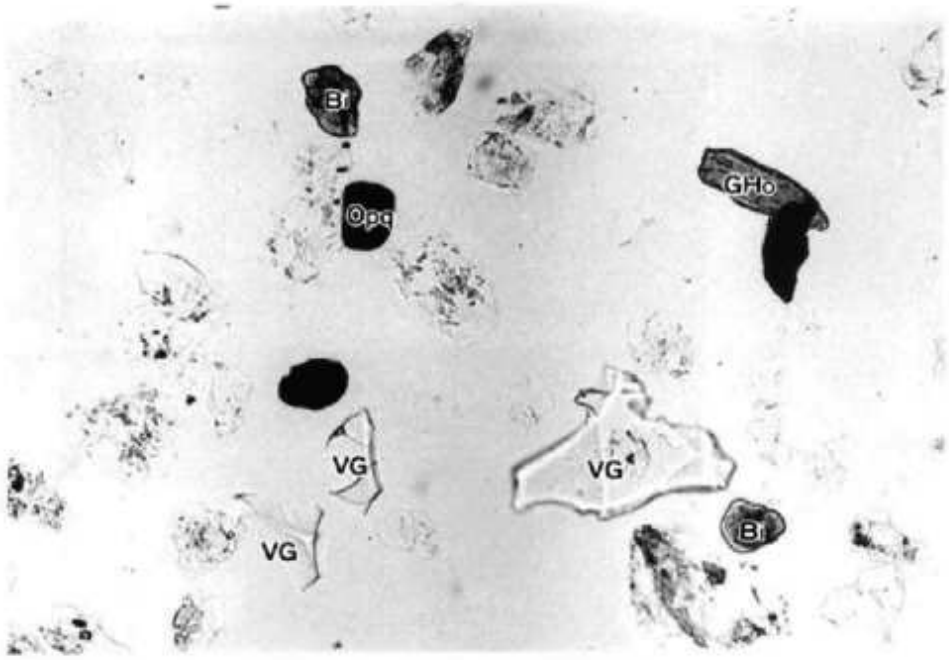
(1) 柱状試料
サンプリング前

(2) 柱状試料
サンプリング後

Fig. 198 火山灰分析
柱状資料写真



(1) 金場遺跡
No.1 試料
平行ニコル
写真倍率×93



(2) 金場遺跡
No.10試料
平行ニコル
写真倍率×93

Fig. 199 火山ガラス顕微鏡写真

Opx ：斜方輝石	Opq：不透明鉱物	Ol ：カンラン石
Cpx ：単斜輝石	Gar：ザクロ石	Id ：イディングサイト
GHo：緑色普通角閃石	Bi ：黒雲母	Zr ：ジルコン
BHo：褐色普通角閃石	Ap ：アパタイト	VG：火山ガラス
CVG：色付火山ガラス	Po ：プラント・オパール	

B　金場遺跡の炭化米特性と稲作起源

和佐野喜久生・真鍋智子
（佐賀大学農学部）

本遺跡及びその周辺の地形の概略については，本遺跡の報告書（註４）から抜粋して記述する。本遺跡の所在地は福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字金場で，朝倉町は筑後川の中流北岸になる（Fig.200)。遺跡は筑後川の沖積地から一段高くなった中位段丘の奥の丘陵地の際（標高51～71m）に位置し，その北背後の麻底良山（標高294m）から西南へ派生した丘陵に接して南方に開ける。

本遺跡地からは縄文時代の草創期から７世紀後葉にいたる集落跡や墓地が密集し，土器などの出土物が多く検出されている。弥生時代中期初頭には円形竪穴住居跡４軒と貯蔵穴６基が検出され，貯蔵穴からは炭化米が豆類・粟・堅果類（ドングリ）と一緒に多量出土した。

材料及び方法

本報告の炭化米資料は福岡県教育委員会によって発掘されたもので，近接した２つの土壙35及び37の中から掘り出した埋没土を水洗・採集された。粒の計測は，異なる２つの資料それぞれから約100粒を任意に抽出し，スケール付きの板上（約２mm深の４×８mm間隔の条溝の交点に10粒を並べる）で粒の平面（長・幅）及び側面（厚さ）を接写撮影し，約4.5倍大にプリントしたものから行った。米粒の形態的特性は，粒長・粒幅及び粒厚の測定値及び計算によって

Tab.4　稲粒（米，籾）特性の指数，指数別階級値及び特性の表現法（和佐野，1995）

米粒特性	特性指数（階級値）					
	1	3	5*	7	9	10
粒長(mm)	(3.5) 極短粒	(4.1) 短粒	(4.7) 中長粒	(5.3) 長粒	(5.9) 極長粒	(6.5) 極大長粒
粒幅(mm)	(1.3) 極狭粒	(1.9) 狭粒	(2.5) 中幅粒	(3.1) 広粒	(3.7) 極広粒	—
粒厚(mm)	(0.7) 極薄粒	(1.3) 薄粒	(1.9) 中厚粒	(2.5) 厚粒	(3.1) 極厚粒	—
長／幅比	—	(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	—
籾粒特性	1	3	5	7	9	10
粒長(mm)	(5.3) 極短粒	(5.9) 短粒	(6.5) 中長粒	(7.1) 長粒	(7.7) 極長粒	(8.3) 極大長粒
粒幅(mm)	(1.9) 極狭粒	(2.5) 狭粒	(3.1) 中幅粒	(3.7) 広粒	(4.3) 極広粒	—
粒厚(mm)	(1.3) 極薄粒	(1.9) 薄粒	(2.5) 中厚粒	(3.1) 厚粒	(3.7) 極厚粒	—
長／幅比	—	(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	—

*：4.4mm≦中長粒(4.7mm)＜5.0mm，2.2mm≦中幅粒(2.5mm)＜2.8mm
1.6mm≦中厚粒(1.9mm)＜2.2mm，　1.4≦中形粒(1.7)＜2.0

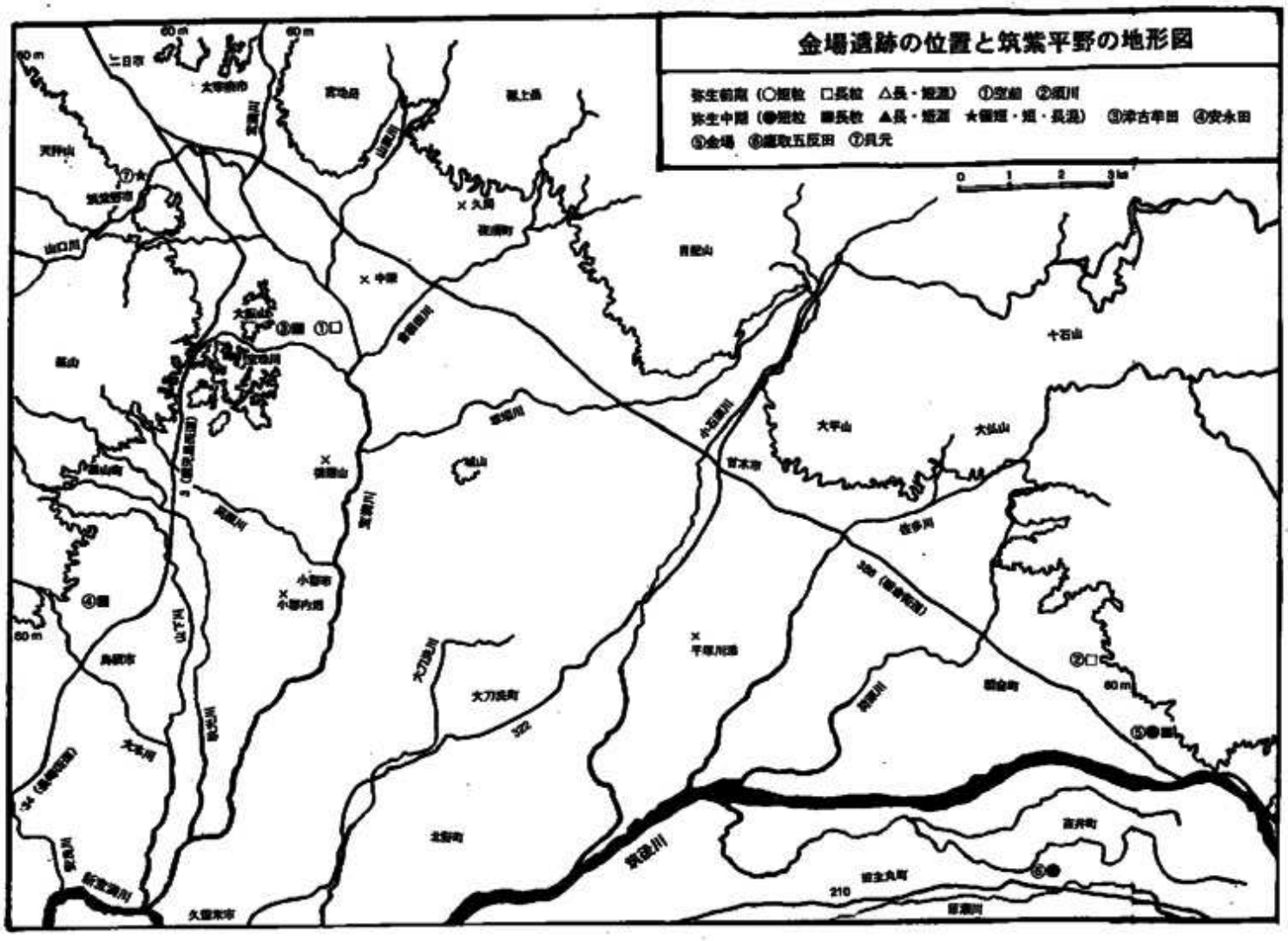


Fig. 200　金場遺跡の位置と筑紫平野の地形図

Tab.5　稲粒（米，籾）の粒長・粒幅指数による粒型分類（和佐野，1995）

		粒長指数						粒幅表現
		1	3	5	7	9	10	
粒幅指数	1	1・1型	1・3型	—	—	—	—	極狭粒
	3	3・1型J*	3・3型	3・5型	3・7型	3・9型	3・10型	狭粒
	5	5・1型J	5・3型J	5・5型J	5・7型	5・9型	5・10型	中幅粒
	7	7・1型J	7・3型J	7・5型J	7・7型J	7・9型	7・10型	広粒
	9	—**	—	—	—	—	—	極広粒
粒長表現		極短粒	短粒	中長粒	長粒	極長粒	極大長粒	

*J：従来の分類法による長/幅比・2.0以下のジャポニカ・タイプにほぼ相当する。
**—：本報告（和佐野，1995）の資料中にはみられなかった。

求めた長／幅比の4項目とした。

炭化米粒の形態的特性の表現法及び粒型の分類法はTab.4及び5に示した既報（註3）の方法によって行った。なお，日本の古代稲の長粒及び短粒系の分類は，粒長4.4mmを境界として，それ以上（粒長指数5以上）のものを長粒系，それ以下の物を短粒系とした。本報では粒長が3.8mm以下の極短粒を多く含む炭化米資料が出現したことから，さらに極短粒系を付加することにした。稲粒の接写写真（Fig.204）は，調査資料の全体像を反映するように，正形に近いものから大小，長短などの粒特性を考慮しながら上段右肩から順次に配列した。

なお，比較の対照として新しく加えた韓国の欣岩里遺跡の炭化米粒のデータは，韓国の国立中央博物館所蔵のプラスチックケースに密封されたものを，ケースの外側から写真撮影して計測したので，他の資料に比べるとややその精度は劣るものであろう。

結果及び考察

本遺跡の炭化米資料の粒4形質それぞれの平均値及び標準偏差は，北部九州7遺跡（縄文晩期～弥生中期の8資料）及び韓国の欣岩里（紀元前7世紀）及び松菊里（紀元前5世紀）遺跡の10資料と比較しながらTab.6に示した。なお，異なる遺跡あるいは遺構の炭化米資料の表現は，それぞれの遺跡名あるいは遺構名を用いることにする。

Fig.201は，長・幅平均値による粒大・形分布を既報（註1・3）の北部九州及び韓国の炭化米資料（図中の白抜きマル印）と比較した。Tab.6及びFig.201から分かるように，本遺跡の土壙35は短粒系よりさらに小粒の極短粒系に属し，韓国の欣岩里遺跡と松菊里・菜畑（弥生）遺跡の中間に位置する。また，土壙37は里田原・空前・川ノ上遺跡に近似した長粒系に属することが分かる。このように，粒特性が顕著に異なる2つの炭化米資料が，同じ遺跡の同年代の近接した異なる土壙にみられたことは，本遺跡では弥生時代中期の初めに，明らかに異なる2つの稲品種が区別されて栽培されていたことを示すものである。

Tab. 6　金場及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差

遺跡名	金場35	金場37	欣岩里	松菊里	菜畑	菜畑
時代	弥生中期初頭	弥生中期初頭	B. C. 7	B. C. 5	縄文晩期	弥生前期
所在地	朝倉郡	朝倉郡	韓国京畿道	忠清南道	唐津市	唐津市
長（mm）	3.73	4.45	3.27	4.02	4.11	3.93
S. D.	0.36	0.30	0.32	0.37	0.35	0.28
幅（mm）	2.32	2.69	2.05	2.34	2.45	2.38
S. D.	0.23	0.17	0.30	0.27	0.23	0.20
厚（mm）	1.56	1.74	–	1.59	1.93	1.95
S. D.	0.21	0.17	–	0.23	0.22	0.24
長／幅比	1.61	1.66	1.62	1.73	1.69	1.66
S. D.	0.14	0.11	0.18	0.12	0.17	0.12
調査粒数	104	101	13	122	155	38

S. D：標準偏差

遺跡名	板付	里田原	空前	津古牟田	安永田	川ノ上
時代	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生中期
所在地	福岡市	田平町	小郡市	小郡市	烏栖市	豊津町
長（mm）	4.19	4.57	4.59	4.70	4.50	4.58
S. D.	0.24	0.24	0.22	0.28	0.34	0.27
幅（mm）	2.64	2.71	2.77	2.67	2.51	2.68
S. D.	0.18	0.13	0.17	0.22	0.18	0.17
厚（mm）	1.80	1.75	1.95	1.92	1.86	2.01
S. D.	0.13	0.20	0.20	0.17	0.16	0.15
長／幅比	1.59	1.69	1.66	1.77	1.80	1.71
S. D.	0.11	0.10	0.11	0.16	0.15	0.14
調査粒数	120	11	100	100	110	100

S. D.：標準偏差

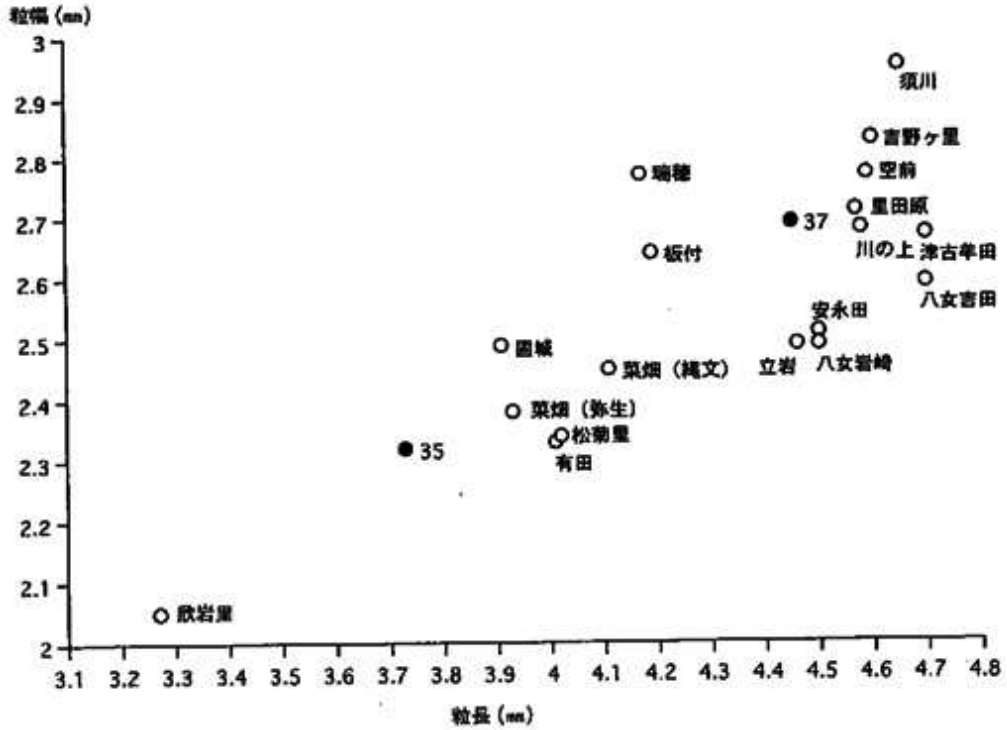


Fig. 201　金場及び比較遺跡（北部九州・韓国）の炭化米粒長・幅平均値の分布図

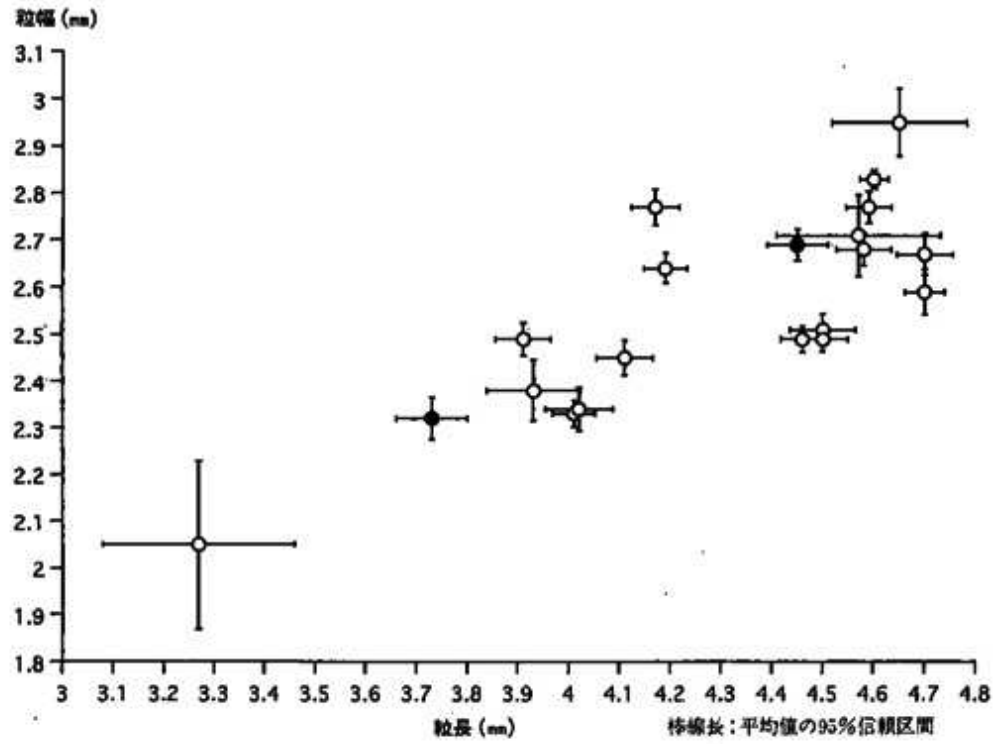


Fig. 202　金場及び比較遺跡の炭化米粒長・幅の平均値（付・95%信頼区間）の分布図

Fig.202は，長・幅平均値の母集団平均値の95%信頼区間をそれぞれに付したものである。土壙35は短粒系のグループから，土壙37は里田原遺跡（計測粒数が少ない）を除く長粒系のそれから，両特性平均値はそれぞれ統計的に有意に異なる。このことは，この2つの系統（品種）の来歴・起源を考えるに際しては，従来とはやや異なる内容のことを考える必要があることを意味している。

Fig.203は，本遺跡の2つの炭化米資料それぞれの遺伝的純粋性を粒長変異のヒストグラムによって比較した。極短粒系に属する土壙35は，粒長変異が3.0mm～4.8mmの広い範囲に分布し，3.8mmにモードをもつ極短粒方向に偏った分布をしている。全体的にはほぼ正規分布を示しているが，分布範囲の広さ，分布の形の偏りから判断すると，土壙35はかなり遺伝的変異を含んだ（混種）1品種の炭化米資料とみなすことができよう。長粒系に属する土壙37の粒長は，土壙35と同様に広い範囲（3.6～5.3mm）に分布し，分布は4.3mmにモードをもった正規分布に近い分布を示すが，分布の中にいくつかのピークをもつことから，土壙37は数品種が混合して新しくできた地方品種の1つであると見ることができよう。

以上のように，本遺跡の2つの炭化米資料は，それぞれに異なる遺伝的変異を維持しながら，

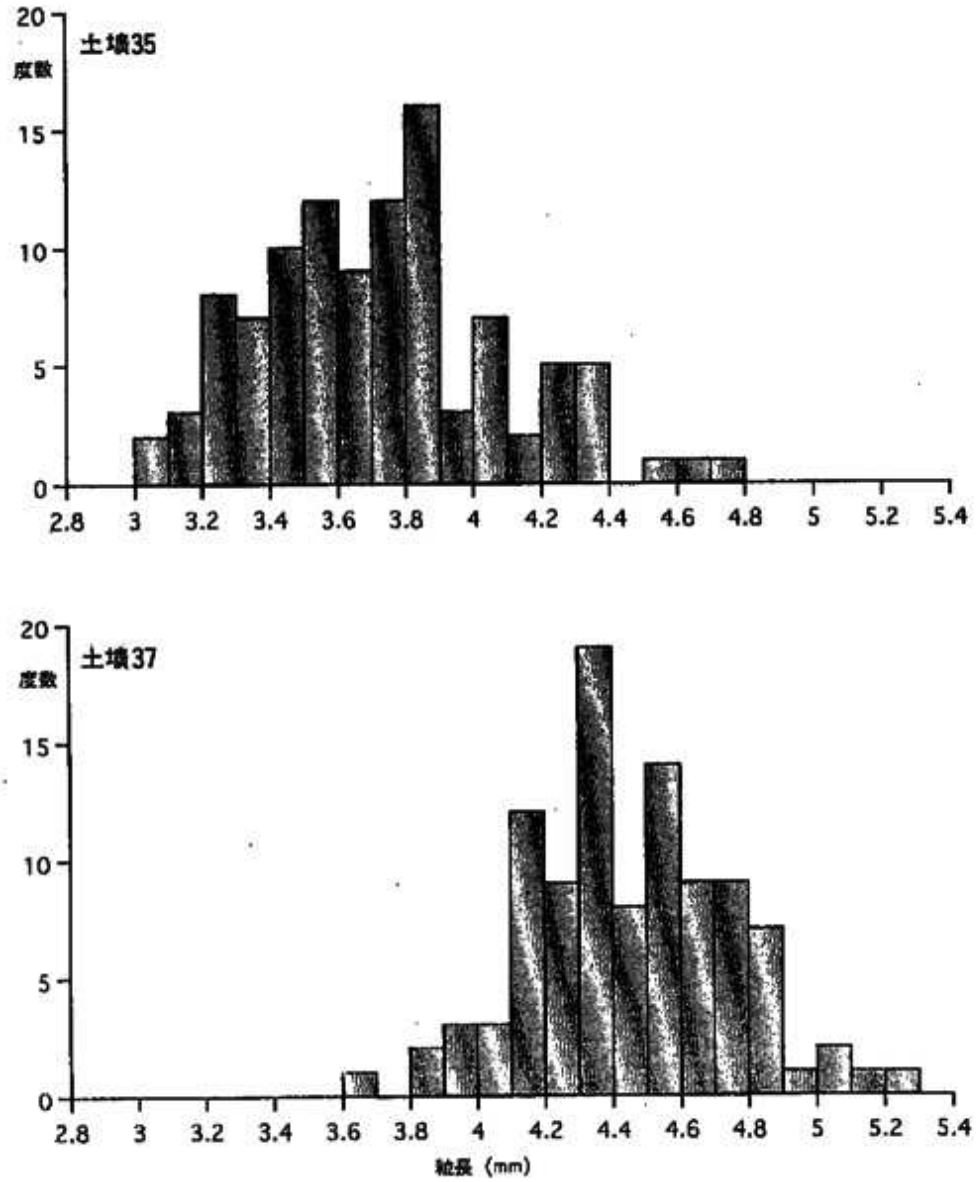


Fig. 203　金場遺跡の炭化米粒長の頻度分布図

長粒系と極短粒系の２つの地方品種がつくられ栽培されていたと考えられる。

Tab.7には，２資料それぞれの粒厚の頻度分布を対照資料と比較しながら示した。土壙35の粒厚平均値（1.56㎜）は，北部九州の全平均（1.88㎜）に比べるとかなり薄粒になり，変異幅も広いことから，この極短粒品種はかなり条件の悪いところで栽培された可能性が強い。また，

土壙37の粒厚平均値（1.74mm）も全平均値にくらべるとやや薄粒になるが，変異幅も小さいことから，この長粒系の品種はやや条件の良い所でつくられたのかも知れない。以上のことから，この遺跡周辺での稲作は余り適した環境状況下ではなかったようであるが，それぞれの環境に適した品種を使い分けていたとも考えられる。ともかく，２つの品種が混合されずに栽培され続けたことは，当地での稲及び稲作に関する知識と栽培技術はかなりのレベルに達していたと

Tab. 7　金場及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差

	粒厚（mm）									平均値	標準偏差
遺跡名	1.0	1.2	1.4	1.6	1.8	2.0	2.2	2.4	2.6	(mm)	
金場35	1	27	34	30	10	1	1			1.56	0.21
金場37		1	12	54	27	5	2			1.74	0.17
欣岩里	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
松菊里	7	3	29	64	15					1.59	0.23
菜畑縄文		1	7	32	57	40	15	3		1.93	0.22
菜畑弥生		1	6	10	11	9	1			1.95	0.24
板付		1	4	50	57	8				1.81	0.13
里田原			3	1	4	1				1.75	0.20
空前			9	29	34	23	4	1		1.95	0.20
津古牟田			10	34	41	15				1.92	0.17
安永田			9	27	56	16	2			1.86	0.16
川ノ上		1	2	14	59	21	3			2.01	0.15
分類（指数）	薄粒（3）			中厚粒（5）			厚粒（7）				

Tab. 8　金場及び比較遺跡の炭化米粒長／幅比の頻度分布・平均値・標準偏差

	長／幅比									平均値	標準偏差
遺跡名	1.0	1.2	1.4	1.6	1.8	2.0	2.2	2.4	2.6		
金場35		6	41	49	7	1				1.61	0.14
金場37			33	56	12					1.66	0.11
欣岩里		2	5	4	2					1.62	0.18
松菊里			16	75	28	3				1.73	0.12
菜畑縄文		4	42	75	26	4	3			1.69	0.17
菜畑弥生			13	20	5					1.66	0.12
板付		3	62	52	3					1.59	0.11
里田原			1	8	2					1.69	0.10
空前			32	56	12					1.66	0.11
津古牟田			17	39	36	8				1.77	0.16
安永田			8	45	47	8	2			1.81	0.15
川ノ上		1	20	54	23	2				1.71	0.14
分類（指数）	円粒（3）			中形粒（5）			細粒（7）				

考えられよう。

Tab.8には，長／幅比の頻度分布を前表と同じように示した。両遺構間の平均値は，北部九州の全平均（1.69㎜）に比べてやや小さい値であるが，ほぼ平均的な値を示した。

Tab.9は，２つの炭化米資料それぞれ個々の粒型分布を対照遺跡と比較したものである。

土壙35は，菜畑遺跡（弥生前期）のものに最も類似した粒型分布を示す。粒幅は狭粒（31%）をかなり多く含む中幅粒（68%）で，粒長は極短粒（58%）を主として短粒（40%）を多く含む極短粒種である。粒型は，５・３型（37%）を主とするが，３・１型と５・１型を同じく29%含むジャポニカ・タイプ（97%）の中幅の極短粒種である。菜畑遺跡以外で極小粒の３・１型を比較的多く含むものは，欣岩里（62%）と松菊里（14%）遺跡のみである。

土壙37は，川ノ上遺跡の粒型分布に最も類似する。粒幅は広粒（26%）をかなり含む中幅粒（74%）で，粒長は短粒（44%）と中長粒（42%）が同じように含まれる短～中長粒種になる。粒型は５・３型（37%）と５・５型（35%）を同じように含み，７・５型（17%），７・３型（6%），７・７型（3%）などを含むやや変化に富んだジャポニカ・タイプ（98%）の中幅の短～中長粒種である。５・３型，５・５型，７・５型の粒型を多く含むものには，川ノ上遺跡の他には長粒系の里田原（調査粒数は少ない），安永田，空前及び津古牟田遺跡などがあるが，短粒系の板付遺跡にも５・３型を主として同様な粒型のものが含まれている。

以上のことから，本遺跡の古代稲作あるいは稲品種の起源については，土壙35は菜畑遺跡（弥生前期），及び韓国の欣岩里・松菊里両遺跡以外には遺伝子源を求めることはできない。土壙37については，本遺跡の地理的位置を考慮すると，弥生時代前期の空前遺跡（長粒系）及び板付遺跡（短粒系）の混種したものとすると，粒型分布の説明も容易になる。

要約

1　福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字金場所在の金場遺跡（弥生中期初頭）出土の炭化米の粒特性を，既報の北部九州及び韓国の遺跡のものと比較し，本遺跡の古代稲の粒特性と稲作起源についての考察を行った。

2　本遺跡の近接した２つの土壙から出土した炭化米粒資料は，極短粒系（土壙35）と長粒系（土壙37）の２つの品種に区別された。全体的粒特性から，極短粒系の土壙35は，菜畑遺跡（弥生時代），及び欣岩里・松菊里両遺跡を総合したような混種の特徴を示し，長粒系の土壙37は地理的な位置をも考慮すると，空前及び板付遺跡の混種による新しい地方品種である可能性を考えた。

3　炭化米粒の粒厚変異から推測される当時の稲作状況は，長粒系がやや薄粒であるが変異幅も小さいことから，長粒系の品種は，やや条件の良い所でつくられ，極短粒系は薄粒で変異幅も広かったことから，極短粒系の品種はかなり条件の悪いところに限って栽培された

Tab. 9　金場及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表

		金場35　104粒　粒長指数					計	金場37　101粒　粒長指数					計
		1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)
粒幅指数	1		1										
	3	29	2				31		1				1
	5	29	37	2			68	1	37	35	1		74
	7		1	1			2		6	17	3		26
	9												
計(%)		58	40	3			101	1	44	42	4		101
		欣岩里　13粒						里田原　9粒					
粒幅指数	1												
	3	62					62						
	5	31	7				38		36	36			72
	7									27			27
	9												
計(%)		93	7				100		36	63			99
		松菊里　122粒						空前　100粒					
粒幅指数	1	3					3						
	3	14	6				20						
	5	6	60	13			79		12	44	1		57
	7								4	38	1		43
	9												
計(%)		23	66	13			102		16	82	2		100
		菜畑縄文　155粒						津古牟田　100粒					
粒幅指数	1												
	3	8	5	2			15		1				1
	5	14	47	19			80		9	50	13		72
	7		5	1			6		2	23	2		27
	9												
計(%)		22	57	22			101		12	73	15		100
		菜畑弥生　38粒						安永田　110粒					
粒幅指数	1												
	3	13	3				16		2	3			5
	5	18	53	11			82	3	30	53	6		92
	7		3				3		1	3			4
	9												
計(%)		31	59	11			101	3	33	59	6		101
		板付　120粒						川ノ上　100粒					
粒幅指数	1												
	3												
	5	5	58	15			78		21	54	3		78
	7		13	8			21		2	21			23
	9												
計(%)		5	71	23			99		23	75	3		101

可能性が高いと考えた。

4　本遺跡に稲作が伝えられたルートとしては，Fig.200に示される朝倉街道（旧官道のもとになった弥生の道）を北から山裾沿いに南東方向に南下していったと考えた。

5　本遺跡の周辺域の稲作遺跡との関連については，須川遺跡（長粒），鷹取五反田遺跡（短粒），平塚川添・山の上遺跡（長粒）などがあり，これらの遺跡と当時どのような人的・物的交流があったのか，今後の重要な課題の1つになるであろうと考えた。

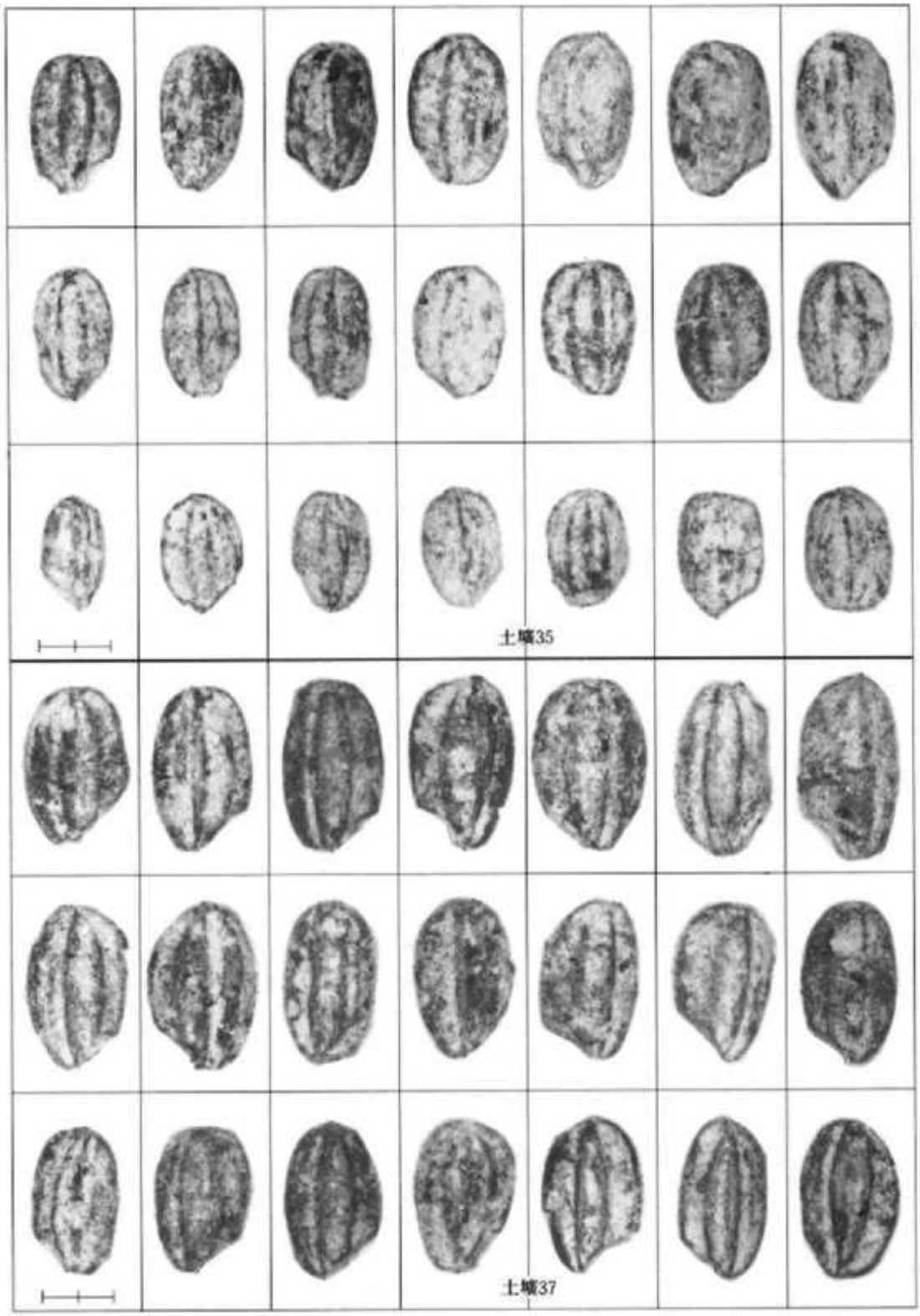
註

1　和佐野喜久生　1993「九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究」『育種学雑誌』43：586-602.

2　和佐野喜久生　1995「稲作の江南起源説」『講座 文明と環境 第3巻　農耕と文明』朝倉書店　東京　143-167

3　和佐野喜久生　1995「東アジアの古代稲と稲作起源」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化 文部省科学研究費による国際学術研究　報告・論文集』和佐野喜久生・研究代表・編集：1-52, 331pp

4　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-54-』1999　福岡県教育委員会（本書）



縮尺1目盛：1ミリ

Fig. 204　金場遺跡の炭化米

C　金場遺跡における種実同定

株式会社 古環境研究所

1　試　料

試料は，金場遺跡の弥生時代中期初葉の土壙20（No.1・2・3），土壙21（No.4），土壙29（No.5），土壙35（No.6・7），土壙37（No.8・9・10），P.578（No.11）から出土した11点であり，それぞれ約100個程度の数量に選別された炭化種実であった。

2　方　法

同定は肉眼および実体顕微鏡で観察し，形態的特徴および現生標本との対比で行った。同定レベルによって種，属，科などの階級で示した。

3　結　果

観察の結果，いずれも炭化した種実で，イチイガシ，コナラ属アカガシ亜属，コナラ属，イネ，アワ？，マメ類，ササゲ属が同定された。学名，和名，部位，粒数を表にまとめる。以下に主な分類群の特徴を記す。

1）イチガシ　*Quercus gilva Blume*　堅果・殻斗　ブナ科

堅果は，黒褐色の楕円形を呈し，たいがいのものは部分的に果皮が欠落し，子葉が露出する。子葉には一条の凹線がある。殻斗は基部から先端に向かって直線的な椀状を呈する。

2）コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　堅果　ブナ科

黒褐色の楕円形を呈し，表面が滑らかである。やや小型であり，コナラ属アカガシ亜属とみなされる。

3）コナラ属　*Quercus*　堅果　ブナ科

堅果実のなかの子葉のみのものであり，黒褐色で楕円形を呈する。特徴的な形態は示さずコナラ属の同定にとどまる。

4） イネ *Oryza sativa L.* 果実 イネ科

長楕円形を呈し，胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

5）アワ？ *Setaria italica Beauv.?* 果実 イネ科

穎が一部つくものや穎の欠落したものがあり，楕円形で胚の部分がくぼむ。ヒエ属（ヒエ，イヌビエなど），エノコログサ属（アワ，エノコログサなど），キビ属は形態が類似しているが，穎の細胞形などに差違が多少ある。本試料は穎が欠落し，炭化のため発泡が著しいことから詳細な部分までは観察ができなかった。最もアワに形態が類似するが，断定はできない。

6）ササゲ属 *Vigna* 種子 マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ，アズキ，ササゲなどの栽培植物が含まれるが，現状の研究では識別は困難である。各試料から20個を任意に取り出し，大きさを計測し別表に示した。

7）マメ科 Leguminosae 種子 マメ科

黒色で楕円形を呈し，マメ類の形態はもつが磨滅が著しく細分できない。

4 考 察

土壙20（No.3），土壙29（No.5），土壙35（No.6），土壙37（No.8），P.578（No.11）より出土した試料は，イチイガシの炭化堅果である。イチイガシの堅果は渋抜きしなくても食せる優良な食物である。土壙21（No.4）はイネの果実（炭化米）である。土壙37（No.10）は，アワに近似し栽培種である可能性がある。土壙20（No.1・2），土壙37（No.9）はササゲ属であり，アズキないしリョクトウとみなされる畑作物である。

以上から，金場遺跡の弥生時代中期初葉から出土した炭化種実類は，イチイガシ，イネ，アワ近似のもの，ササゲ属で，どれも優良な食物となるものばかりであり，イチイガシを除けば栽培作物である。イチイガシは照葉樹林帯の弥生時代の中期まで遺跡の貯蔵穴中にまとまって出土している。イネは弥生時代では比較的普遍的に出土している。アワ近似のものおよびササゲ属ないし類似するマメ類は，少量の出土はあるが，多量の出土はめずらしい。本遺跡において，イネやササゲ属は主要な栽培食物であり，イチイガシも食物として利用されていたと考えられる。また，土壙からの出土であり，これらの土壙が貯蔵穴のような機能をもつ可能性も示唆される。イチイガシは自然度の高い樹木であり，周囲に比較的自然度の高い照葉樹林が分布していたと推定される。

参考文献

松本豪 (1979)「緑豆」『鳥浜貝塚』 福井県教育委員会 p.162-163

吉崎昌一 (1992)「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル』 No.355 ニューサイエンス社 p.2-14

黒松康悦・粉川昭平 (1986)「亀井遺跡山土の大型植物遺体」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査概要報告書』 大阪府文化財センター p.339-350

Tab.10 金場遺跡出土アワ？果実，ササゲ属種子の計測値
(任意に抽出した20個を計測)

アワ？果実

(mm)	径	
No.10	1.89	2.12
	2.52	2.33
	1.81	2.19
	2.52	2.51
	1.84	1.87
	1.85	1.91
	1.95	2.19
	1.98	2.42
	1.85	2.13
	2.52	2.41

ササゲ属種子

(mm)	長さ	幅	(mm)	長さ	幅	(mm)	長さ	幅
No.1	5.97	4.35	No.2	7.28	5.20	No.9	7.63	5.00
	6.20	3.90		7.21	4.99		7.37	4.69
	6.75	4.18		7.59	4.33		7.31	4.53
	7.01	4.39		7.19	4.51		7.64	4.50
	6.40	4.22		7.42	4.61		6.85	3.87
	6.99	4.02		7.61	4.55		6.76	4.51
	6.22	4.49		8.91	4.85		6.64	3.84
	6.44	4.32		7.88	4.95		7.29	3.86
	7.01	4.12		8.10	4.39		7.05	3.78
	6.33	4.18		6.67	4.75		7.00	3.92
	6.77	4.24		7.61	4.44		6.39	4.68
	6.69	4.68		6.93	4.61		6.69	4.22
	6.61	4.37		7.25	4.74		6.54	4.08
	6.23	4.34		7.12	4.89		6.40	4.18
	6.29	4.13		7.24	4.95		6.33	4.25
	6.93	3.93		7.28	4.72		6.36	4.20
	6.74	4.78		7.15	4.25		6.44	4.15
	5.86	4.47		8.33	4.92		6.20	4.32
	7.13	3.87		6.97	4.77		6.05	4.09
	6.30	4.11		6.92	4.53		6.62	4.42

Tab.11　金場遺跡出土種実（弥生時代中期初葉）同定結果

分類群			No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11
学名	和名	部位	土壙20	土壙20	土壙20	土壙21	土壙29	土壙35	土壙35	土壙37	土壙37	土壙37	P.578
Arbor	樹木												
Quercus gilva Blume	イチイガシ	堅果			92		99	100	2	94	5		78
		殻斗					1						
Quercus subgen Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	子葉							16				
Quercus	コナラ属	堅果		2	12								
Herb	草本												
Oryza sativa L.	イネ	果実				90							
Setaria italica Beauv.?	アワ？	果実										442	
Vigna	ササゲ属	種子	101	99		3			5		94		
Leguminosae	マメ類	種子							1				
Total	合計（点数）		101	101	104	93	100	100	24	94	99	442	78
各資料総出土量（cc）			9,365	3,035	3,745	8	2,740	7,780	5	3,900	1,410	80	50

Fig. 205 金場遺跡の種実

D 集落の変遷

金場遺跡の今回の発掘調査では，当初の予想をはるかに上回って，旧石器時代から平安時代までの各時期の遺構・遺物が多量に出土した。それらの中で本遺跡を代表する時期としては，後期旧石器後半～末，縄文前期，縄文晩期，弥生時代中期初葉，5C前葉前後，7C後葉前後等があり，いずれを省いても本遺跡の性格を語れない程，各時期ともにまとまった調査成果を有している。

ここでは，とりあえず遺跡の全体の様相を把握する目的で，時間の流れを追いながら，集落の変遷という視点で検討を進めてみたい。

旧石器時代（Fig.206）

本遺跡のⅠ区中央部に，Ⅰ区グリッドと称して旧石器を掘る目的で発掘区を設けた。各グリッドをいくらか掘り下げた後，出土状況の良好なグリッドを選択して更に掘下げた。その結果，小型のナイフ形石器，台形石器，台形様石器，細石刃，彫器，尖頭器等の製品を中心とする剝片石器群を得ることができた。全体の器種毎のまとまりとしては，大きく2つに分けられる。小型のナイフ形石器と台形様石器の一群と，細石刃を中心とする一群とである。しかし，遺跡からの出土状況は，これらを層位的に明確に峻別する事はできなかった。

旧石器そのものの検討については，改めて後項で詳述するので，ここでは平面的拡がりを中心に概観してみよう。まず，大まかな遺跡内での旧石器の分布範囲は2ケ所に分かれる。1ケ所はⅠ区の旧石器グリッド部分，もう1ケ所はそれから40mほど離れたⅡ区の北半部である。後者は，Ⅱ区北半でも縄文晩期を中心とする土器が最も集中的に包含層から出土した範囲の中に収っており，きちんとした旧石器だけの包含層を形成していた訳ではなく，縄文土器等に混入して取り上げられたものの範囲であり，出土点数も少なく，散漫な分布状態である。（Fig.207の中で，Ⅱ区に破線で示した範囲）よって，Ⅱ区北半における分布範囲は，石器製作の形跡は明瞭でなく，むしろ生活痕跡的な部位と評価できる。具体的には，Fig.65とFig.66の一部に示した，ナイフ形石器・台形石器・台形様石器・尖頭器や，Fig.67～73に示した掻・削器のうちの一部，Fig.74・75の石核などである。これらはやはり時期差はあると思われるので，この空間が一定のキャンプ地としての好適地として，時間を超えて選択されていたものと考えられる。この範囲を含めたⅡ区北半は後世の縄文早・前期においても同様のキャンプ地的状況を残しており，伝統的に好位置であった事が判かる。これは，すぐ北側に丘陵先端が迫り，北風が完全に遮られ，更に，東側は谷であり，水の便や谷筋を登り下りする通路に接しているという点でも，好環境であった事によるのだろう。

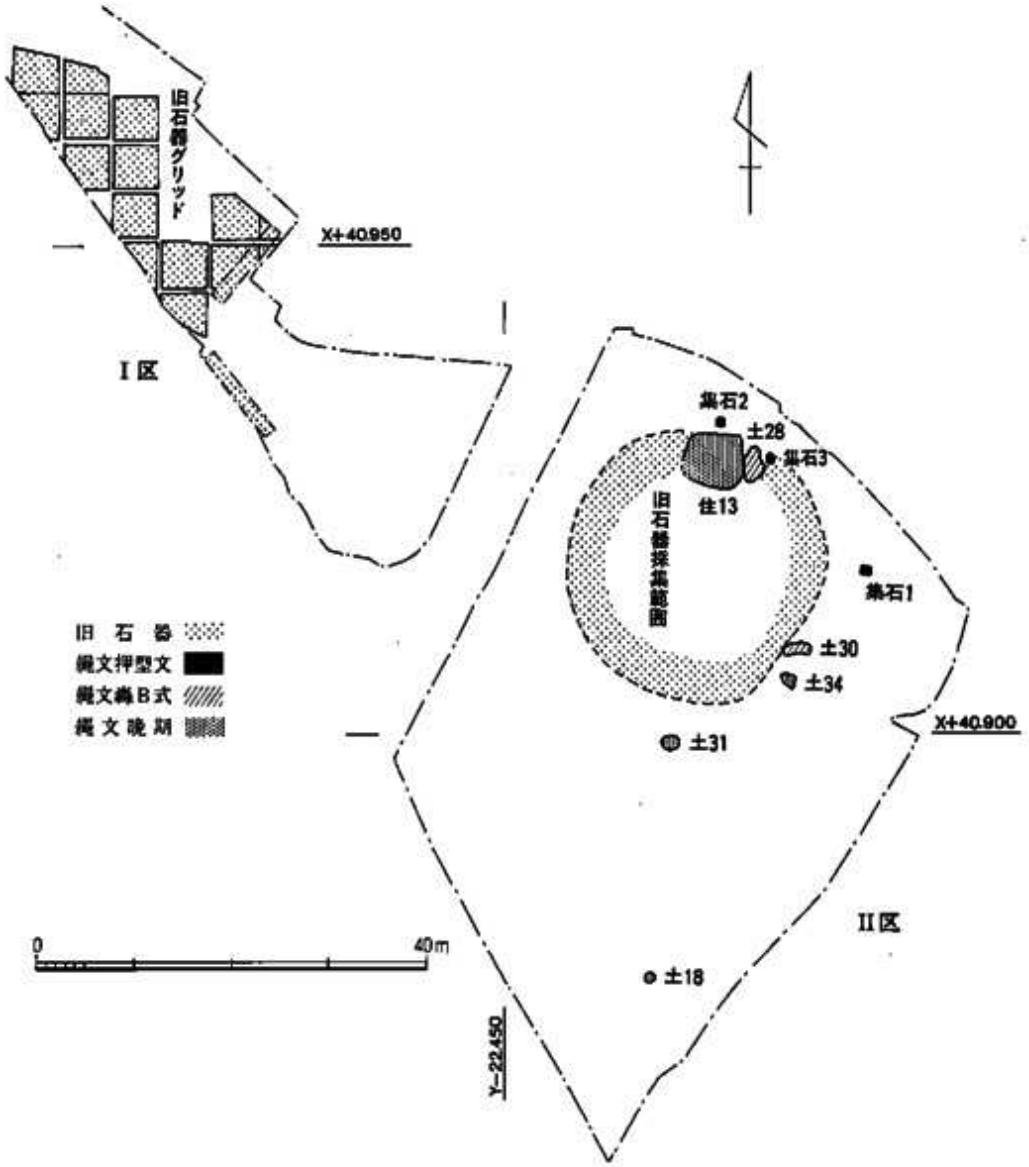


Fig. 206　金場遺跡集落変遷図（その１）(1/800)

次にＩ区グリッドの状況を見てみると，明らかに石器製作がなされた場である事は判かる。ただ，この地点はまだ斜面の下位にあたり，完全な平坦地ではない。旧石器の各包含層も全体に南西方向へ傾斜を持ち，必ずしも良好な地形とは言えない。また，Ⅱ区北半に比べると，北東側の急斜面側以外の180度は，わりと見晴らしが効く場所ではある。その反面，冬の風を防ぐのは困難であったろう。今のところ，サヌカイトの母岩が露出している場所も近隣には知られておらず，原材入手の適地でもなかろう。以上の如く，Ｉ区グリッドの場所が，どうして石

器製作地として選地されたのか，思い当たる節は全く無い。ここの上層からは，少量とは言え，押型文土器，突瘤文（未貫通孔列文）土器，塞ノ神式土器等の縄文早期の土器・石器も出土しており，伝統的にこの場所が選地されていたことが判かる。このような状況から見て，何らかの未知なる重大な理由があって，この場所が旧石器時代人の石器製作地として選ばれたのであろう。

縄文時代早・前期（Fig.206）

早期　この期の遺構としては，Ⅱ区北端に並ぶ3基の集石炉がある。3基はいずれも発掘区北東端，即ち，背後の丘陵が落ちた直下の裾部に位置する。早期の土器自体が，Ⅱ区ではこの第1号集石炉から出土した押型文土器小片1点のみであることからすると，とてもこの場所での長期間滞在や，定期的キャンプ地として伝統的に用いられた場所とは考えられない。一時的な，狩猟の行き帰りの際の休息場的に用いられた程度であろう。さらに，Ⅰ区グリッド上層からは上記した如く，早期土器類少量が出土しているが，これは多分に旧石器同様，石器製作目的の比重が大きいと考えられる。ただ，磨石や凹石，打製石鍬の使用欠損品等の出土を見ると，生活痕跡と考えることも可能であろう。丘陵麓の小規模なキャンプ地でもあった事が推定できよう。この時期に石器製作地として選ばれたのは，石器の中に，旧石器時代のものと思われる剝片に，後世の縁辺調整や，再加工品が散見している事から，前代の剝片や石材をそこで拾うことができたからという理由によることも大きいだろう。

前期　この時期の遺構としては，Ⅱ区中央やや北寄りの第30号土壙と，北端近くの第28号土壙の2基の不整形土壙のみである。ただ，これらは2基とも，形状から判断して風倒木痕であると考えられる。よって，この時期の確実な遺構は残存していない。出土土器は，条痕文土器，轟B式土器，曽畑式系土器があり，最低3期に大別される。出土量は圧倒的に轟B式土器が多く，他二者は極く少量である。これらの分布範囲は，Ⅱ区北半のFig.206に示した旧石器採集範囲よりも広く，東端の第29号土壙中にまで混入している事から，Ⅱ区北半でも東端の谷に面するへりの部分まで分布している事が判かる。Ⅰ区からは採集されていない。よってこの時期の生活痕跡は，細身でシャープな連接する隆線を付ける轟B式期前半代にピークを持って，その前後に激減する状況を示し，Ⅱ区北半全体に残されていることになる。この土器の多さから見ると，住居等のしっかりした施設を伴う生活が行われたとみられる。或いは，季節的に毎年定まったキャンプ地として，山に向かうベースキャンプ的に使用された場所なのかもしれない。その後，晩期に到るまで人跡が絶える。

縄文時代晩期（Fig.206）

前葉～中葉古段階　この時期の遺構は発見されておらず，土器だけが出土している。晩期全体

の中では少ない方であり，大きな集落は想定できない。分布範囲としては，Ⅰ区で僅かとⅡ区北半に限られている。住んだとしても小規模で，或はまだキャンプ的な性格のものだったのかもしれない。尚，当甘木朝倉地域では，この時期の大遺跡は発見されておらず，遺跡数も絶対的に少ない。土器が出たとしても，それは晩期中葉新～後葉段階を主体とするのに対する副次的な少量の遺物出土状況である。こういう現状では，当地方においては，集落形成の未成熟段階及び人口の少ない状況を想定せざるを得ないだろう。いずれにしても，今回の調査での当該期の土器は，当地方における編年資料として貴重なデータを追加してくれることになった。

中葉新～後葉古段階　この時期は，その前から連続して生活が営まれているが，縄文時代では最大のピークを迎える。この期の遺構としてはⅡ区北端近くの第13号住居跡，中央付近の第31・34号土壙，南端近くの第18号土壙がある。これらのうち中央部に位置する2基は廃棄土壙的であるが，南端の1基は貯蔵壙と考えていいだろう。暗褐色包含層を中心とする，この期の出土遺物は，Ⅱ区北半～中央部からのものが圧倒的に多いが，Ⅱ区全体，Ⅰ区中央から南半にまで広く分布している。前代の分布範囲に比べて絶対的な拡大と認識できる。出土土器の量からみると，まだあと数軒の竪穴住居跡があってもよさそうである。廃棄土壙まで設けたことは，ある種の定住的性格が想定できる。さらに，貯蔵壙の存在は，乾燥した段丘上であれば，ドングリピット等と称されるアク抜き壙ではあり得ず，あくまでも長期滞在を前提とした，地下保存庫としての集落機能のひとつとして認識される。ただ，集落の規模という視点から，近隣の杷木町クリナラ遺跡と比べると，クリナラの方がより山間部であり，特殊目的を持った集落であるにも関らず，この金場遺跡の方はかなり小規模だと言わざるを得まい。いずれにしろ，この集落全体が解明されなければ実体は把めないだろう。Ⅰ区に拡がる遺物出土状況から，その南西側に集落が展開しているのではないかと推測する。

後葉新～末葉　この時期の遺構は無い。遺物も量的に前代より激減する。集落的な視点からは，急激な衰退がみられ，或は集落としての体を為さない状態と言えるかもしれない。単なる短期的キャンプ地とも考えられよう。なお，刻目凸帯土器は，弥生早期にかかりそうなものが1点しか出土していない。やはり晩期後葉から継続して同じ場所で集落を形成する事は，こういう山際の中～高位段丘上では無いようだ。当地方ではもっと低い段丘・微高地に弥生早期の遺跡が本格的に展開するのではないかと思われる。

弥生時代中期初葉（Fig.207）

集落　本遺跡で本格的に集落が形成・展開された一大画期で，住居の数では7C後葉前後の集落に劣るが，遺跡の中での拡がりとしては最大規模となる。Ⅰ区南半からⅡ区全域にわたってほぼ万遍無く各遺構が配置されている。住居は，Ⅰ区の2軒とⅡ区北端の第11号住居跡は，構造・規模が近似しており，同時存在の可能性がある。Ⅱ区南半の第12号住居跡は，規模も大き

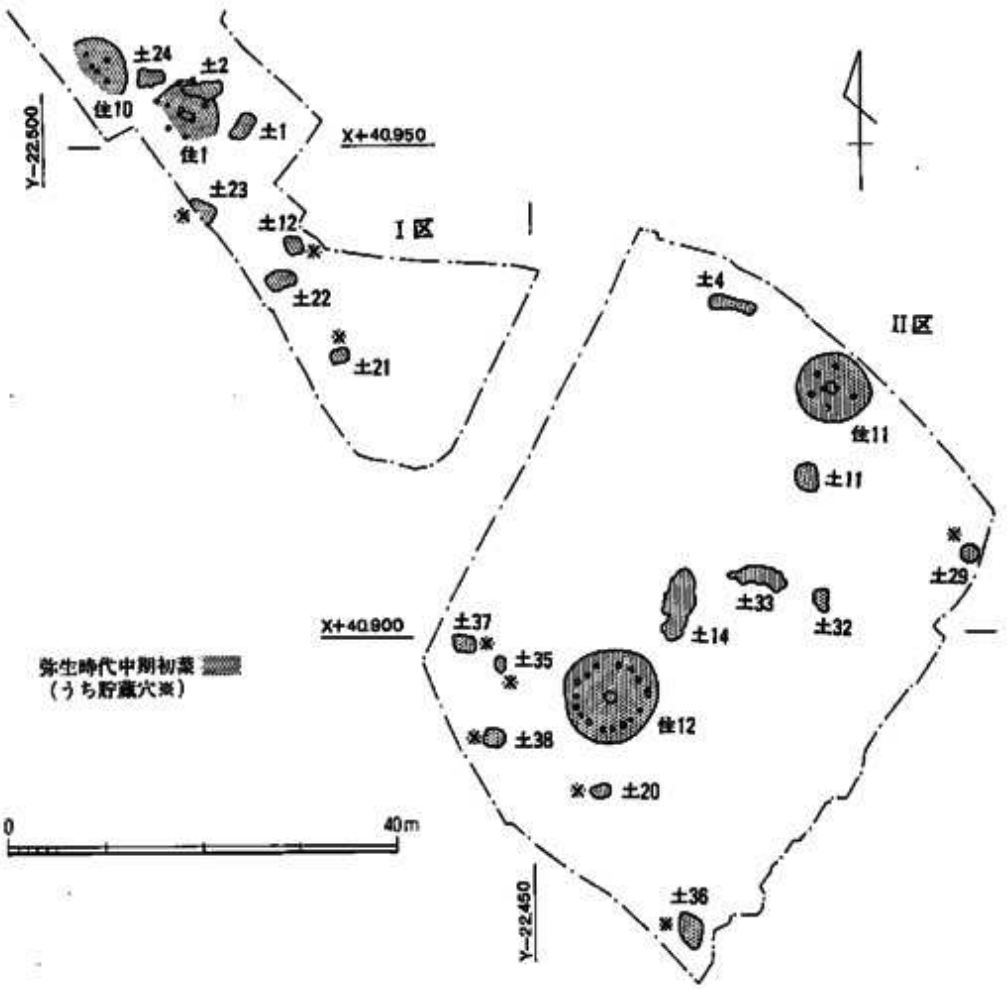


Fig. 207　金場遺跡集落変遷図（その２）(1/800)

く，構造的に異り，新しい段階のものと考えられる。そうすると，集落内でグループとして２グループ，時期的に最低２期に細分できることになる。Ⅰ区の第１・10号住居跡は，地形から見て，まだ西南側の発掘区外に展開するグループを形成すると思われ，住居近辺に廃棄土壙を持つ。このグループの貯蔵穴（土12・21・23）は南東側の10～25m 離れた位置に点々と設けられ，寸詰まりの長方形的なものが３基みられる。これに対し，Ⅱ区北端の第11号住居跡は，近くに大きめの廃棄土壙群を持ち，20m 東南側の崖のへりに円形袋状竪穴１基（土29）を設けているようである。このようにこれら２グループでは共通して，１軒の住居に対して１～数基の廃棄土壙と貯蔵穴を各々持ち，その配置にも共通する点があるようだ。ところが，これがⅡ区南半の大型第12号住居跡になると，近くに大きな廃棄土壙を持ち，西～南側のすぐ近くに４基の小型方形・楕円形の貯蔵穴（土20・35・37・38），更に南東側20mの位置に長方形貯蔵

穴（土36）がみられる。これらのうち第20・35・37号土壙の住居近くの貯蔵穴では堅果・米・豆等の貯蔵が確められている。これらの集中度はいかにも不自然であり，この大型住居の特殊性を示すかのようである。或はこれらのⅡ区南半の貯蔵穴群はすべてが第12号住居跡に伴うのではなく，西南側に展開する集落の貯蔵穴群地区であったのかもしれない。第12号住居跡から土器が殆ど出土していないので，詳細な各遺構間の時期的関係の検討ができない。

竪穴住居跡　Ⅰ区の第1号住居跡とⅡ区北端の第11号住居跡は，中央土壙両端に小柱穴の対ピットを持ち，松菊里型住居新期類である。本文中でも詳細に検討したとおり，Ⅰ区の第10号住居跡もその可能性がある。これらのうちⅠ区の2軒は対ピット・5主柱穴ともに深くしっかりしていて，更に壁ラインの柱穴群も認められ，古い様相を残している。一方Ⅱ区北半の第11号住居跡は，5主柱穴の配置等はⅠ区のものとそっくりだが，対ピットは浅く，壁ラインの柱穴群も明確でなく，既に発展型松菊里住居へと脱皮しようとしており，より新しい様相を示している。一方，Ⅱ区南半の第12号大型住居跡は，弥生時代前半期の通有の円形住居の構造となっており，10本主柱の建て替えかと思われる，住居規模にふさわしい主柱穴の多さとなっている。以上のように，住居の構造からみて，本遺跡の弥生中期初葉の住居群は大きく2期に分けられ，更に松菊里型のものは2小期に細分でき，都合3段階の変化が認められる。

貯蔵穴　北部九州域ではそれまで盛行していた円形袋状竪穴の画一性が，弥生中期段階になって急激に崩れ，中期前葉段階まででほぼ皆無となってしまうことが知られているが，本遺跡でもその経過を詳細に確認することができた。まず，円形袋状竪穴はⅡ区北東端に1基しか発見されておらず，他の8基は寸詰まりの小型長方形のもの6基，小型楕円乃至不整形のもの2基となる。長方形のものも弥生前期のものより平面規模が小さく，浅いもので，全く系統が異るだろう。なお，楕円・不整形の2基からはいずれも炭化堅果・炭化米等が多量に出土し，明らかに貯蔵穴としての機能を持っていることが判かっている。次に，貯蔵形態としての倉庫建物については，今回の調査では検出していない。もしこれが無いものとすると，この集落においては，まず弥生前期的な共同管理の密集した貯蔵穴群が無いことから，住居付属貯蔵穴（各戸管理）のみの段階であり，『各戸管理の倉庫＋貯蔵土壙』の突抜型貯蔵施設管理形態（中間「環濠集落の構造」『季刊考古学』31 雄山閣 1990）の一歩手前の段階と位置付けられよう。ただ，本遺跡の貯蔵穴がすべて各戸管理であるとすると，Ⅱ区南半の第12号大型円形住居跡の周辺の5基の貯蔵穴の存在は，すべてが同時使用とは言わないが，他の住居例と比べて数が多く，やはりこの時点での貯蔵占有量の住居毎の格差が示されているものと考えられる。

この時期で遺跡全面に拡大した集落は，突然その後消え失せてしまい，その後の弥生時代の遺構・遺物は皆無である。その確実な理由は明確にできないが，まず，この場所自体が段丘の最も奥の丘陵裾であることから，水田稲作に対する立地的不適地であり，水田可耕地と考えられる沖積地ややや広く開けた谷，低位段丘地帯までが遠い地点である事が指摘できる。本格的

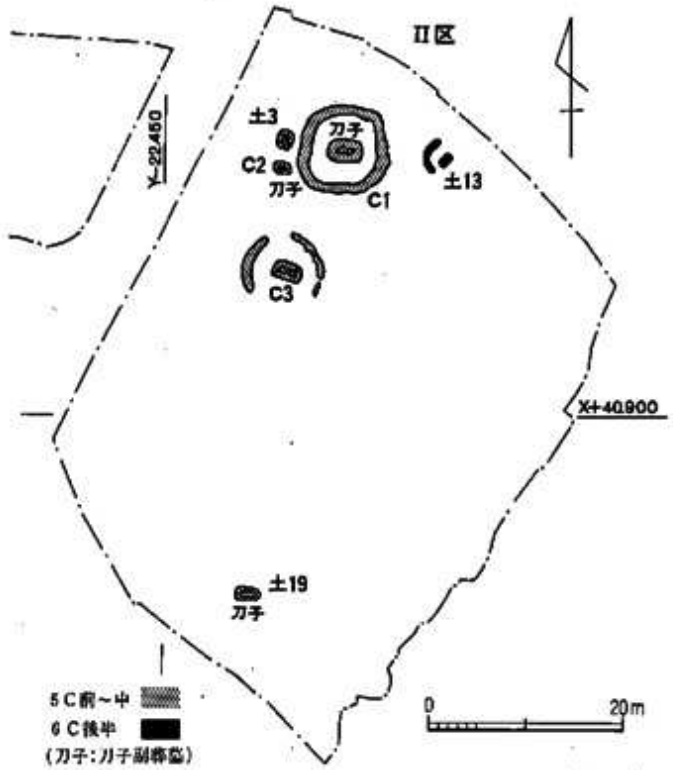


Fig. 208　金場遺跡集落変遷図（その３）(1/800)

な水稲農耕経営のためにその適地へ移動してしまったという事であろう。もう一つ考えられる事は，貯蔵穴に厚く残った炭化堅果・炭化米等の上に焼土がかぶっており，単に食糧が放棄されたのではなく，住居等と同時に焼き落されたのだという，人的或は外的要因による集落の滅亡・放棄も可能性がある。以後の弥生時代いっぱい人跡が途絶えたという事から考えると，大きな要因としては前者であろう。とすれば，この集落の生産手段は未だ水稲農耕経営を主としてはおらず，山や台地の幸をも求めた半狩猟・採集経済段階であったと考えざるを得ない。その為の集落占地を示しているのかもしれない。

５～６Ｃ代（Fig.208）

この時期は墓地のみである。600年の空白を経てやっと再び登場したが，それは山麓のうら寂しい地を選んでの墓地としてであった。

５Ｃ前葉前後　この時期の遺構は，Ⅱ区北端のＣ１（石棺系竪穴式石室），Ｃ２（箱式石棺墓），Ｃ３（石棺系竪穴式石室），第３号土壙（２連２段掘土壙墓）と，Ⅱ区南端近くの第19号土壙（２段掘土壙墓）の計５基（主体部は６基）である。分布図を見て明らかなように，北側のグ

ループと，南端の１基とに分かれる。南端の第19号土壙墓は，より南側に存在する墓群とグループを形成するのかもしれない。時期的には，C１から土師器片１点が出土するだけで，土器からの判定ができないが，刀子１点のみを副葬するスタイルの主体部が３基もあり，更にいずれも東西に長軸をとり，頭位を東にとるという共通性から，どれも５C初～前葉代の近接した時期のものと考えられる。主体部の型式の違いについては既に甘木市柿原Ｉ遺跡報告の中で詳細に解明されており，それに従っても極端な時期差を示すものではない。むしろ，周溝を持つC１・C３がいずれも石棺系竪穴式石室という共通のより手のこんだ構造をなすのに対し，その近辺に付随するように位置するC２と第３号土壙墓が小型的・簡略化的性格を持つ事に意義があると考えられる。集落の長クラスの一族墓と考えるが，C１が当初作られ，それに付随してC２に年少者，第３号土壙墓には従たる者が葬られ，次にC３が営まれたのだと考えられる。C３が後になるというのは，C１の主体部の構造と比べて後出的であるという点，C１の周溝が方墳的な感じを受け古相を示すのではないかという事等による。

６C後半　この時期の遺構は１基だけで，北端に位置する土壙墓（第13号土壙）である。小規模な周溝を持ち，その中に供献された土師器高杯から，時期は明確である。主体部の主軸方位も他の墓と異り，簡単な素掘りのままの土壙墓で，これも他と全く異る。ただ，C１の東隣に設けられたという事は，C１の墳丘が百年以上を経てまだ残っており，それを意識していた事が充分推測できる。なお，この時期には既に，この背後の丘陵尾根上に横穴式石室円墳群が盛んに築造されていると思われ，この土壙墓はあくまでも例外的に丘陵裾のこの地に作られたものと考えられる。その理由は定かではないが，墓を作り得る者であるが，本流の石室内に入れない事情のある者なのか。単なる階級的格差なのか。

７C中～８C前葉代（Fig.209）

再びこの地に，実に850年ぶりに集落が甦った。しかもⅡ区全体に密に配置された大集落として。ただ，その前段階として古墳の終焉という土地利用の意識変革があったからでもあるが。細かい時期別に見てみよう。

７C中葉　この時期はまだ集落の萌芽の時代で，明確な集落形成は為していない。遺構はⅢ区の急斜面中途の緩斜面部位に築造された中原１号墳と，Ⅱ区中央付近にみられる小さな第８号土壙だけである。ただ，Ⅱ区包含層や新しい遺構に混入して出土した土器が幾らか出土しているので，Ⅱ区のあたりに削平されてしまった住居や，本遺跡の隣接地に当期の集落が存在する可能性は高い。終末期古墳の墓地として，背後の丘陵一帯が意識されていた時期であろう。なお，Ⅱ区にある唯一の第８号土壙の性格は確定できないが，廃棄土壙だとすると近くに生活遺構が存在してもよい。

７C後葉　本遺跡で最大の集落が成立した時期で，各種遺構が一通り揃っている。掘立柱建物

Fig. 209　金場遺跡集落変遷図（その4）(1/800)

3棟，竪穴住居跡10軒，土壙5基，土壙墓1基となる。各遺構の間には切合うものもあり，2～3期に細区分できるかもしれない。竪穴住居跡は中央から東寄りの大型住居が集中する一群と，西端寄りの小型類4軒が集った一群の2グループに大別できる。東群の大型住居の第3・7・15号住居は，南側の大きな南北棟である第2号掘立柱建物と主軸方位がほぼ一致しており，特に第7号住居とは同時併存していたと思われる。いずれにしろ，この東群が当集落の中心となりそうだが，実際は第5・6号掘立柱建物が同時併存でいずれも家屋棟となりそうなので，やはり東端の従たる竪穴住居群としか言えないだろう。一方，西端の小型住居群は，単なる小型住居ではなく，カマヤ的な性格を思わせるものもあり，そういう特殊目的の一群であろう。掘立柱建物は，第5号建物が柱穴も大きく，中心建物となりそうで，第6号建物は別のグループか，或は第5号建物と対になる前面の建物となろう。第2号建物は既述した如く，東側の竪穴住居群に伴いそうで，馬屋か大きな共同作業場乃至は共同倉庫的な感じがする。土壙は南北に長い大型のものが，住居群の北側に並列している。これだけ並ぶと，単なる廃棄土壙ではなく，何らかの目的があったのではないかと思えてくる。単なるゴミ捨て場であれば，東側の目の前が谷であり，そこで充分事足りる筈であるから。幾案か想像はできるが，今後の課題としておこう。次に，土壙墓1基（第5号土壙）が集落の北側にて検出されたが，住居群の外側とは言え，至近距離であり，殆ど屋敷内墓地と言ってよい。そうであれば，中世の屋敷内墓地の萌芽的なものとも考えられる。この地方では7C後葉と言えば，今だに矮小化した横穴式石室を築造し続けている状況であり，それとは別に集落近くに埋葬するものも在った事がわかる。以上の諸状況をまとめてみると，この時期の集落は，同じ集落の中で，掘立柱建物に住む人々と，竪穴住居を密集させて住む人々の差が明確となっていることが判かる。更にここに占地したという事は，水田農耕経営を専業とする人々ではなく，他の生業の目的があったのではないかと考える。僅かではあるが鉄滓や鞴羽口片も出土しており，もし現在の地名「金場（かなば）」が生きるとすれば，鍛冶関連のものも想定できる。ただ工房そのものはここより南側に位置したであろう。また，このような山麓のあたりに突如として掘立柱建物群や大型竪穴住居群が現われたということは，通常では考えられない特別の事情もあっていいのではないかと考える。朝倉宮推定地も遠からぬ位置に違いなかろうし，何らかの関係が考えられないものか。

7C末～8C初葉　この時期は，その前から引き続いて集落が存続するが，規模が縮小したかに見える。遺構は中規模の竪穴住居跡2軒と掘立柱建物3棟である。東西棟の第1号掘立柱建物は本文中で報告したように明らかに生活家屋であるが，西側に在った第5号建物と比べると規模が縮小している。その反面，南側の南北棟の2棟はいずれも大きくしっかりしており，これらの建物を見ていると，前代の竪穴住居群が整理されて，掘立柱建物へと質的な変化があったのではないかと思われる。

8C前葉　この時期は既に集落の体をなさないような状況となっているかに見える。西端の小

型竪穴住居跡２軒だけがこの期の遺構である。遺跡全体からの出土遺物も激減している。ただこの２軒の住居は，平面規模の小ささに似合わぬ，他の大型住居のカマドと同等のちゃんとしたカマドを持っており，やはりカマヤ的な，単なる住居ではない特別の施設と考えられる。そうすると，調査区の外側に本来の集落が，前代から位置をずらして存在する可能性も考えられる。ただ，純粋に，前代の栄華が急激に去ってしまった後のうらびれた風景として捉えるのも良いかもしれない。

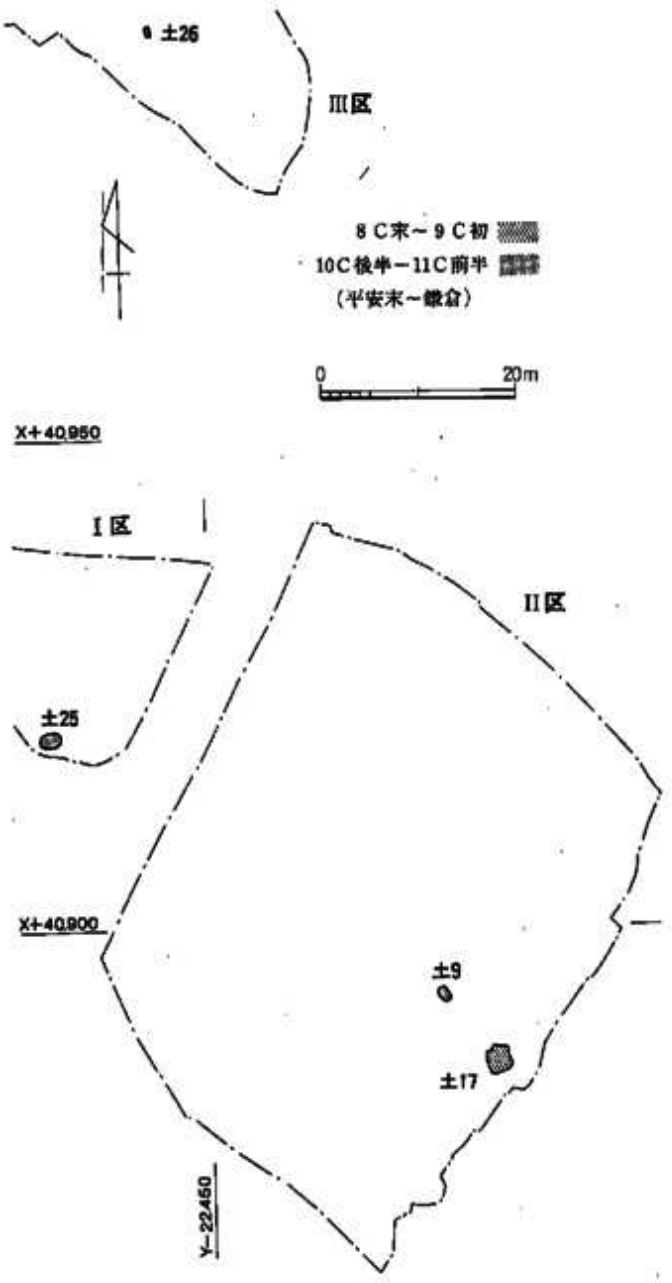


Fig. 210　金場遺跡集落変遷図（その５）(1/800)

その後の金場遺跡(Fig.210)

８C前葉の２軒の小型住居を最後にして，本遺跡内では集落が途絶えてしまう。今日まで一切無い。８C末～９C初には，Ⅱ区南半に第17号土壙１基のみがみられ，その性格は明確でないが，墓ではないので何らかの簡単な生活的営みがあったものと考えられる。その後は全く人跡が絶えて，10C後半～11C前半代と考えられる第９号土壙が，Ⅱ区南半にぽつんと見られる。これも性格は不明で，偶発的な遺構であろう。また，Ⅰ区南端に見られる第25号土壙は深い摺鉢状遺構で注目されるが，平安末～鎌倉期の遺構と思われる。これはしっかりした遺構だが性格を定め切れず，単独の占地であることから，やはり偶発的性格のものだろう。

これ以降は遺構が無く，原野と化してしまっただろう。恐らく江戸期になって開墾が進み，畑として豊かなみのりを得る場所となり，更にⅡ区は水田として谷上方からの水を引いて開発される。昭和期後半にはⅢ区の急斜面は柿畑として開発され，その麓一帯にはぶどう畑が拡がるようになる。そして昭和63年にこの地で発掘調査が行われ，その直後に高速道路の建設が始まり，この地の上を猛スピードで走り抜ける現代自動車社会の象徴の姿がみられるようになる。以上が1万数千年余にわたる金場遺跡の歴史である。

E 旧石器グリッド

金場遺跡は1万年以上にわたる歴史が刻まれており，その間にはそれぞれの画期が認められ，どの時期を金場遺跡を代表するものとするかは非常に迷う程である。その中でもⅠ区の旧石器出土は，やはり特筆すべきものと考える。

Ⅰ区旧石器グリッドの調査自体は，今から考えると充分納得のいくものではなく，発掘範囲の拡張，Ⅶ層・Ⅸ層の全グリッドでの掘り下げ，より下層への徹底した掘り下げ等，反省点も多い調査であった。今後の肝に命じる課題としよう。ここでは，成果のまとめとして，石器組成や石材，グルーピング等の諸問題について検討してみたい。なお，各石器毎，及び各器種毎の詳細な検討については，本文中で詳述しているのでここでは省略する。

石器組成　Tab.12に示した通りであるが，この中には勿論縄文時代のものも入っている。層位的に見ると，Ⅲ層までが赤ホヤの入る層で，Ⅵ層下部までが確実に打製石鏃が混じるので，ここまでは縄文期のものがあると考えてよい。ATは最下部のⅨ層まで入っているので，年代的にはⅦ層・Ⅸ層はAT以後縄文以前ということになる。各器種毎に層位的ピーク・傾向を見てみよう。ナイフ形石器はⅥ層下部にピークがみられ，Ⅶ層中部まで出土している。これらはすべて小型・特小型類であり，層位的に最古段階にこなくても問題はない。ナイフ形石器とほぼ同様の層位を示すのが台形様石器で，年代的にもほぼ同時期としてよかろう。これらに対して，Ⅵ層中部に出土数のピークを持つものがある。細石刃・石刃類がそうであり，層位的にはナイフ形石器・台形様石器よりも新しい状況をみせる。彫器はⅦ層上・中部のものと，Ⅲ・Ⅵ層上部のものとがあり，新旧2群に分かれそうだ。下位のものは層位的に台形様石器等と併行期となろうか。台形石器は出土点数が少なく，何とも言えないが，Ⅶ層中部からも出土している事から，やはりこの石器群の中では古い段階のものとなろうか。尖頭器は2点とも典型例ではなく，Ⅲ層下部出土品（64）は翼状剥片を用いたナイフ的な類で，Ⅵ層下部のもの（63）は片辺が完全にブランティングされていて形態的には三稜ポイントとなるが，用途的にはドリ

Tab.12　I区グリッド出土石器一覧

層位 ＼ 器種		ナイフ形石器	台形石器	台形様石器	細石刃	石刃	石核	彫器	尖頭器	掻削器	使用剥片	打製石鏃	磨石	棒状石器	小計	剥片・チップ			
																黒曜石	安山岩	その他	小計
Ⅲ層	中部					1		1				1			3	12	36		48
	下部	2		1	3		1		1	2		4	2		16	35	66		101
Ⅵ層	上部				7	1	1	1		2		6	2		20	77	132	チャート(白) 1	210
	中部	1	1	2	10	3	2			1	2	2	1		25	145	223	頁岩質1 チャート(白) 1	370
	下部	3		2	7	2	1		1	2	2	3			23	89	154	チャート(赤) 1	244
Ⅶ層	上部	1		1	2	2	4	2		1	1	1			15	39	146		185
	中部	1	1	2				1							5	15	60		75
	下部						1			1					2	2	24		26
Ⅸ層														1	1		4		4
計	点数	8	2	8	29	9	10	5	2	9	5	17	5	1	110点	414	845	4	1,263点
	%	7	2	7	26	8	9	5	2	8	5	15	5	1	100%	33%	67%	0.3%	100%

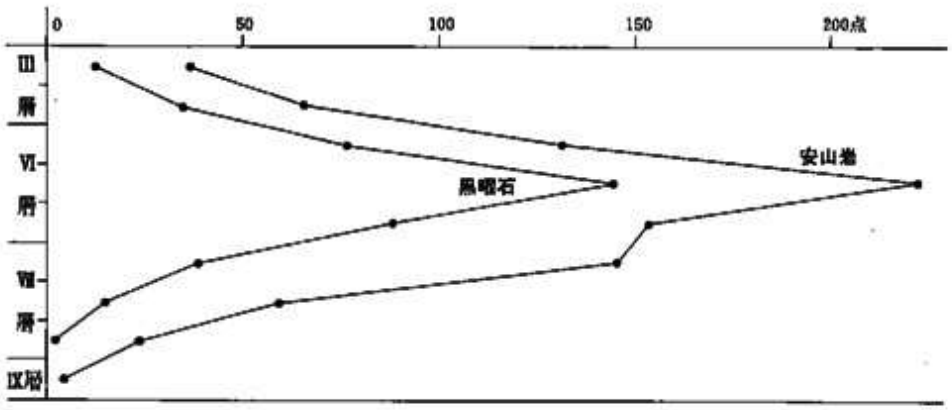


Fig. 211　I区グリッド出土石器の石材別各層位出土状況
(Tab. 12の右端部分をグラフ化したもの)

ル或は小型刺突工具的な小型品である。よって典型的槍先形尖頭器や角錐状尖頭器の類は出土しておらず，層位的な共伴関係等を押さえる資料は得られなかった。掻・削器については，各層からわりと万遍なく出土しており，どの時期も必需品であったことが考えられる。次に打製石鏃は，VI層上部にピークがみられ，他の石器類よりも上層であることが判かる。III層出土の石鏃の中には特小型の剝片鏃（102）や，作りの雑な平基小型類（90～92）が見られるが，他の石鏃類はすべて古相を示す形態で風化も著しく，縄文草創期（～早期）のものが大半と考えられる。なお，層位的には細石刃と打製石鏃がダブる部分もあり，両者が共伴する可能性も否定できない。県内では糟屋郡須恵町乙植木山城戸遺跡（須恵町教育委員会「乙植木山城戸遺跡」1995）でも，ひょっとしたら細石刃と伴うかと思われる状況があり，可能性としては残しておきたい。最後に，磨石はIII層下部からVI層中部までにまとまっており，やはり新しい段階に止まっている。打製石鏃のピークとほぼ同じであり，縄文早期までのものと考えられる。

使用石材　I区グリッド出土石器の使用石材は，大きく分けて腰岳系の良質な漆黒色黒曜石，多久周辺の安山岩，乳白色の蛋白石的なもの，赤茶色のチャート，頁岩等がある。安山岩の中には玻璃質のものが少量みられ，黒曜石の中にも淀姫産のもの（59等），姫島産（48），松浦系（45）などが含まれる。出土点数的にはこれらは圧倒的に少数派であるが，各地からの石材到来が物語る意味は大きい。全体としては，多久系安山岩が2/3を占め，残り1/3を腰岳系黒曜石が占める。この両者の層位的出土状況をFig.211に示した。これで見ると，VI層下部までは黒曜石が安山岩の約半分強と全体平均より比率が高いのに対して，VII～IX層ではその比率がぐっと低くなり，安山岩の比率が際立って高くなっている。大雑把に言うと，層位的には細石刃以前は安山岩の使用が大半で，細石刃とともに黒曜石の使用が増加したものと理解できよう。なお，出土石器全体からの製品・使用剝片の割合，つまり石器としての歩止まりは8.7%とな

り，意外と高い事がわかる。これは点数であり，重量になるともっと高くなるだろう。縄文期から弥生前期の例に比べるとかなり高い比率で，その差異は歴然としている。

層位別作業単位　ここでは，出土石器全体を層位毎にグループングしてみた。意図としては作業単位毎に分布が認められないかと考えたので，黒曜石と安山岩の石材別に，集中部分を囲ってみた。(Fig.212・213) まずⅢ層では，黒曜石の小単位グループが5ケ所みられ，安山岩の小単位グループが6ケ所に認められた。両者は重複する部分も多いが，図でO4としたものは黒曜石だけで，㋫グリッドのS4・S5では安山岩のみの作業単位がみられる。このⅢ層での特徴は他層に比べて，まず，作業単位数が少ないこと，更に各単位毎の密度（石器の数量）が低いことである。㋬グリッドのS6ではかなり密集するが，他はかなりまばらである。㋮グリッドでの作業単位はまだ認られていない。次のⅥ層では，作業単位が黒曜石が8ケ所，安山岩が12ケ所と，他層と比べて最大となる。また，この中でもO1やS2・O2・O7などは範囲が広いので，実際の作業単位としてはもっと分かれるだろう。分布範囲としては，Ⅲ層と比べて北端の㋐㋑㋒グリッドで初めて作業単位が，しかも密集して見られるということと，㋮グリッドでも作業単位がみられるようになったことが大きな違いである。南端の㋥㋬グリッドでは相変らず大量に作業が行われているが，Ⅲ層に比べると，このⅥ層は更に密度も高く，範囲も拡がっている。このⅥ層では作業単位毎の作成器種が浮かび上がってくる。例えば，北端のO1では黒曜石製掻・削器類と細石刃が，南端のO7でも同様の状況がみられる。東端のO6では小規模ではあるが細石刃作成場所と考えられる。これらに対し，㋬グリッドのO5では黒曜石剝片のみで1点も製品が見られないものもある。これと重複するS8では打製石鏃が4本あり，その製作場所とも考えられる。また，このⅥ層の作業単位の中には，O1・O7・S2・S7・S10～12のように分布形状が三日月形になっているものが多く見られる。これは，三日月の中央に座って石器製作を行い，その前面に剝片類が散らばった結果ではないかと考えられる。次にⅦ層では，黒曜石の作業単位が6ケ所，安山岩の作業単位が11ケ所となる。Ⅵ層全体の出土量の1/3しかないこの層で，この作業単位の数はⅥ層にひけを取らないものであろう。Ⅶ層の分布状況を見てみると，北端の㋐㋑グリッドでは相変らず高い密集度を示すが，Ⅲ・Ⅵ層で高い密度を示していた南端の㋥㋬グリッドでは閑散としたものになる。また，北側の㋬グリッドでもまばらな状況となってしまっている。黒曜石の作業単位が小さくなり，その分安山岩だけの作業単位が増えている。東端の㋮グリッドでは，Ⅲ・Ⅵ層でよりも作業単位が増え，掻・削器等の製品も多い。作業単位毎の製品作成はⅥ層ほどには全体に明瞭でないが，北端のO2・O4では黒曜石製掻・削器類が目立つようである。また，この層でもⅥ層で見られたような三日月形状の作業単位がO4・O5・S6などに見られる。この三日月形状をⅥ・Ⅶ層を通して見ると，その方向は大旨三日月部が西側と南側になっているのが判かる。三日月部分の弧が西に向いているものは北端の層位が西南側へ傾斜した部位にあり，南に向いている

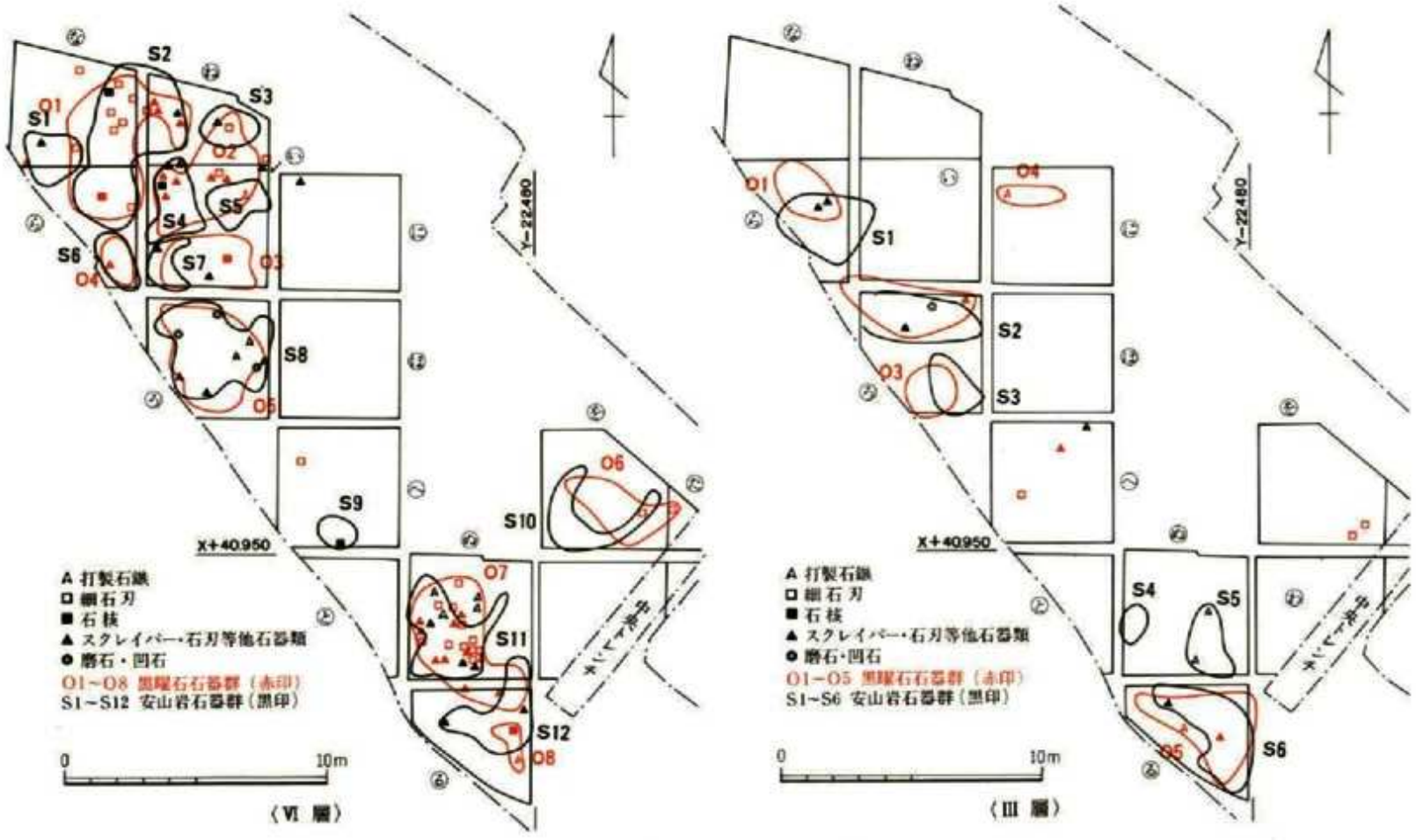


Fig. 212　旧石器グリッド層位別出土石器群（その1）(3/800)

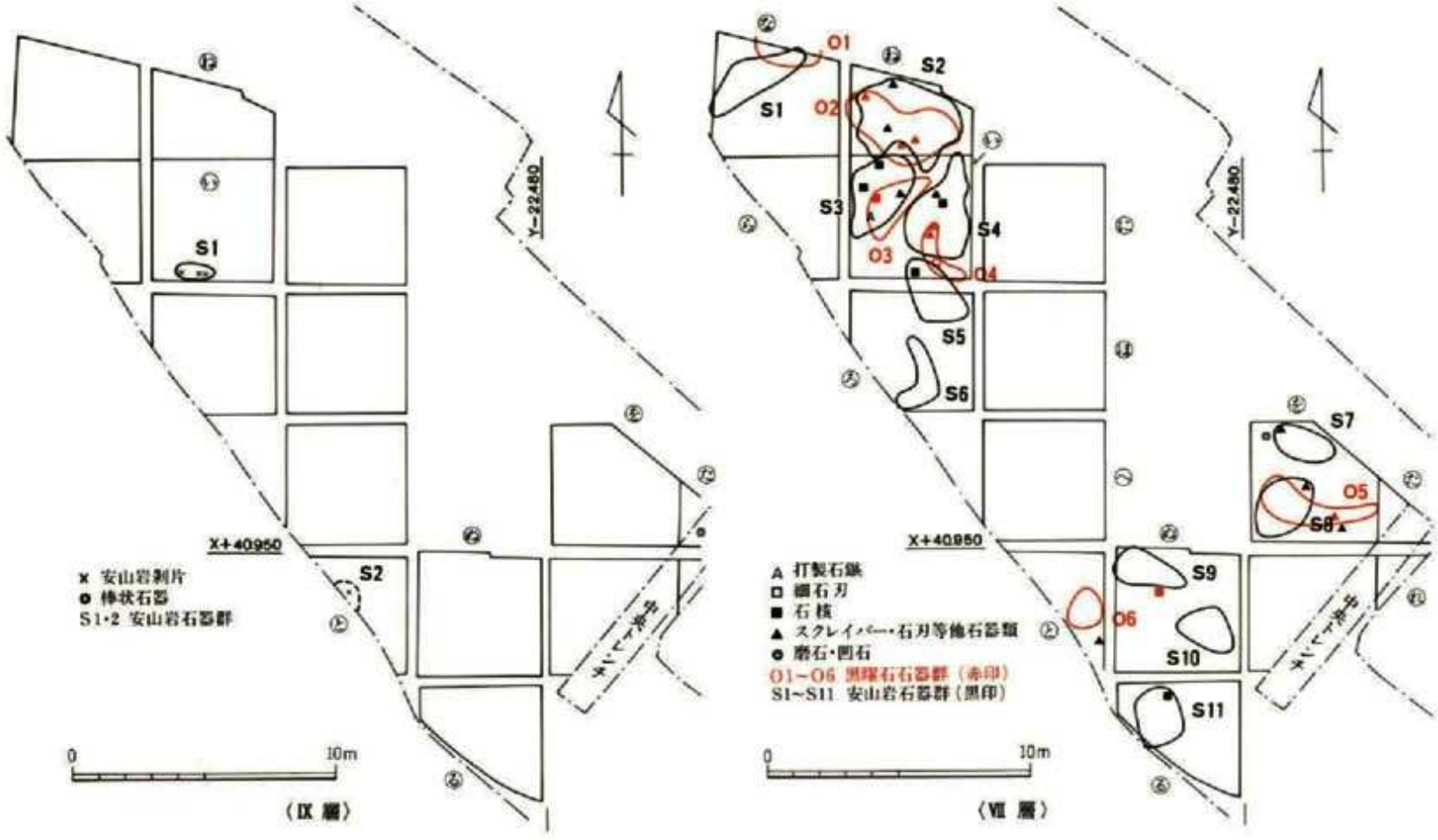


Fig. 213 旧石器グリッド層位別出土石器群（その2)(3/800)

ものは南端と東端の層位が平坦か南側へ緩やかに傾斜している部位にあたる。つまりどの位置においても，高い方を背にして，低い平野側を目前に見ながらの作業を行ったという事ではなかろうか。最後にIX層では3ケ所に出土地点がみられるが，いずれも部分的にしか掘っていないので作業単位を云々することはできない。隅々安山岩剝片しか出土していないので何とも言えないが，下層へ行くに従って安山岩の比率が高くなっているので，安山岩を主体とした石器製作が行われたであろう。

以上の成果をまとめてみると，まず，当地方においては火山灰の肉眼観察が困難で，旧石器～縄文前期の研究がたち遅れていたが，今回土壌中火山灰分析を実施して，ATとアカホヤを確認することができた。東隣の上ノ宿遺跡や原の東遺跡でもほぼ同時に分析を行い，両火山灰の存在を確認する事ができた。ただ，ATにおいては金場遺跡と原の東遺跡では良好な堆積層準を把めず，二次堆積との見解が出ており，残念な次第であった。今後これらを踏まえ，より良好な層序を求めて発掘調査を前進させる事は，当地方の旧石器研究にとって格段に豊富な成果を生むに違いないと確信する。

F　弥生中期初葉土器について

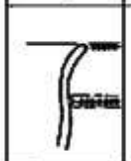
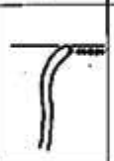
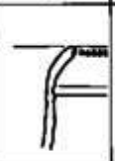
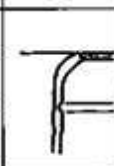
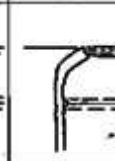
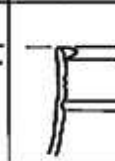
かつて筑紫野市剣塚遺跡（福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXIV—」1978）で，弥生前期後半～中期初葉の甕形土器すべてを口縁形態で分類したことがあった。さらに，地方色を追いかける意図で甘木市西原C遺跡（福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—3—」1984）で，弥生前期末～中期初葉の甕形土器口縁の分類を行った。そこで，金場遺跡でも同時期の良好な資料に恵まれたので，全出土品で分類・検討を行っておきたい。朝倉町の東端近くに位置する本遺跡は，今後筑後川向かいの浮羽郡や，県境を越えた日田地方との比較に良好な位置であり，地域性を持ったこれらがどのような社会背景を持って相互の関係を持ったのかを知るために極めて有効な作業となろう。

Tab.13に口縁形態の分類と出土点数を掲載した。以下に分類の基準を示す。

I—A類：如意形口縁で，口唇部外下端に刻目を施すもの。外面に三角凸帯を付け，その上にも刻目を施す前期後葉のものをA—1類。口唇部に刻目は持つが，外面に凸帯も沈線も施さないものをA—2類。口唇部に刻目を持ち，胴部に1条の沈線を巡らすものをA—3類とした。

I—B類：如意形口縁で，口唇部の刻目，胴部外面の凸帯・沈線等を全く持たないもの。

Tab.13　金場遺跡出土甕形土器分類表

	I類								II類		
	A			B	C		D				
	1	2	3		1	2	1	2	A	B	C
											
住1				1	1						
住11				4	1				1	1	
土1（廃棄土壙）					1						
土2（廃棄土壙）		1			2	1					
土4（廃棄土壙）							2				
土11（廃棄土壙）		1		2	3		2		1		
土12（貯蔵穴）								1		2	
土14（廃棄土壙）			2	6	10		5		3	1	6
土21（貯蔵穴）	1						4				
土22（廃棄土壙）			1	1	4		3		3		
土23（貯蔵穴）					8		5		1	1	1
土24（廃棄土壙）		2		1					3		
土29（貯蔵穴）				1	1						
土32（廃棄土壙）										1	
土33（廃棄土壙）				2	3		1		1		2
土36（貯蔵穴）					2						1
土37（貯蔵穴）									1	1	
土38（貯蔵穴）					1		1			5	2
その他の遺構				5	19	1	10		3	1	3
計	1	4	3	23	56	2	33	1	17	13	15
	8（4.8%）			23(13.7%)	58(34.5%)		34(20.2%)		17(10.1%)	13(7.7%)	15(8.9%)
	123(73.2%)								45(26.8%)		
	総　数　168点（100%）										

Ⅰ—C類：如意形口縁で，胴部外面に1条の沈線を施すもの。その中でも，口唇部外面が凹状をなし，全体的なカーブが跳上口縁的なものをC—2類とし，そうでない通常の口縁のものをC—1類とした。

Ⅰ—D類：如意形口縁で，胴部外面に1条の三角凸帯を付ける類。その中でもC—2類と同様に，口唇外面が凹状となり跳上口縁的な特徴を見せるものをD—2類とし，それ以外の通常の口縁形態のものをD—1類とした。

Ⅱ—A類：所謂亀ノ甲タイプの系統の，断面三角形の粘土帯を口唇外面に付けるもので，胴部に沈線や三角凸帯を付けないもの。

Ⅱ—B類：Ⅱ—A類の胴部外面に沈線1条を巡らす類。

Ⅱ—C類：Ⅱ—A類の胴部外面に三角凸帯を1条付ける類。

以上のうちで，Ⅰ—A類は弥生前期として良いが，A—3類はより新しい様相で，遠賀川流域系統としてたどれるかもしれない。C—2類とD—2類も明らかに新しい様相で，これも遠賀川系であろう。如意形口縁類の中にも短く外折して明らかに新しい傾向を見せるものもあるが，ここではあえて細分していない。Ⅱ類の亀ノ甲系の中にも，口縁上面が水平になり，内端の突出が僅かに見え始めているものもみられ，中期前葉の逆L字口縁への変化前段階の新様相と考えられる。

以上の分類結果を見ると，金場遺跡では圧倒的に如意形口縁類が多く，亀ノ甲タイプ系統のものは3割にも満たない。甘木市西原C遺跡では全く逆で，Ⅰ類が33%，Ⅱ類が67%となる。西原C遺跡で無かったD—1・D—2類が金場遺跡では見られ，逆に西原C遺跡ではわりと多かった口唇部外面がへこむ類が，金場遺跡では激減している。両遺跡は直線距離にして6kmしか離れていないのに。

このような各地域性によると思われる同時期遺物の中のタイプの違いは，簡単には整理・結論は出せないが，今後の近隣地域の遺跡でこれと同様の分類データが示されれば幸いである。特に浮羽郡や日田市の作業に期待したい。

VI 補 遺

治部ノ上遺跡 A 1 号石蓋土壙墓出土管玉（Fig.214, PL.120）

ここでは朝倉郡朝倉町大字入地所在の治部ノ上遺跡発掘調査により検出した，A 地区 1 号石蓋土壙墓底面から出土した大小 2 点の管玉について報告しておきたい。

これは，発掘調査終了後，一時行方不明になっていたもので，本来「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—32—」（1994　福岡県教育委員会）の173頁に収録される筈であったものである。かような不手際を深くおわび申し上げる次第である。

管玉　1 は，濃灰緑色の碧玉製。断面が全体に楕円形気味となり，一部にやや平坦面をなす所もある。孔は両面から穿孔されている。長さは17㎜，直径 7 ㎜，孔径1.5～ 3 ㎜，重さ1.3g となる。2 は，灰青色の碧玉製で，細身小型類そのものである。作りは丁寧で，長さ 7 ㎜，直径 2 ㎜，孔径 1 ㎜，重さ0.1g となる。

2 のような細身小型類管玉は，弥生前期の木棺墓等と，弥生後期終末期頃にしばしば見られるものである。また 1 のような太身になってくる管玉は，言うまでも無く古墳時代の通有のタイプであり，両者が隣接して副葬されていたという事は，時期的に古墳時代初頭の墓であることを示すものであろう。

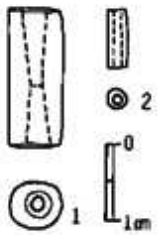


Fig. 214　治部ノ上 A 1 号石蓋土壙墓出土管玉（実大）

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんどうしゃどうかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこく
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —54—
副書名	朝倉郡朝倉町所在金場遺跡
巻次	54
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	
編著者名	中間研志
編集機関	福岡県教育委員会　文化財保護課
所在地	〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園7-7　　TEL　092-641-2903
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
金場遺跡	福岡県朝倉郡 朝倉町大字山田 字金場・柳・長田 ・中原	404420	570385	33°22′4″	130°45′29″	1988. 4.19 ～ 1988.11.26	15,400㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金場遺跡	集落 墓地 古墳 散布地	旧石器	包含層	ナイフ，台形様石器 細石刃，石核，彫器	
		縄文早期	集石炉3基	押型文土器，突瘤文土器	
		縄文前期	土壙3基	轟B式土器，曽畑式土器 条痕文土器	
		縄文晩期	住居1軒，土壙2基	晩期土器多量，石器	
		弥生中期初	住居4軒，土壙18基	弥生土器・石器，米・豆	
		古墳時代	横穴式石室円墳1基 石棺系竪穴式石室3基 土壙墓2基，住居12軒	鉄鏃，刀子 土師器，須恵器	
		奈良～平安	住居2軒，土壙2基 火葬墓1基		

図　版

金場遺跡全景（南東上空から　気球写真）

(1) 金場遺跡Ⅰ区全景（北西上空から　気球写真）

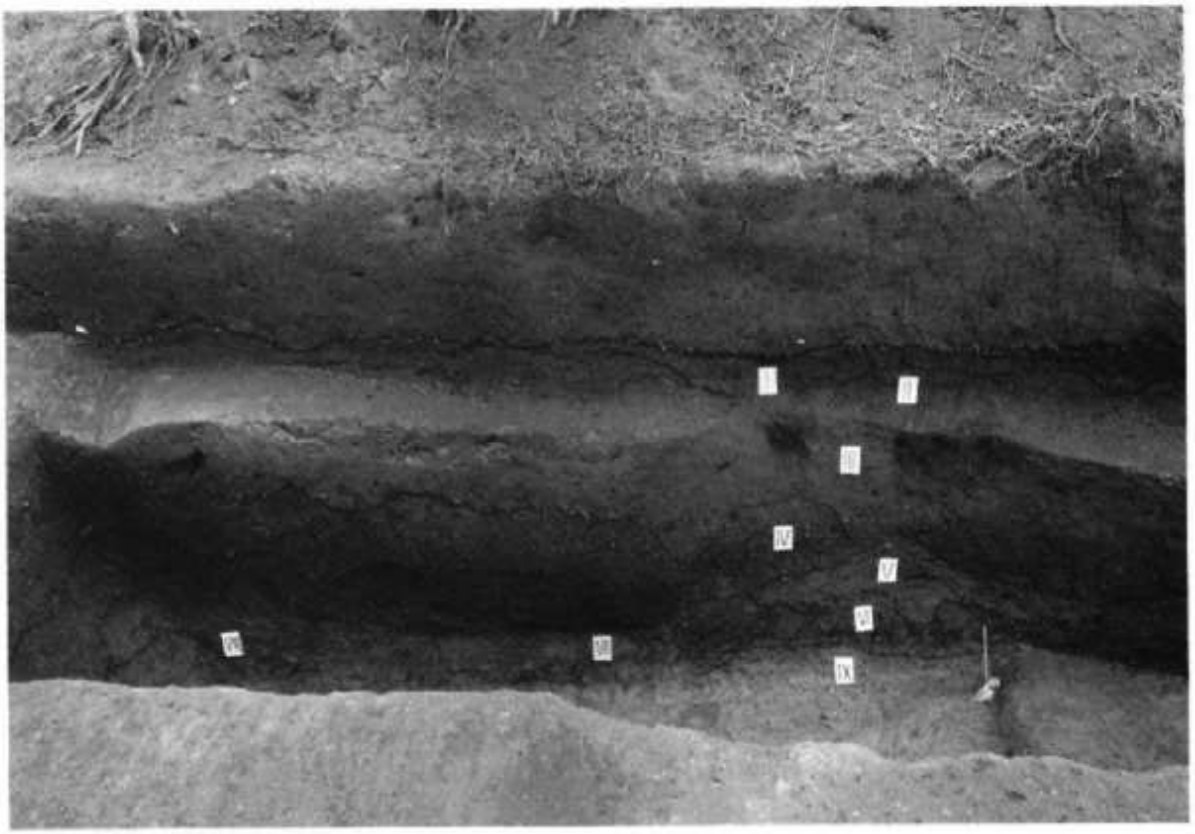
(2) 金場遺跡Ⅱ区全景（南上空から　気球写真）

(1) 金場遺跡Ⅲ区全景（南上空から　気球写真）

(2) Ⅰ区旧石器グリッド全景（北西から）

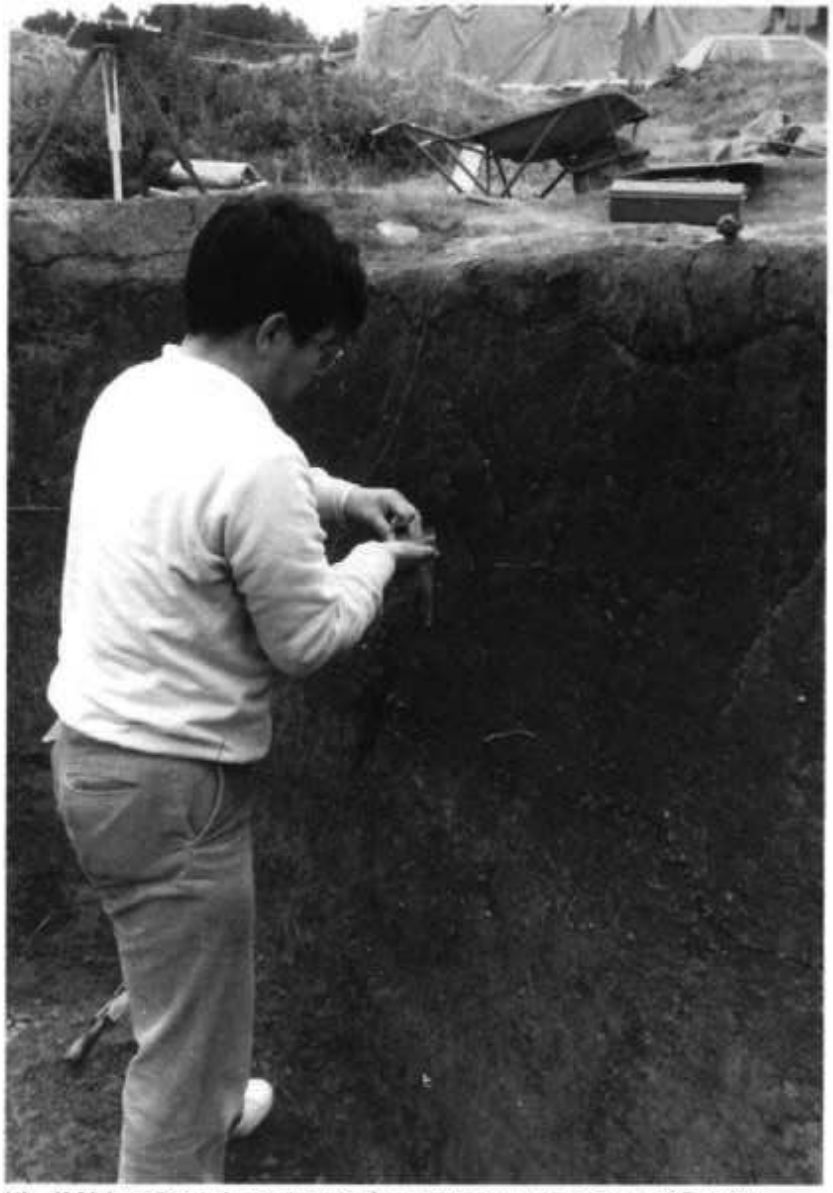
(1)　Ⅰ区グリッド中央部分（北から）

(2)　Ⅰ区グリッド中央付近掘り下げ状況（ほぼ最下面）

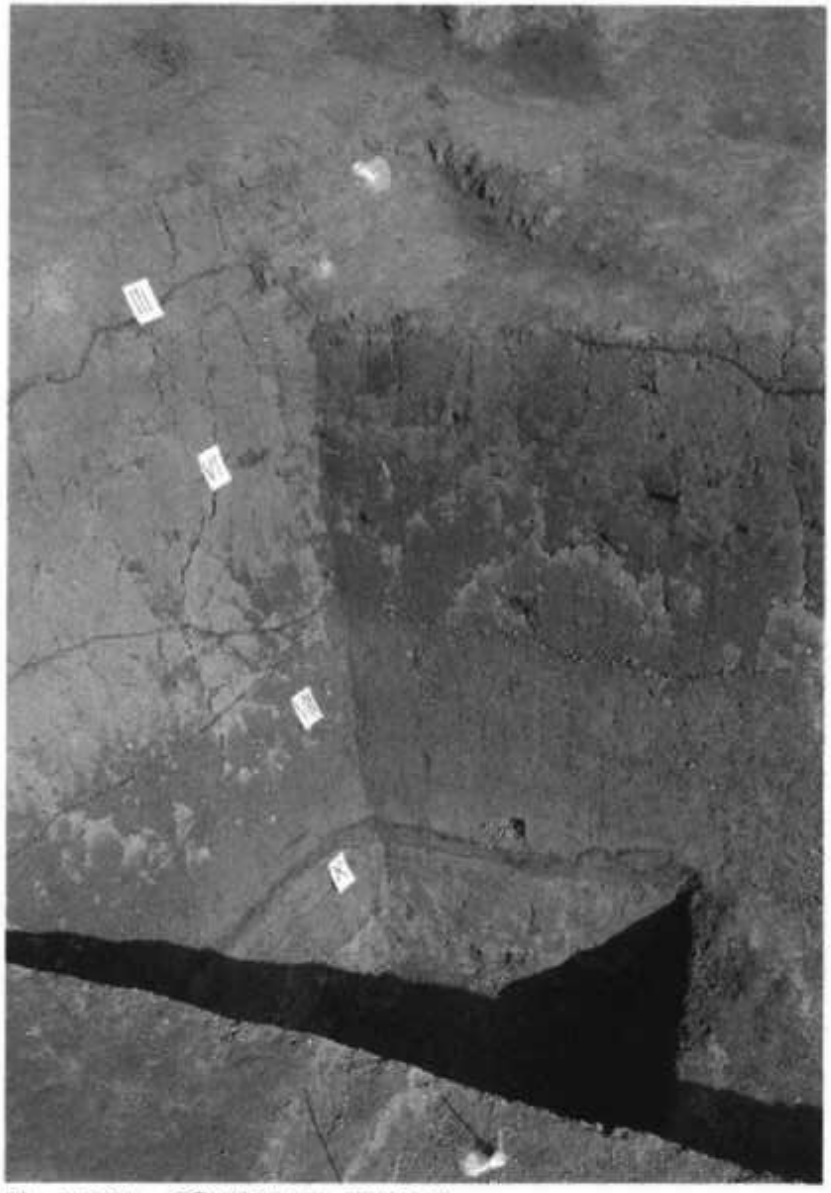


(1) Ⅰ区中央トレンチ東壁土層（西から）

(2) Ⅰ区グリッド㋒東壁土層（西から）



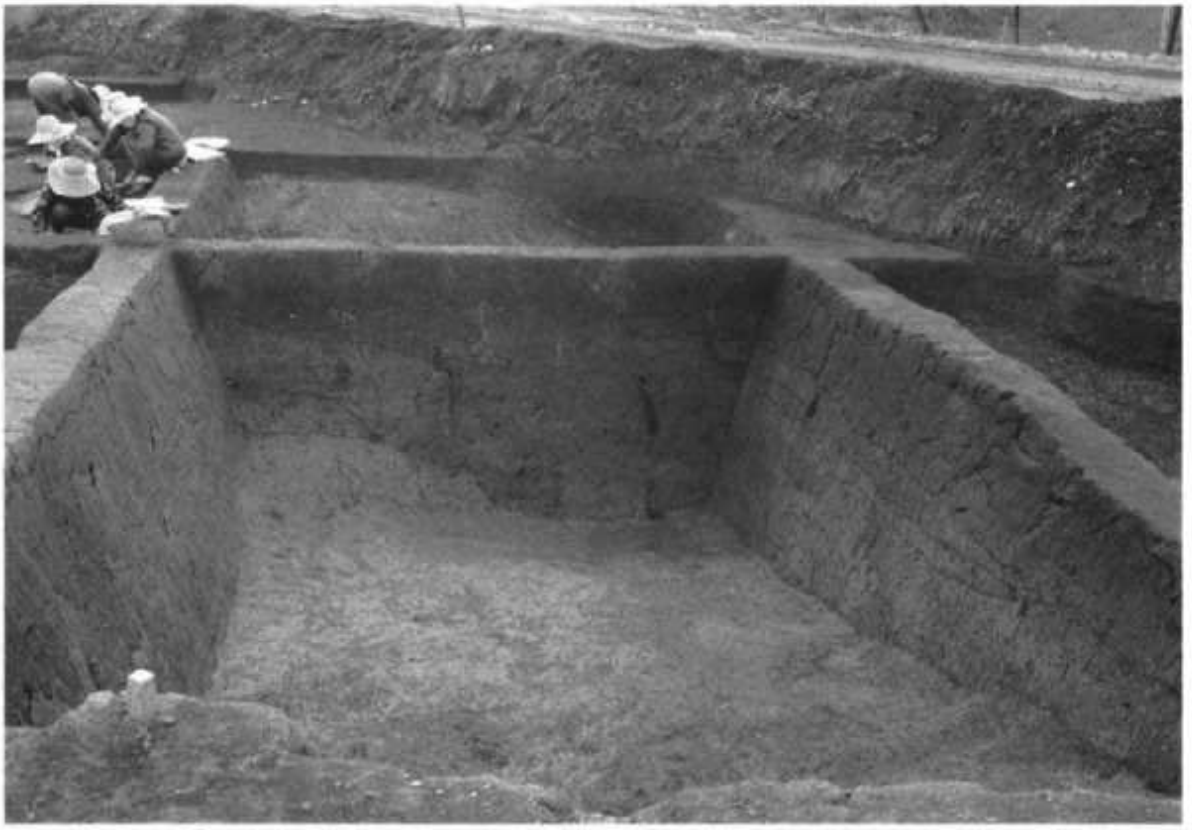
(2) 竹村恵二氏の火山灰分析サンプル土採取状況（Ⅰ区グリッド㉒東壁）



(1) Ⅰ区グリッド㉒北東隅土層（南西から）

(1) 竹村恵二氏の火山灰分析サンプル土採取状況（Ⅰ区グリッド㉓ 南から）

(2) Ⅰ区グリッド掘り上げ後の測量風景



(1) Ⅰ区グリッド㋒完掘後（北から）

(2) Ⅰ区グリッド㋒最下層掘り下げ状況（北から）

(1) Ⅰ区グリッド㋐㋑石器出土状態（南から）

(2) Ⅰ区グリッド南半発掘作業状況（北東から）

(1) Ⅰ区グリッド㋒上半部発掘状況（南西から）

(2) Ⅱ区北半西壁土層（東から）

(1) 第1号集石炉（北から）

(2) 第2号集石炉（東から）

(1) 第３号集石炉（西から）

(2) Ⅰ区中央部上層遺構（西上空から　気球写真）

(1) 第１号竪穴住居跡・第２号土壙（北から）

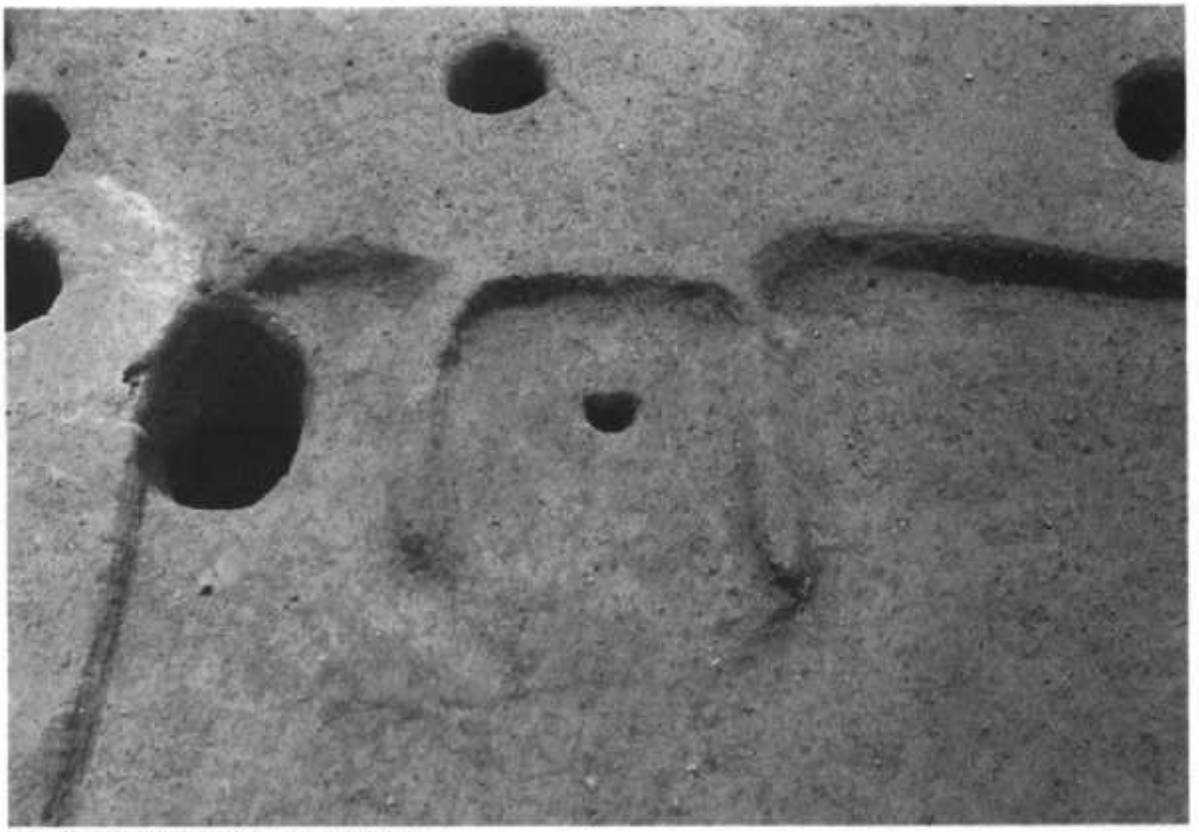
(2) 第２号竪穴住居跡（南から）

(1) 第３号竪穴住居跡（南から）

(2) 第３号竪穴住居跡カマド（南から）

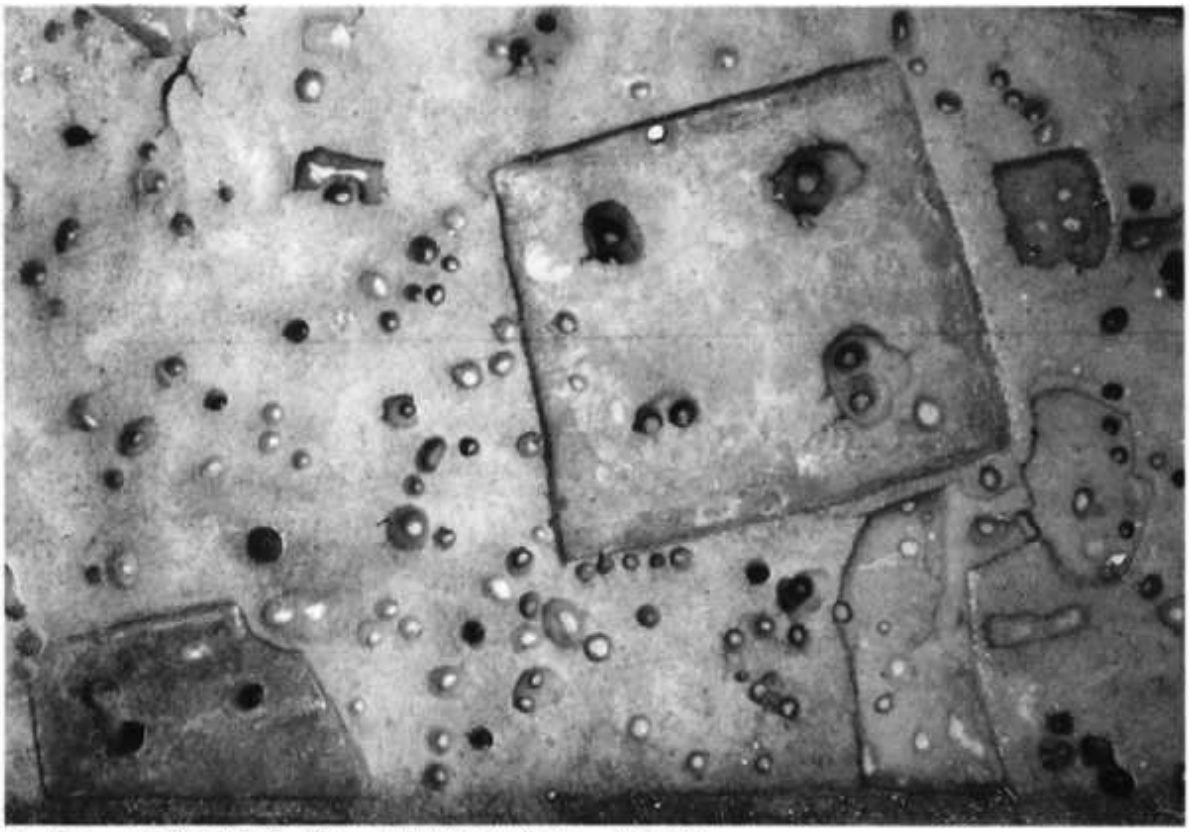
(1) 第3号竪穴住居跡下層（南から）

(2) 第4号竪穴住居跡（東から）



(1) 第4号竪穴住居跡カマド（東から）

(2) 第4号竪穴住居跡下層（東から）

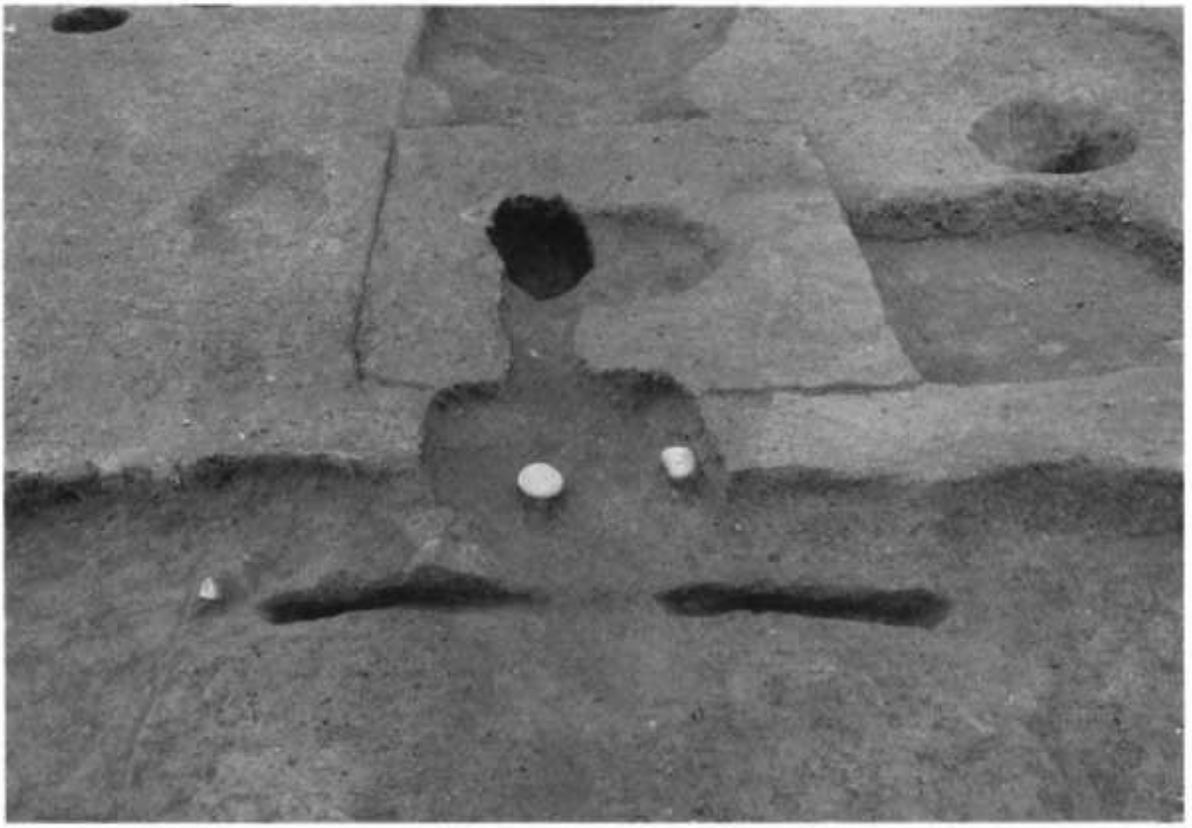


(1) 第５・７号竪穴住居跡，第８・16号土壙（上空から　気球写真）

(2) 第５号竪穴住居跡南半部（南から）

(1) 第５号竪穴住居跡南半部下層（南から）

(2) 第５号竪穴住居跡北半部（南から）

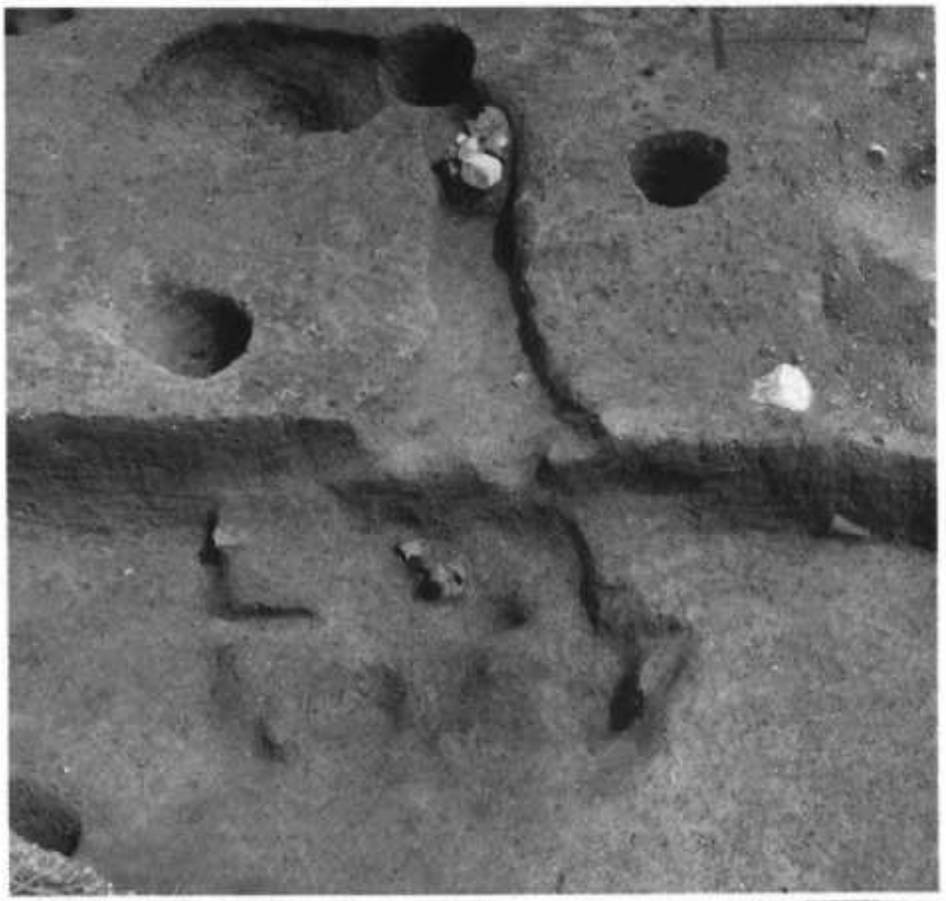


(1) 第５号竪穴住居跡カマド（南から）

(2) 第５号竪穴住居跡下層（南から）

(1) 第６号竪穴住居跡
北半部（西から）

(2) 第６号竪穴住居跡北半部下層（南から）



(1) 第６号竪穴
住居跡カマド
（南から）

(2) 第６号竪穴住居跡南半部（北から）

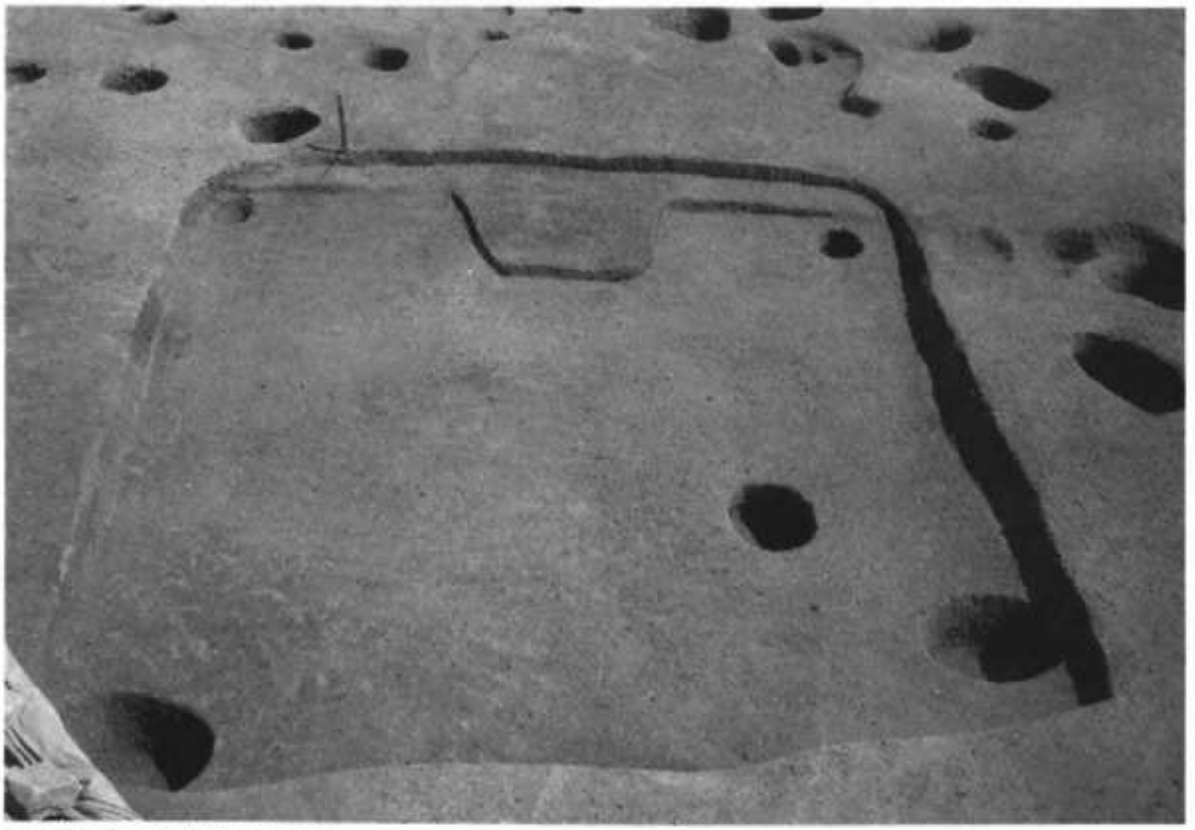
(1) 第６号竪穴住居跡南半部下層（北から）

(2) 第７・３号竪穴住居跡，第16・８号土壙，第２号掘立柱建物（北から）

(1) 第7号竪穴住居跡（南から）

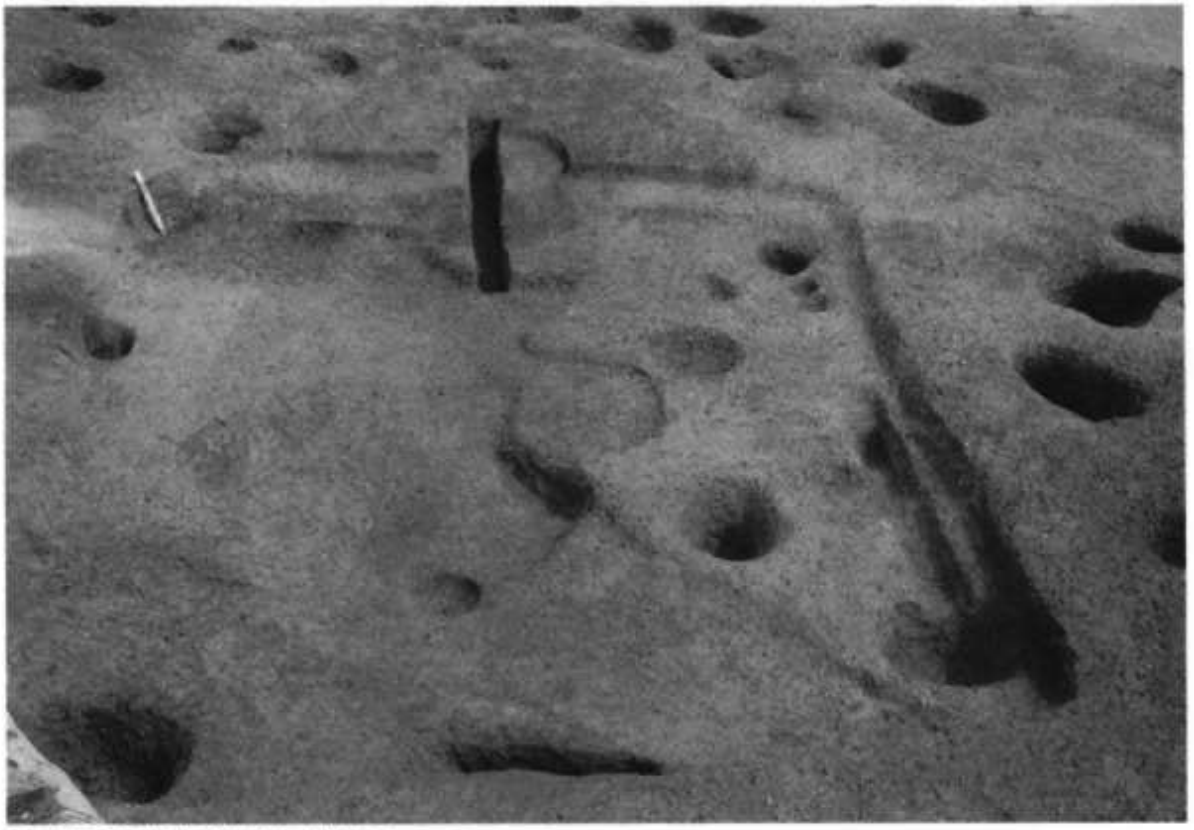
(2) 第7号竪穴住居跡カマド（南から）

(1) 第７号竪穴住居跡下層（南から）



(2) 第８号竪穴住居跡（南から）

(1) 第８号竪穴住居跡カマド（南から）



(2) 第８号竪穴住居跡下層（南から）

(1) 第９号竪穴住居跡北東半部（南西から）

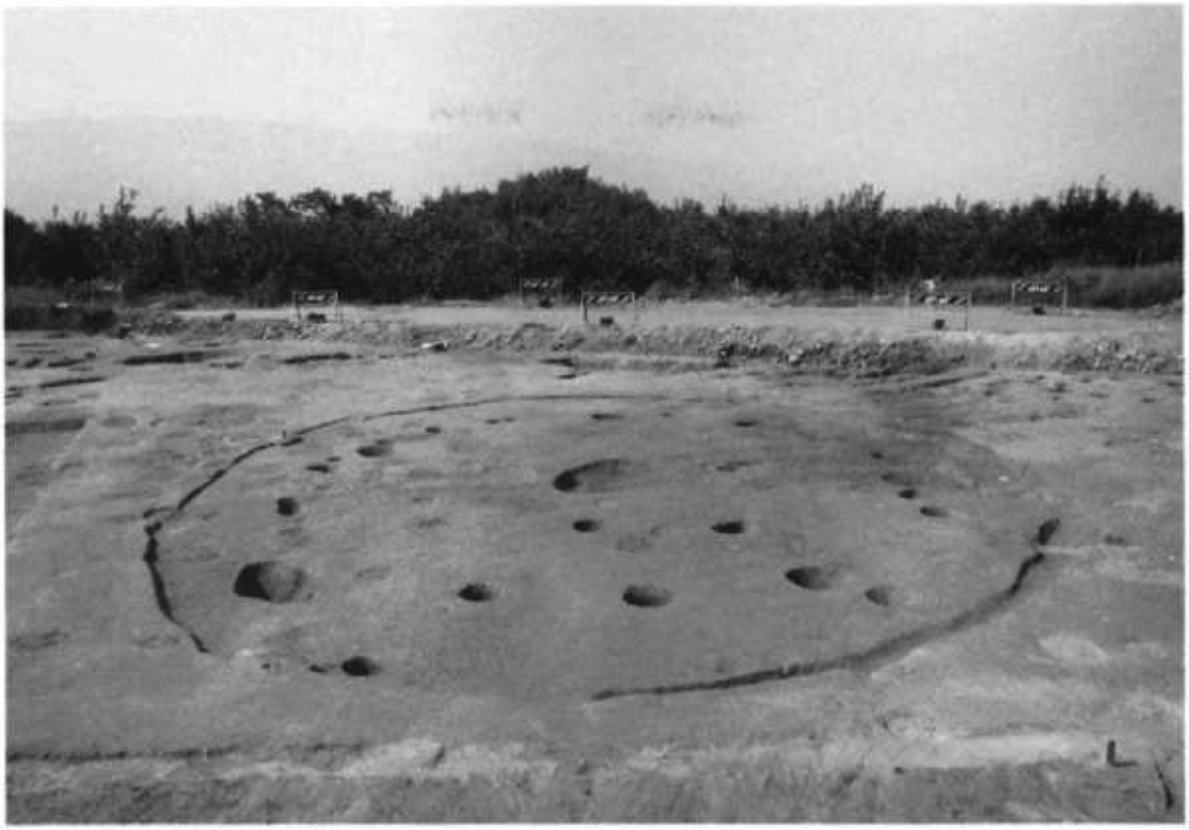
(2) 第９号竪穴住居跡北東半部下層（南西から）

(1) 第９号竪穴
住居跡カマド
（南西から）

(2) 第９号竪穴住居跡下層（南西から）

(1) 第10号竪穴住居跡（北から）

(2) 第11号竪穴住居跡（西から）



(1) 第12号竪穴住居跡（北から）

(2) 第13号竪穴住居跡（北から）

(1) 第14号竪穴住居跡（南から）

(2) 第15号竪穴住居跡（南から）

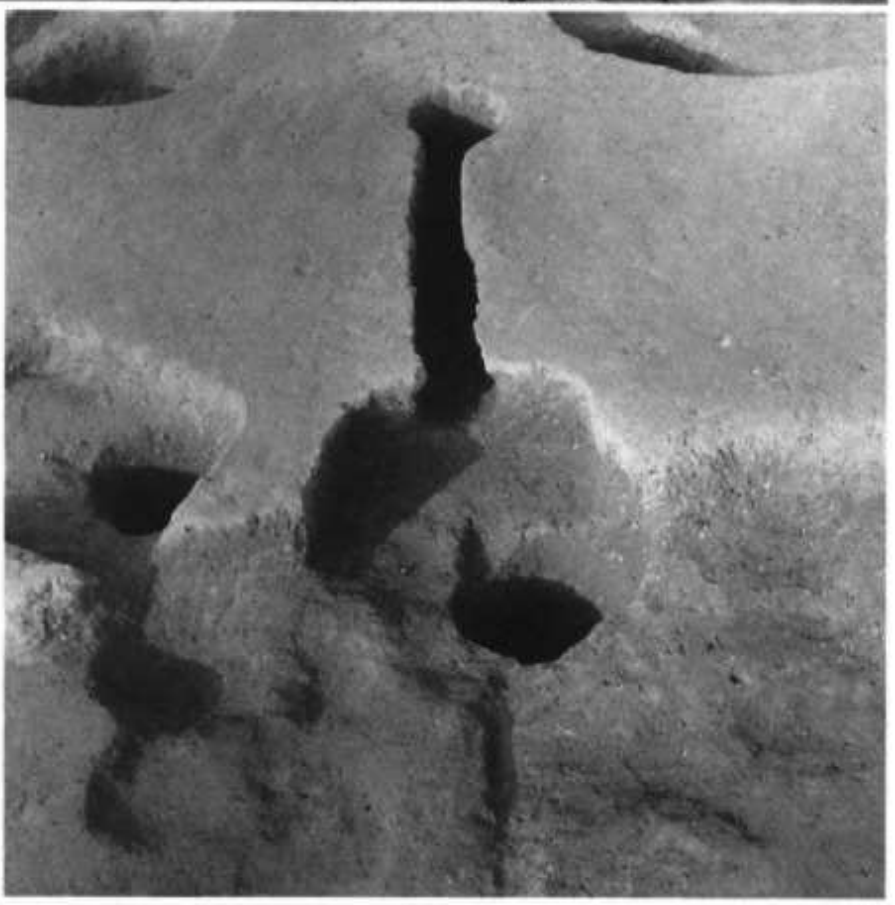
(1) 第15号竪穴住居跡カマド（南から）

(2) 第15号竪穴住居跡下層（南から）

(1) 第16号竪穴住居跡（南から）

(2) 第16号竪穴住居跡下層（南から）

(1) 第17・18号
竪穴住居跡
（東から）

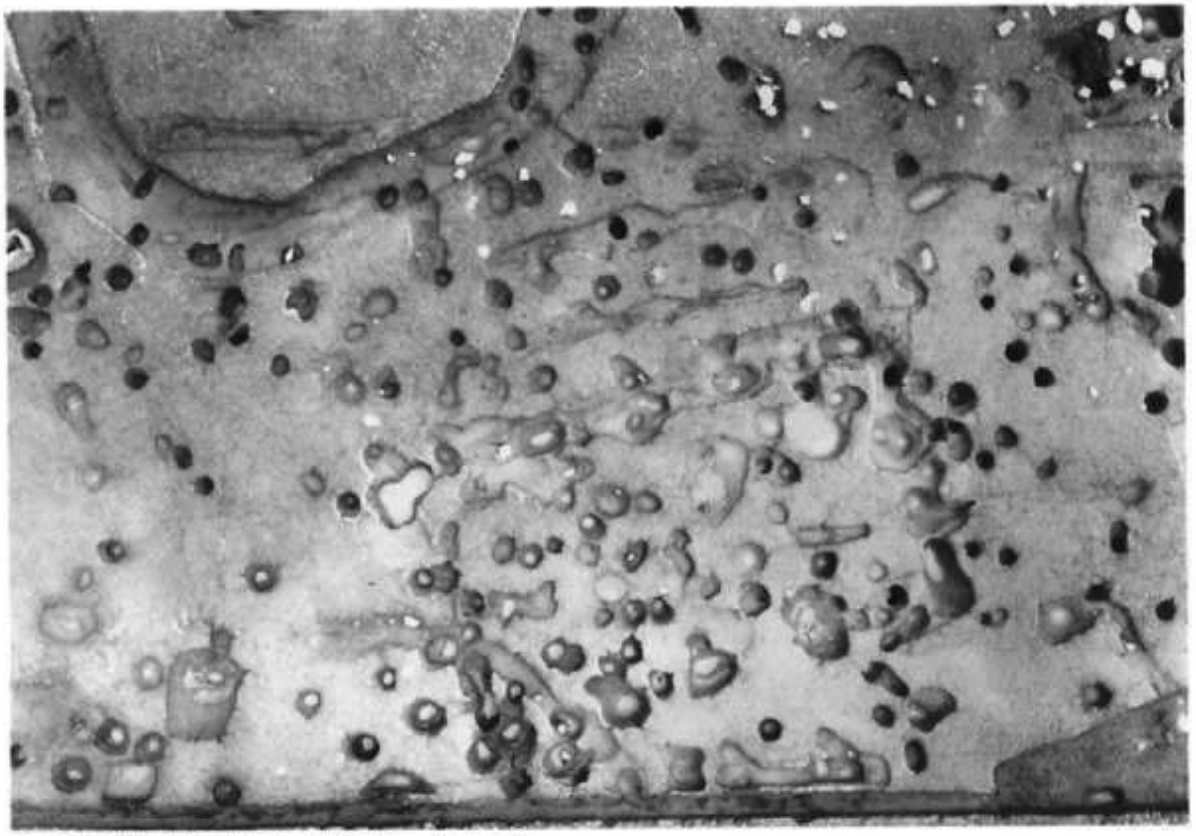


(2) 第17号竪穴
住居跡カマド
（南から）

(1) 第18号竪穴住居跡カマド（東から）

(2) 第17・18号竪穴住居跡下層（東から）

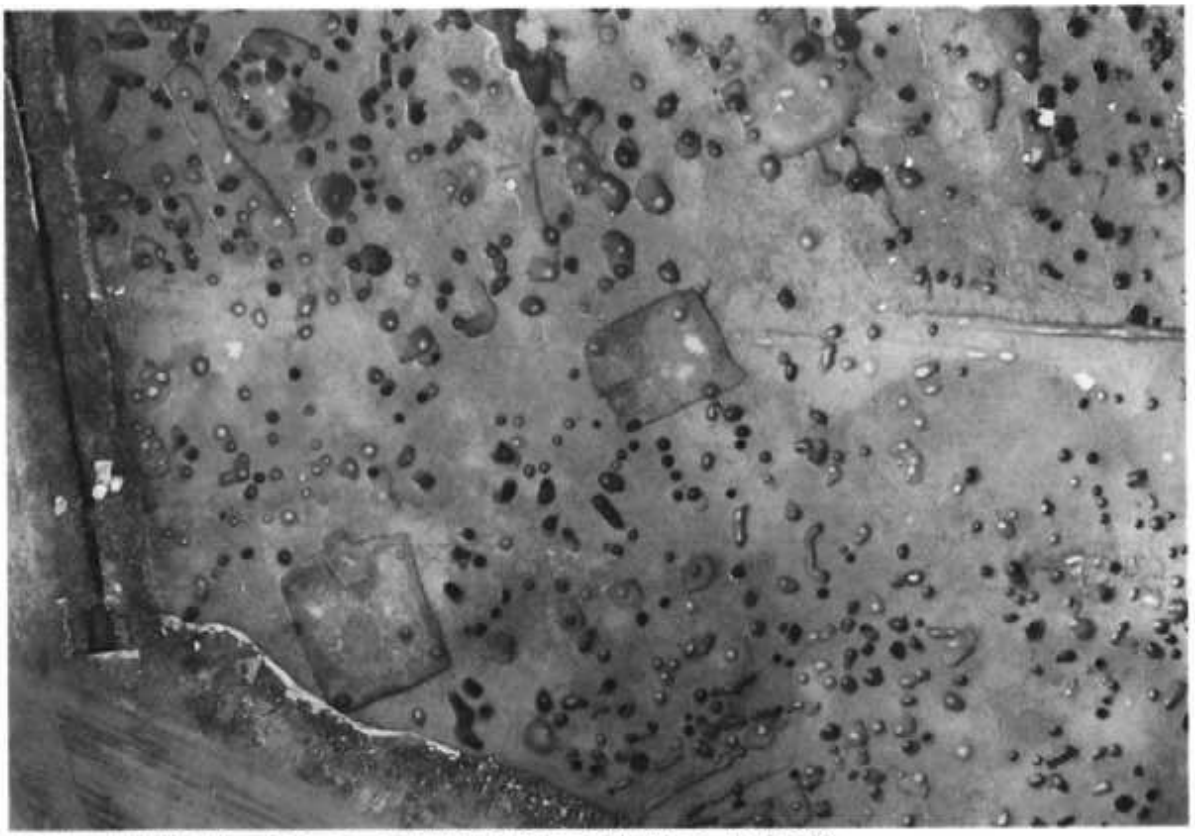
(1) 第19号竪穴住居跡（東から）



(2) 第1号掘立柱建物周辺（上空から　気球写真）

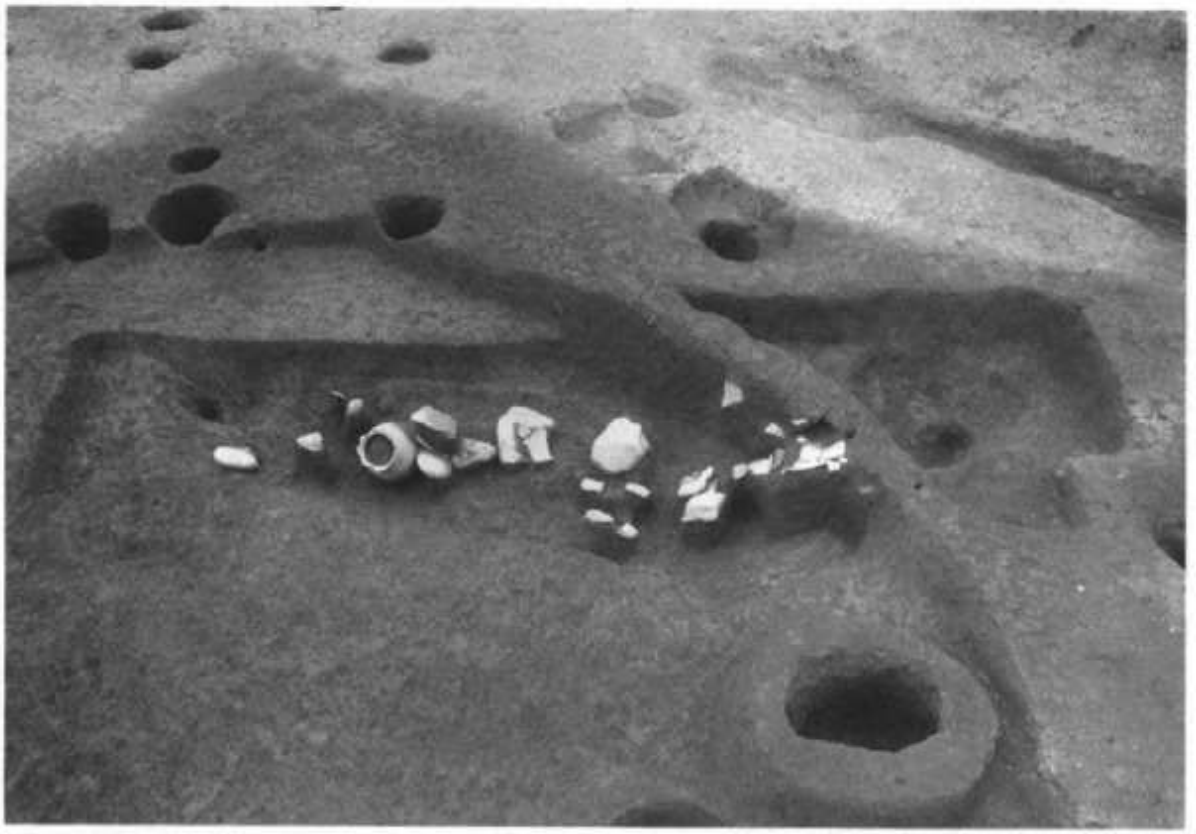
(1) 第２号掘立柱建物，第３・７号竪穴住居跡周辺（上空から　気球写真）

(2) 第４号掘立柱建物（西から）

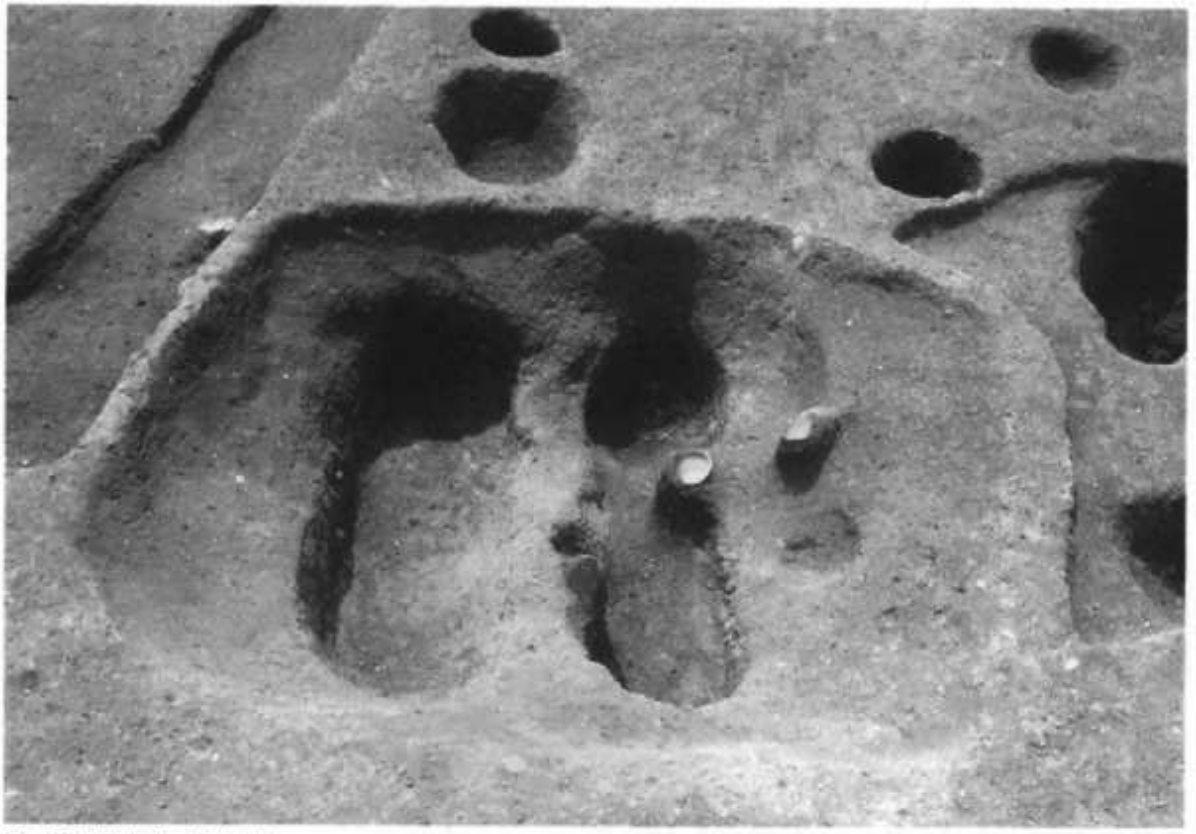


(1) 第4号掘立柱建物，第4・8・9号竪穴住居跡周辺（上空から　気球写真）

(2) 第1号土壙（西から）



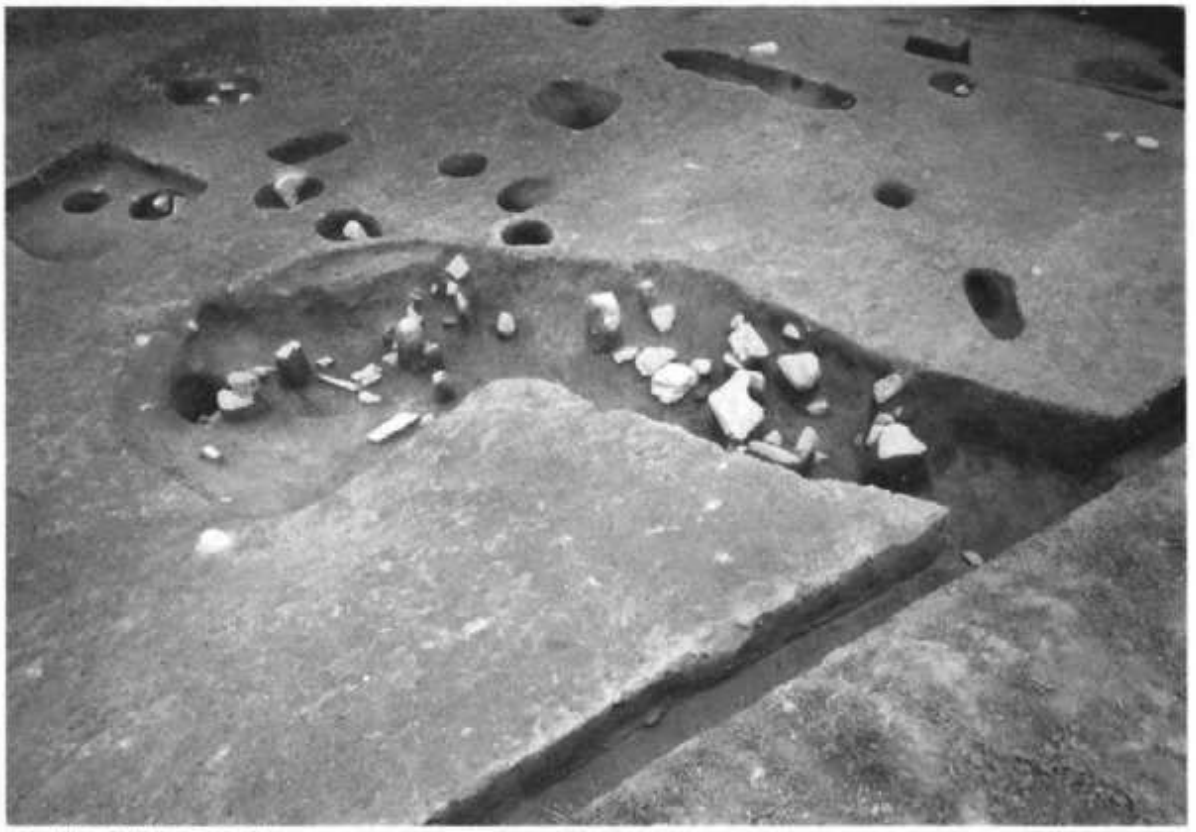
(1) 第2号土壙（東から）



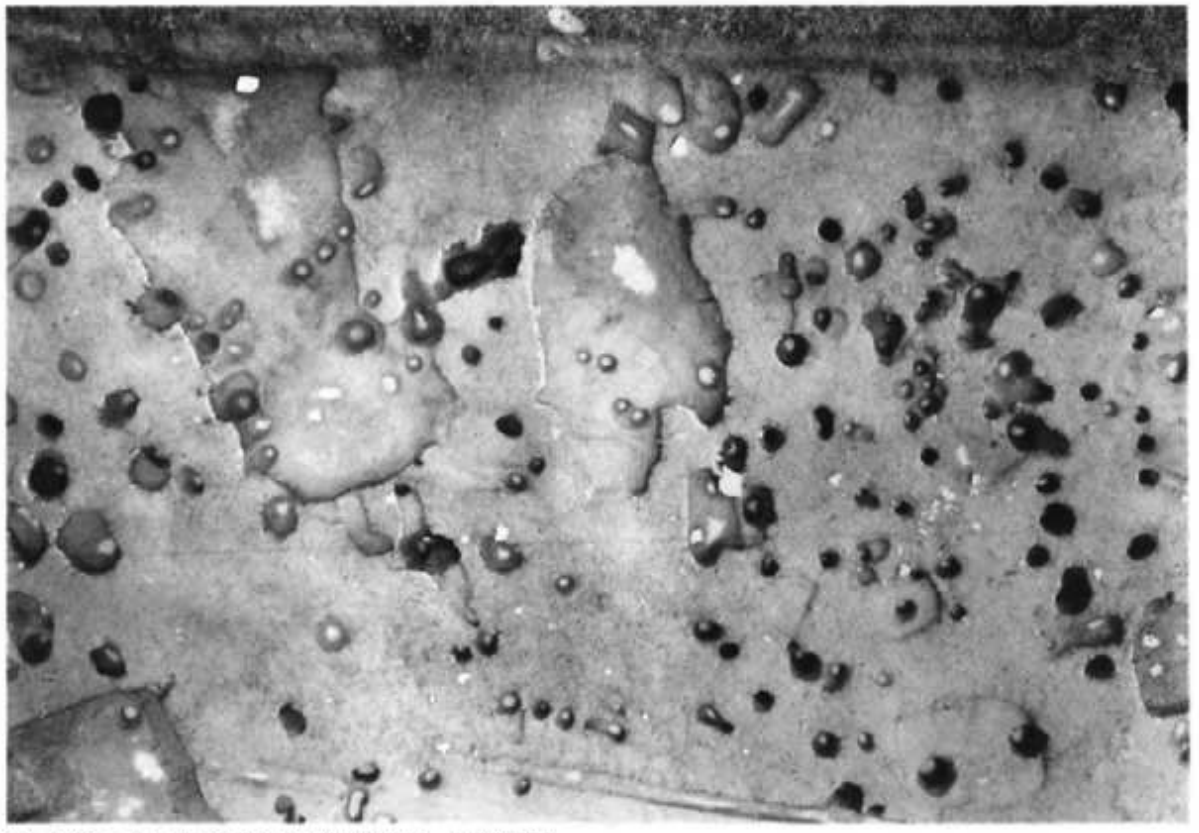
(2) 第3号土壙（東から）

(1) 第4号土壙（南から）

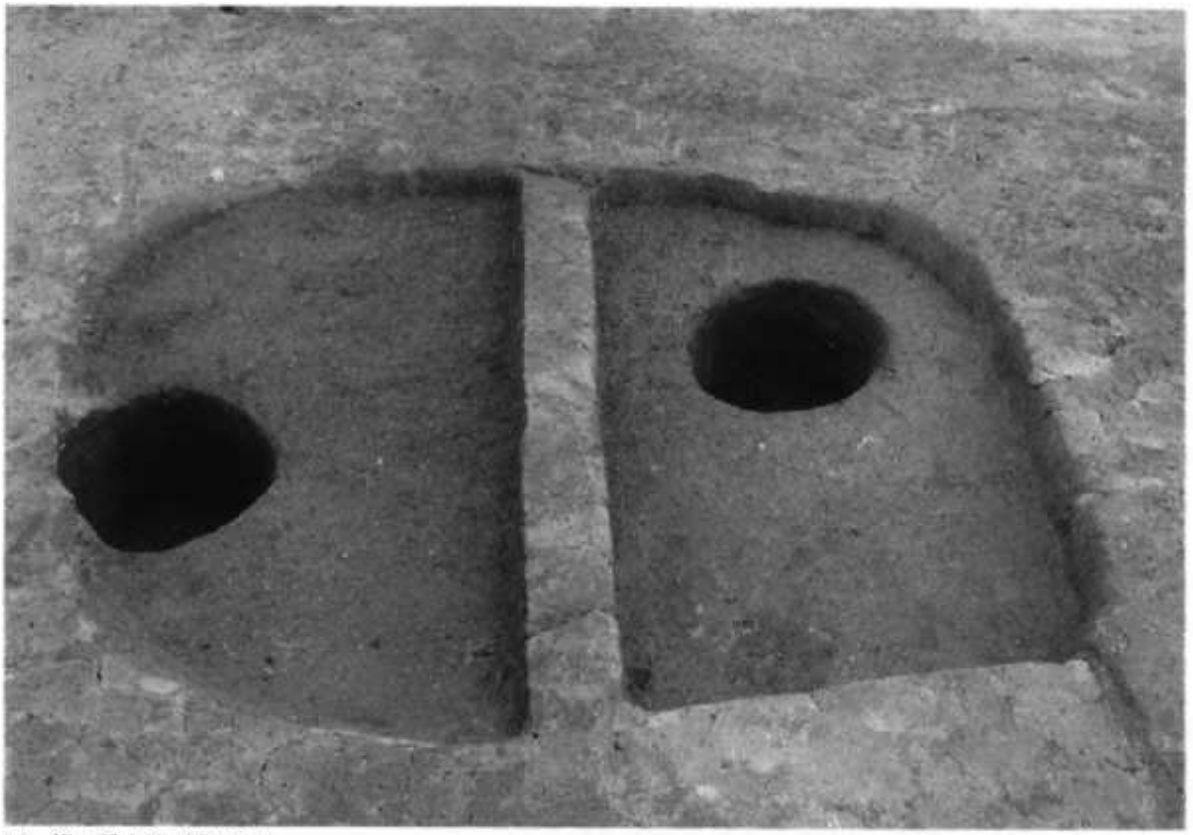
(2) 第5号土壙（北から）



(1) 第6号土壙（西から）

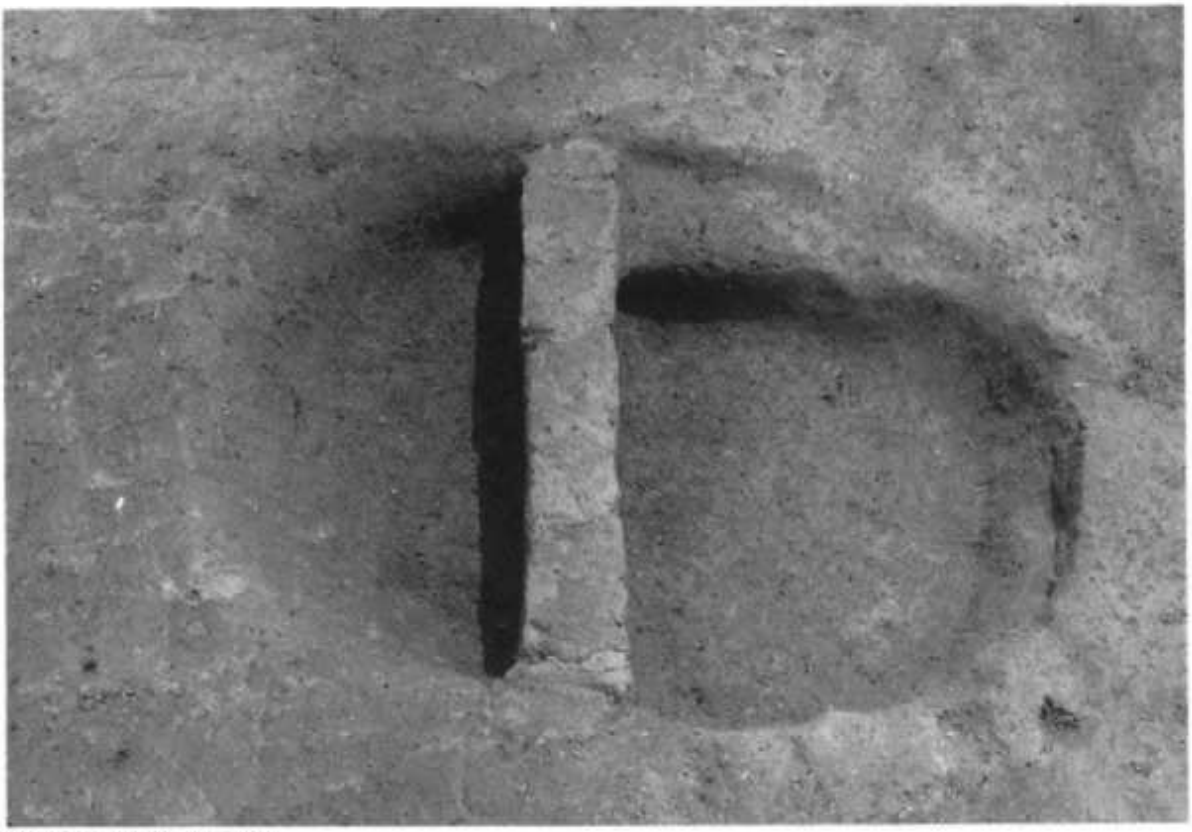


(2) 第7・14・15号土壙周辺（上空から　気球写真）



(1) 第７号土壙（北から）

(2) 第８号土壙（北から）



(1) 第9号土壙（北から）

(2) 第10号土壙（東から）

(1) 第11号土壙（西から）

(2) 第12号土壙（南から）

(1) 第13号土壙（西から）

(2) 第14（手前）・15号土壙（東から）

(1) 第14号土壙（東から）

(2) 第14号土壙土器
出土状態（南から）

(1) 第14号土壙完掘後（東から）

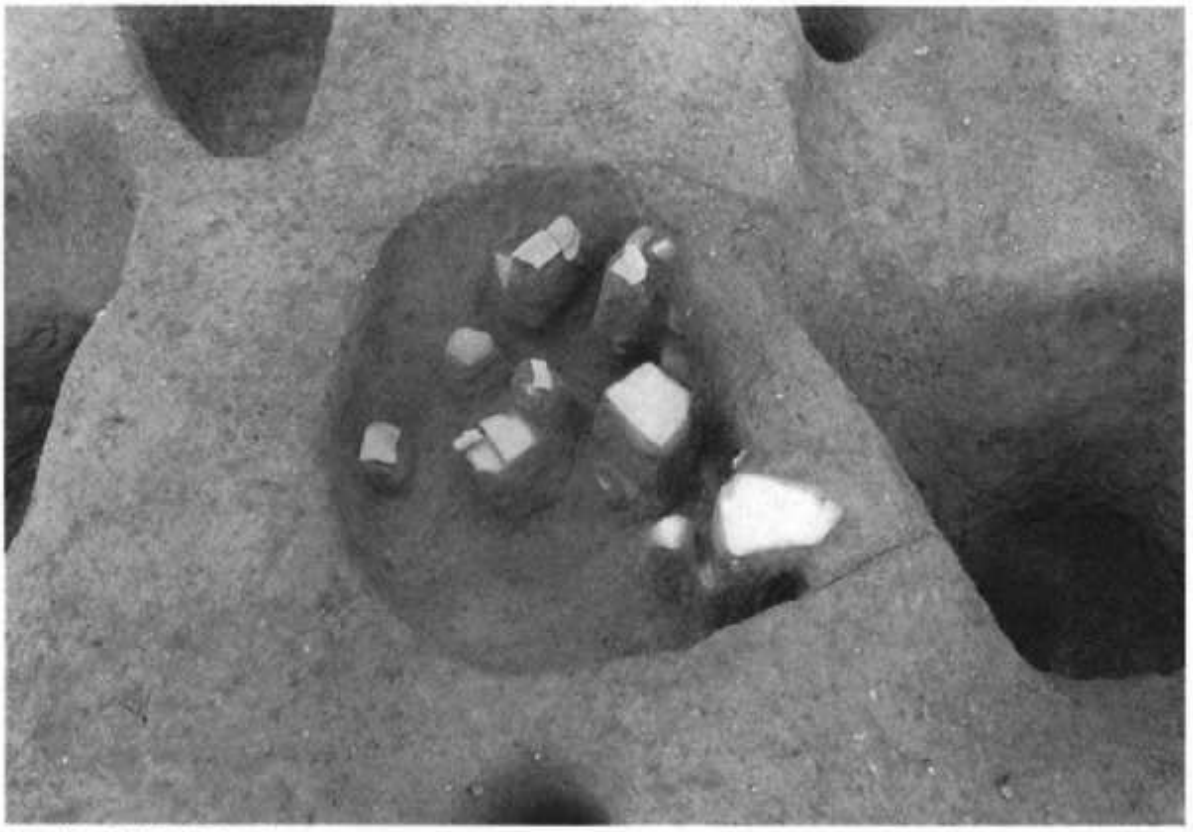
(2) 第15号土壙（西から）

(1) 第15号土壙完掘後（北から）

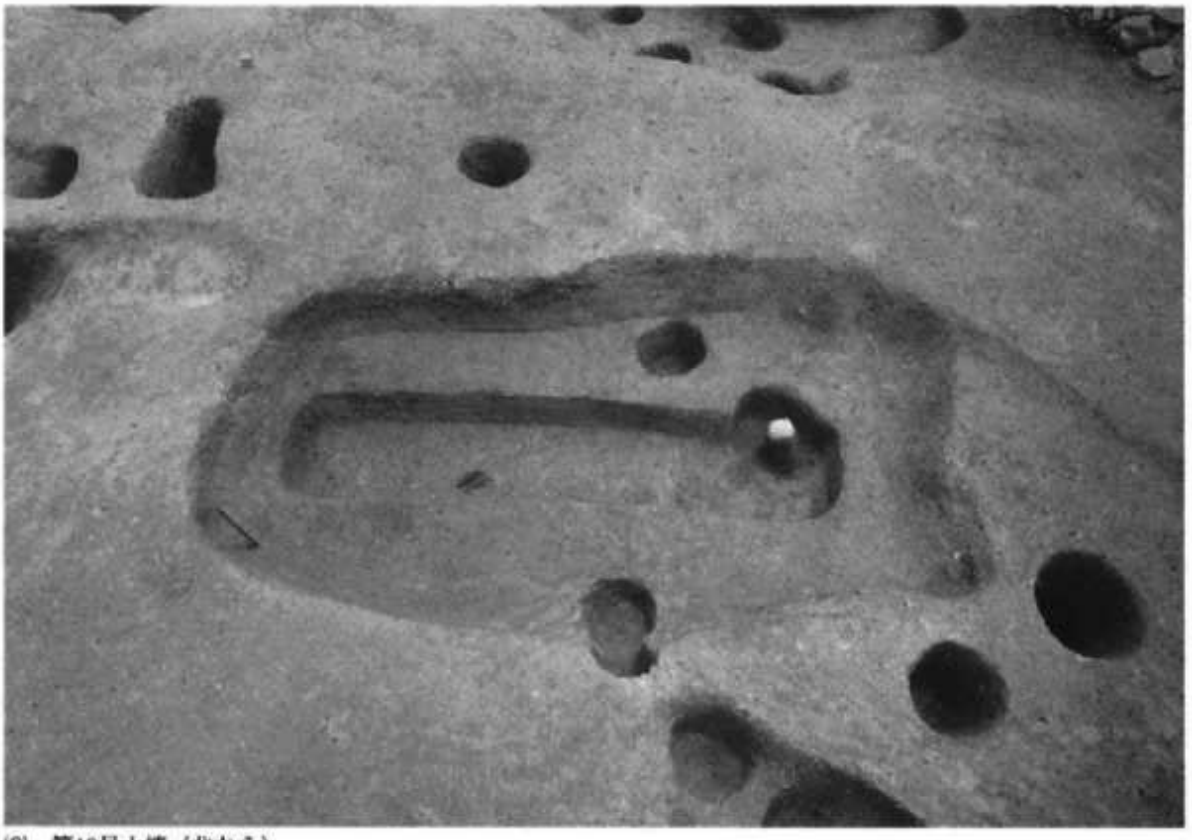
(2) 第16号土壙（東から）

(1) 第17号土壙（南西から）

(2) 第17号土壙土器出土状態（南西から）

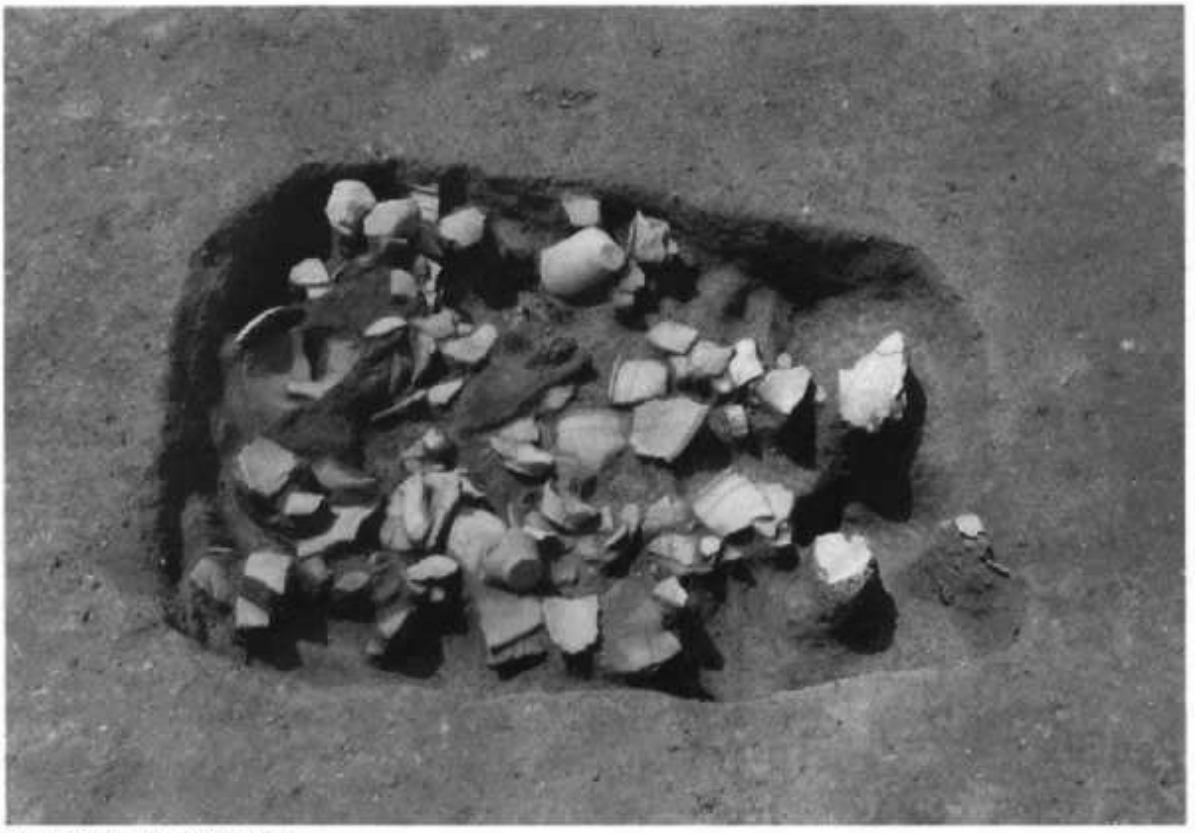


(1) 第18号土壙（西から）



(2) 第19号土壙（北から）

(1) 第20号土壙（北東から）



(2) 第21号土壙（北西から）

(1) 第22号土壙（北から）

(2) 第23号土壙（南東から）

(1) 第24号土壙（北から）

(2) 第25号土壙（東から）

(1) 第26号土壙（北東から）

(2) 第27号土壙（南から）

(1) 第28号土壙と第３号集石炉（北から）

(2) 第28号土壙内蠢Ｂ式土器出土状態（西から）

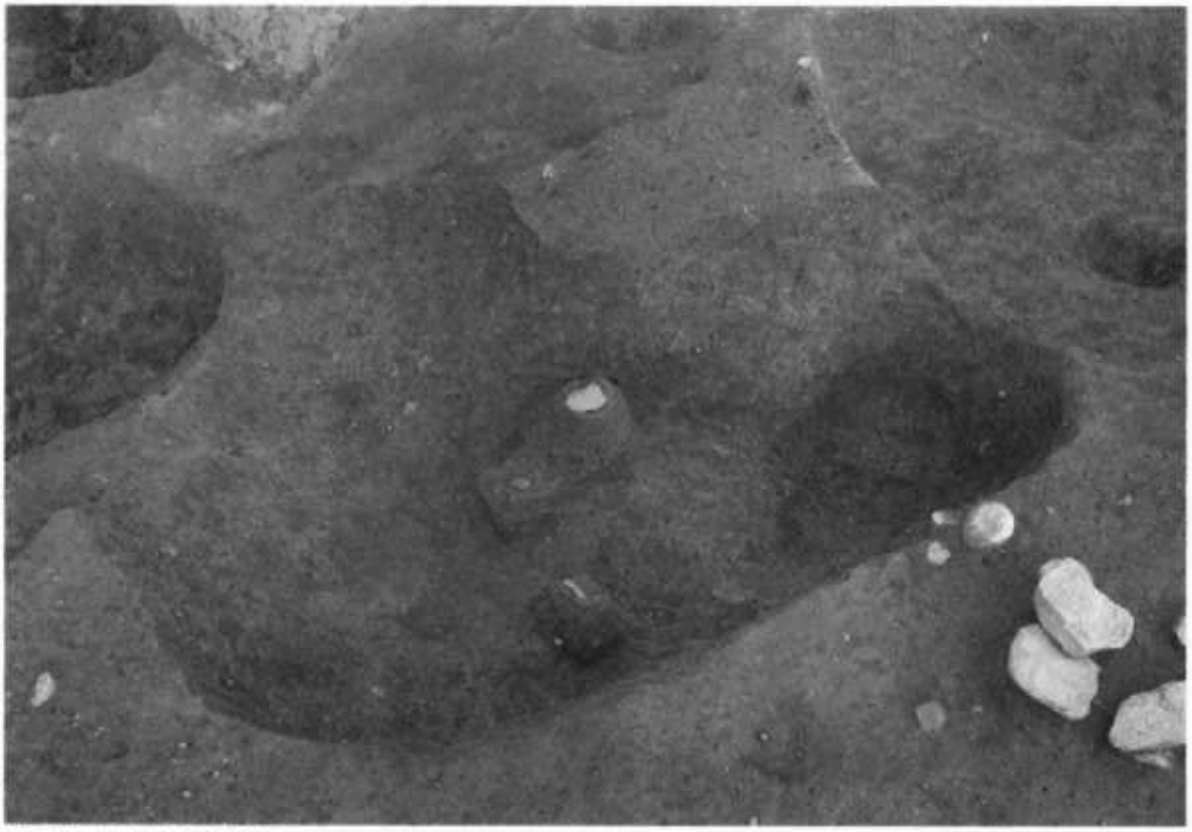
(1) 第29号土壙（東から）

(2) 第30号土壙（東から）

(1) 第31号土壙（東から）

(2) 第32号土壙（西から）

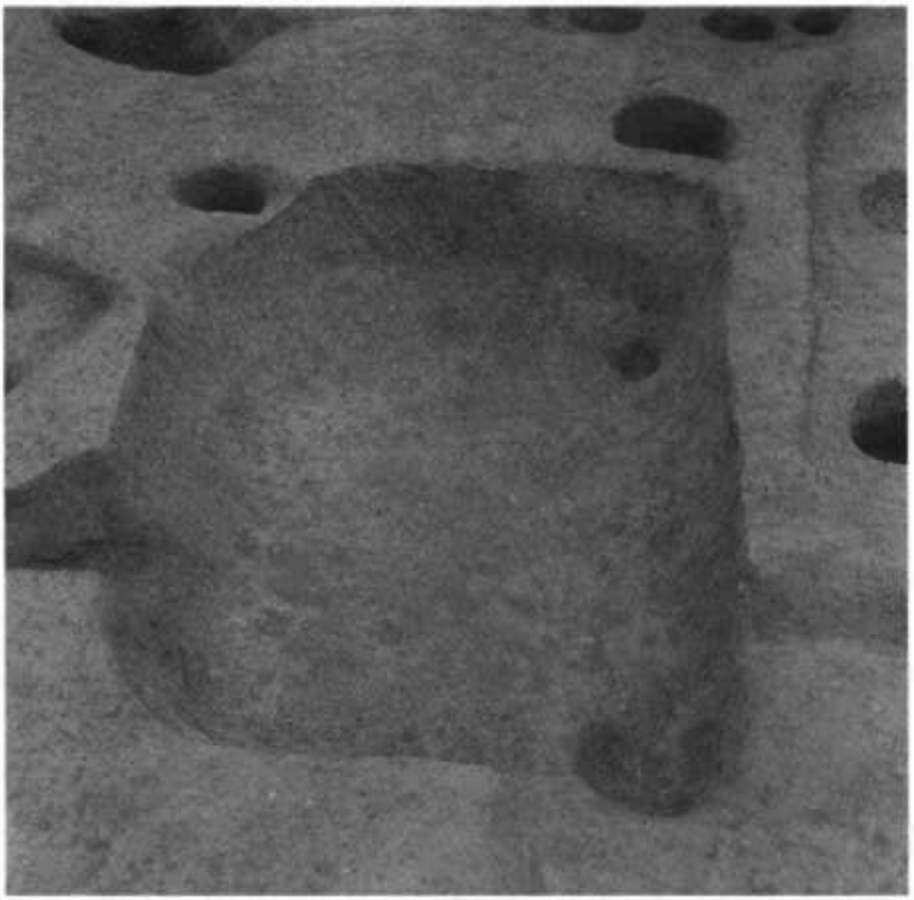
(1) 第33号土壙（東から）



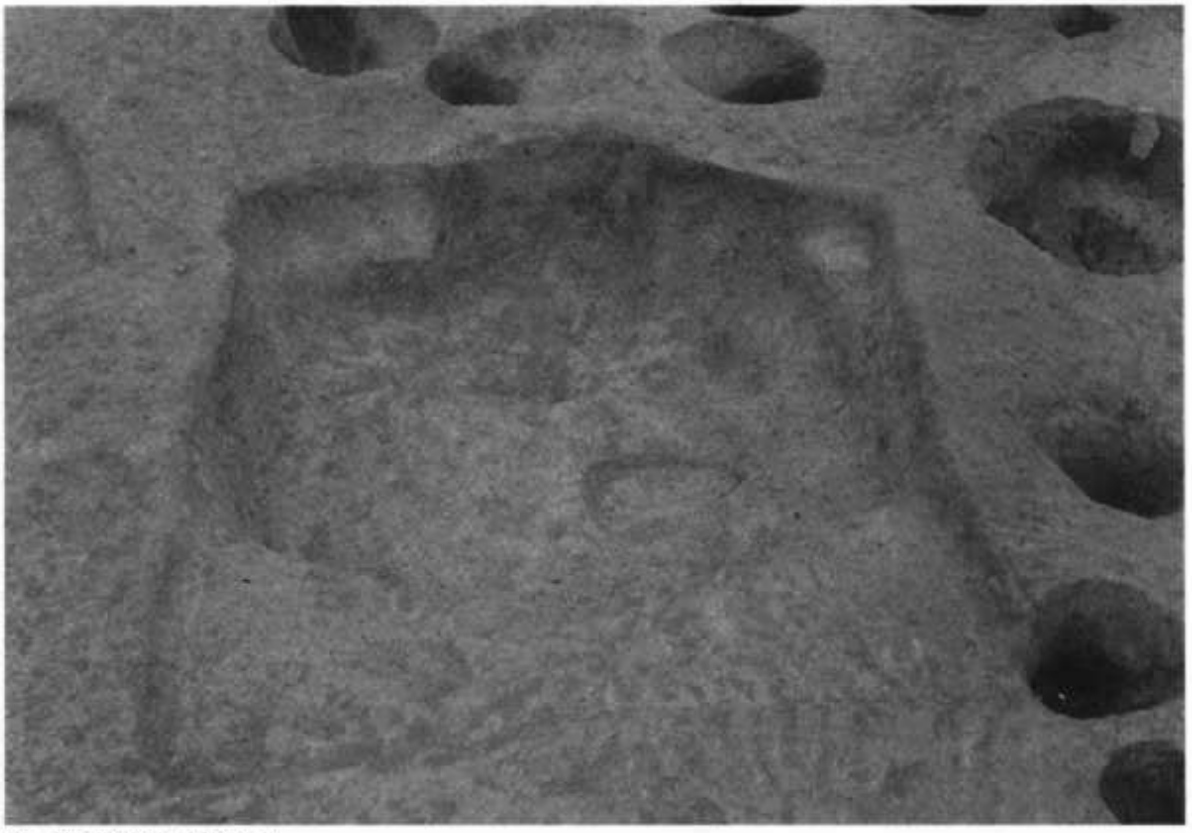
(2) 第34号土壙（西から）

(1) 第35号土壙（東から）

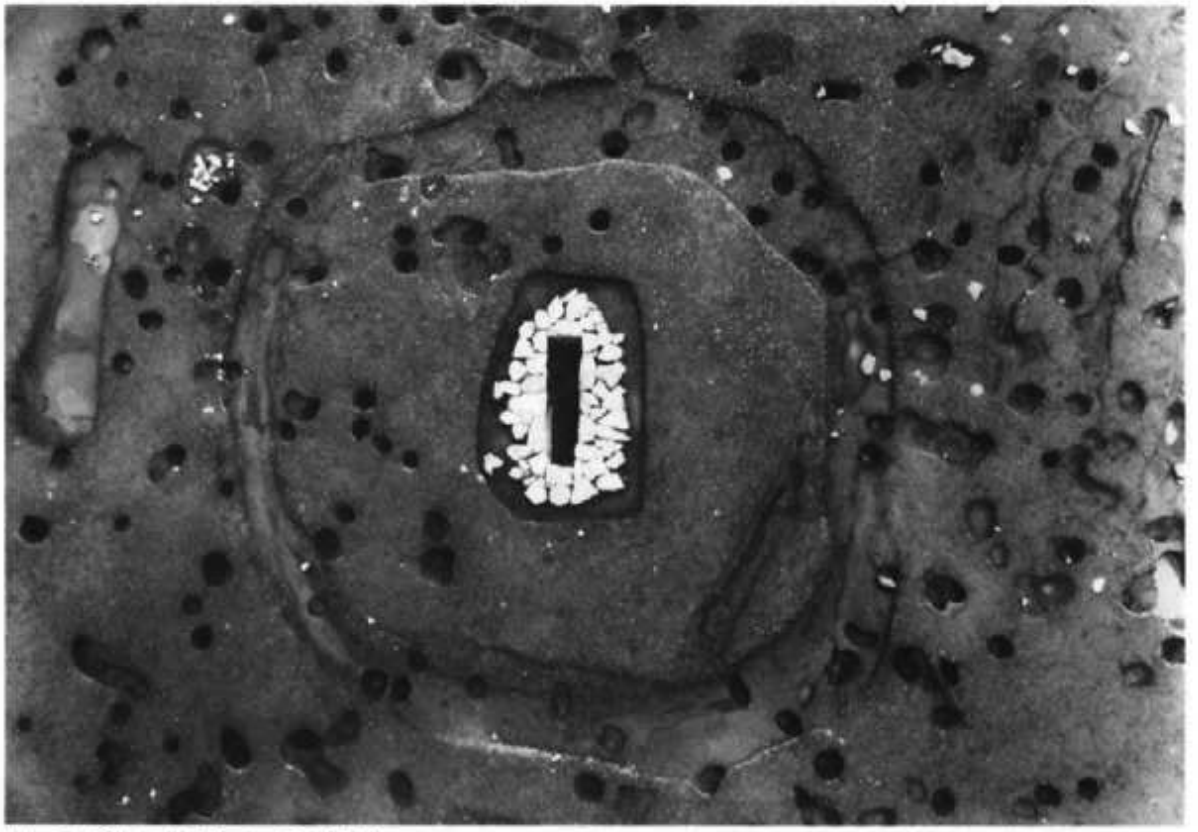
(2) 第36号土壙（東から）



(1) 第37号土壙
（東から）



(2) 第38号土壙（南から）



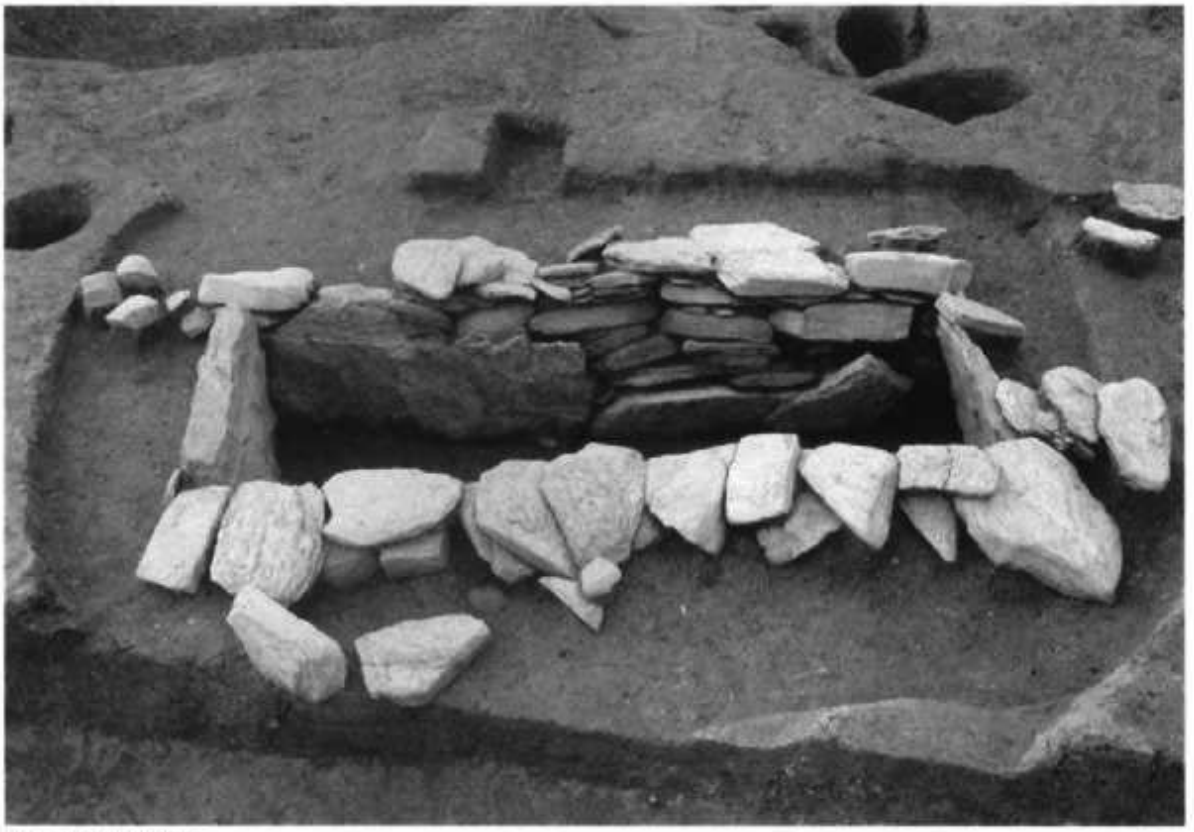
(1) C１全景（上空から　気球写真）

(2) C１埋葬主体部（南から）

(1) C１埋葬主体部（西から）

(2) C２（南から）

(1) C２盖石除去後（南から）



(2) C３（北から）

(1) 中原1号墳発掘前の残存状況（西から）

(2) 中原1号墳発掘前の残存状況（南から）

(1) 中原１号墳完掘後全景（南東から）

(2) 中原１号墳玄室奥壁と左壁（東から）

(1) 中原1号墳
石室全景（南東から）

(2) 中原1号墳
玄門付近（北東から）

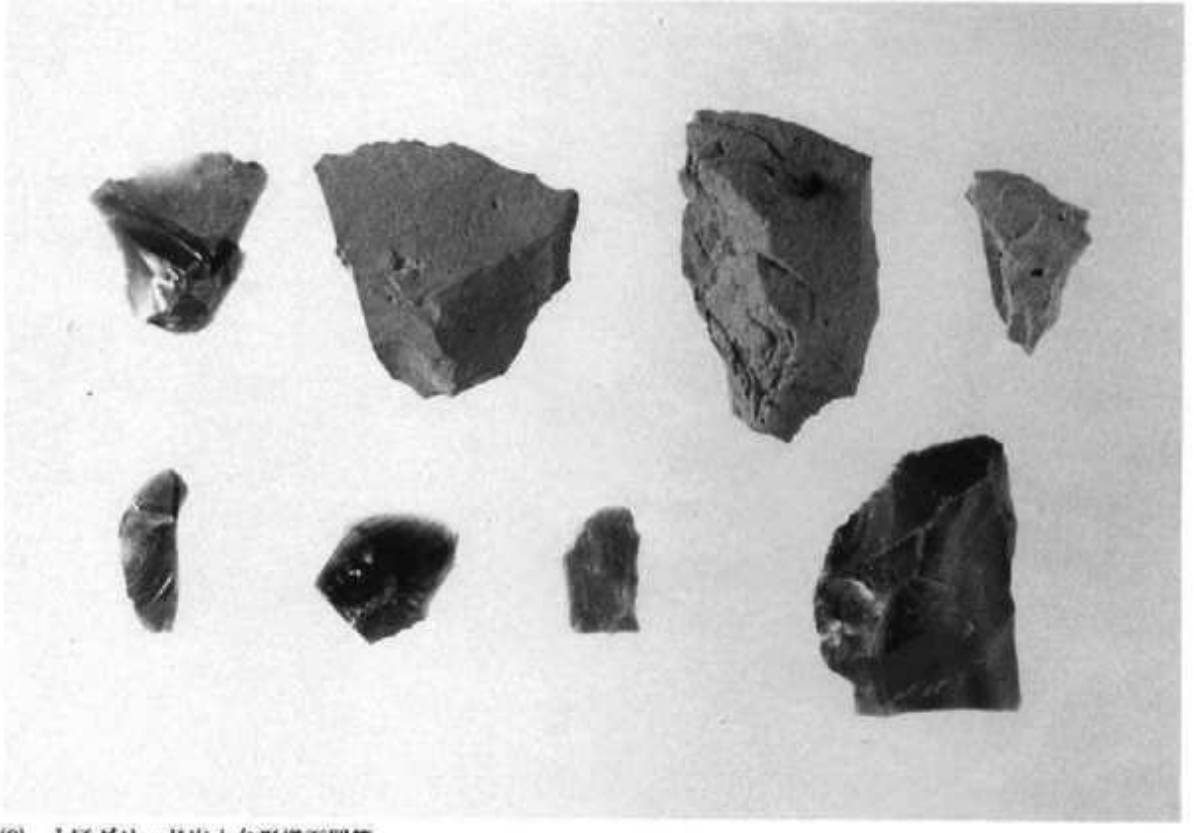
(1) 中原１号墳前庭部土器出土状態（北東から）

(2) 中原１号墳北東側墳丘と周溝の土層（南東から）

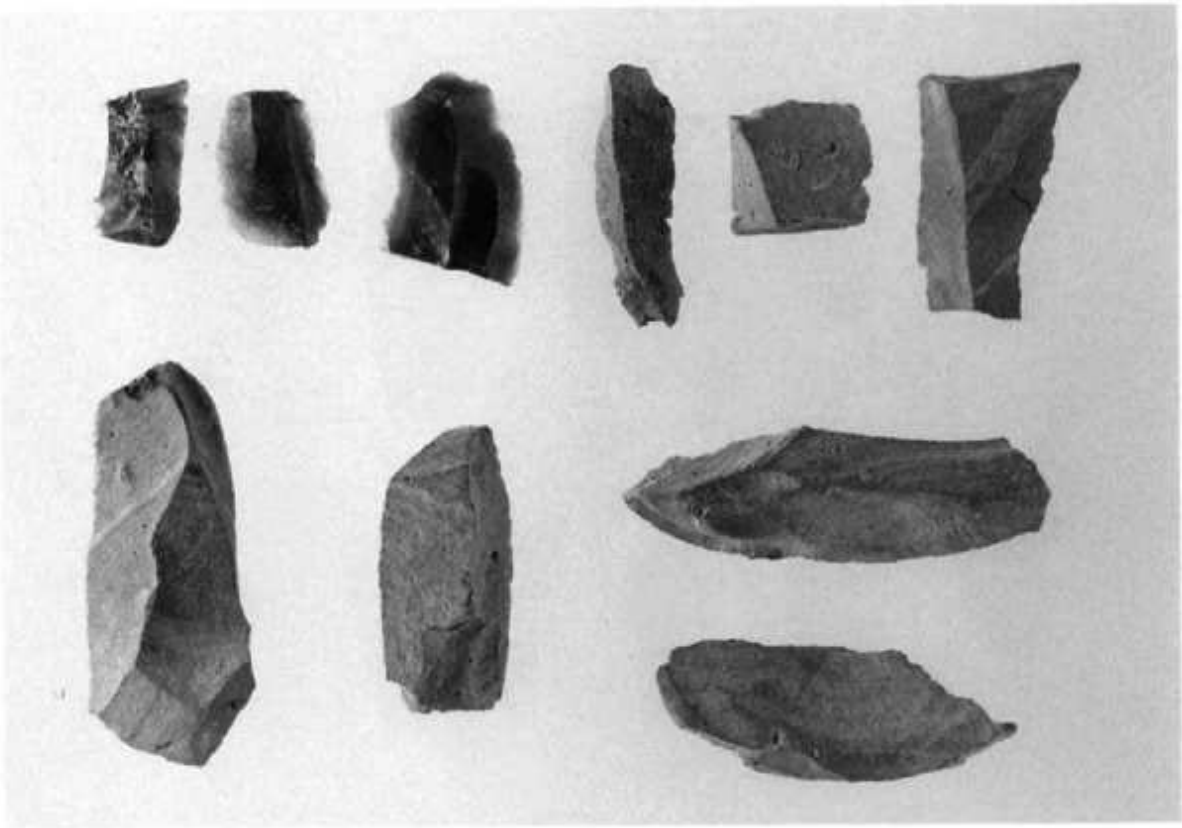
(1)　中原１号墳北西側墳丘と周溝の土層（北東から）

(2)　Ⅱ区第７号竪穴住居跡付近発掘作業状況

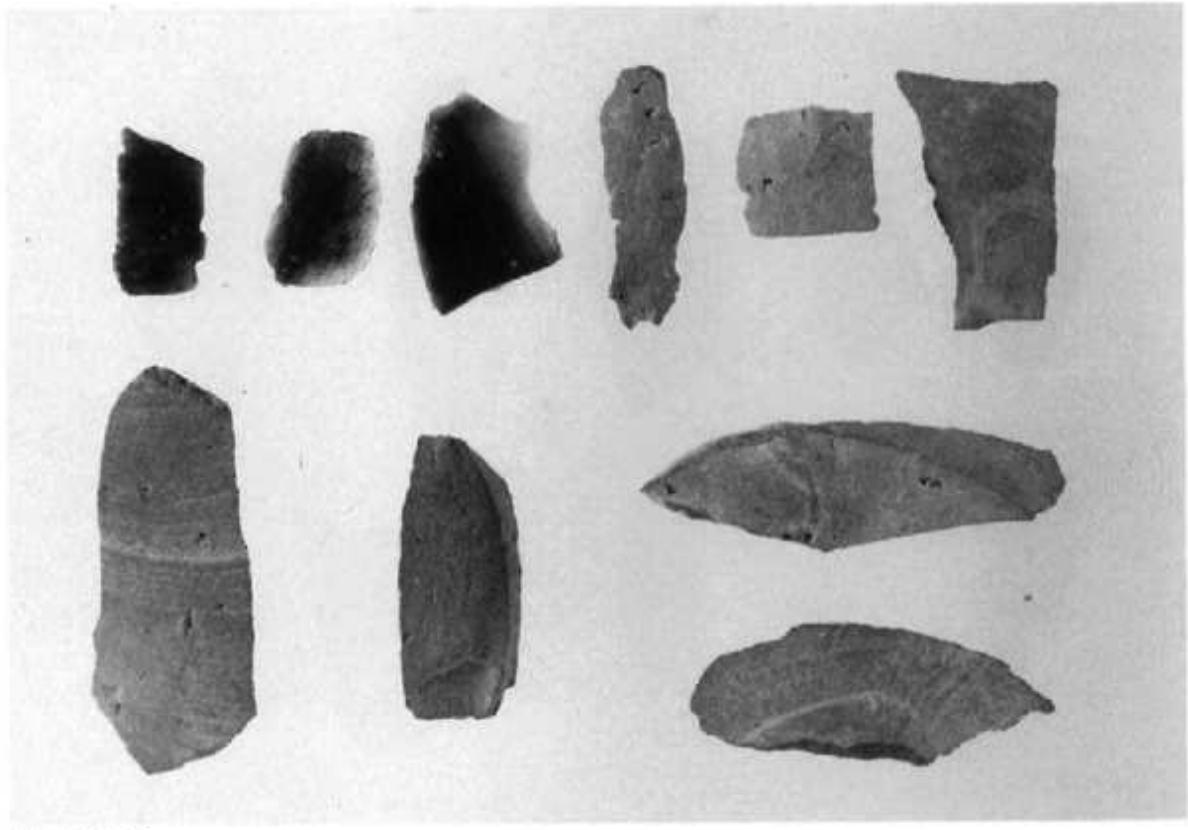
(1) Ⅰ区グリッド出土細石刃



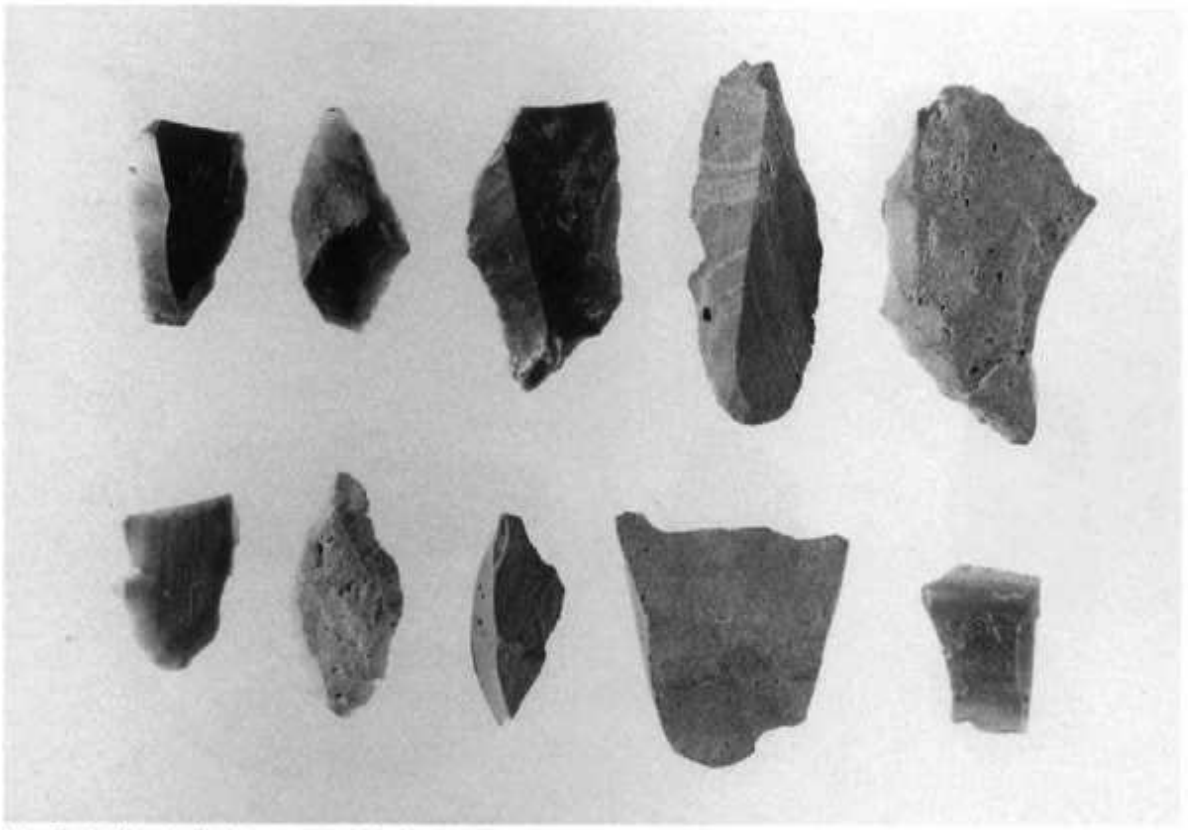
(2) Ⅰ区グリッド出土台形様石器等



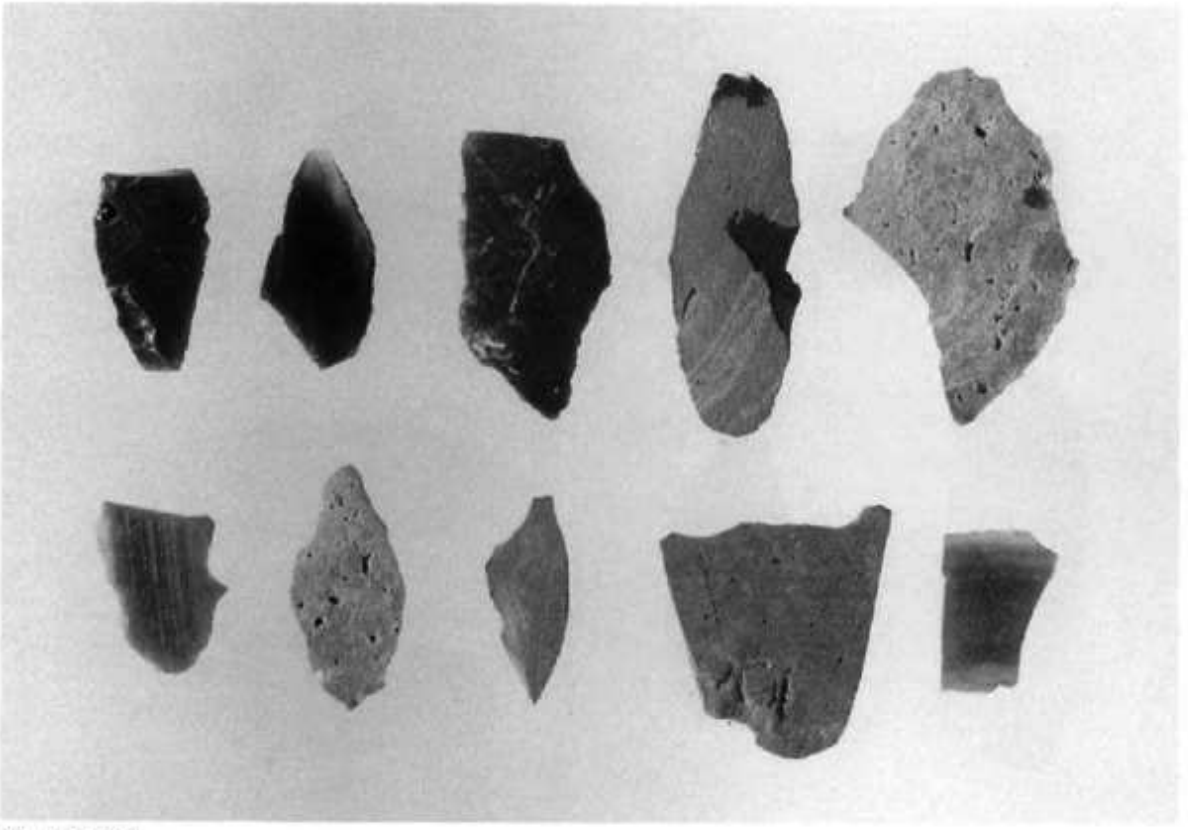
(1) Ⅰ区グリッド出土小型石刃・石刃・翼状剥片



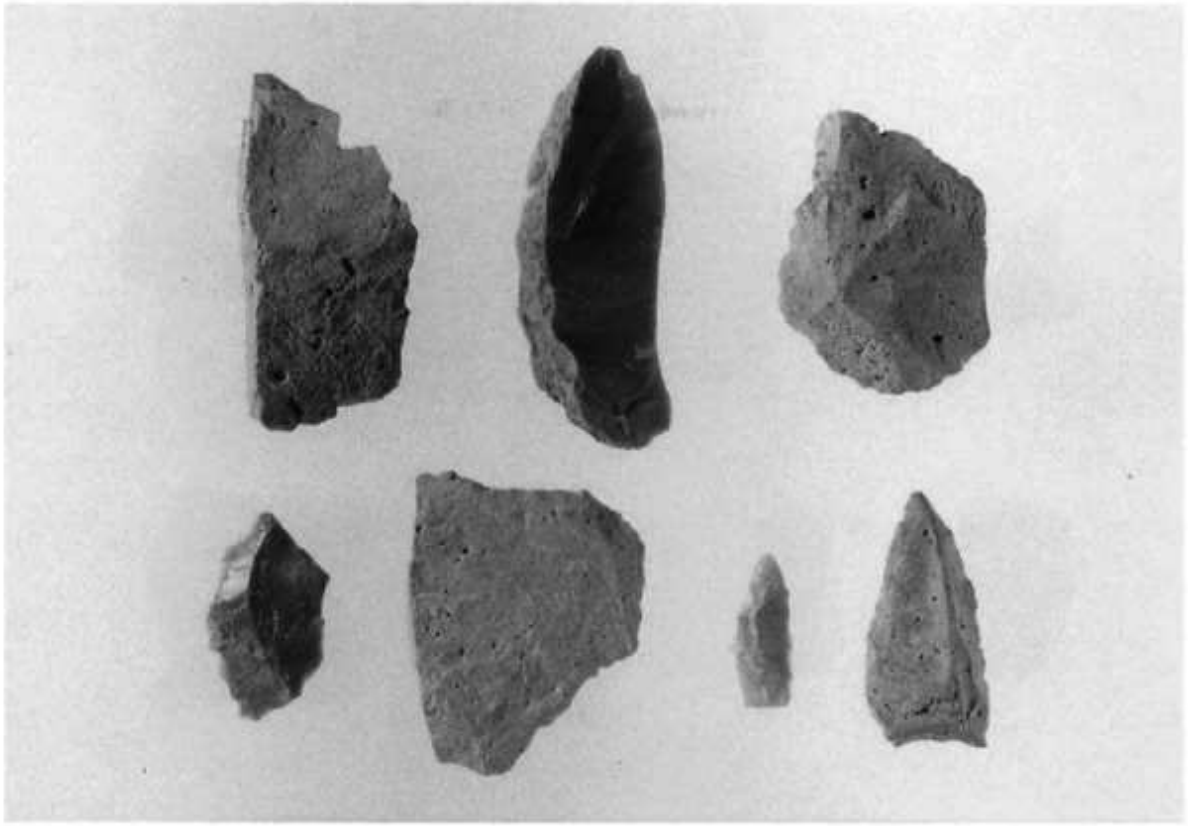
(2) 同上裏面



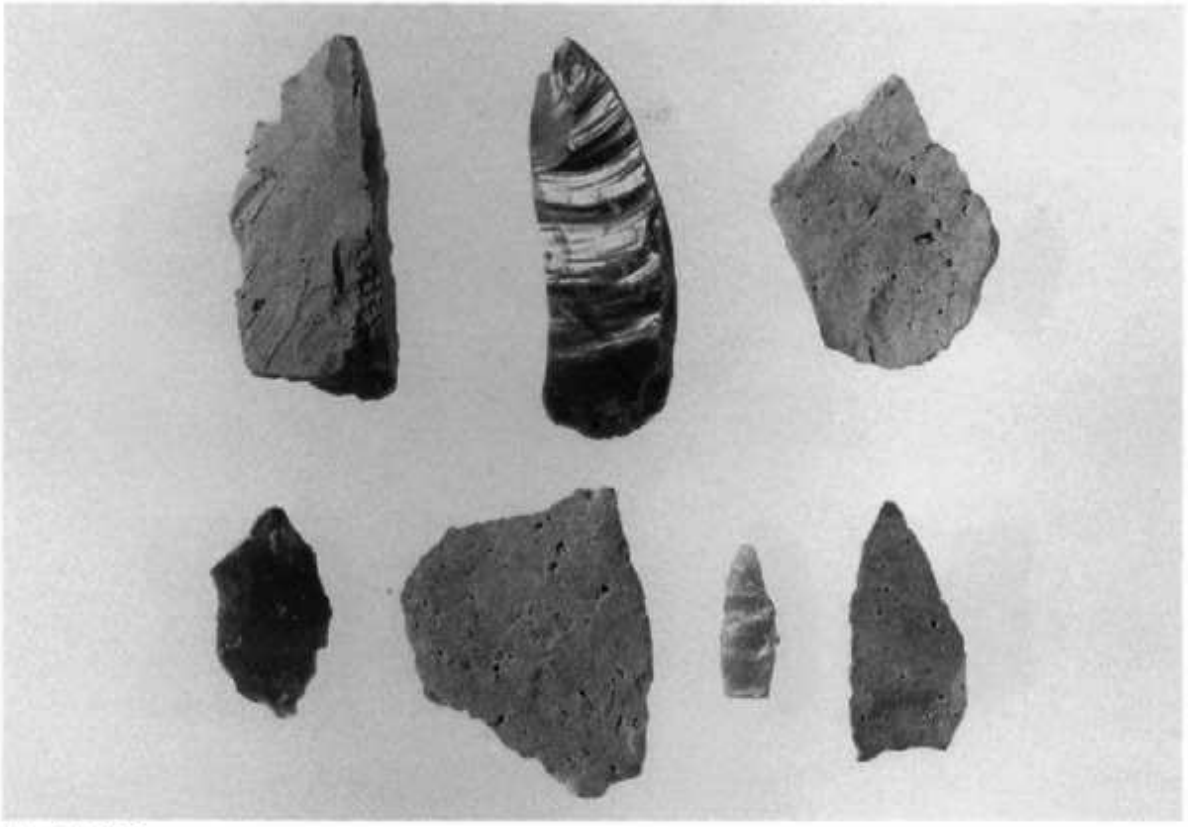
(1)　I区グリッド出土ナイフ形石器・台形石器



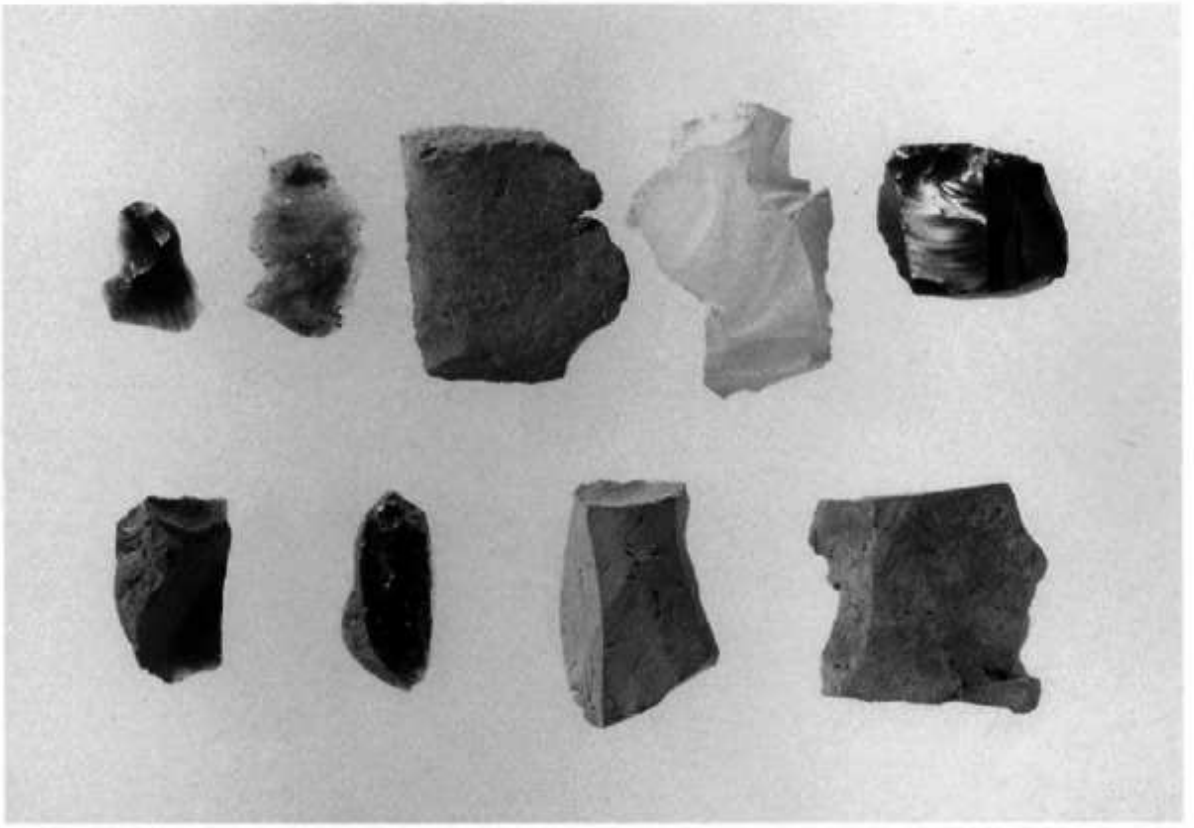
(2)　同上裏面



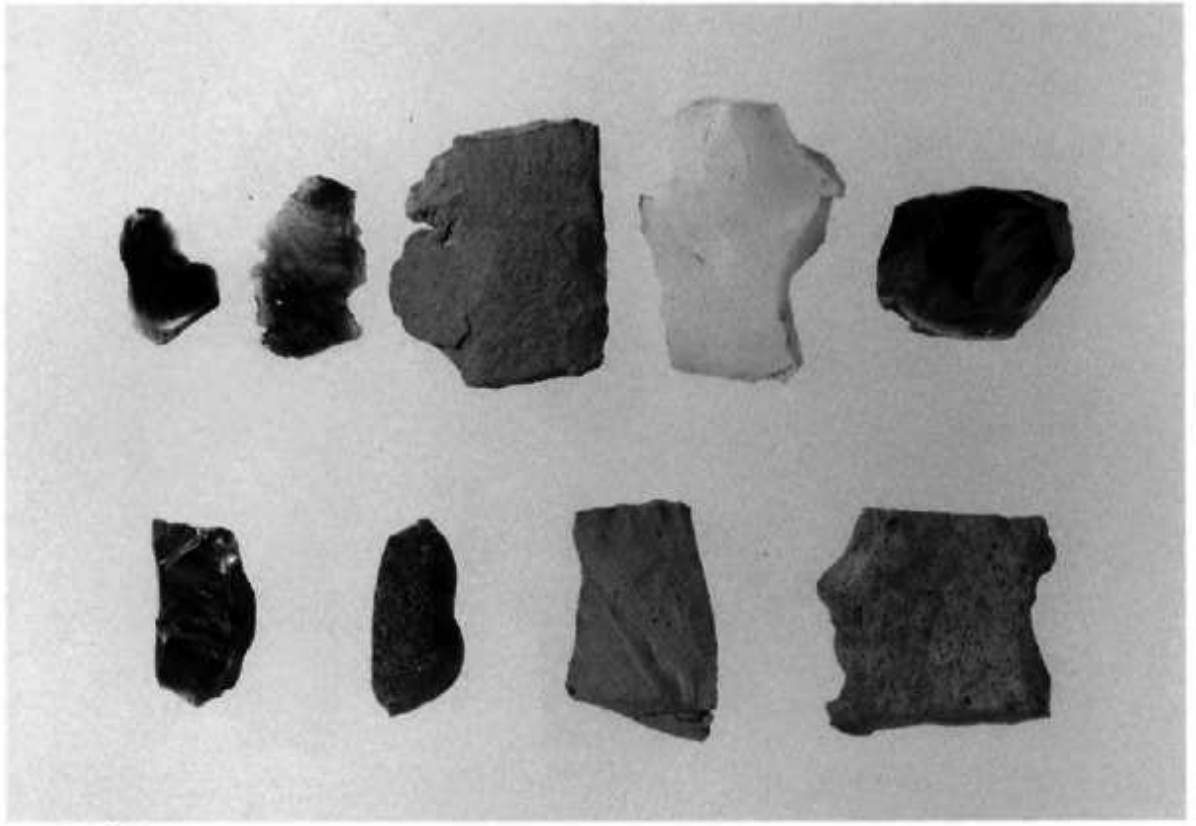
(1) Ⅰ区グリッド出土剥器・尖頭器



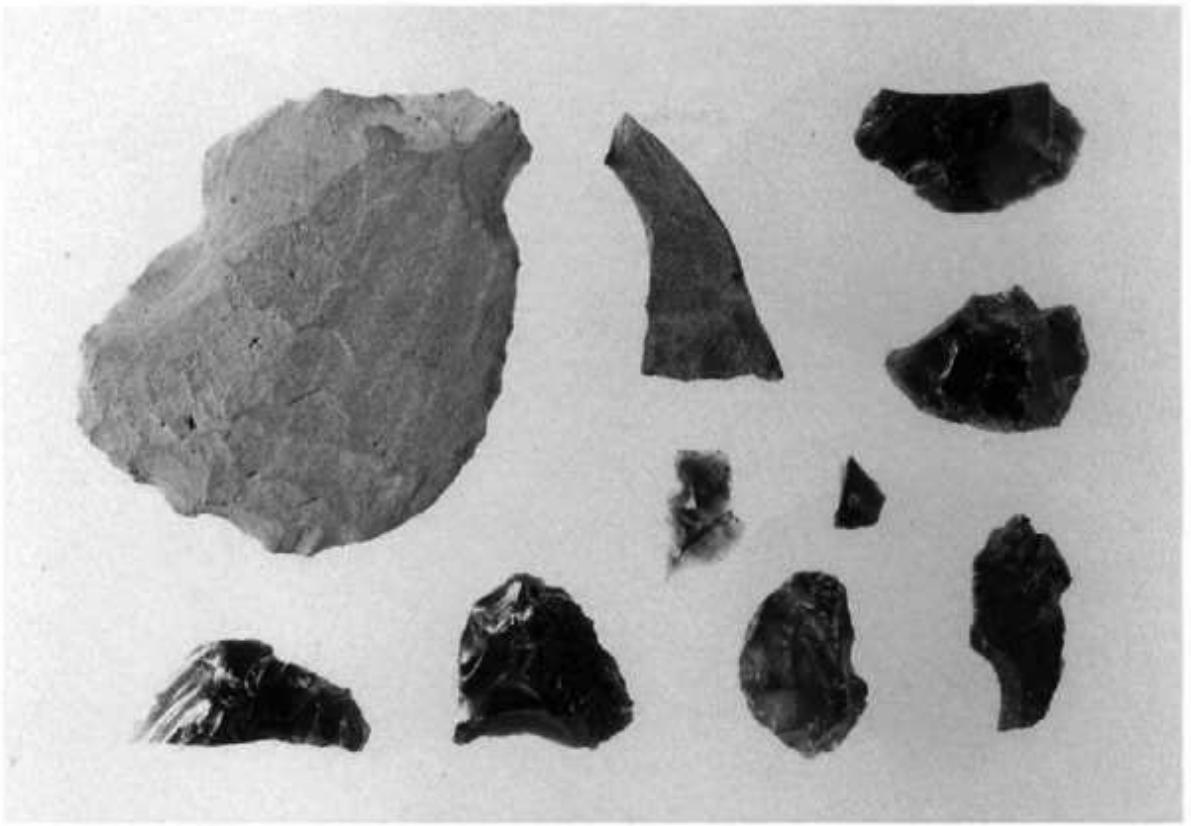
(2) 同上裏面



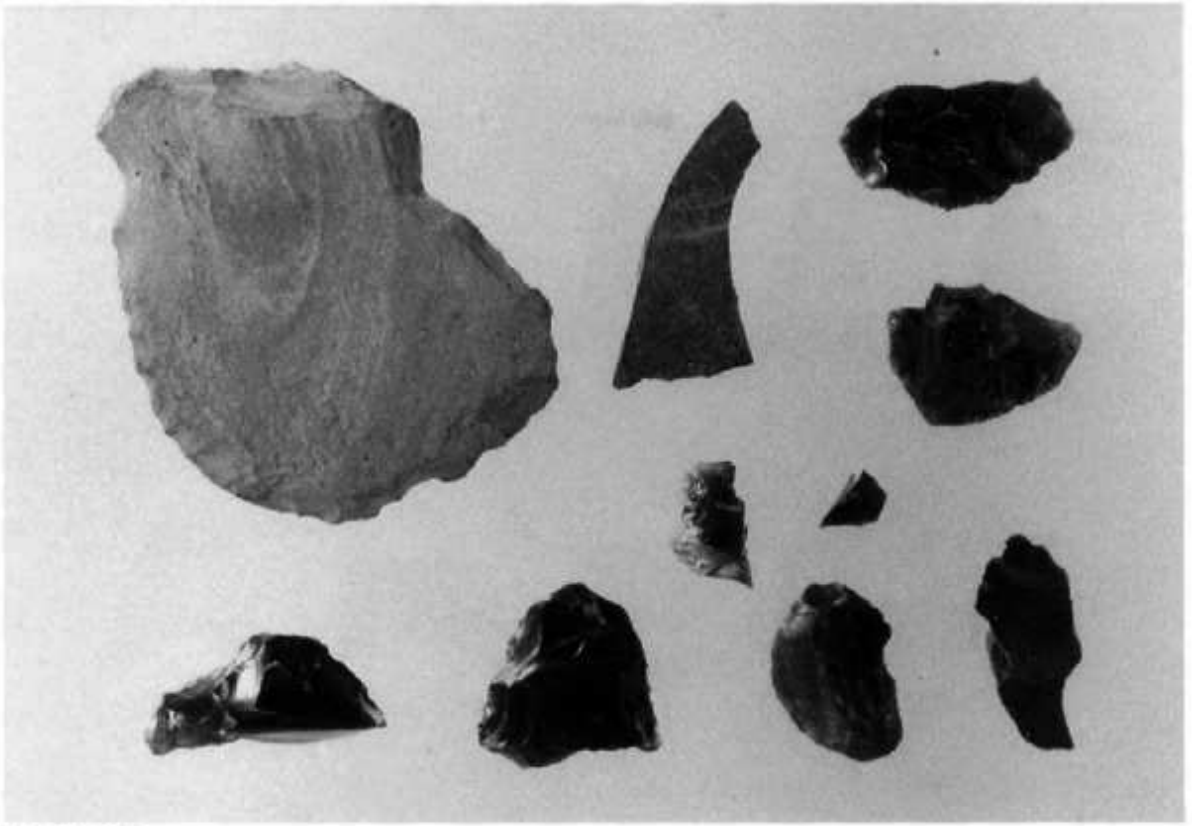
(1)　Ⅰ区グリッド出土掻・削器・石核



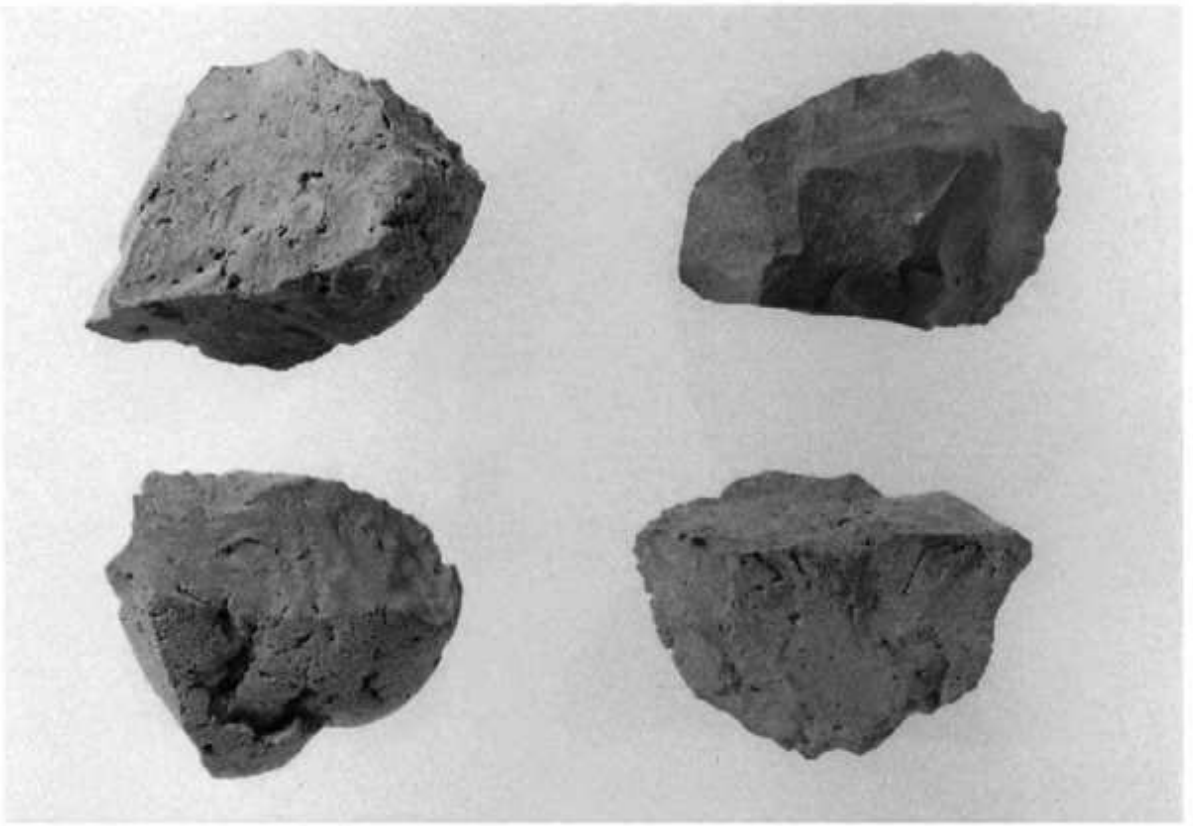
(2)　同上裏面



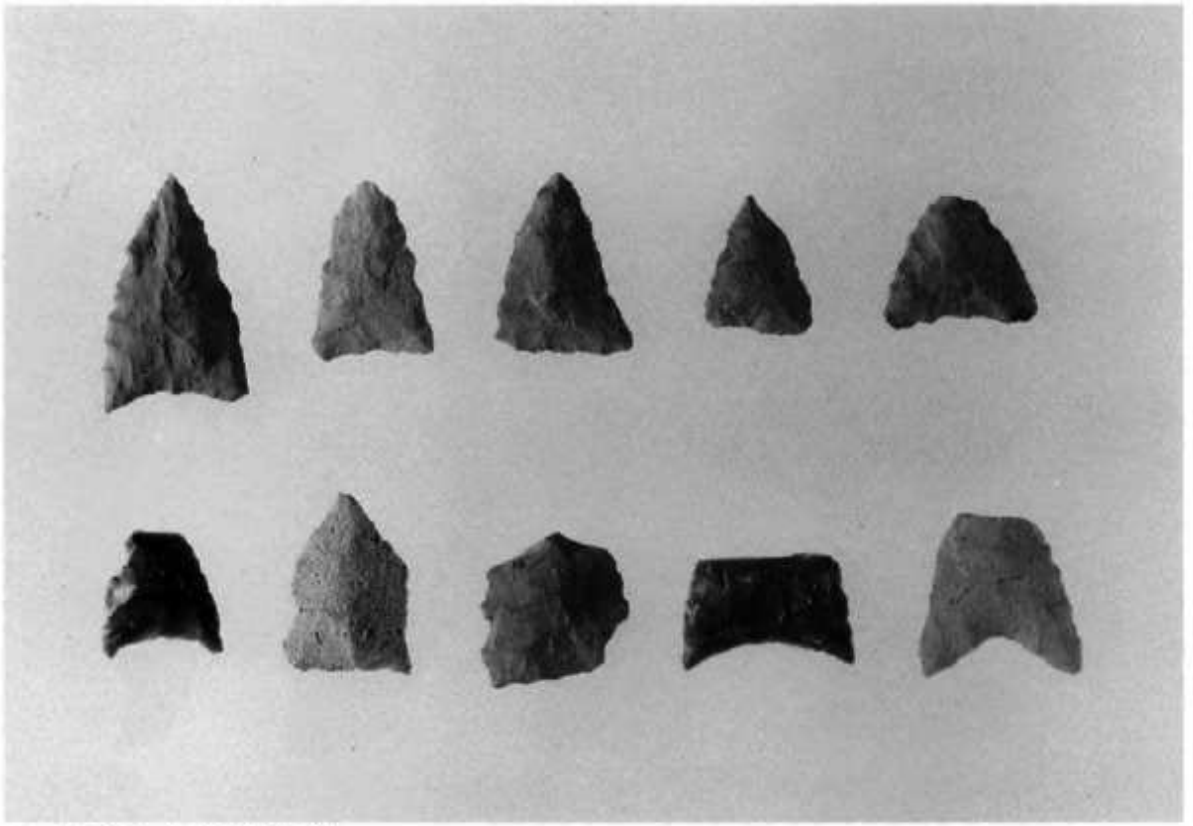
(1)　I区グリッド出土掻・削器



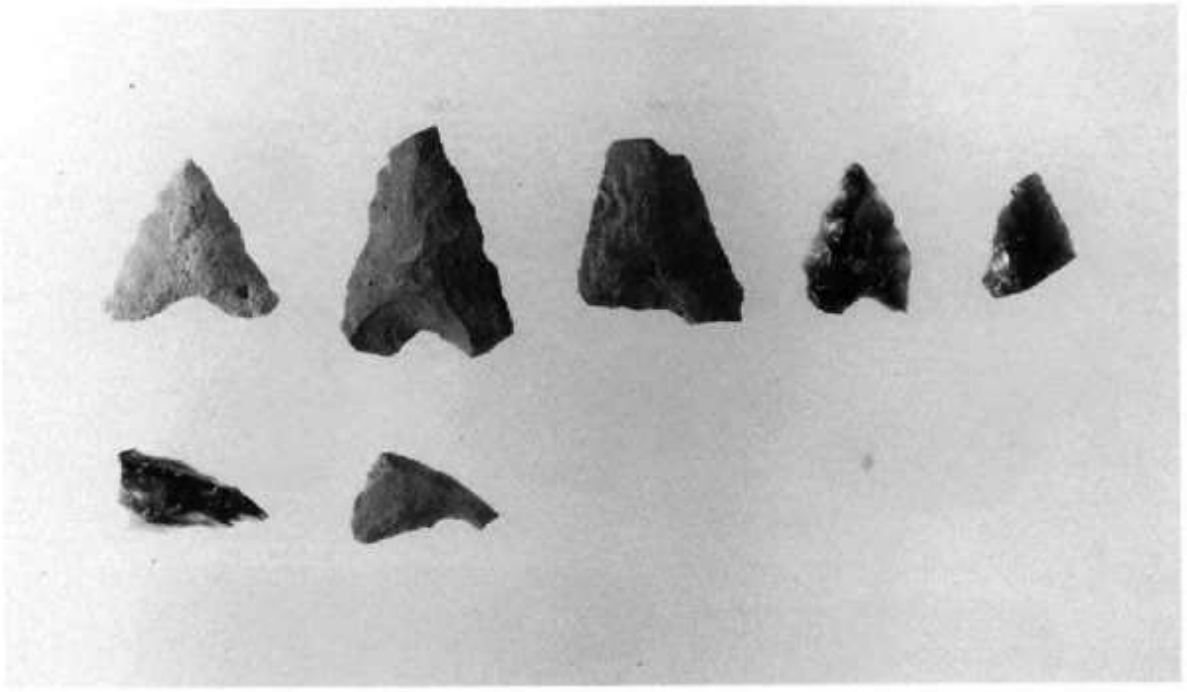
(2)　同上裏面



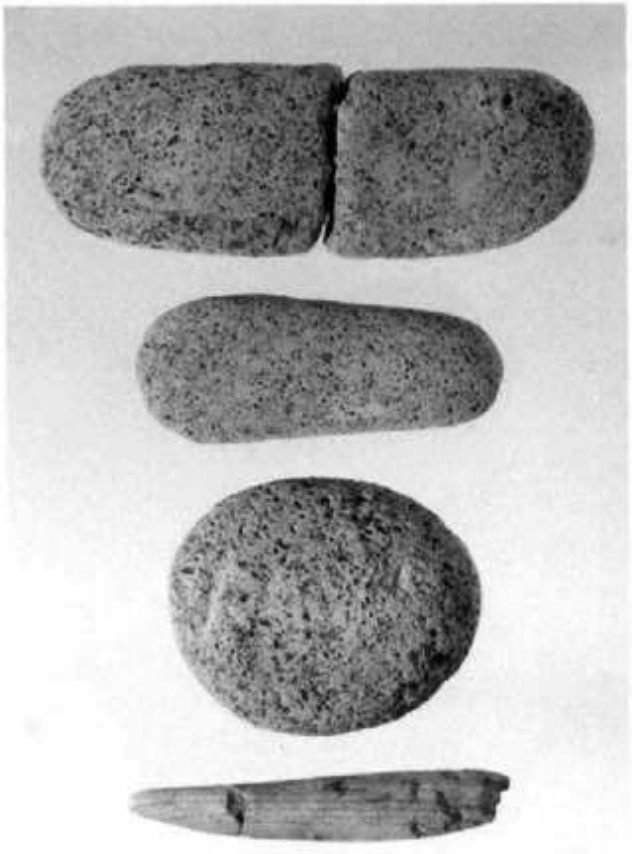
(1)　I区グリッド出土石核



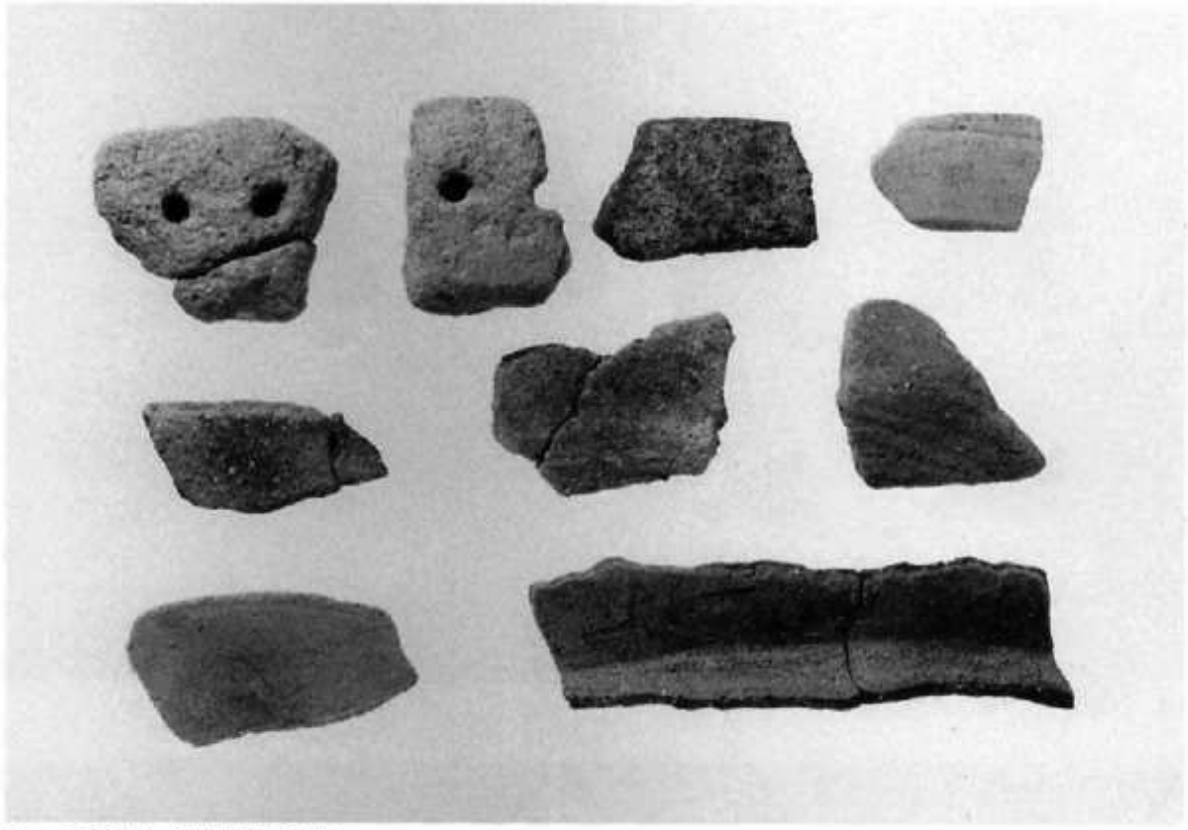
(2)　I区グリッド出土打製石鏃



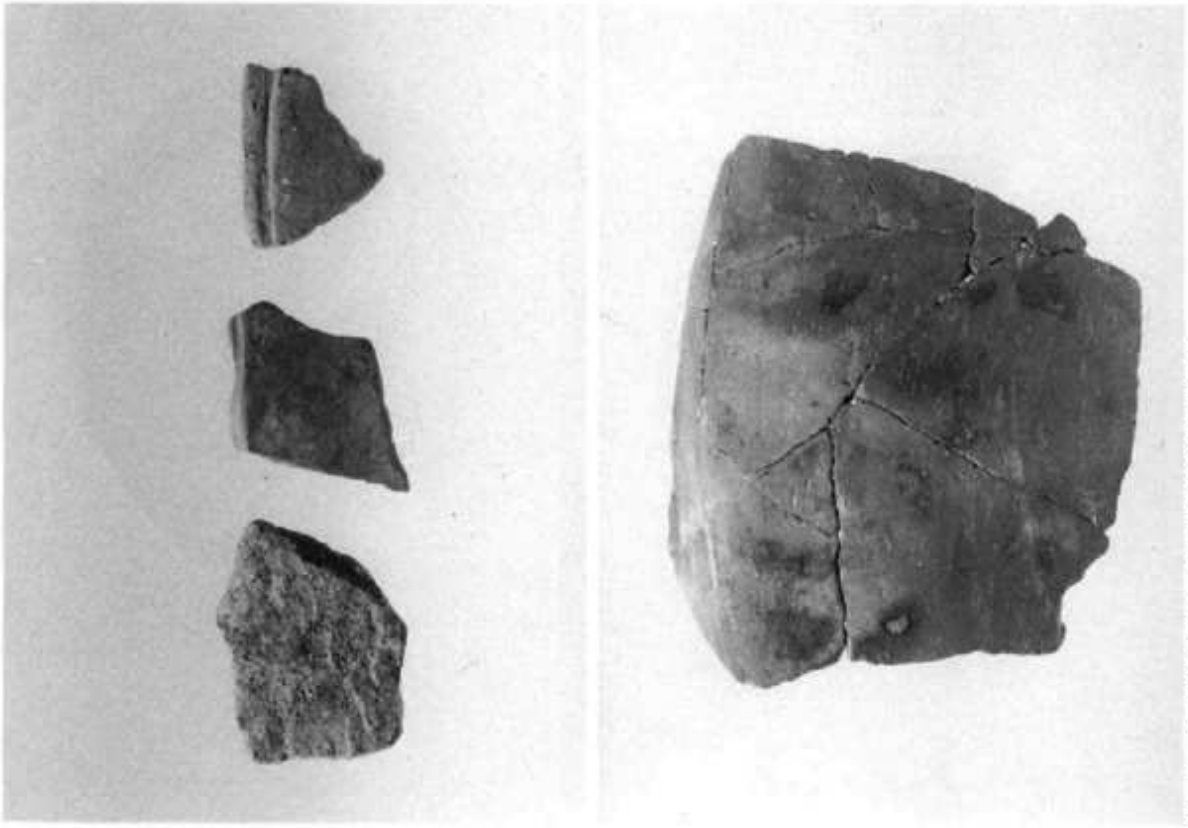
(1)　Ⅰ区グリッド出土打製石鏃



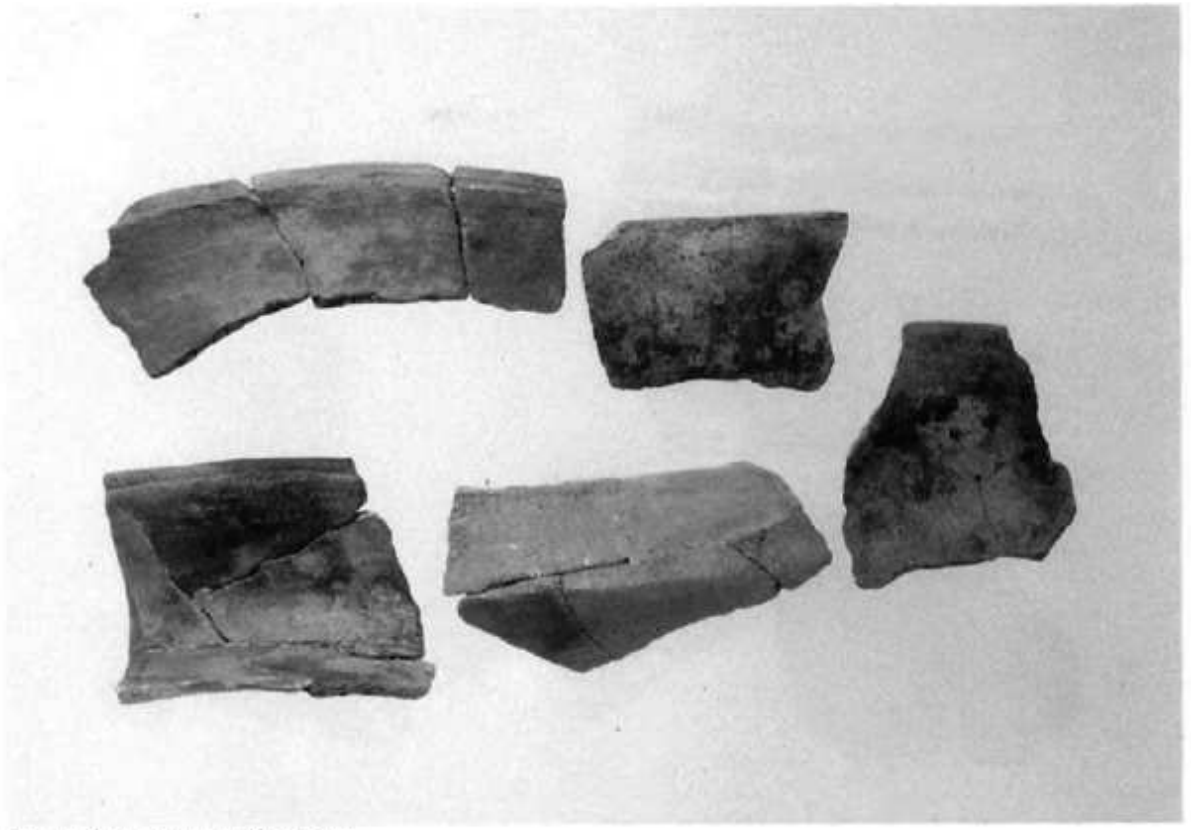
(2)　Ⅰ区グリッド出土棒状石器・磨石・凹石



(1)　I区グリッド出土縄文土器

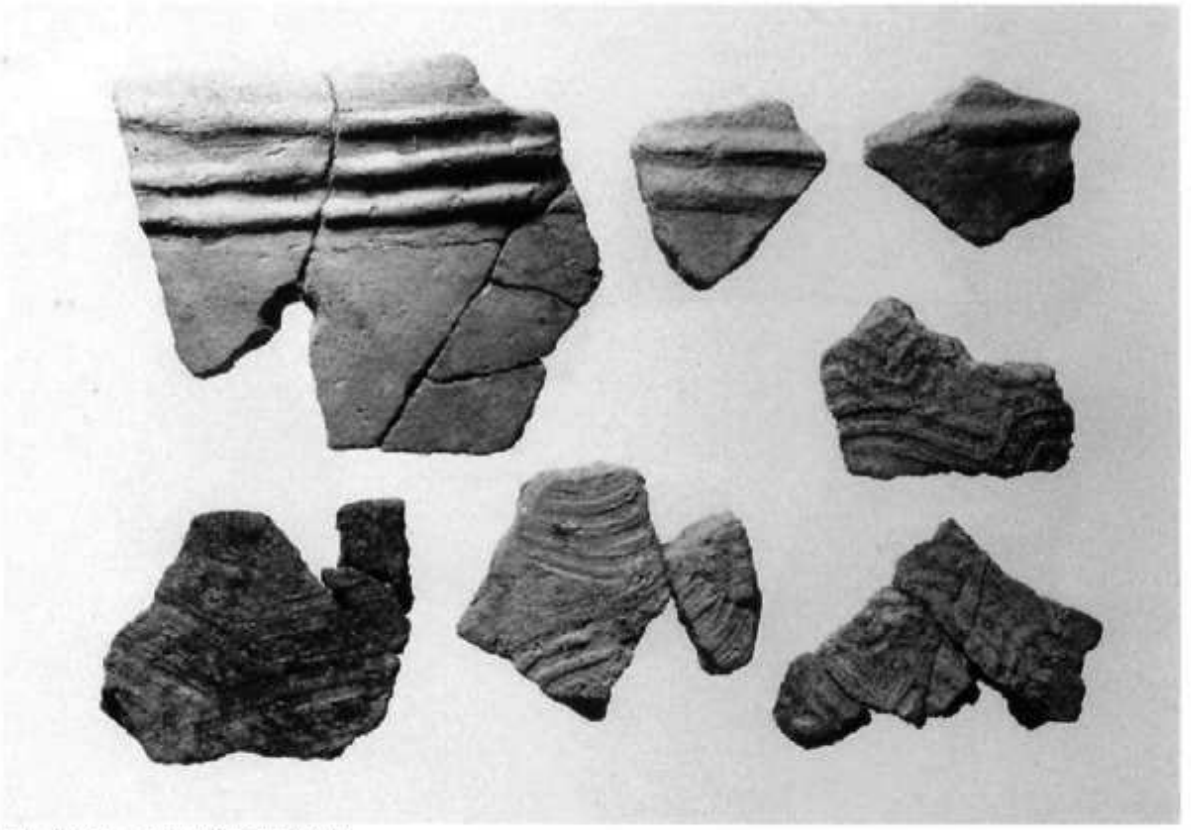


(2)　上：第1号集石炉・第13号住居跡出土土器
　　下：第18号土壙出土縄文晩期浅鉢



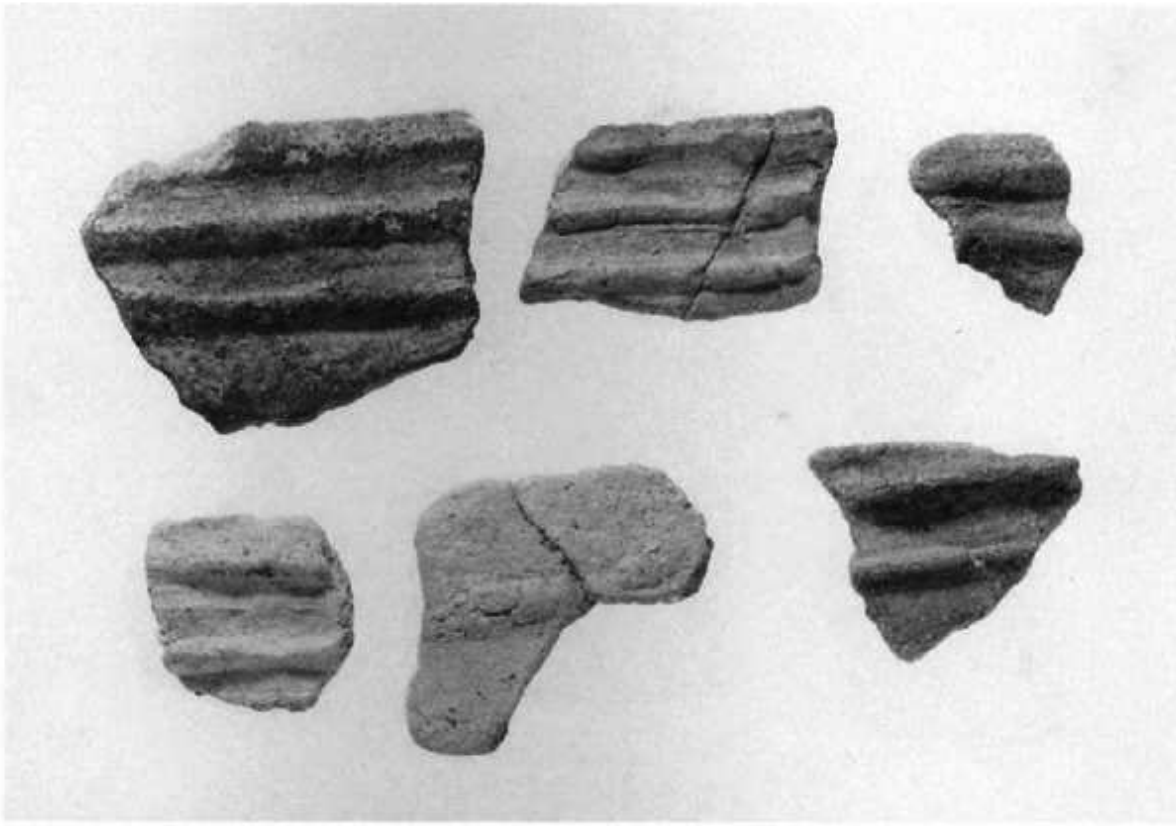
(1) 第18号土壙出土縄文晩期土器

(2) 第28号土壙出土縄文前期轟B式土器

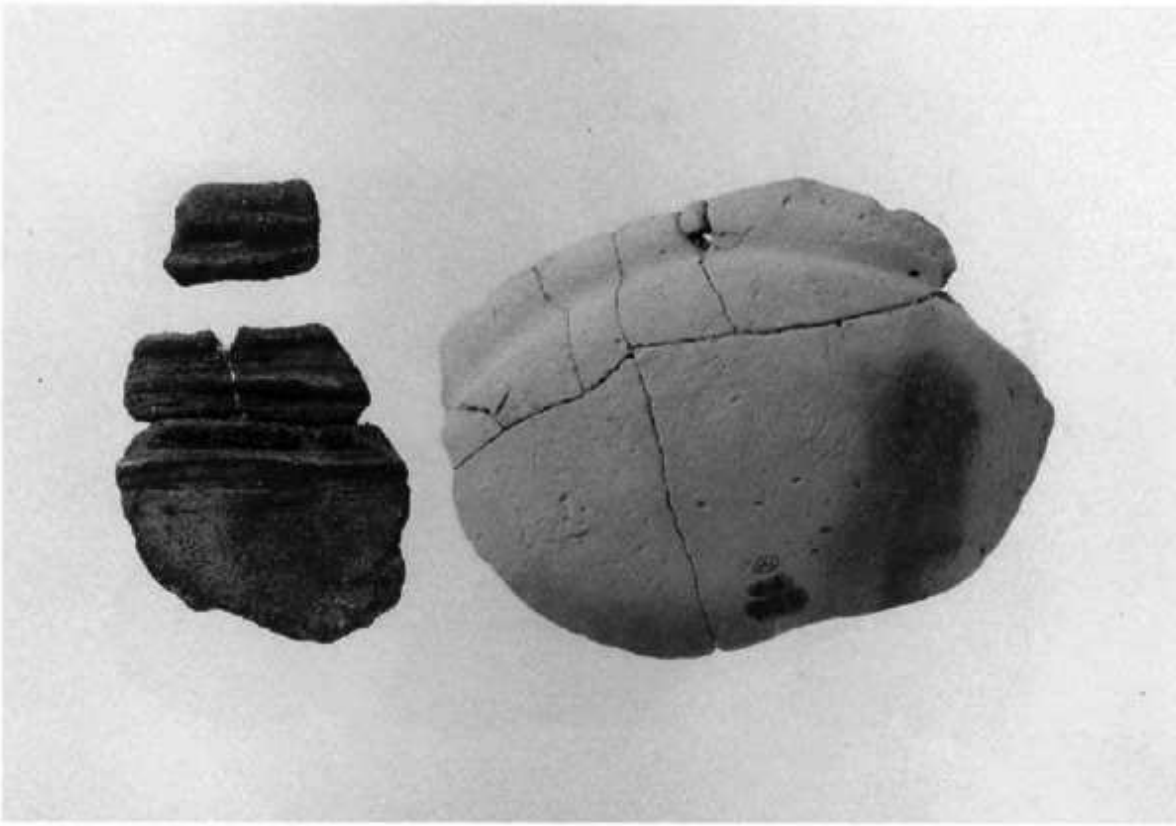


(1) 第28号土壙出土縄文前期土器

(2) 同上裏面



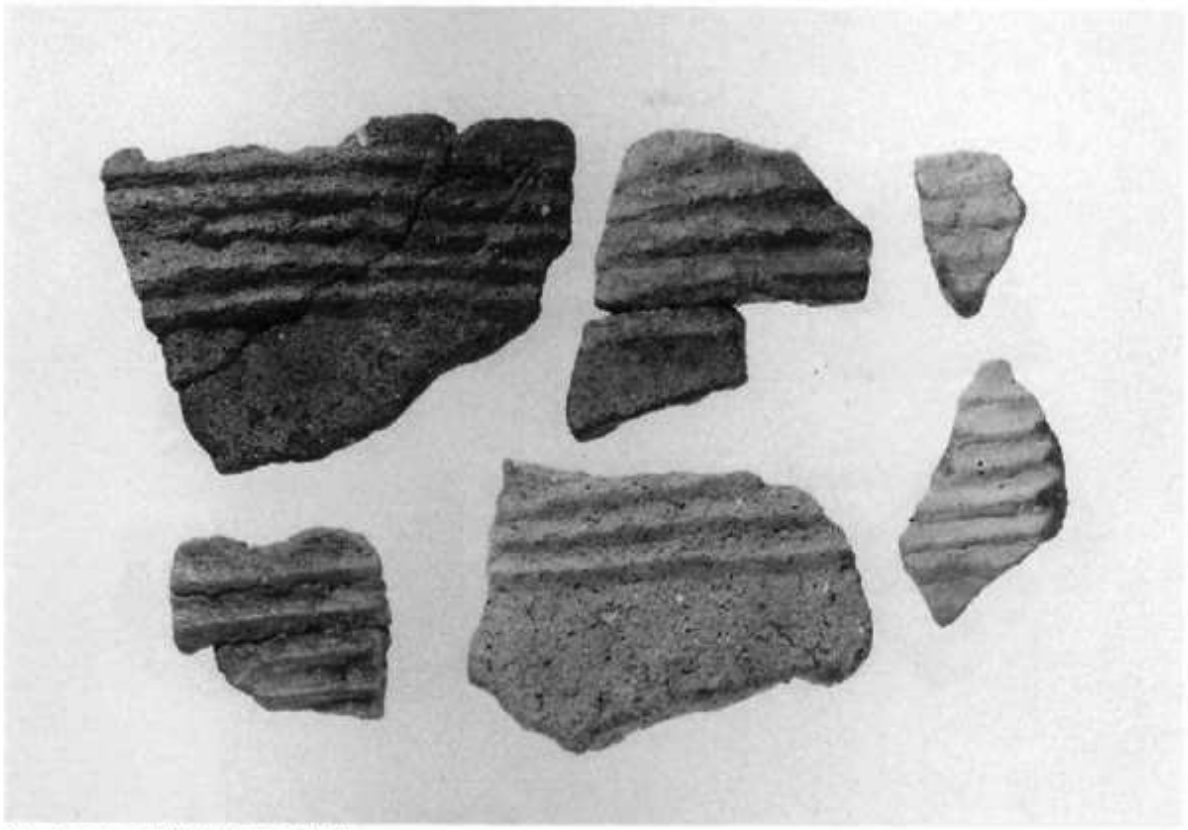
(1) 第30号土壙出土縄文前期轟B式土器



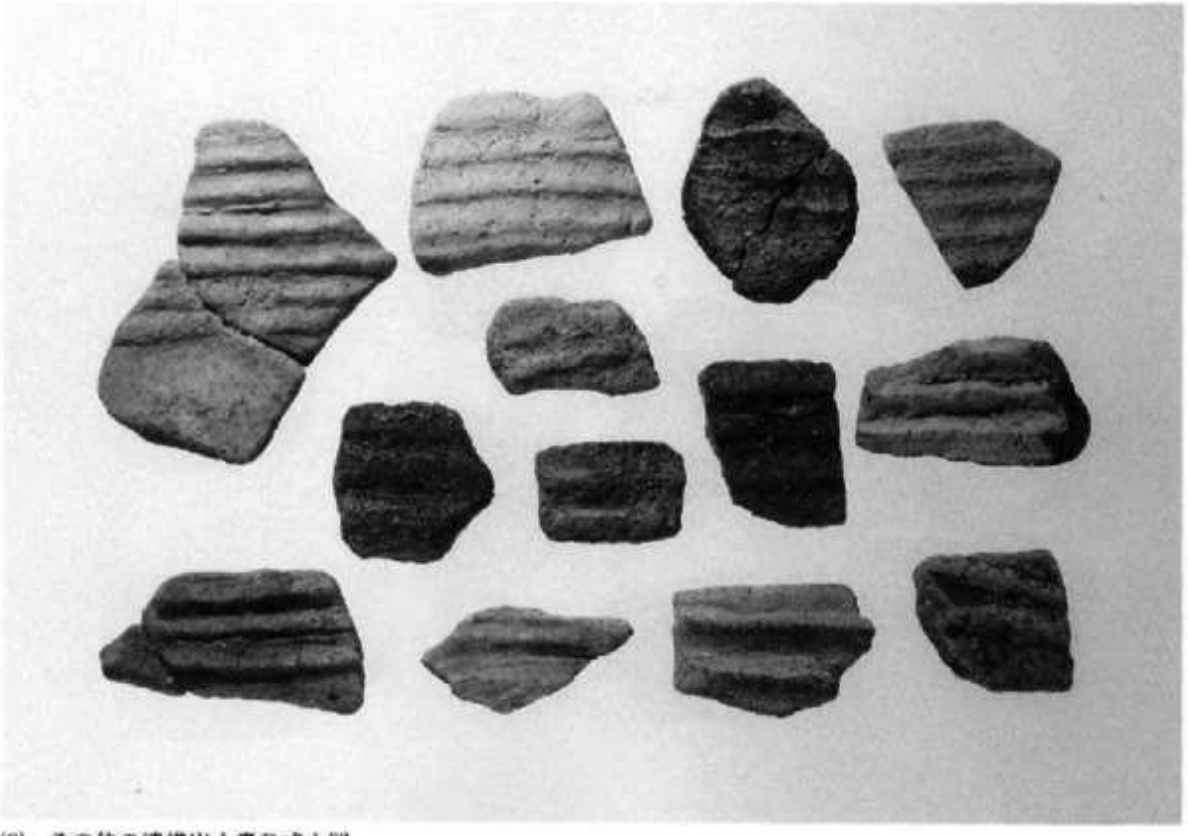
(2) 第31・34号土壙出土縄文前期・晩期土器

(1) その他の遺構出土縄文早・前期土器

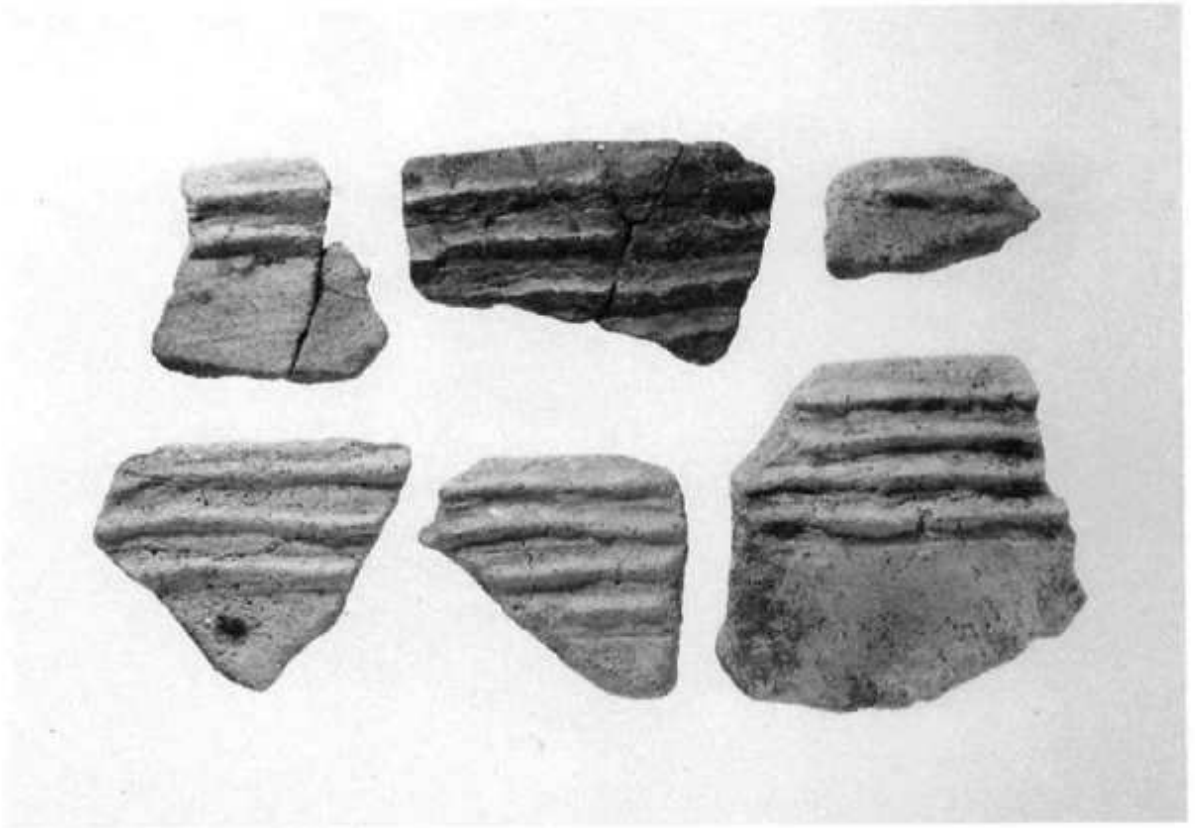
(2) 同上裏面



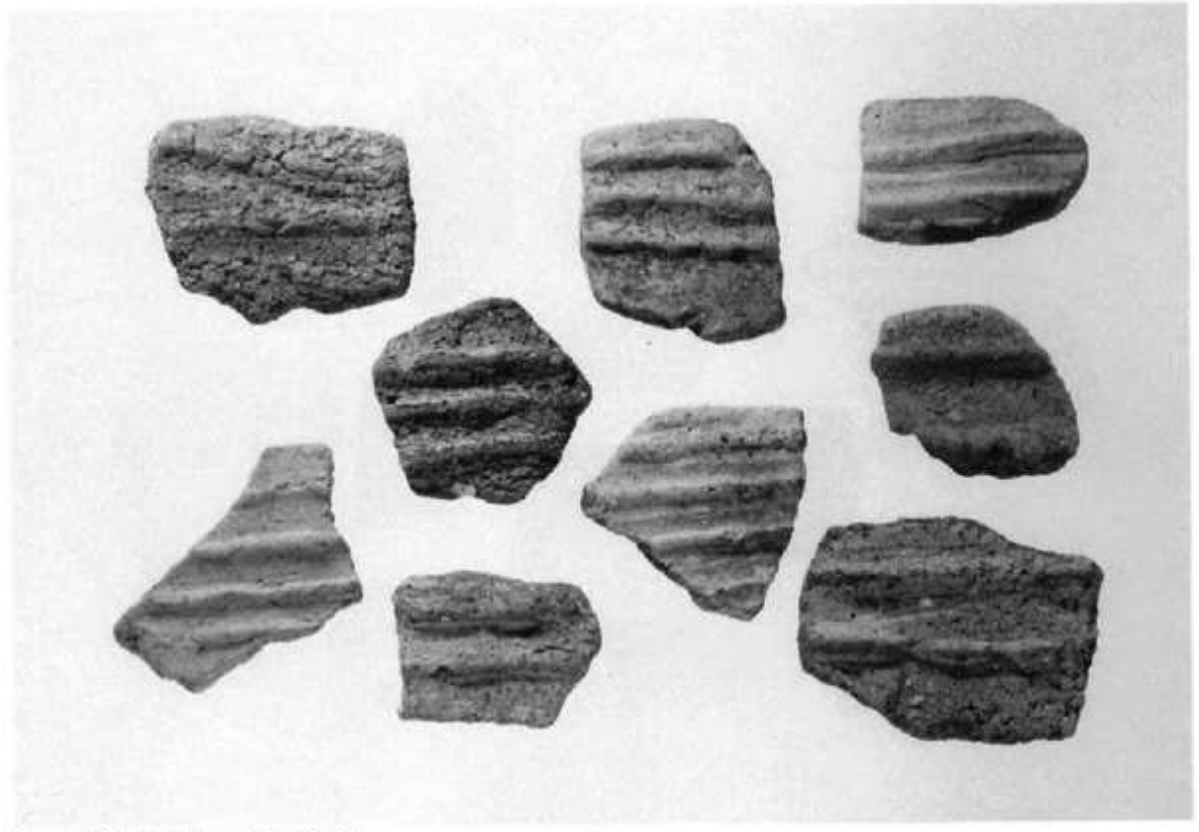
(1) その他の遺構出土轟B式土器



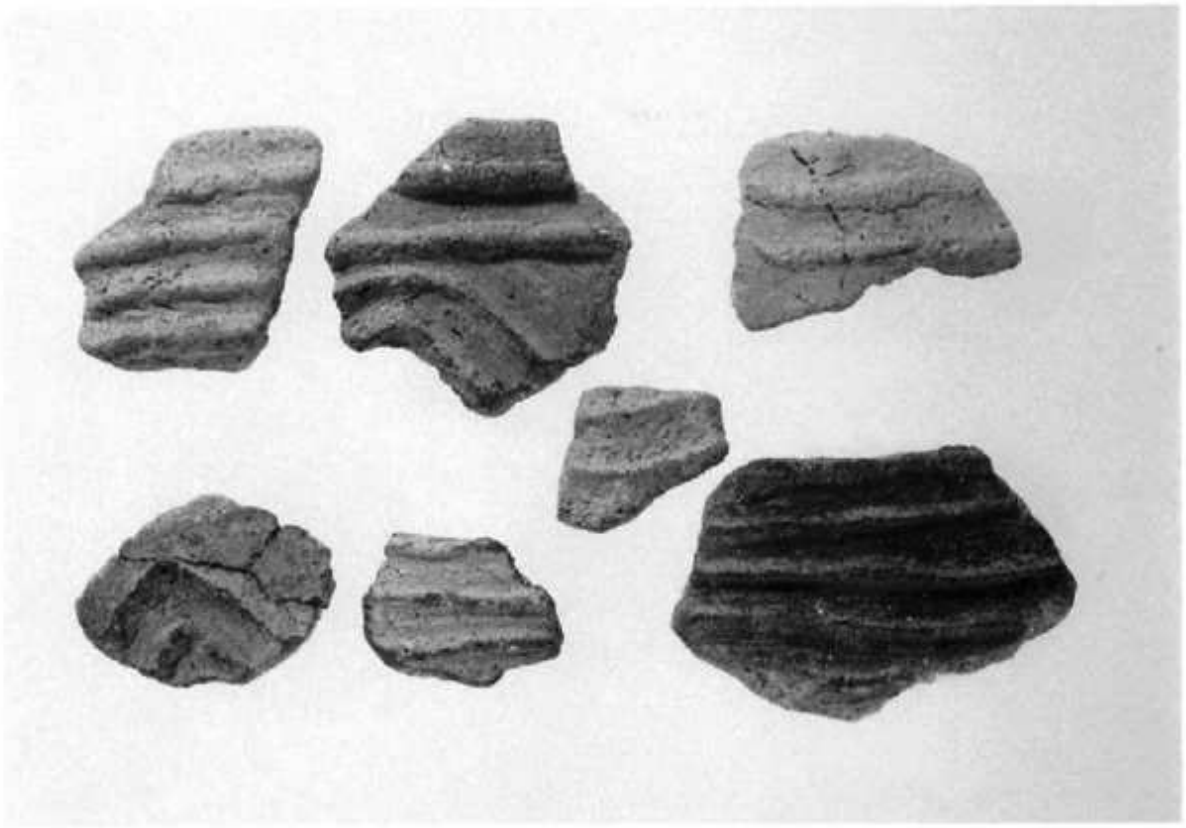
(2) その他の遺構出土轟B式土器



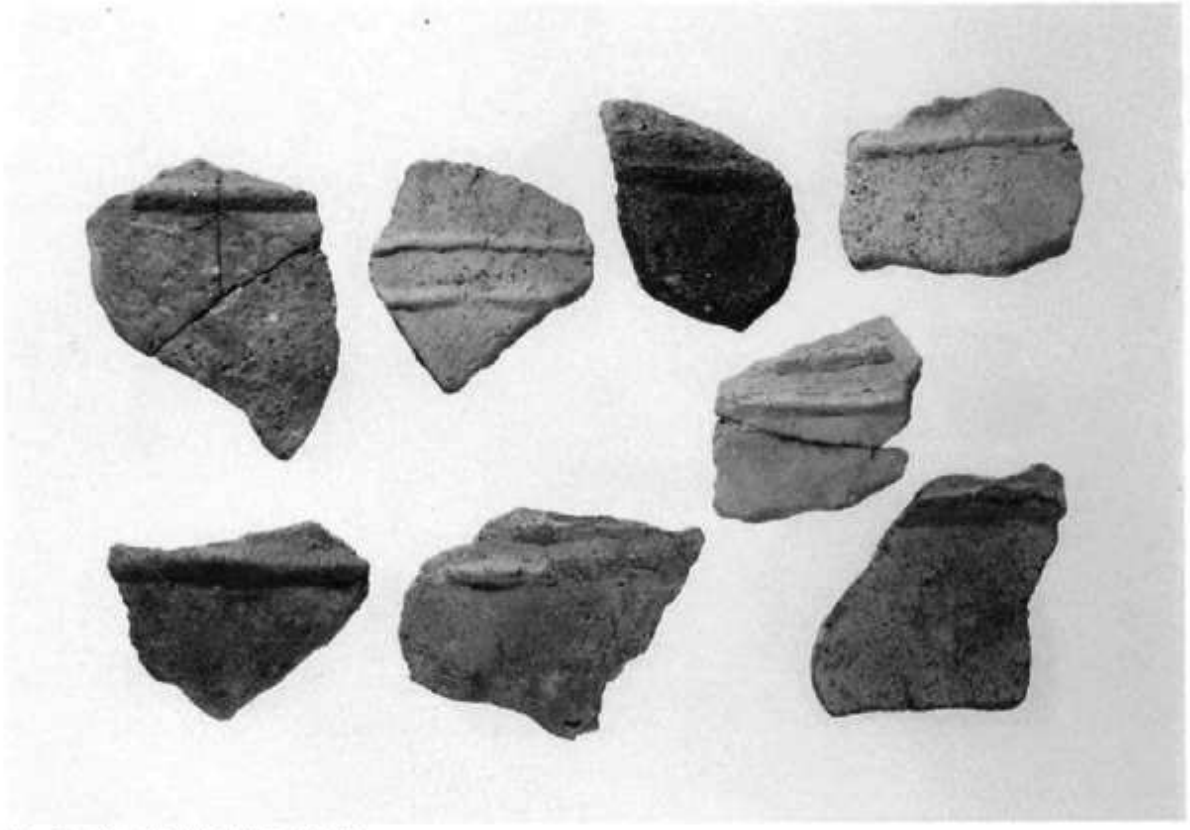
(1) その他の遺構出土轟B式土器



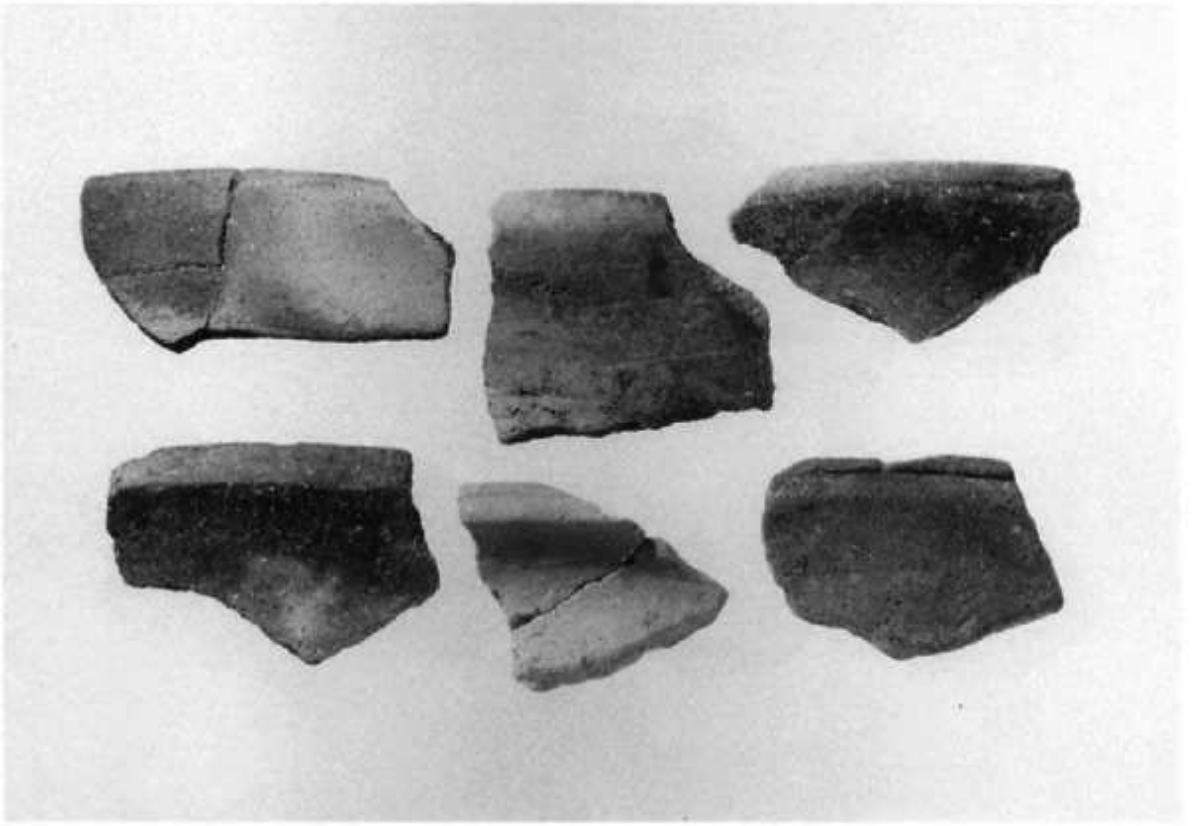
(2) その他の遺構出土轟B式土器



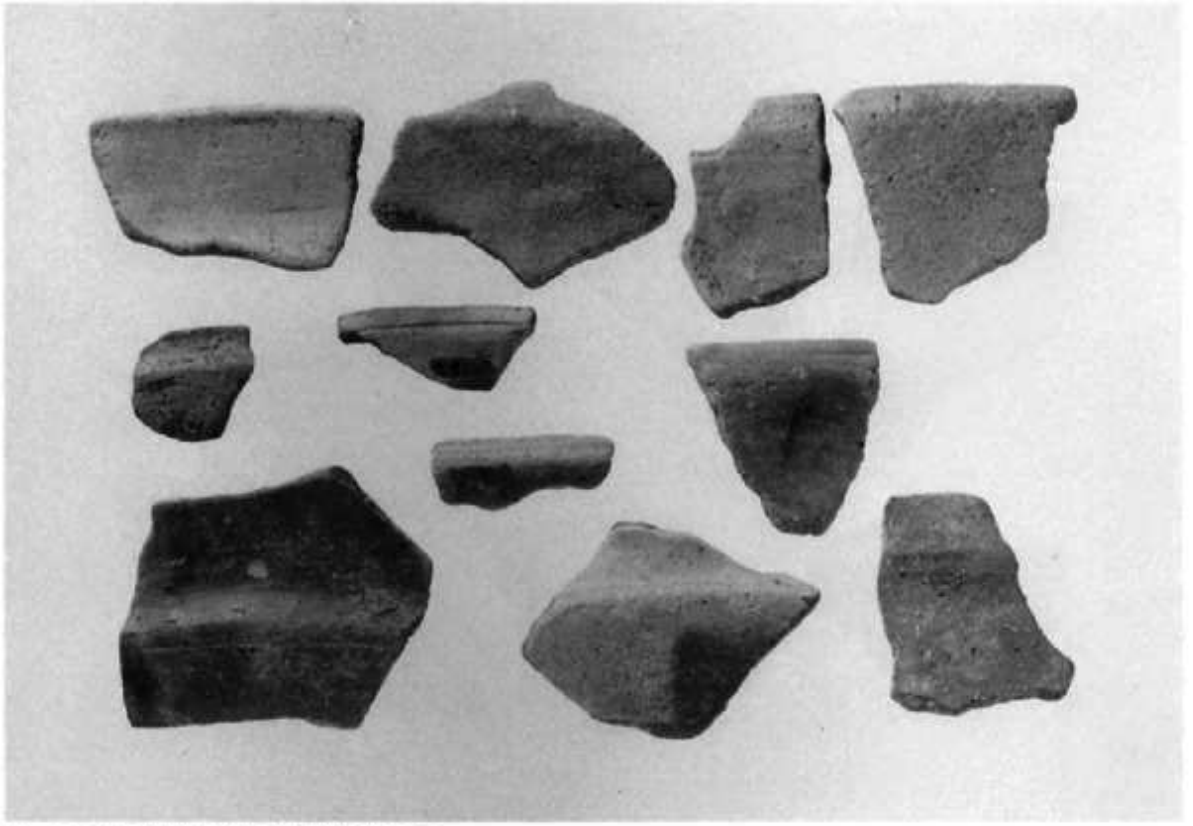
(1) その他の遺構出土轟B式土器



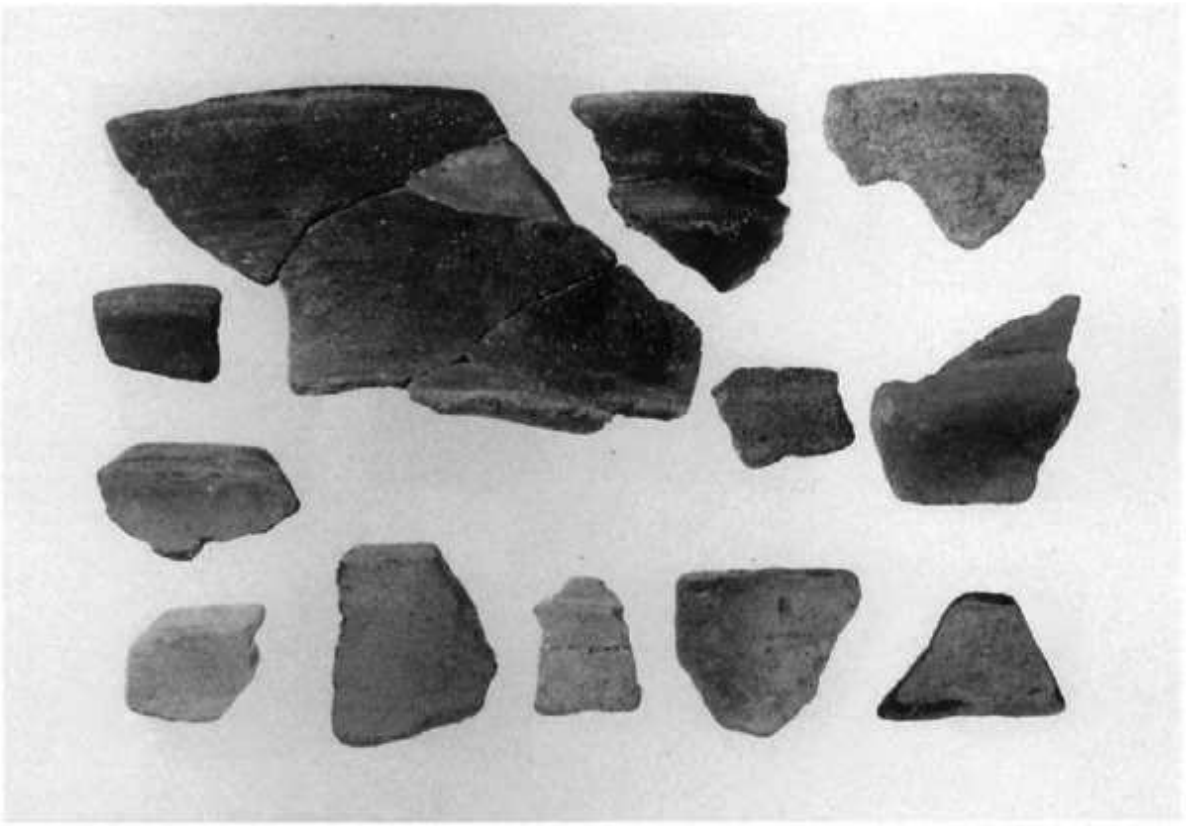
(2) その他の遺構出土轟B式土器



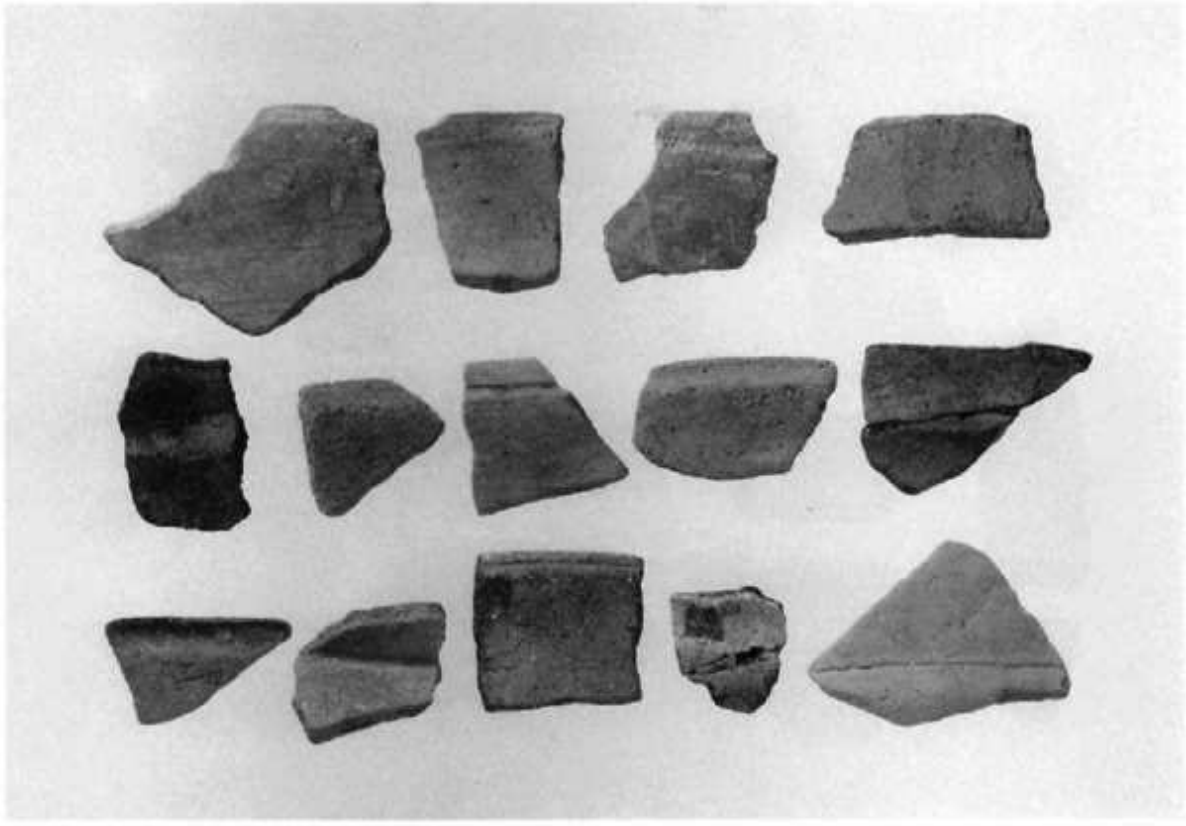
(1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類系



(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類系

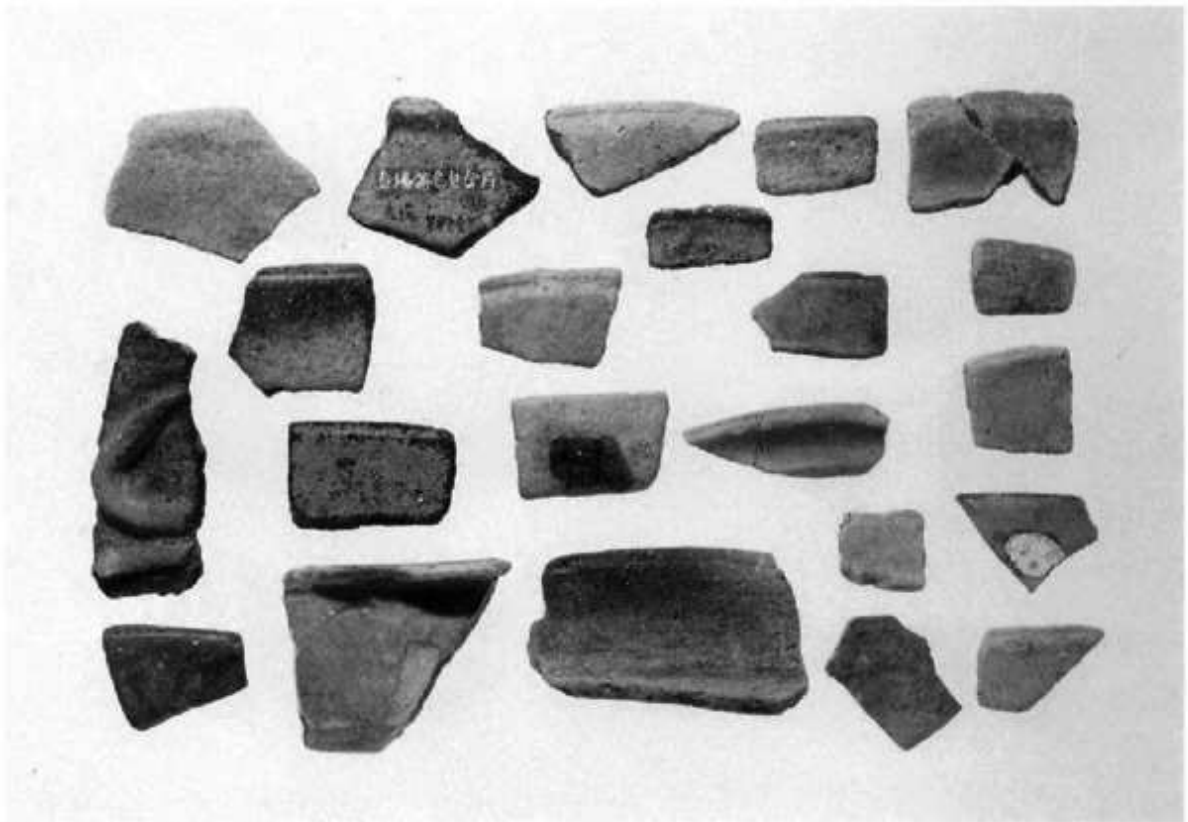


(1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類

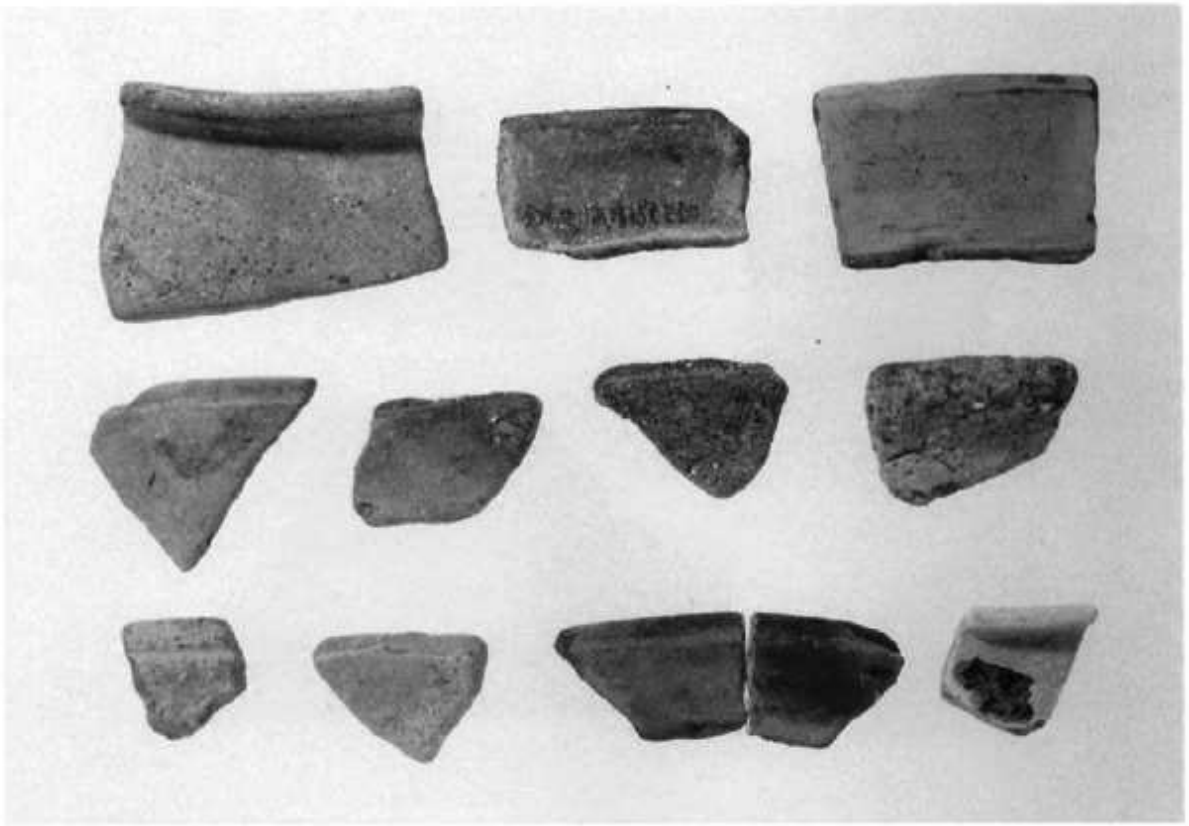


(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A類

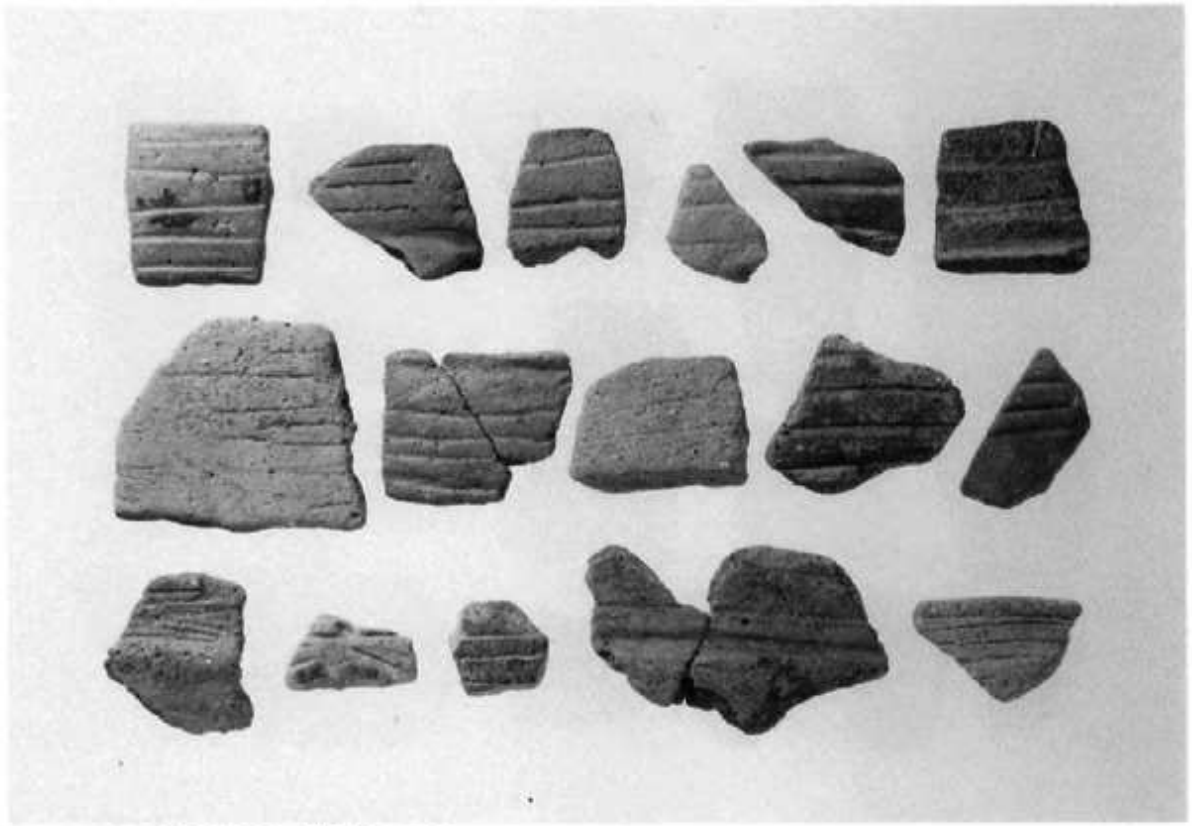
(1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A・C類



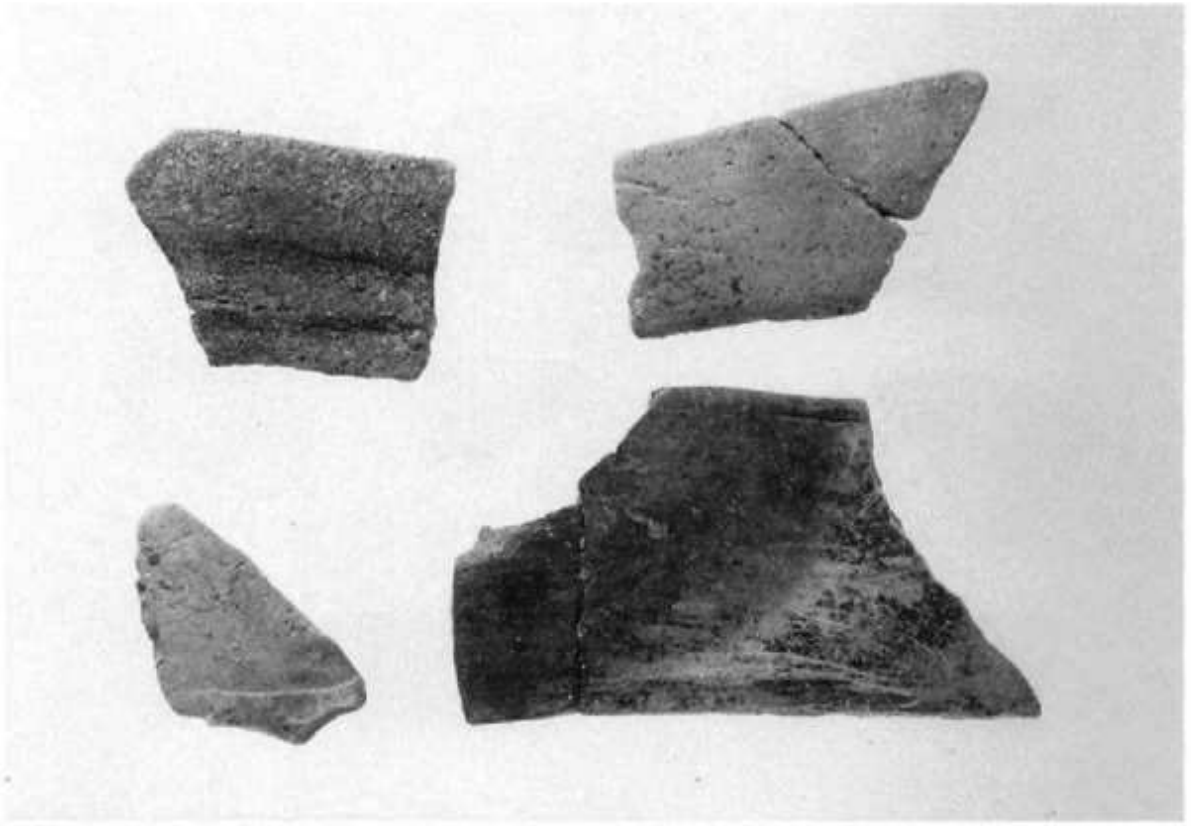
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢A・C類



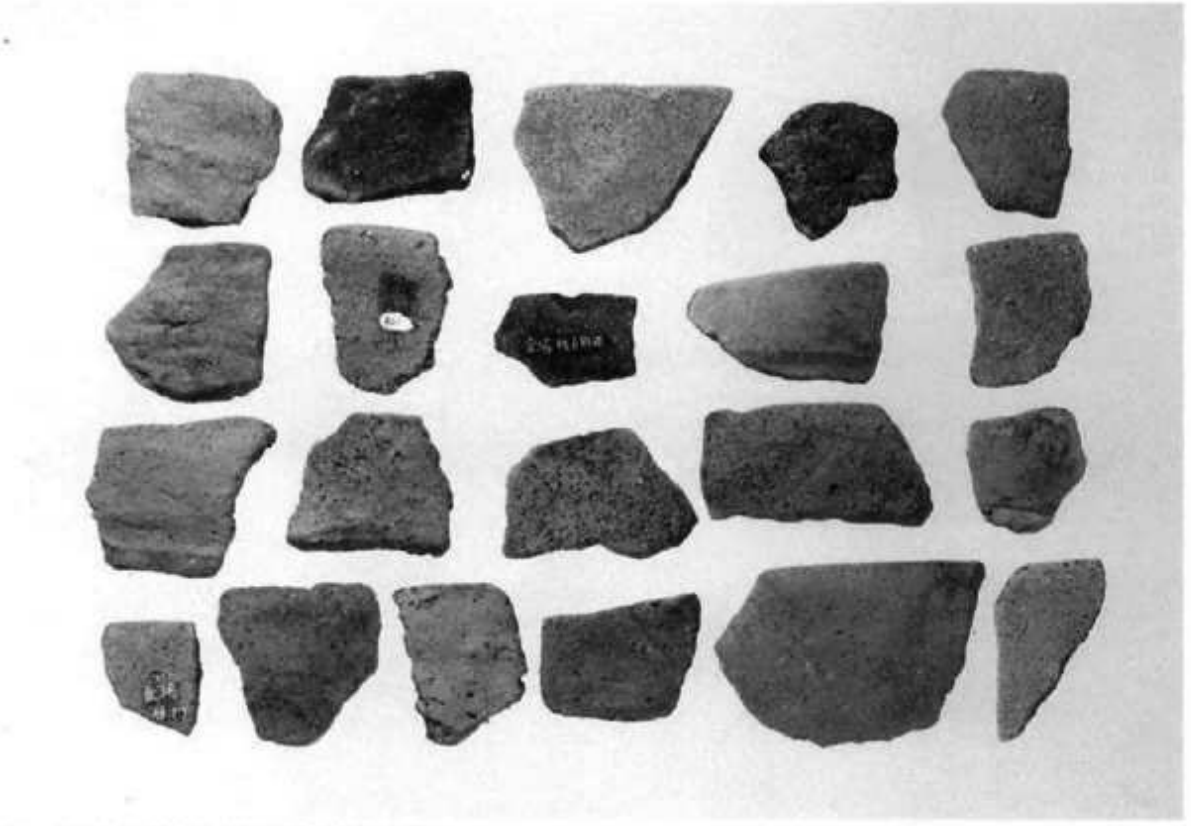
(1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢C類



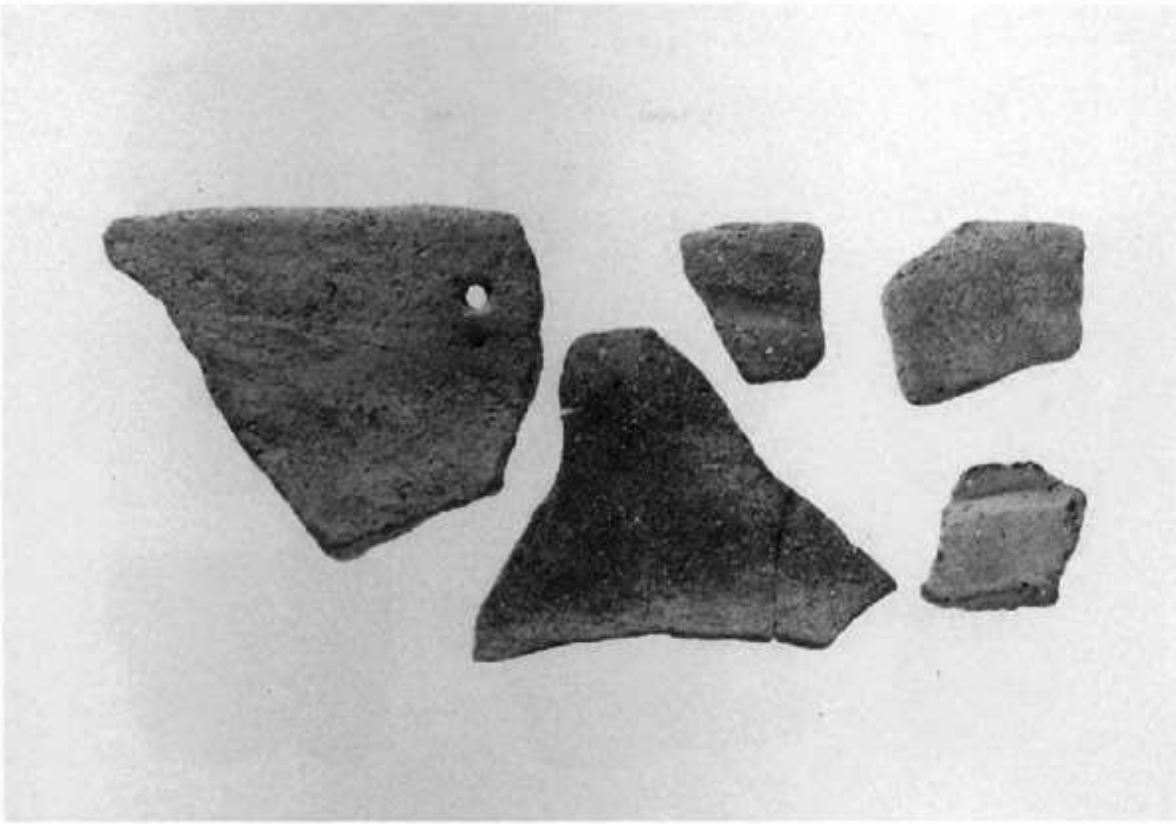
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B類系



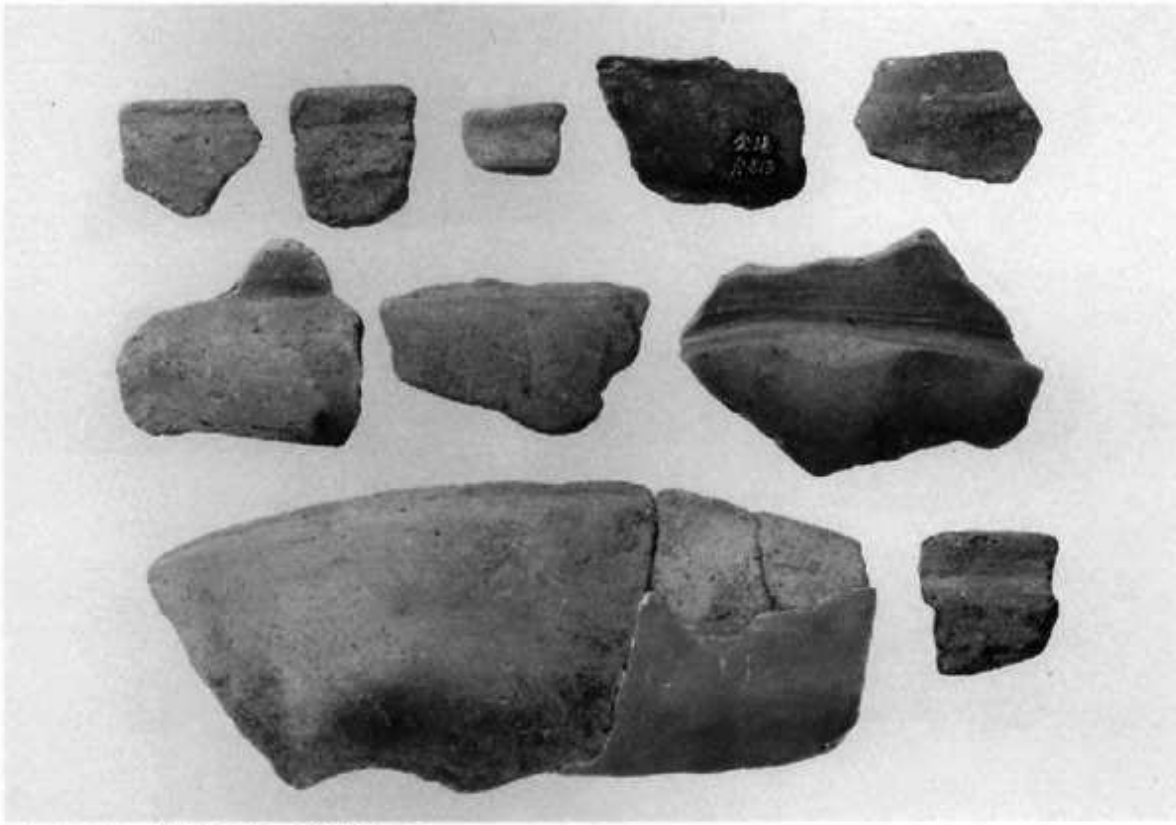
(1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B類



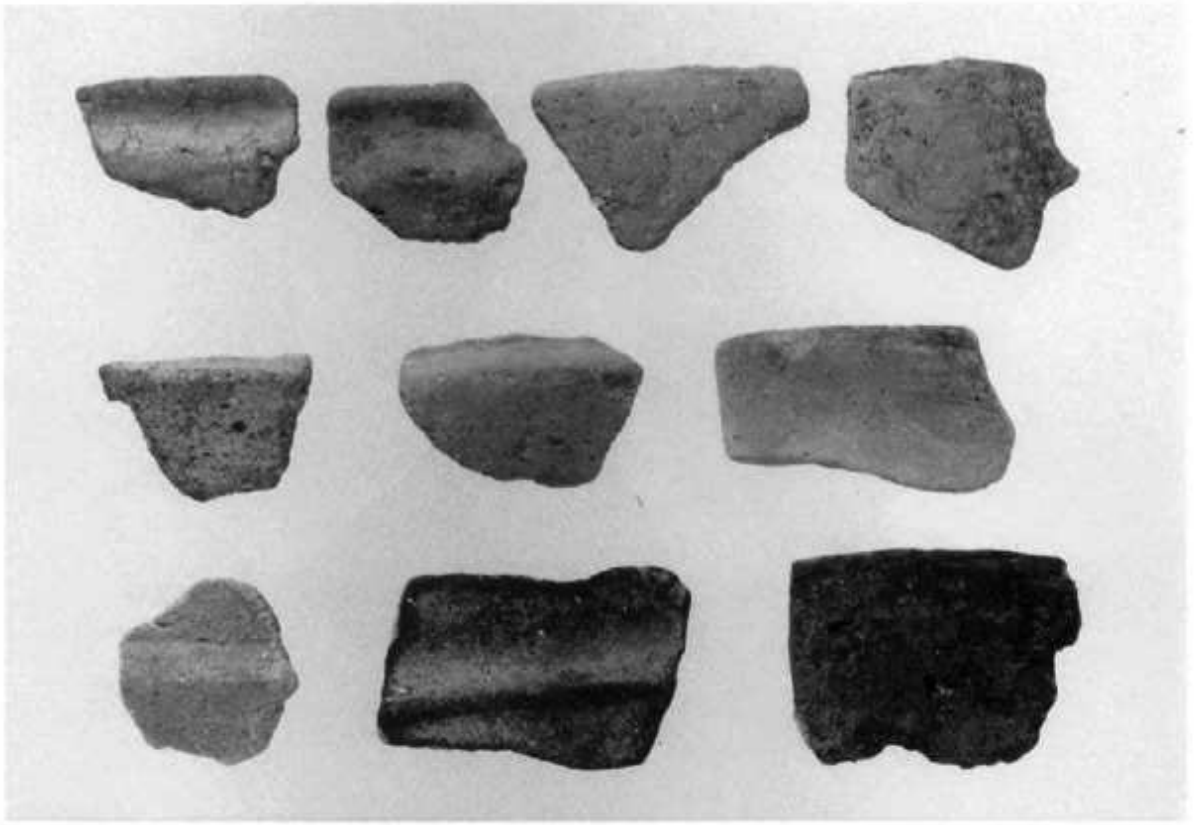
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B３類



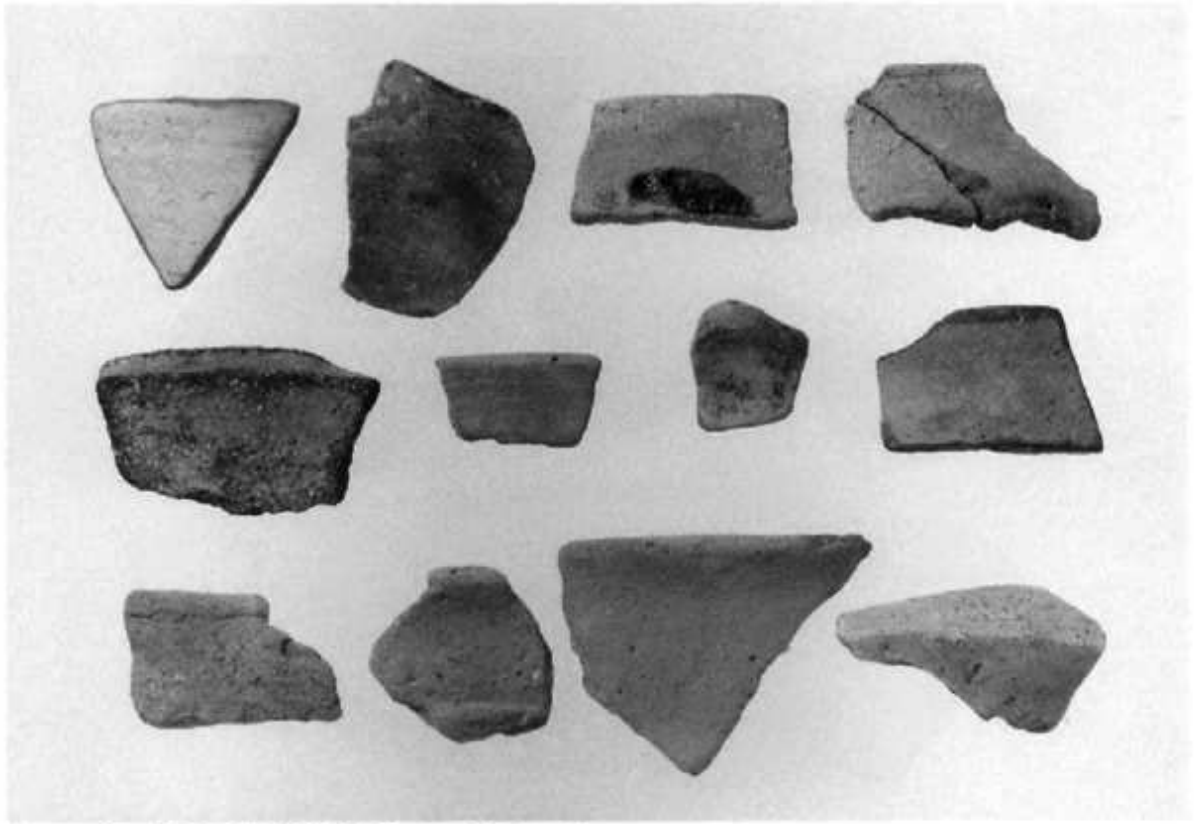
(1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢B３類



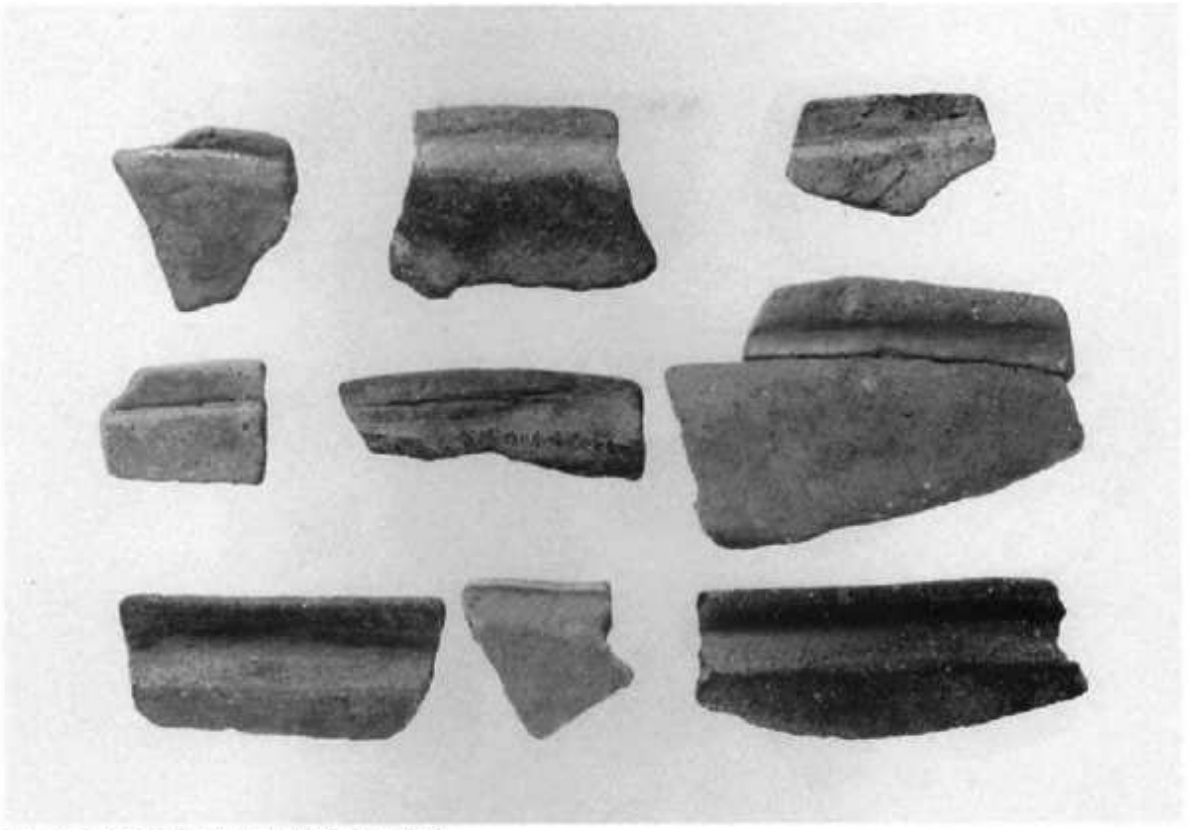
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢D類



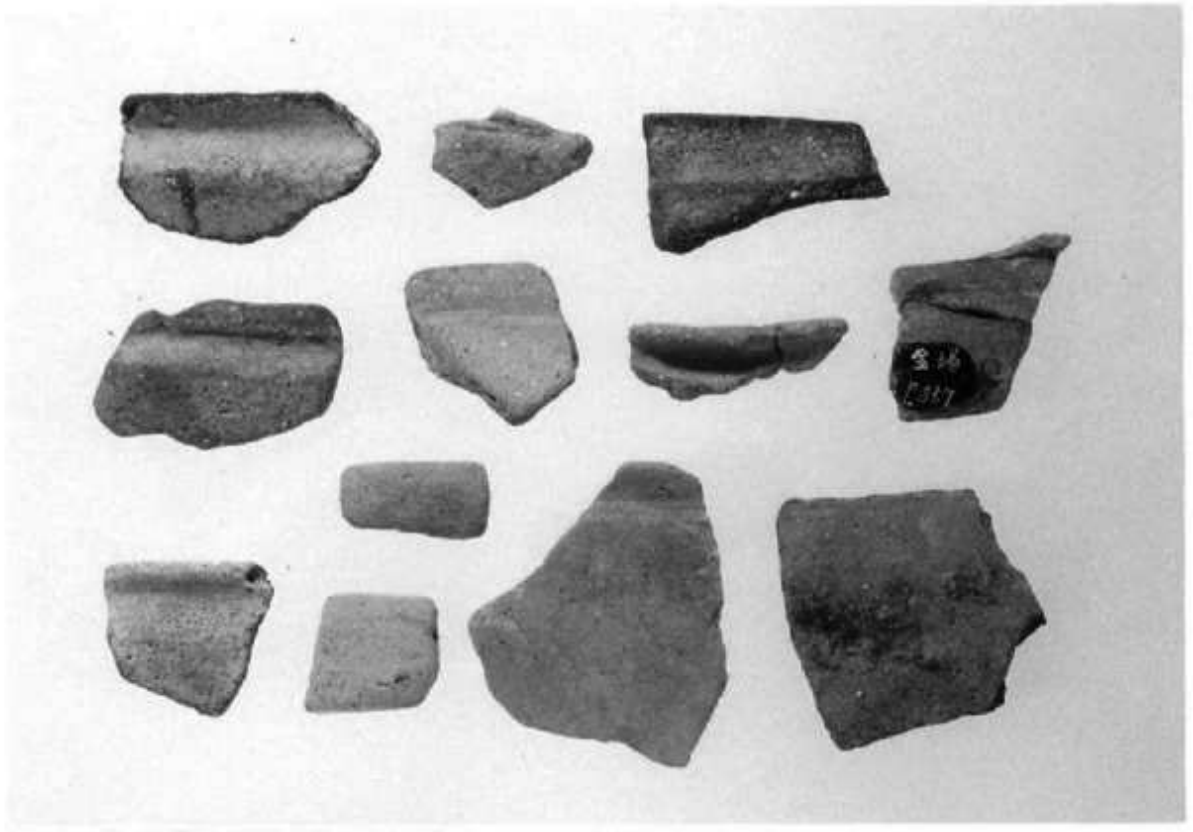
(1) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢D・H類



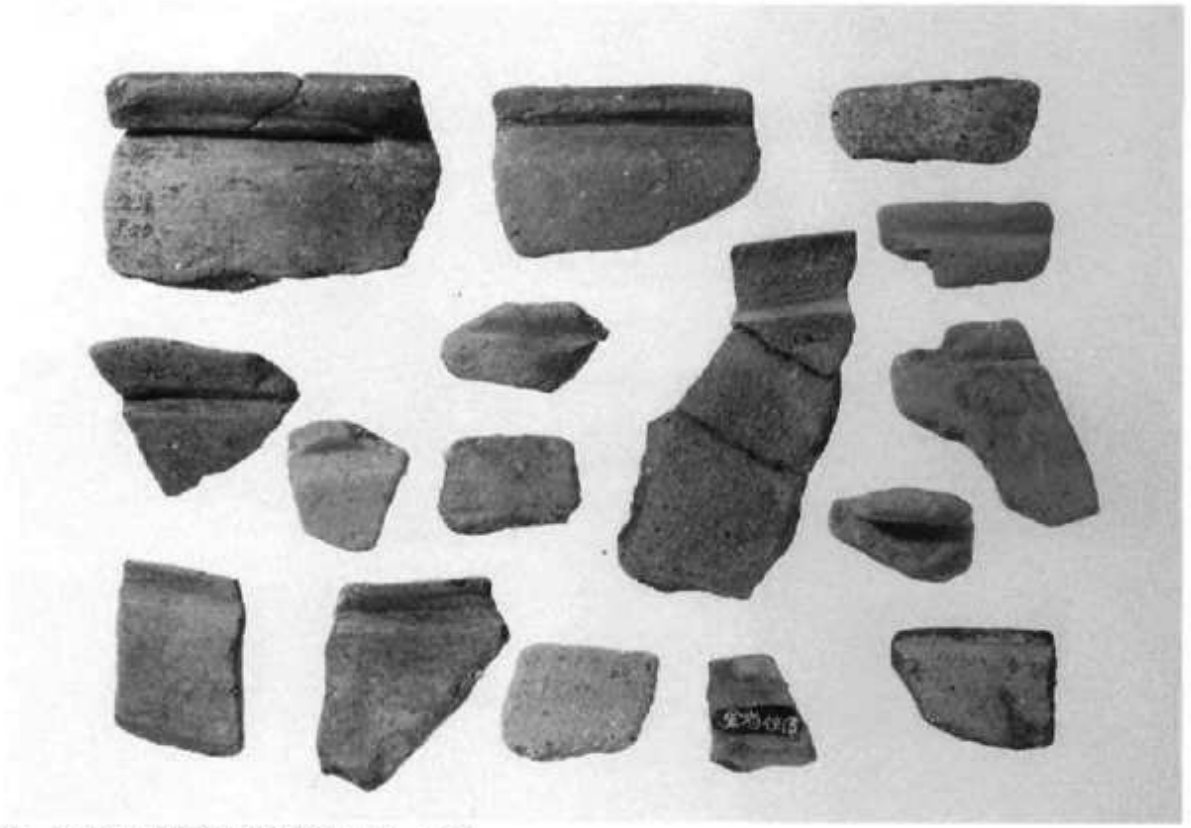
(2) その他の遺構出土縄文晩期浅鉢直口類・柿原２C類



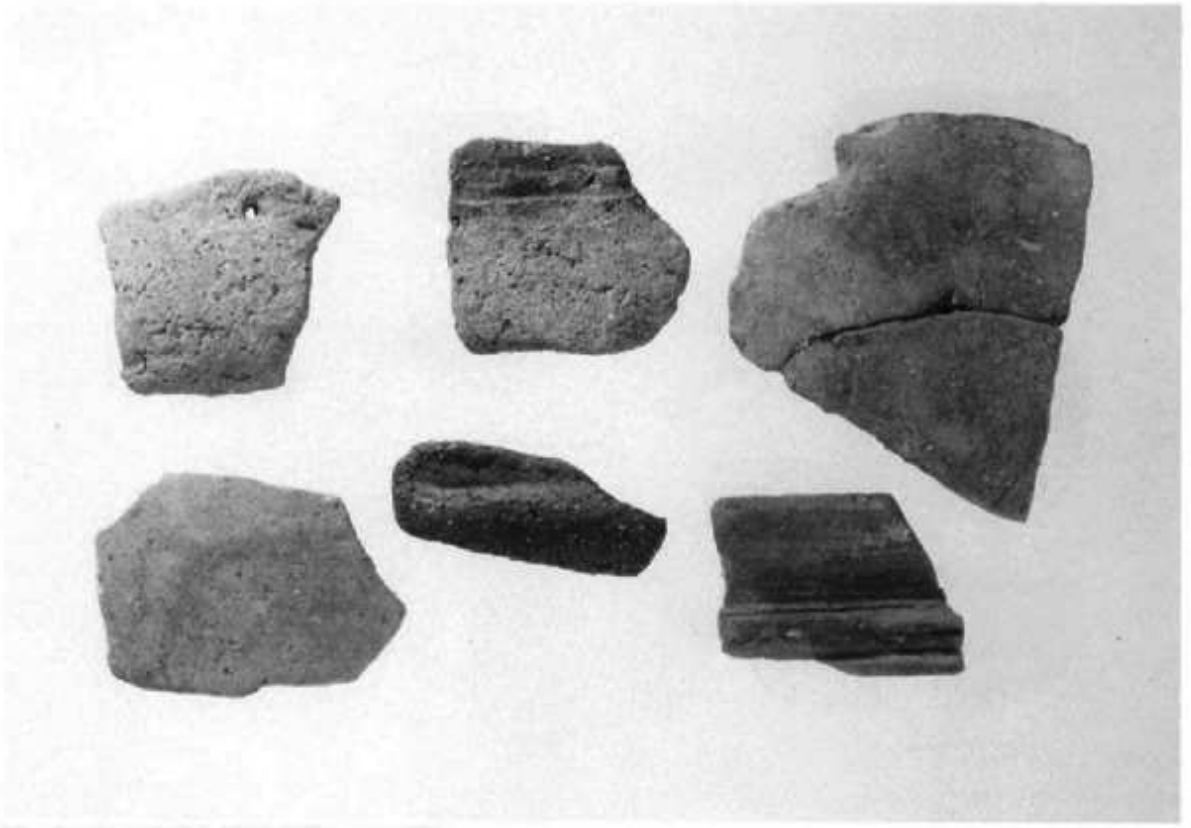
(1) その他の遺構出土縄文晩期マリＢ類系



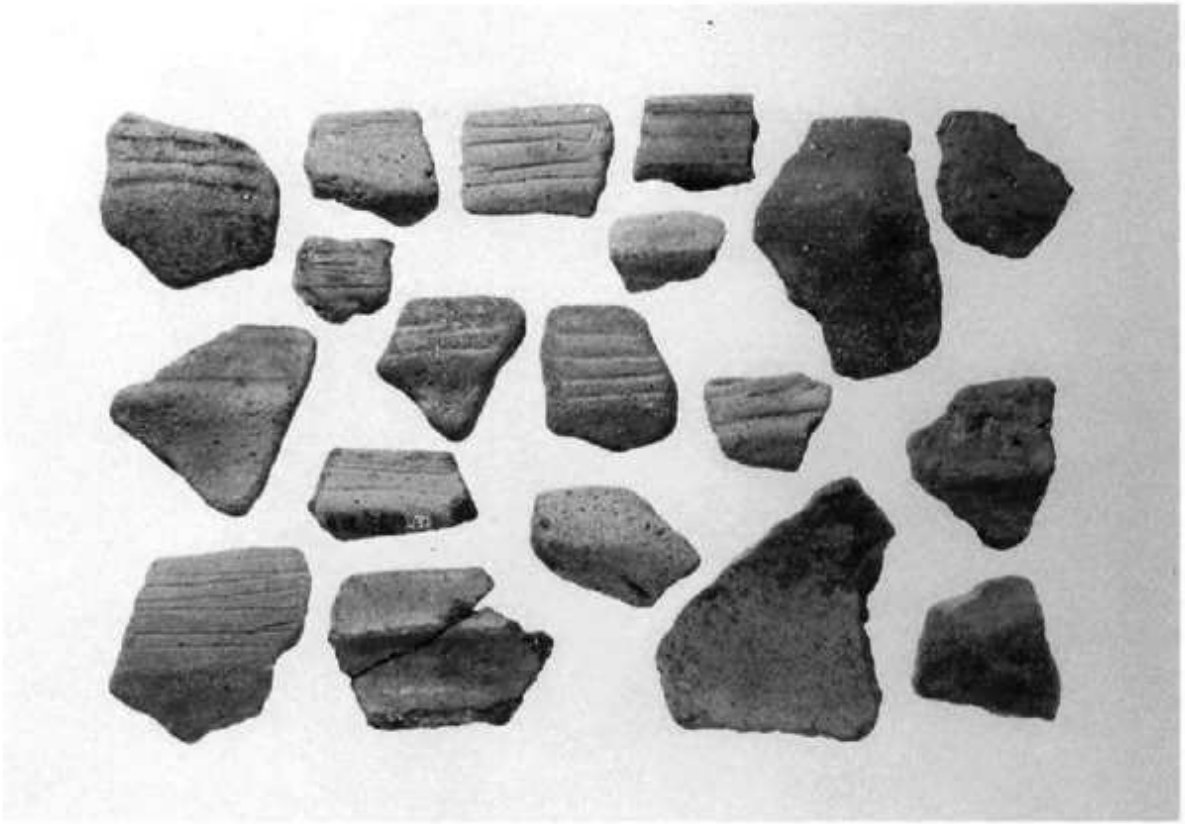
(2) その他の遺構出土縄文晩期マリＢ１類



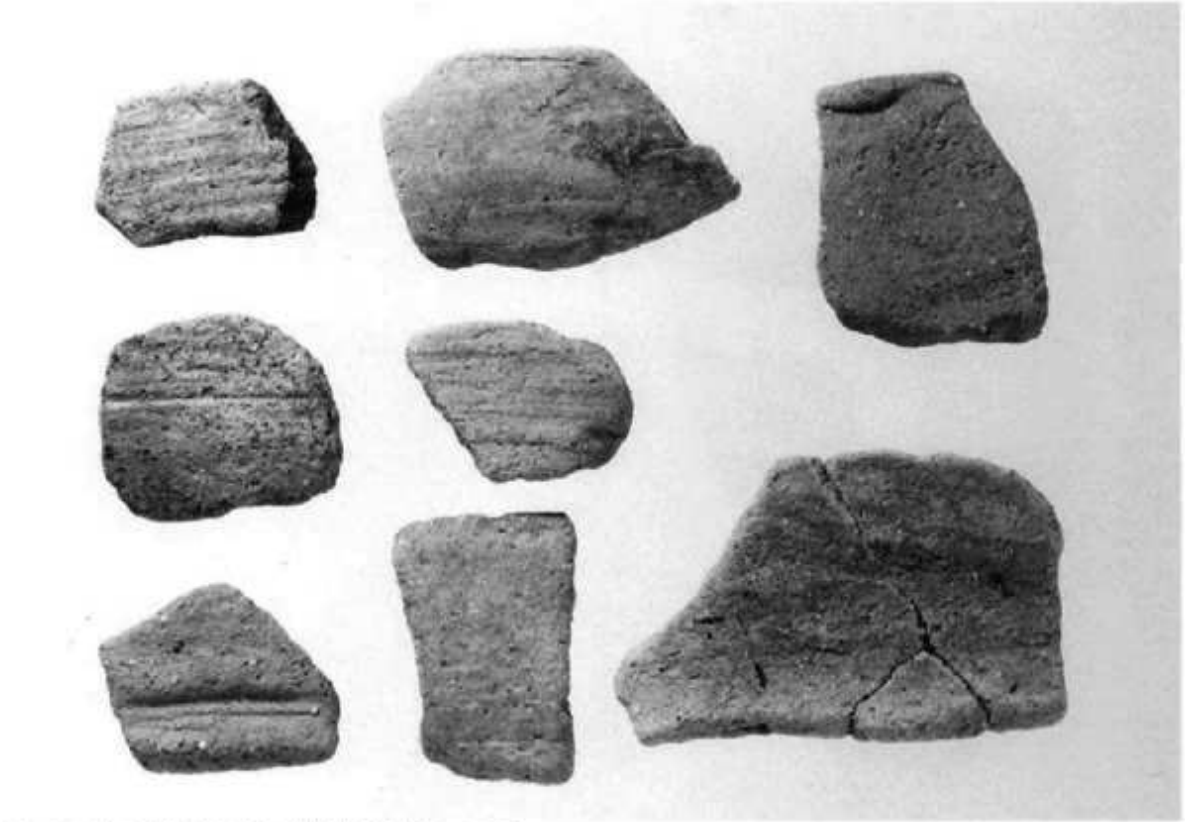
(1) その他の遺構出土縄文晩期マリA・B類



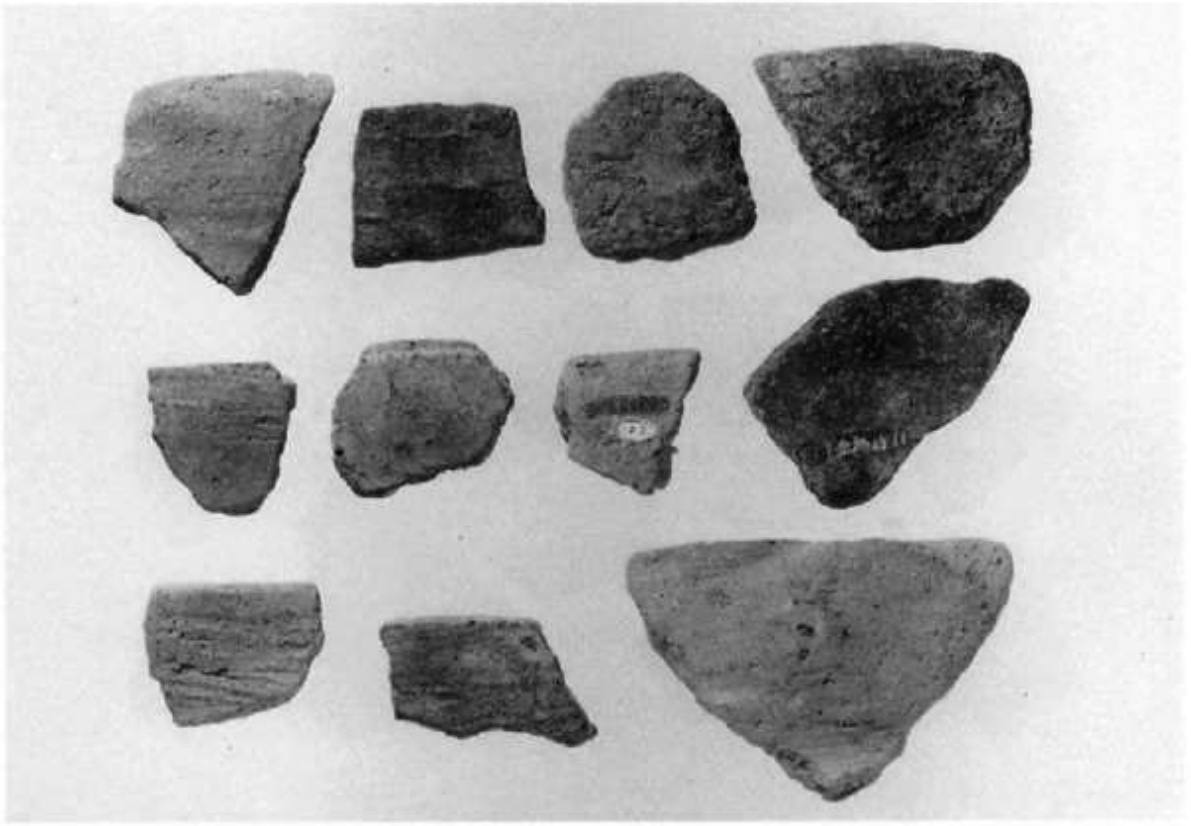
(2) その他の遺構出土縄文晩期マリE類等



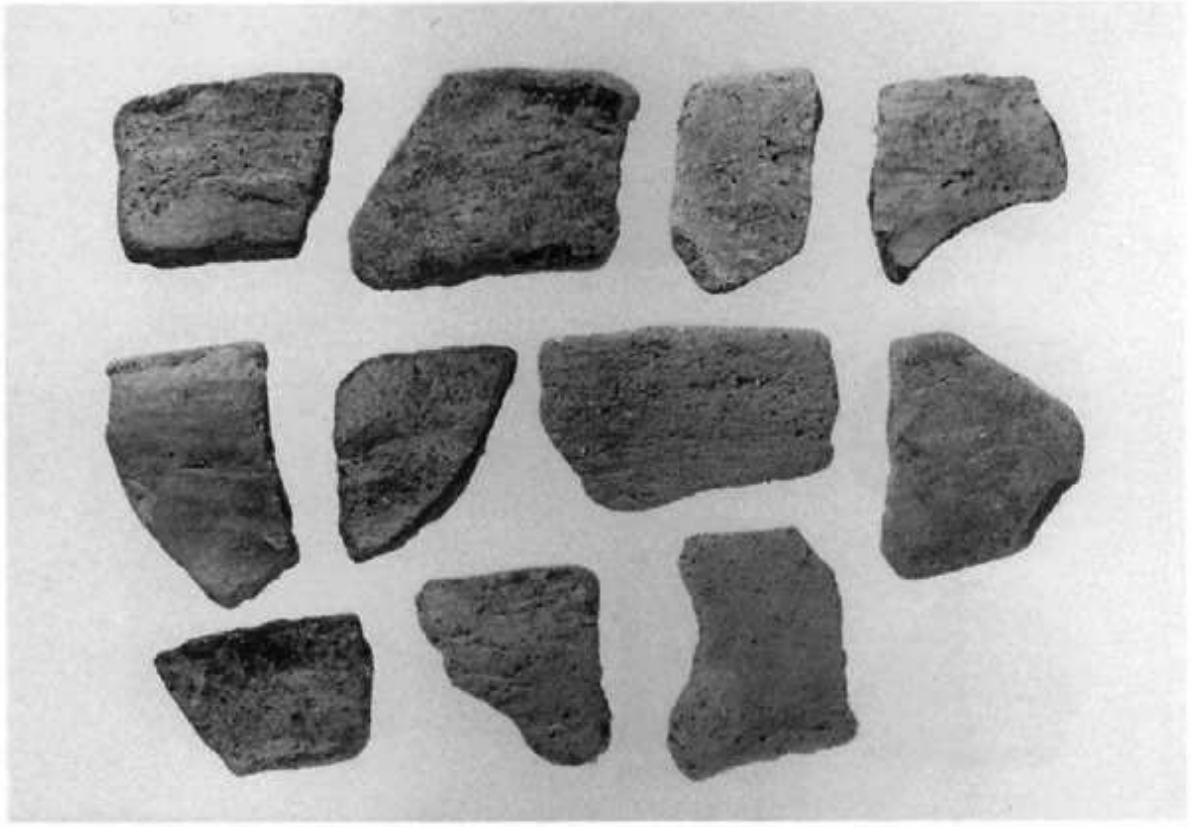
(1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢A・B類



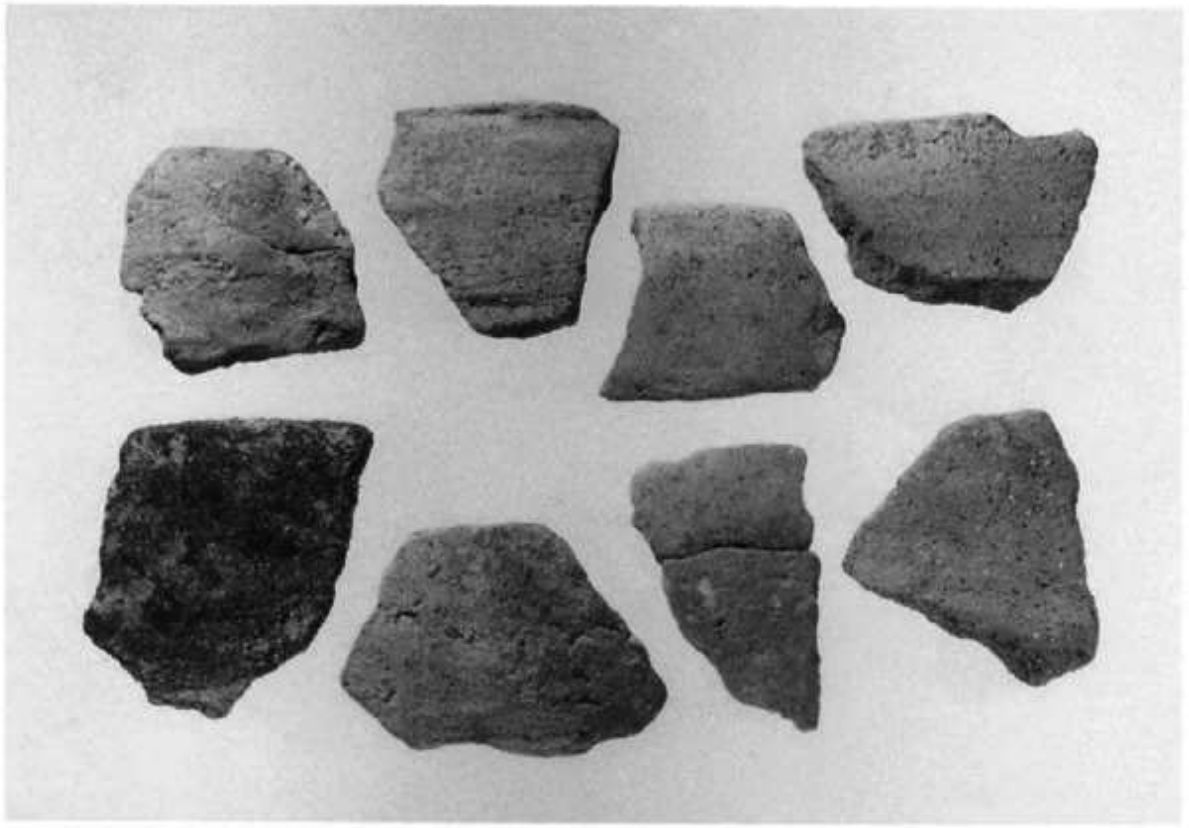
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢C・D類



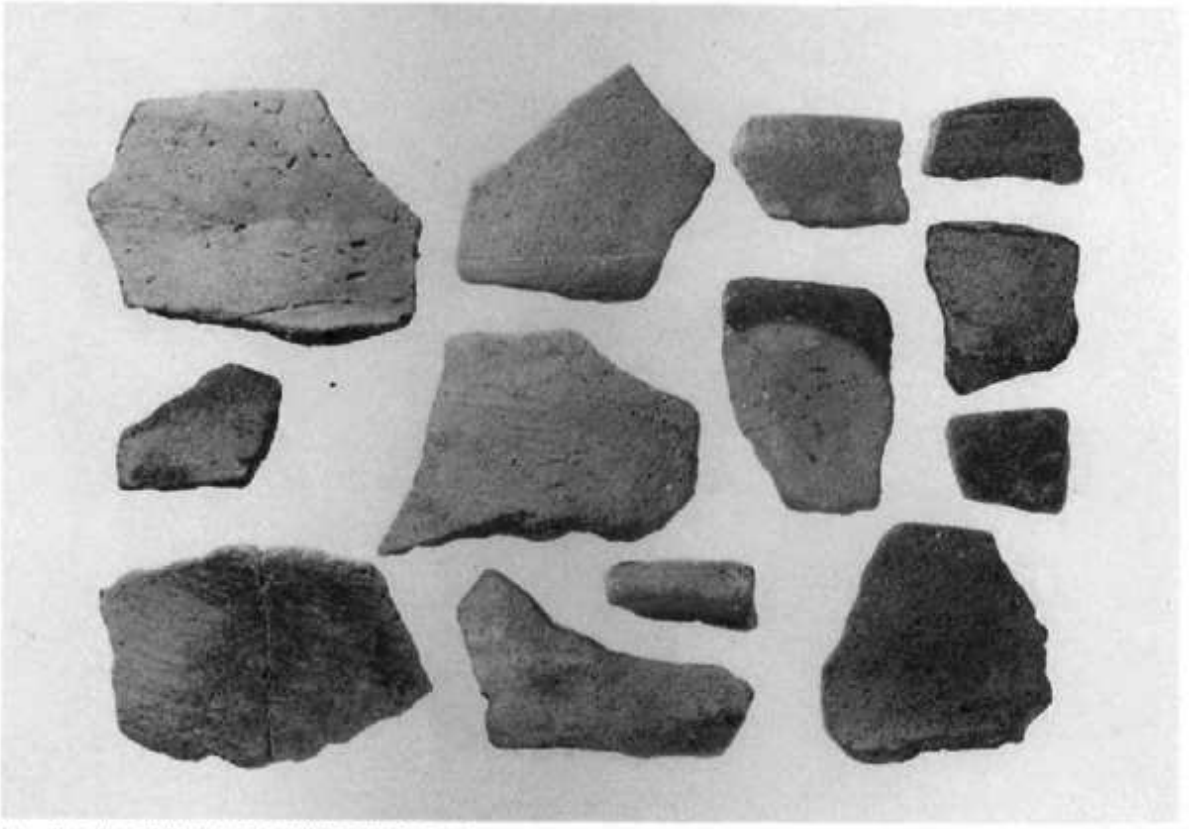
(1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢C・D類



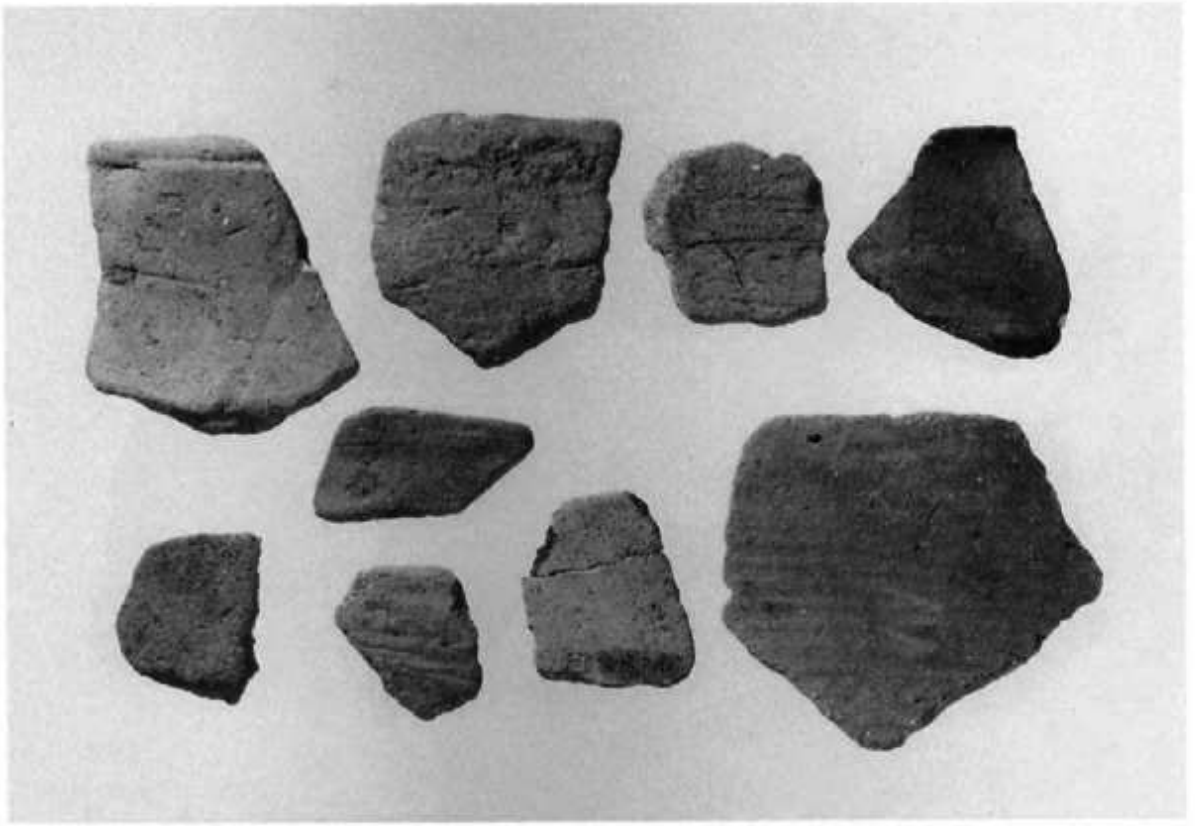
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢D類



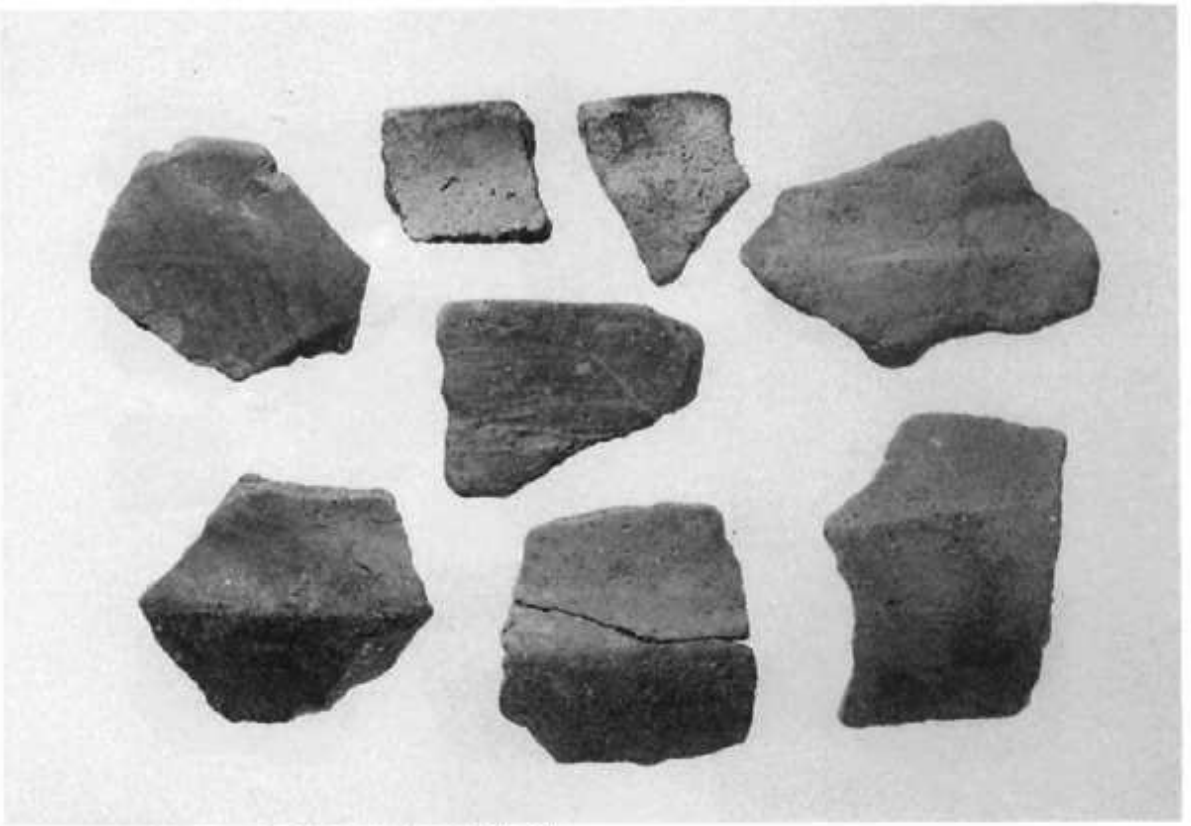
(1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢D類



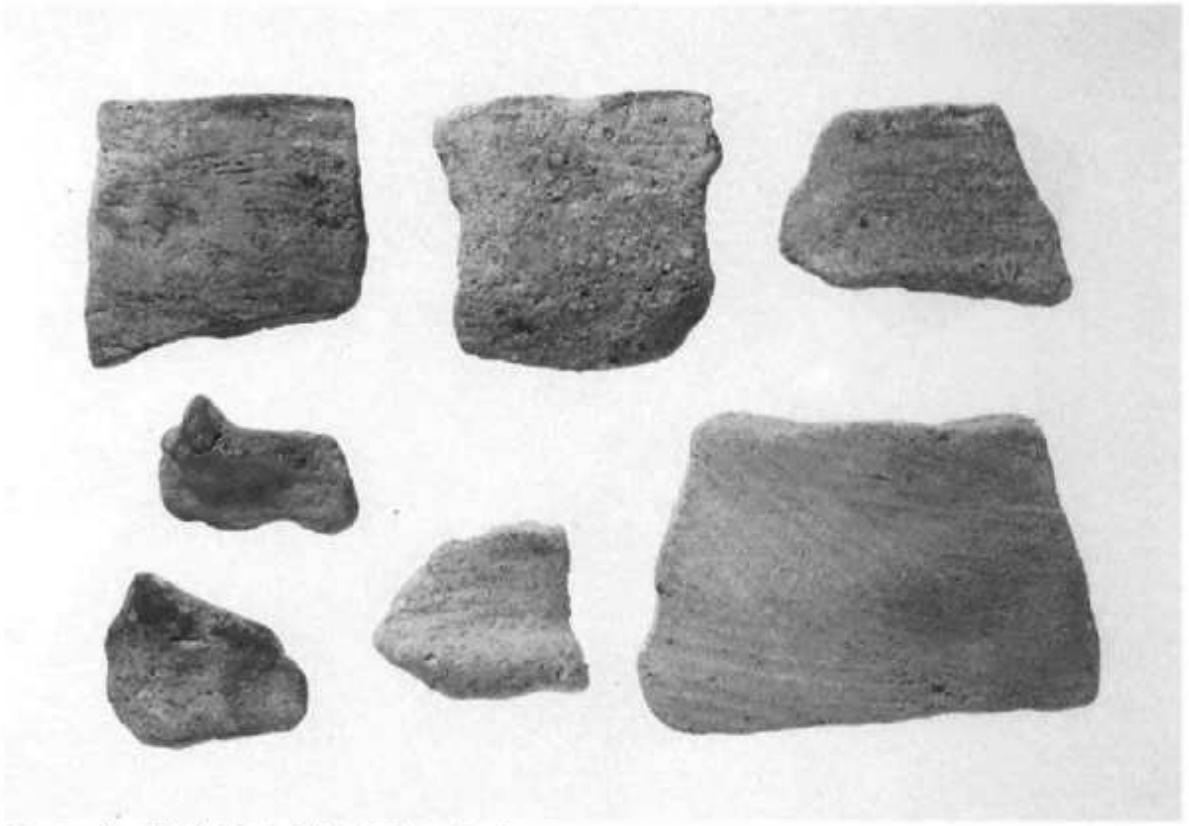
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢D類



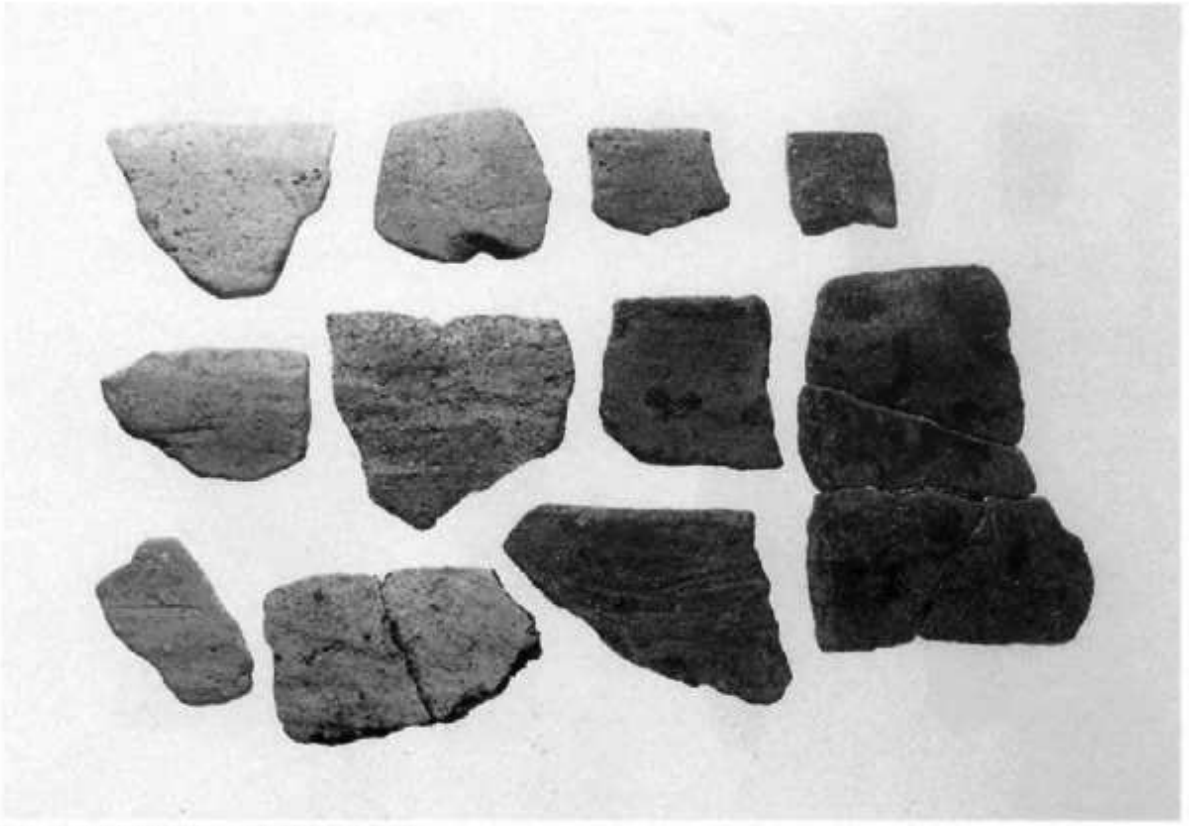
(1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢E類系古段階



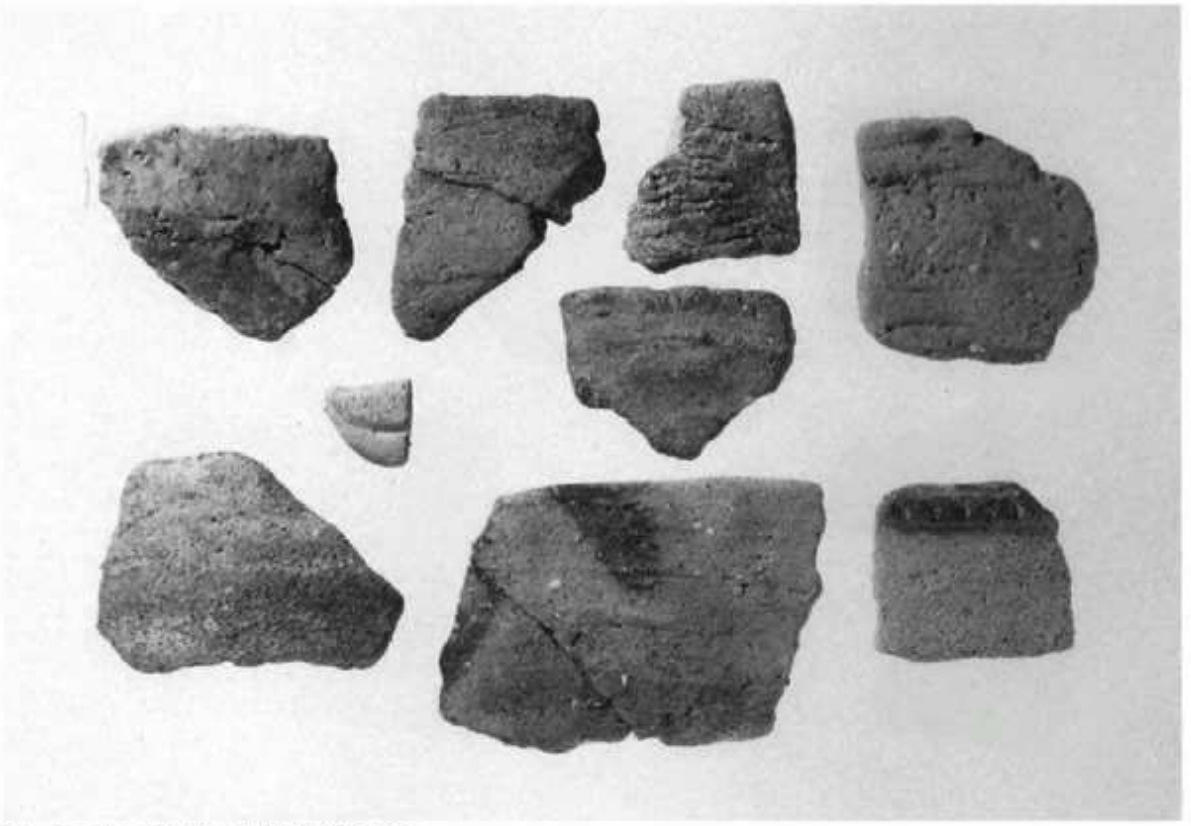
(2) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢E類系古段階



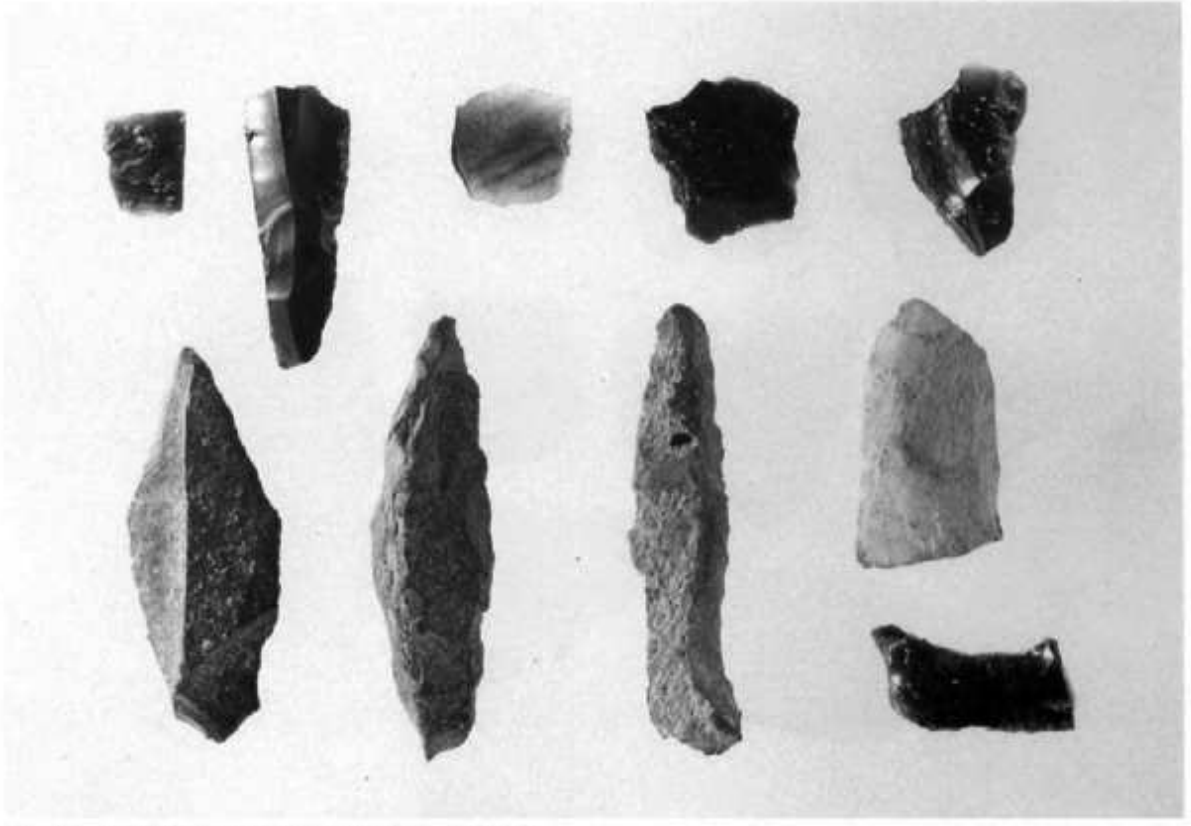
(1) その他の遺構出土縄文晩期定型深鉢E類・鉢



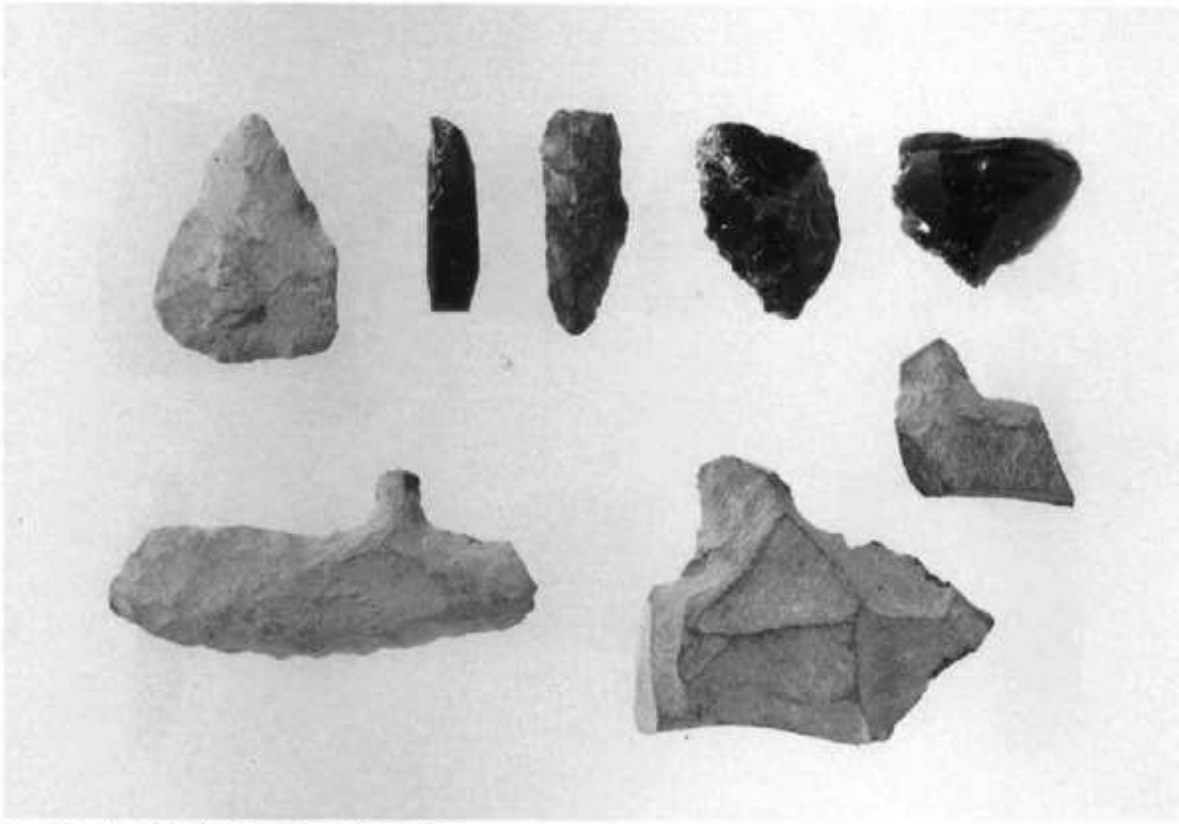
(2) その他の遺構出土縄文晩期粗製深鉢



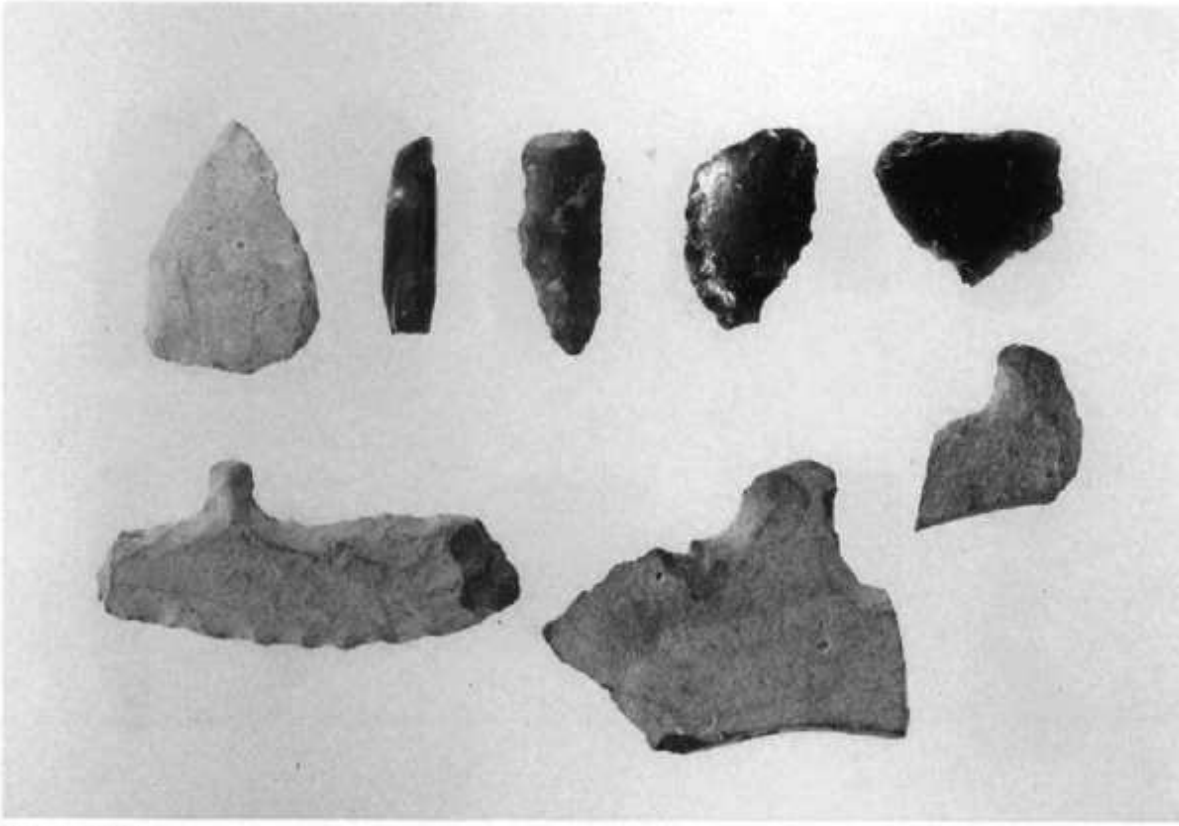
(1) その他の遺構出土縄文晩期粗製深鉢



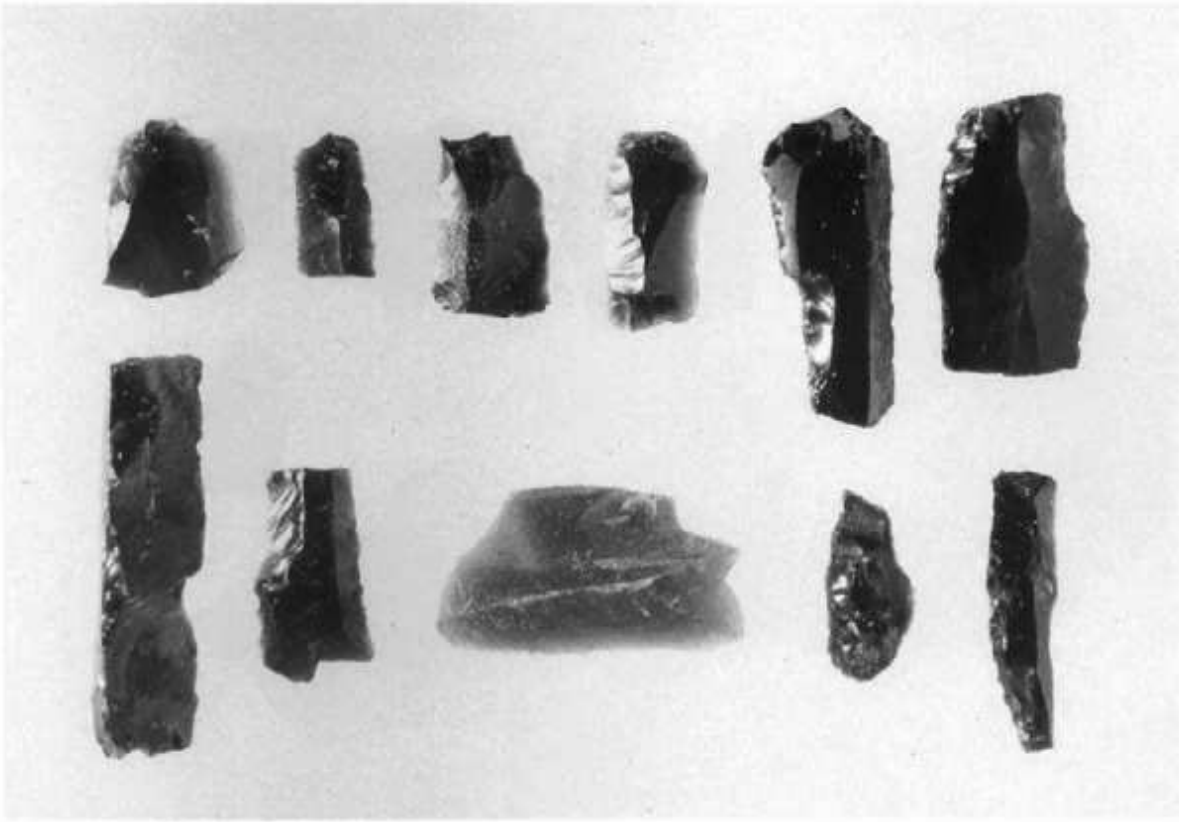
(2) その他の遺構出土台形石器・尖頭器・異形石器



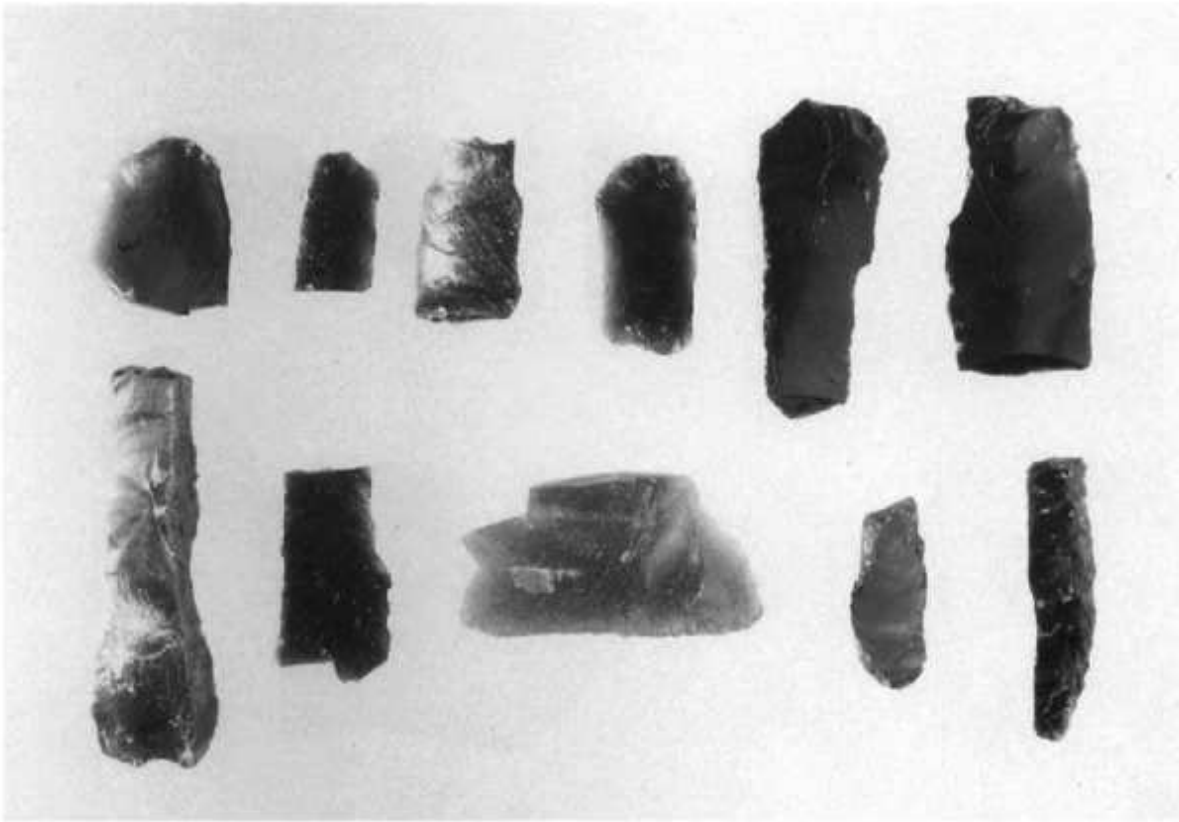
(1) その他の遺構出土尖頭器・石錐・石匙



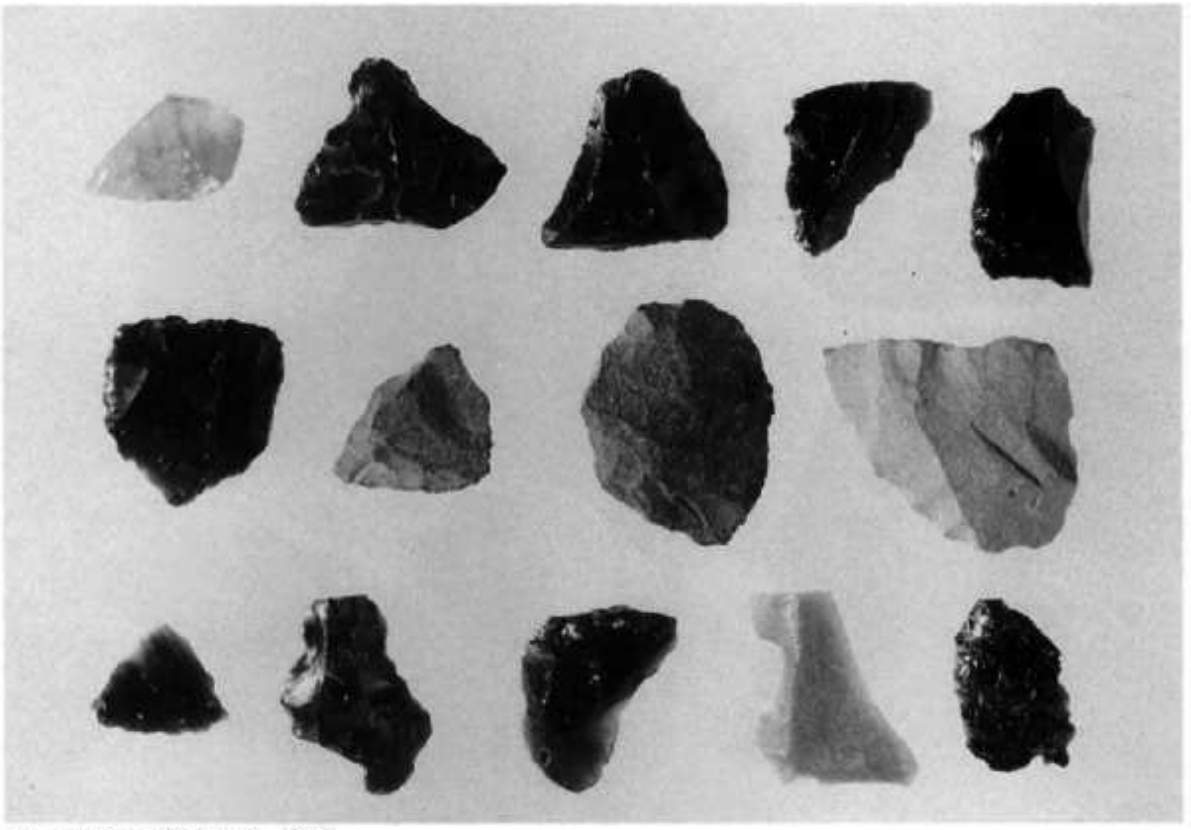
(2) 同上裏面



(1) その他の遺構出土石刃，掻・削器

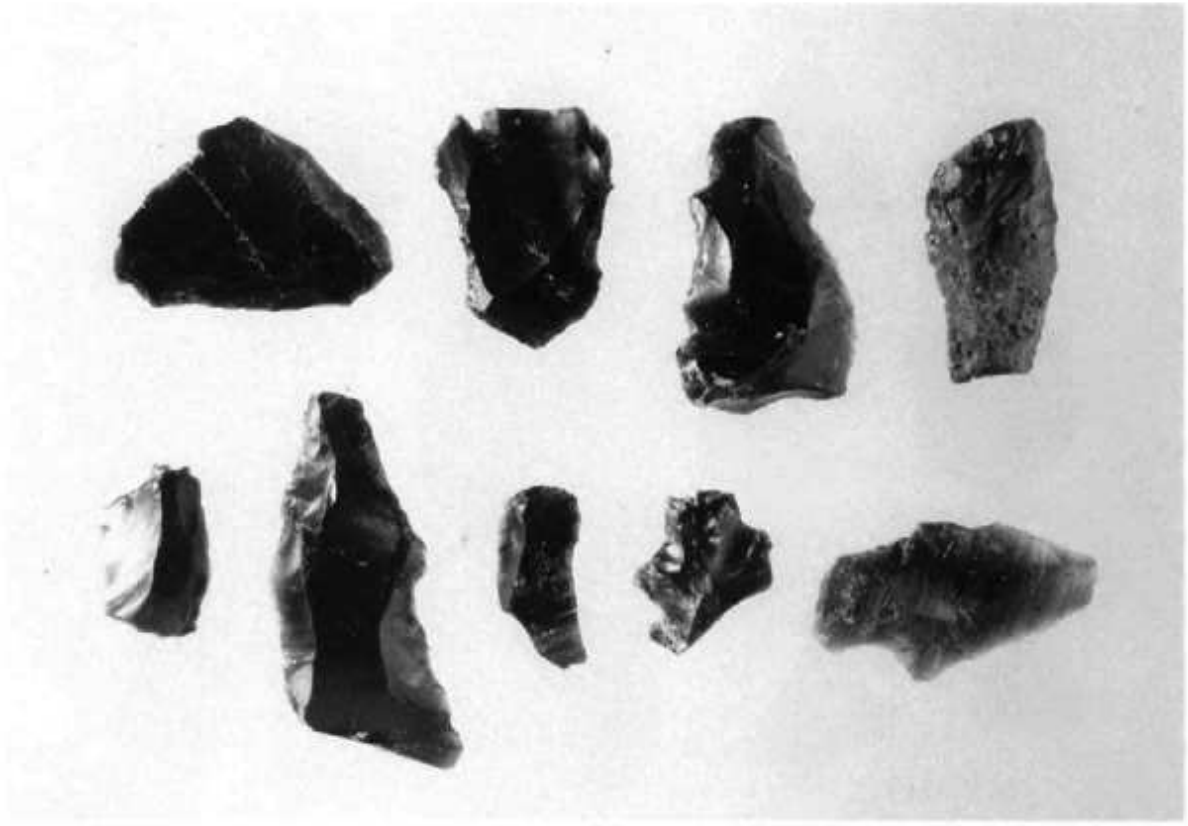


(2) 同上裏面

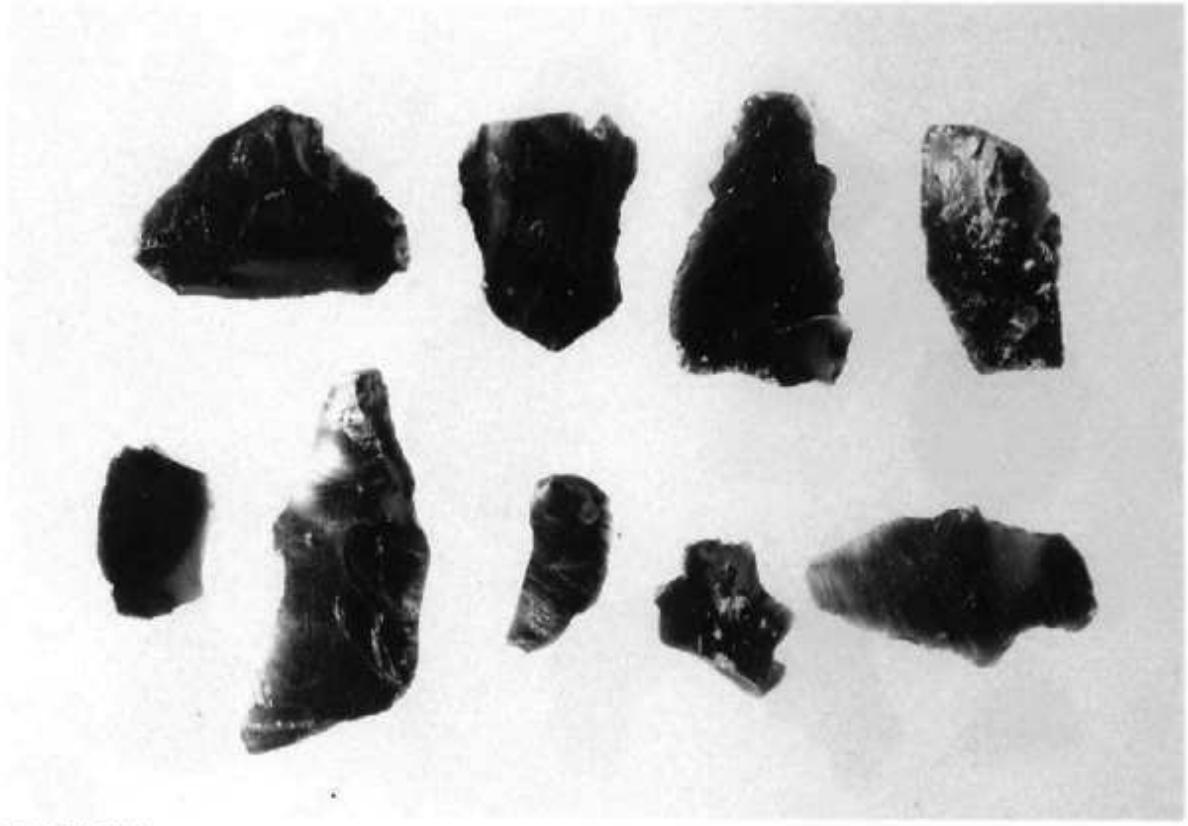


(1) その他の遺構出土掻・削器

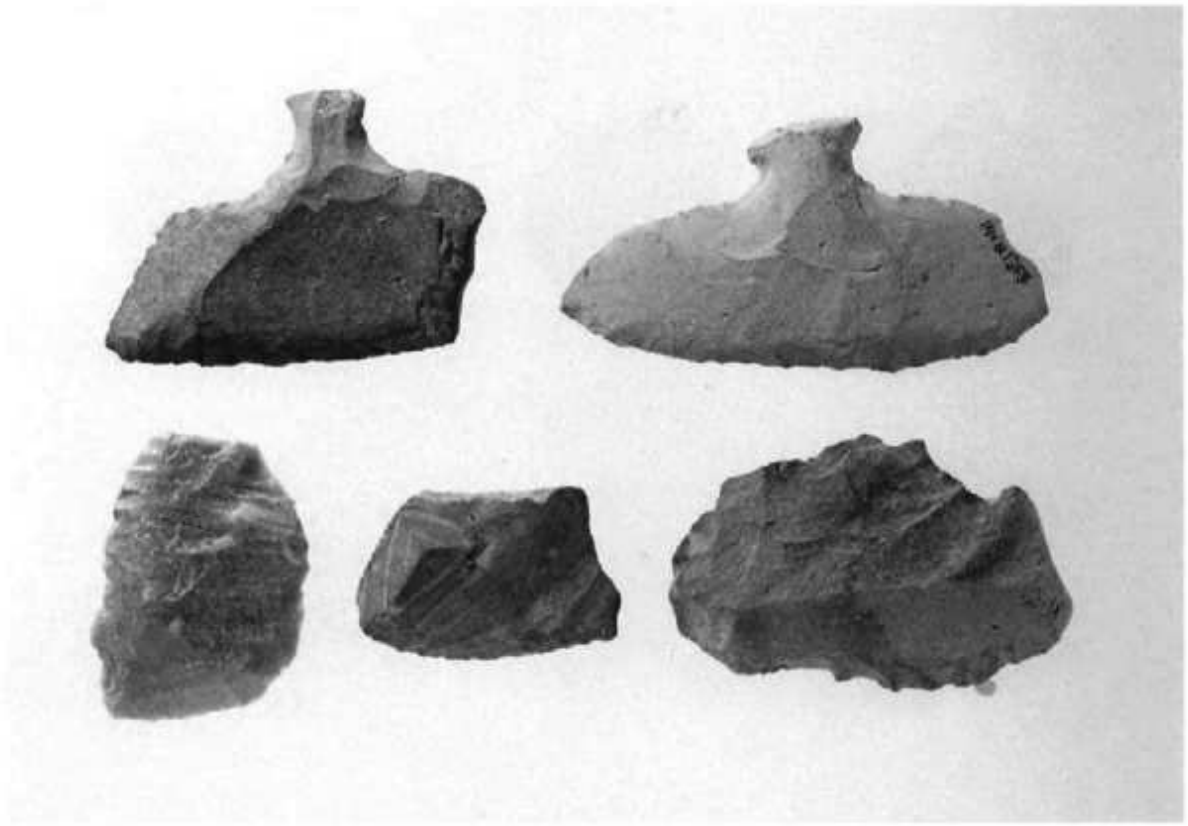
(2) 同上裏面



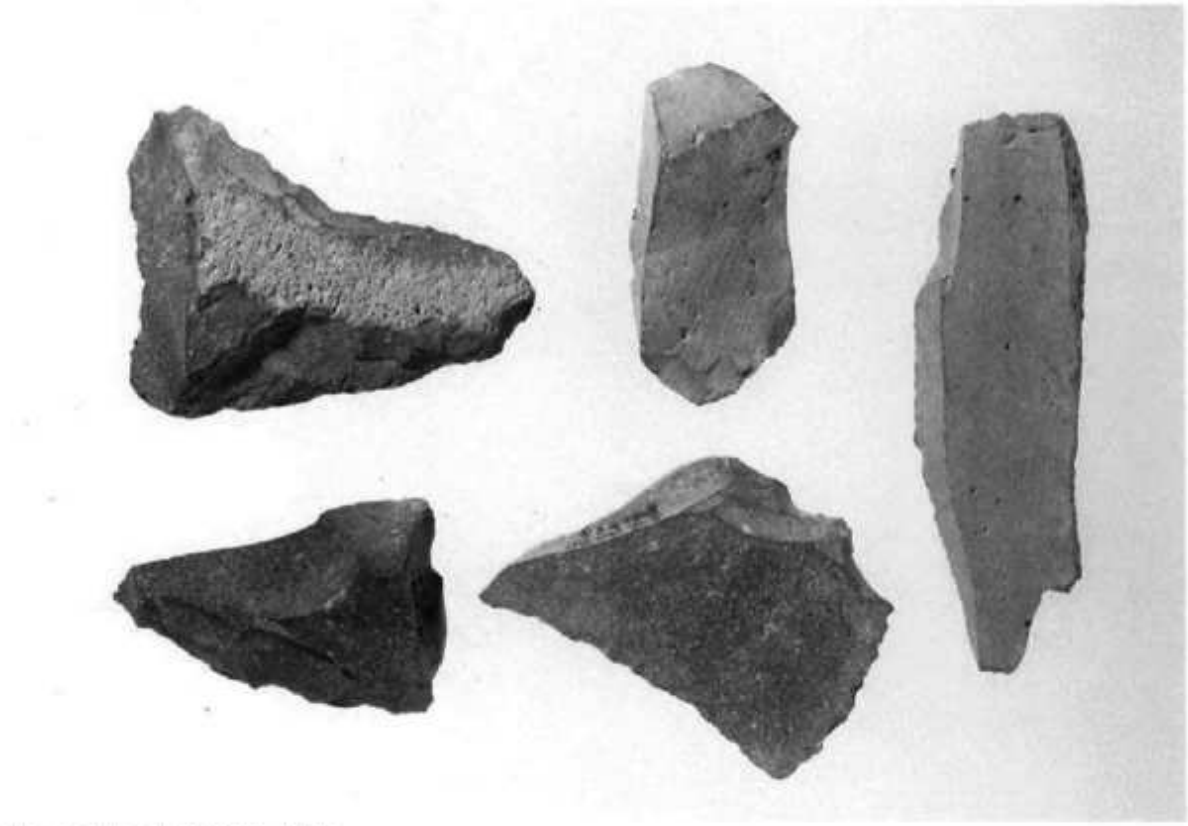
(1) その他の遺構出土掻・削器



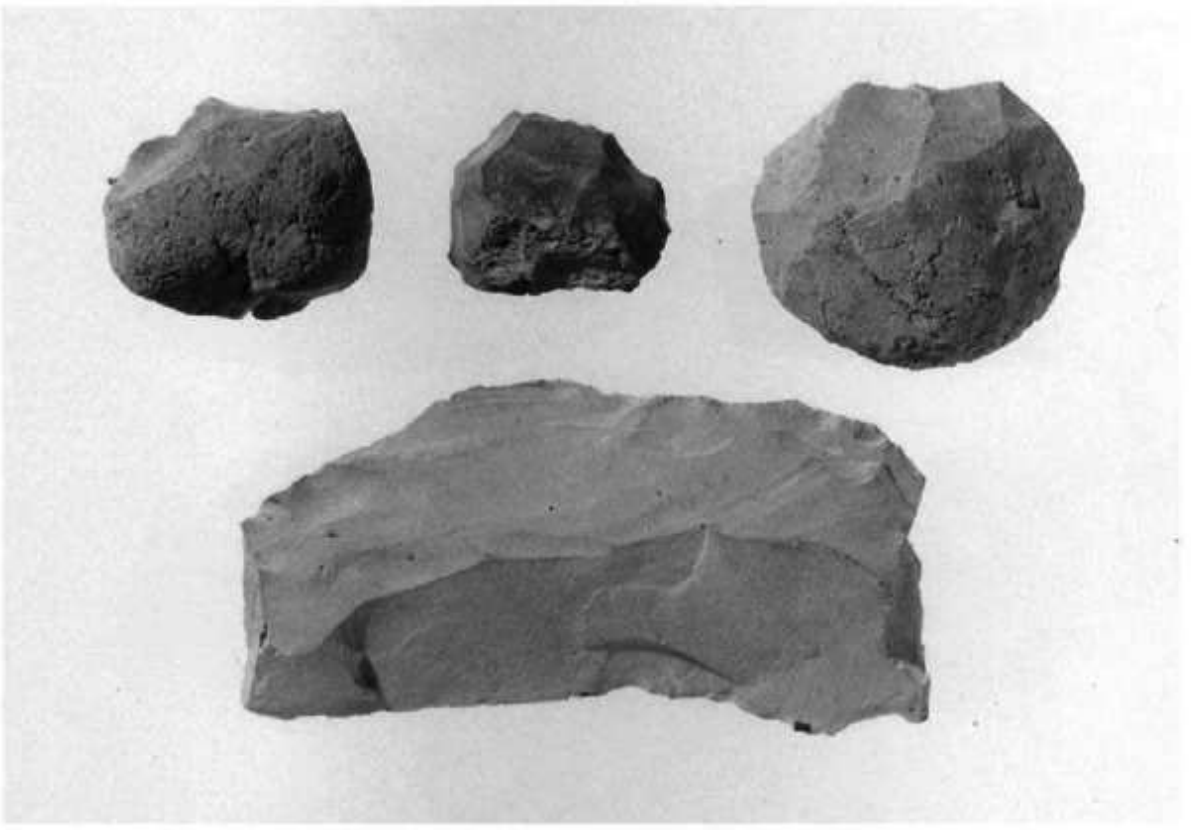
(2) 同上裏面



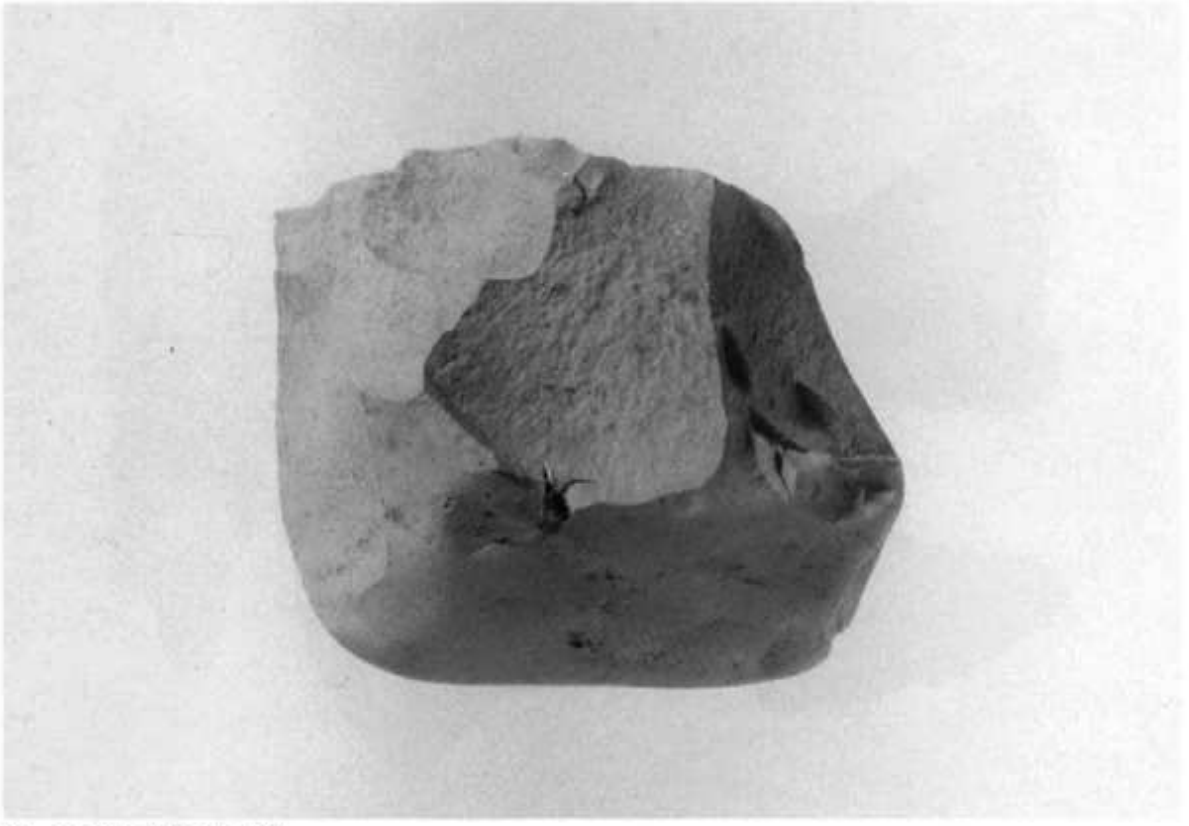
(1) その他の遺構出土石匙，掻・削器



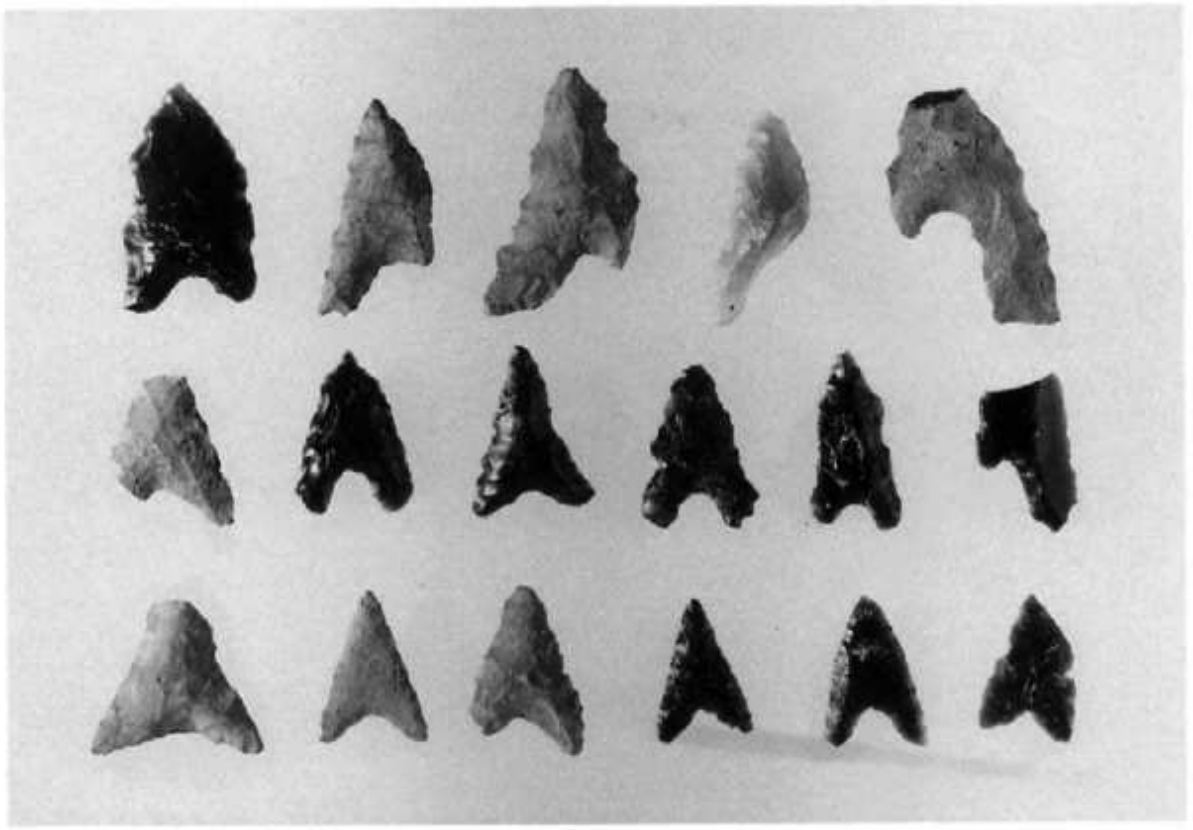
(2) その他の遺構出土掻・削器



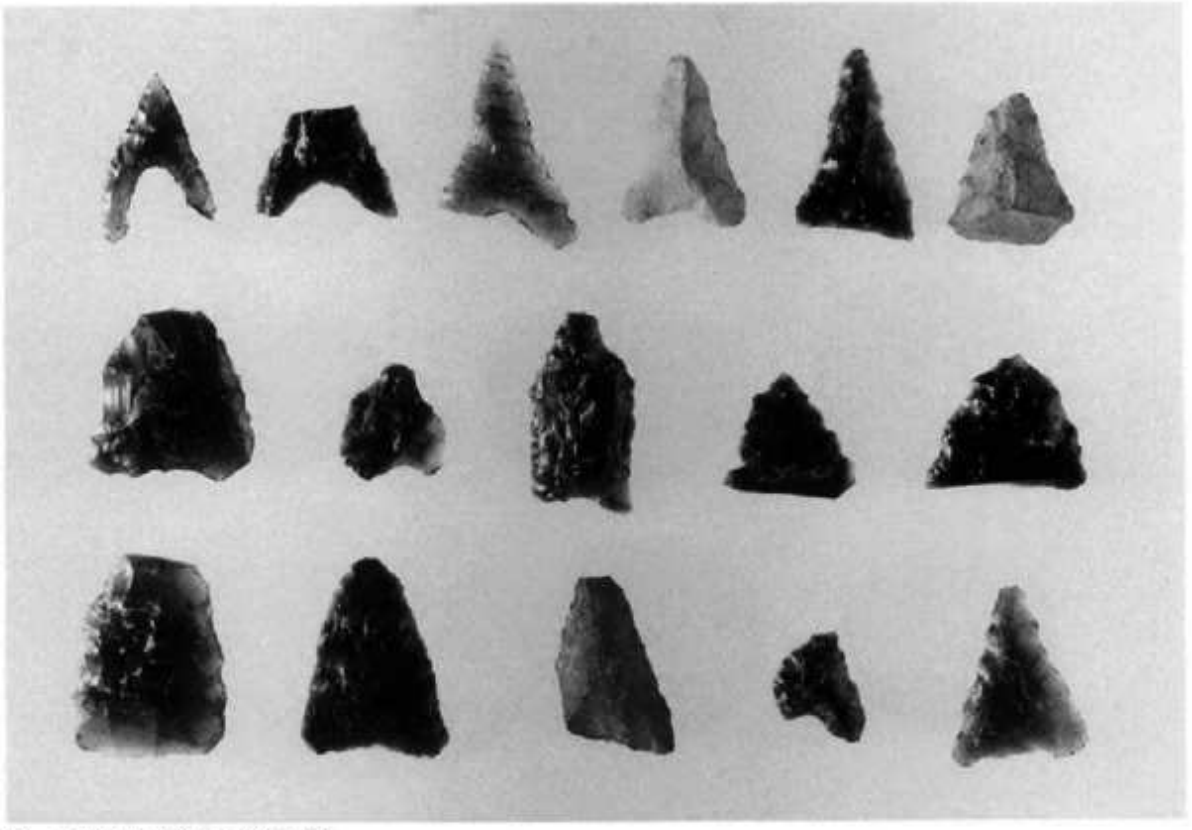
(1) その他の遺構出土削器・石核



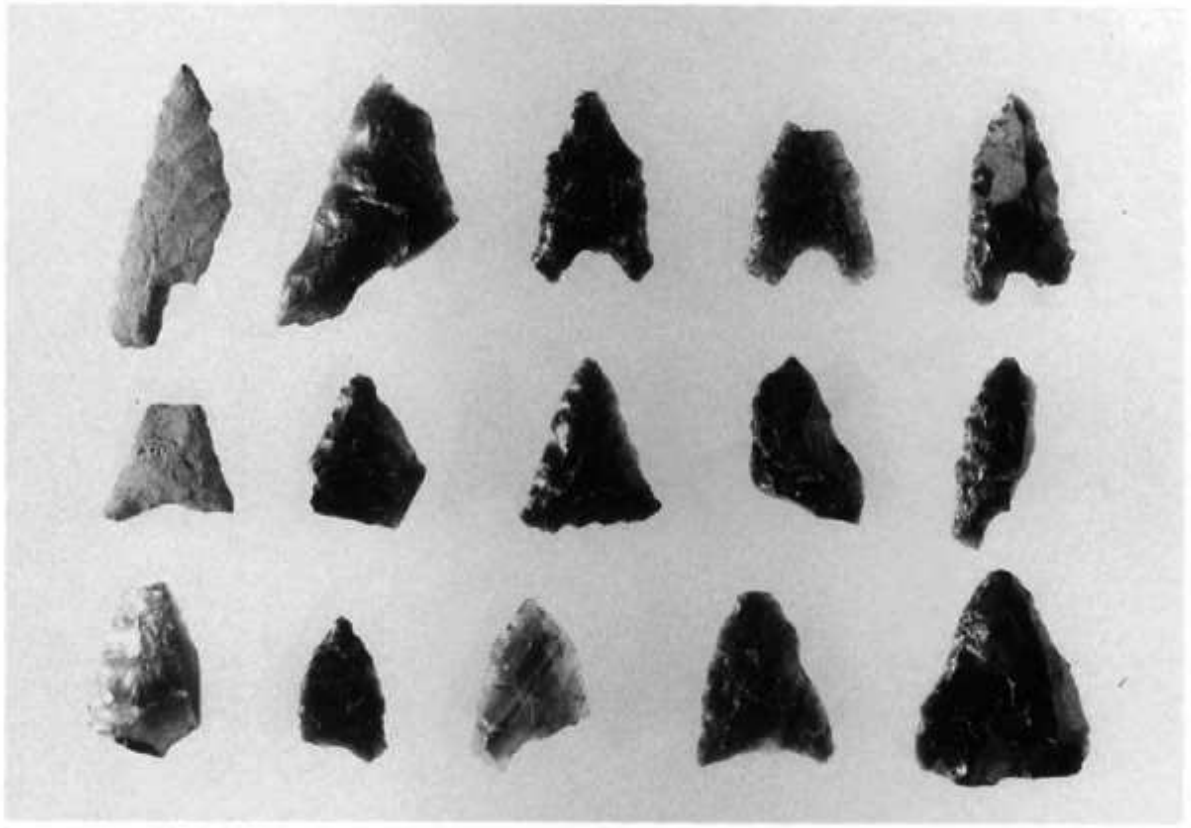
(2) その他の遺構出土石核



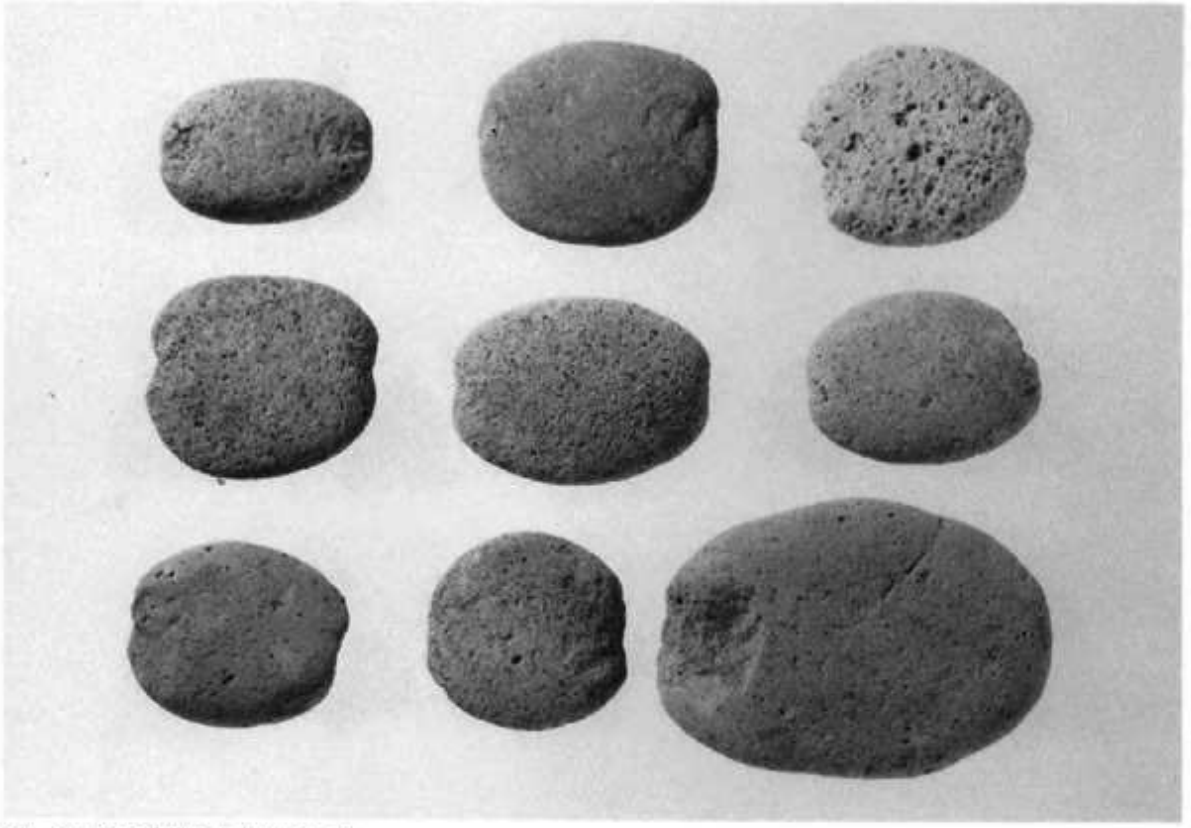
(1) その他の遺構出土打製石鏃



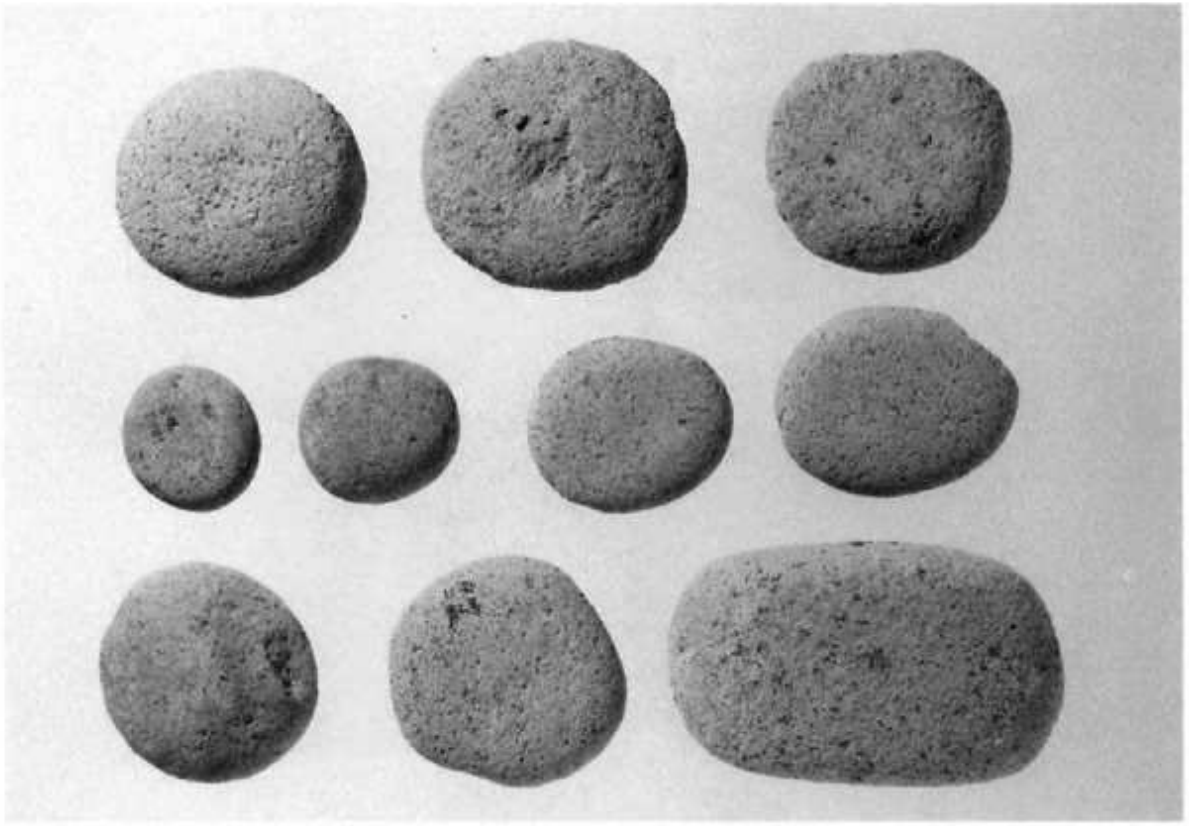
(2) その他の遺構出土打製石鏃



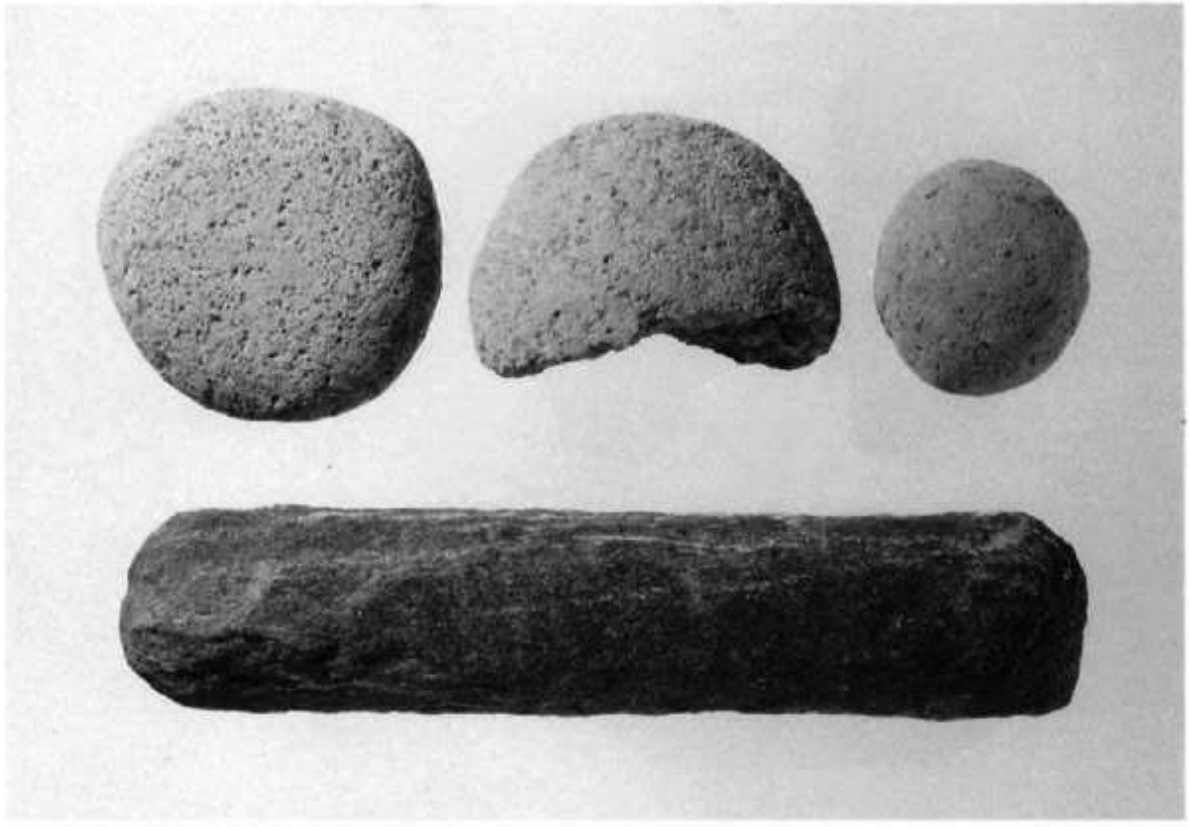
(1) その他の遺構出土打製石鏃



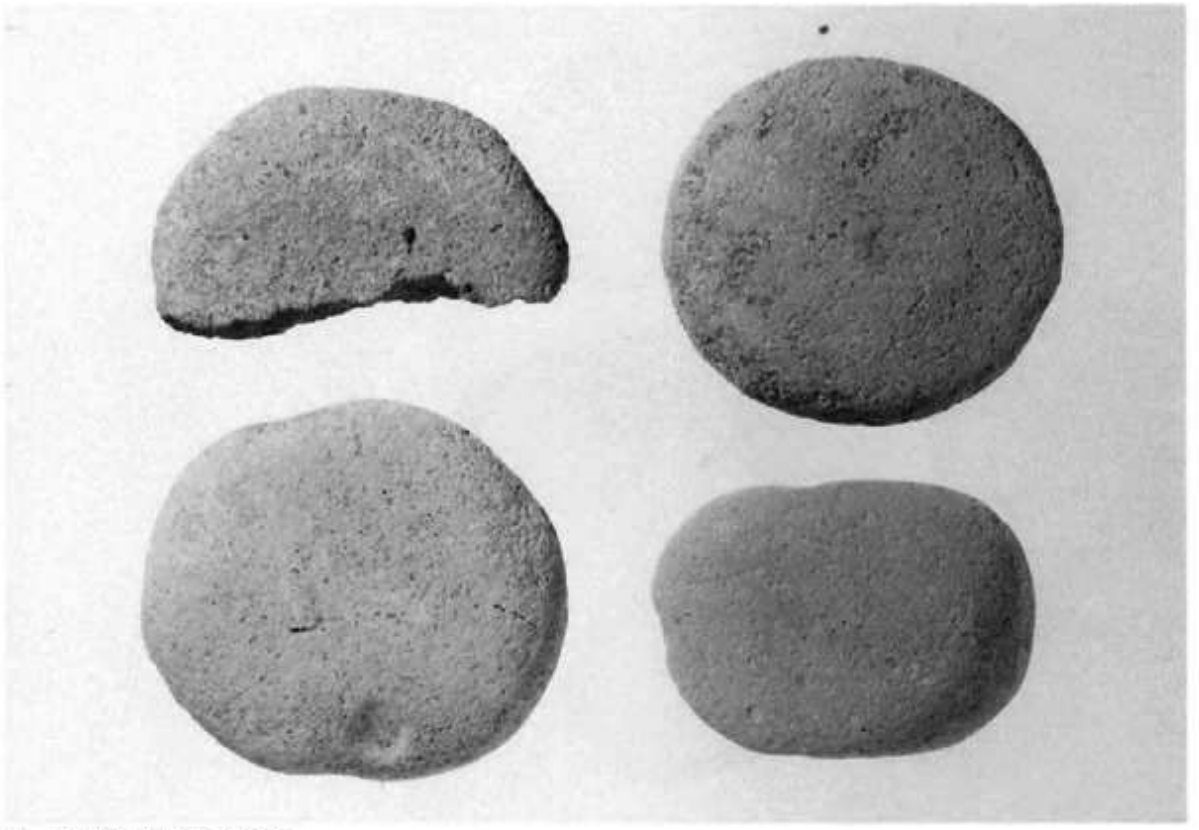
(2) その他の遺構出土打欠き石錘



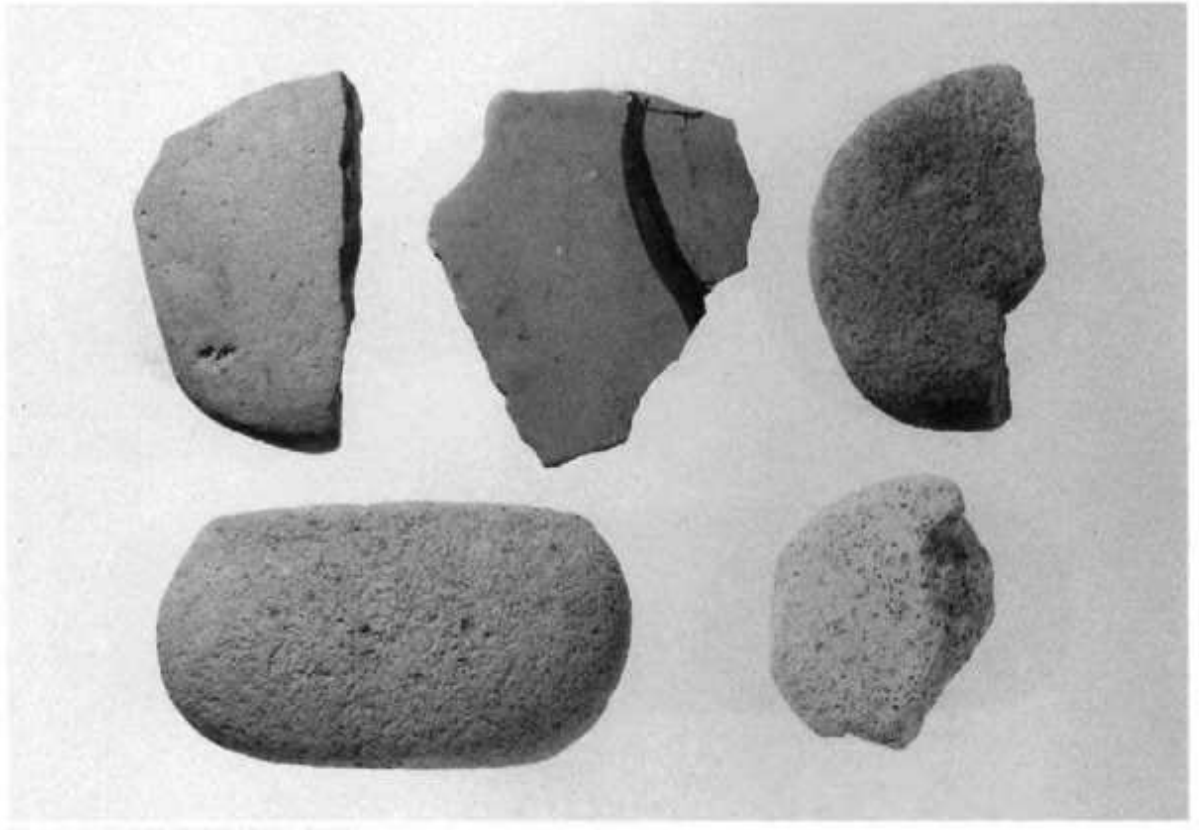
(1) その他の遺構出土凹石・磨石



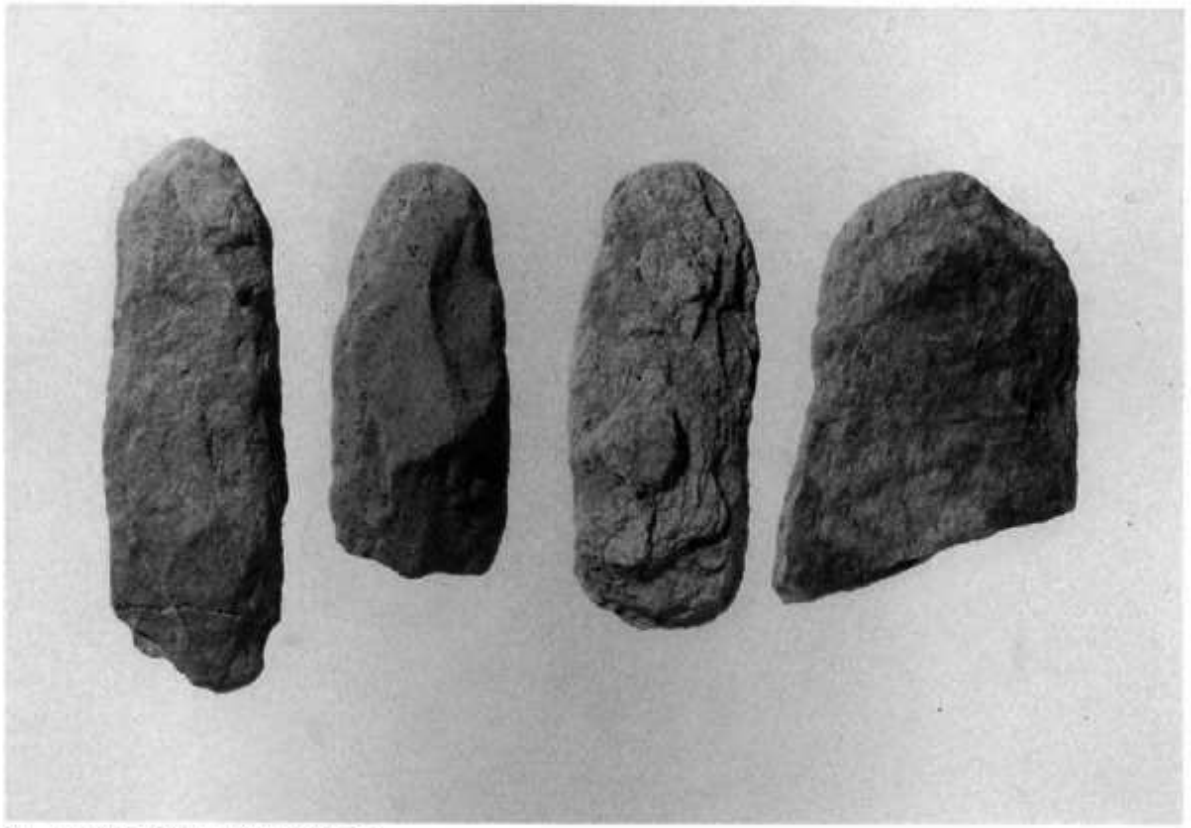
(2) その他の遺構出土磨石・敲石



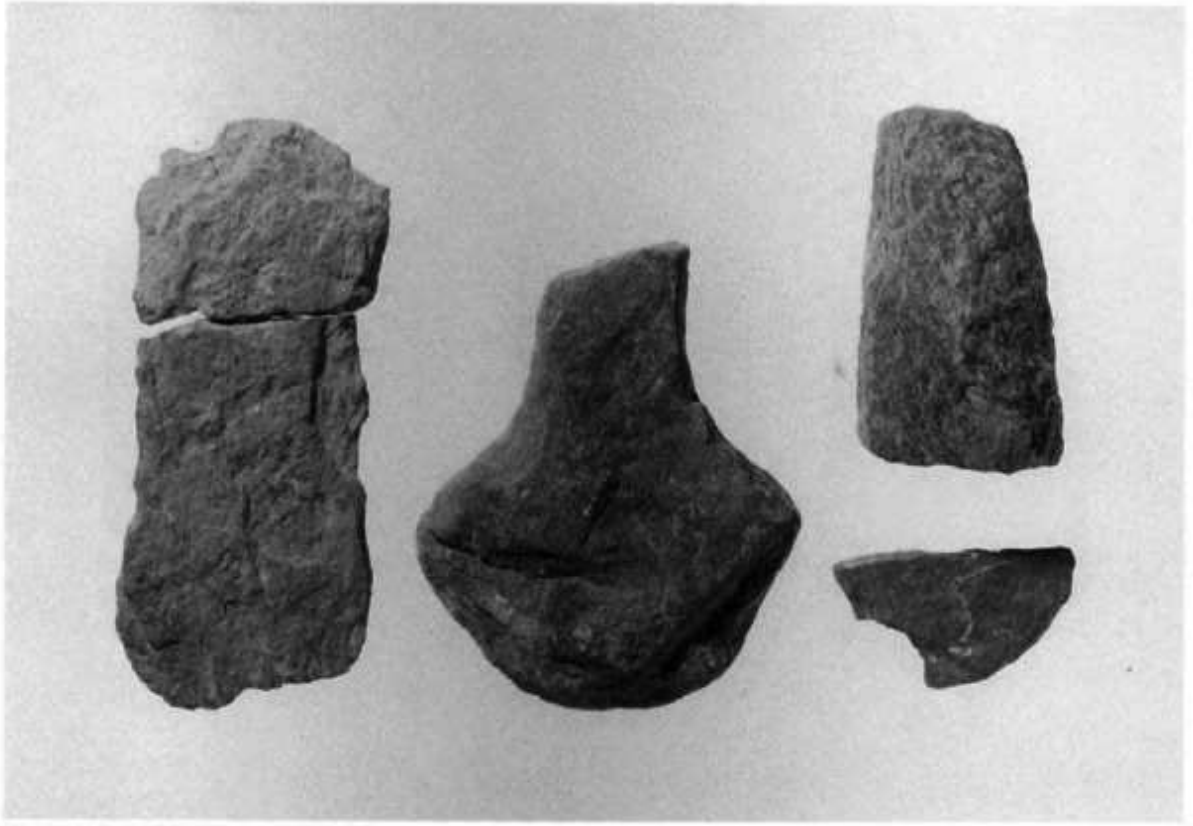
(1) その他の遺構出土磨石



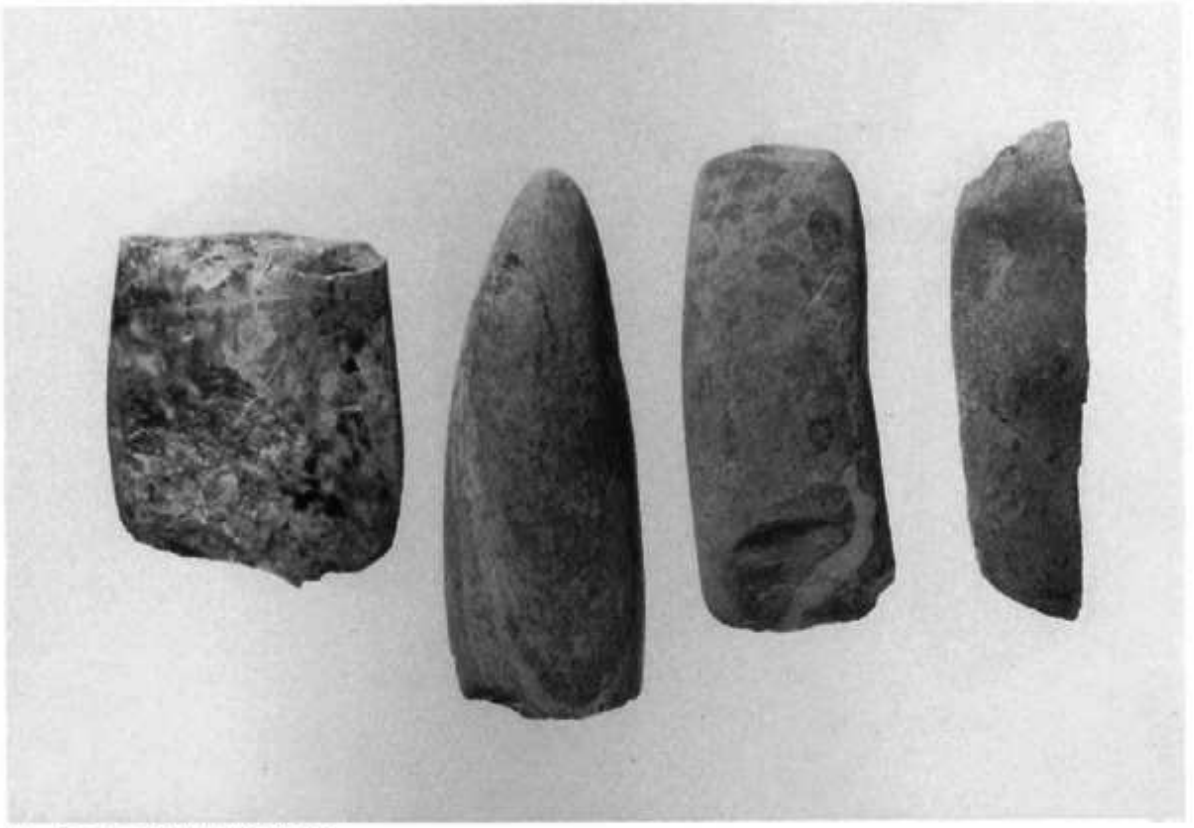
(2) その他の遺構出土磨石・砥石



(1) その他の遺構出土偏平打製石斧



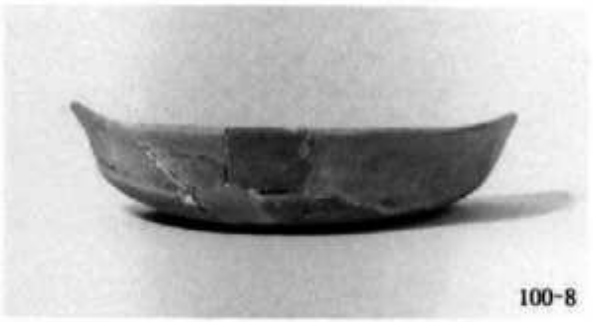
(2) その他の遺構出土偏平打製石斧



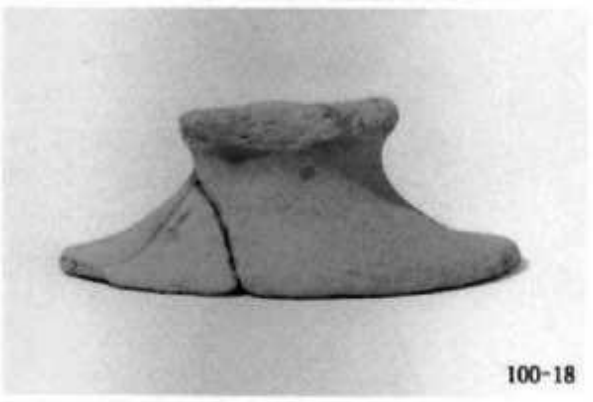
(1) その他の遺構出土磨製石斧

(2) その他の遺構出土磨製石斧・砥石

89-4


100-8

94-3


100-18

97-1

110-8

97-9

110-6

第1・3・5・6・11号住居跡出土土器（右下番号はFig.の番号）

113-4

131-10

123-13

134-5

131-5

134-4

131-11

135-1

第15住居跡、第１号掘立柱建物、第２・４・５号土壙出土土器

139-2

141-6

141-7

141-8

142-6

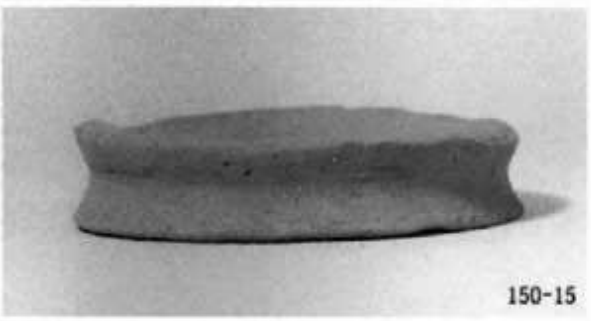
144

第10・12・13号土壙出土土器

146-15

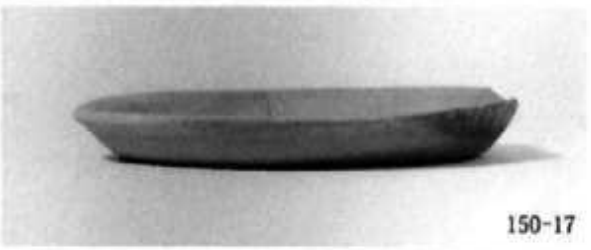
187-4

146-13

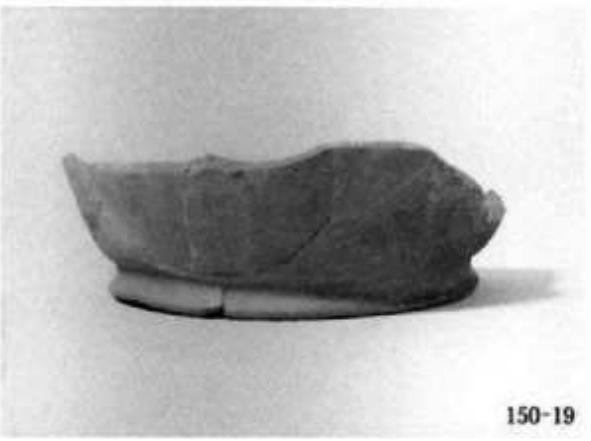

150-15

146-12

150-16


150-17

148-41


150-19

第14・15・17・19号土壙出土土器

155-8

154-5

154-3

154-2

155-11

154-1

第21号土壙出土土器

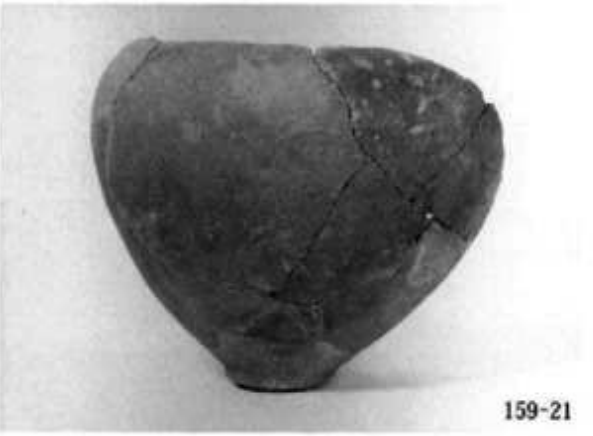
154-7

155-9

158-10

159-16

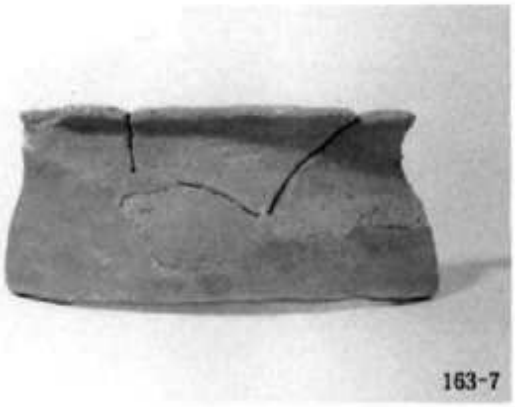
158-1


159-21

158-2

163-2

第21・23・24・26号土壙出土土器


163-7

163-5

163-4

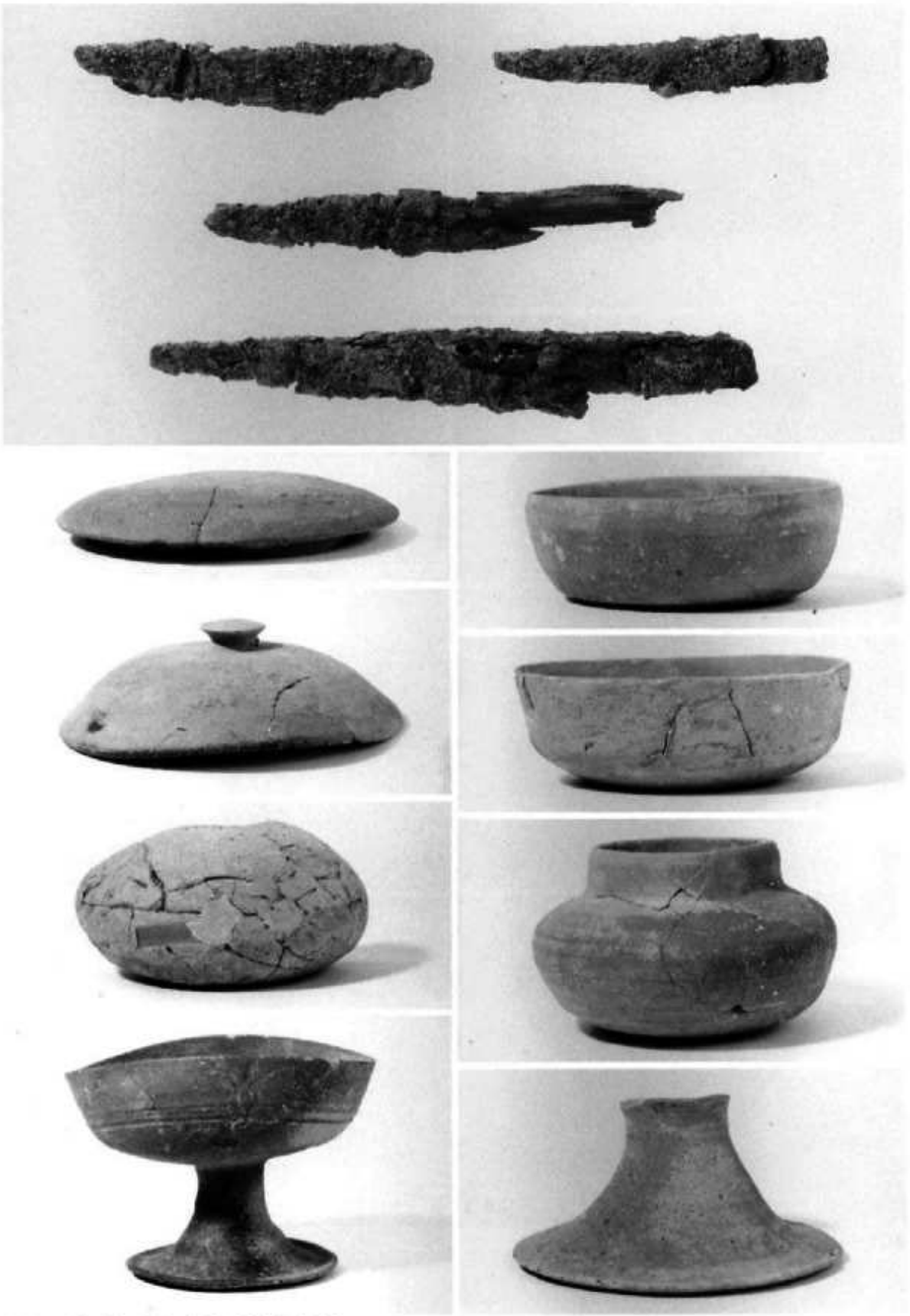
165-3

165-1

165-7

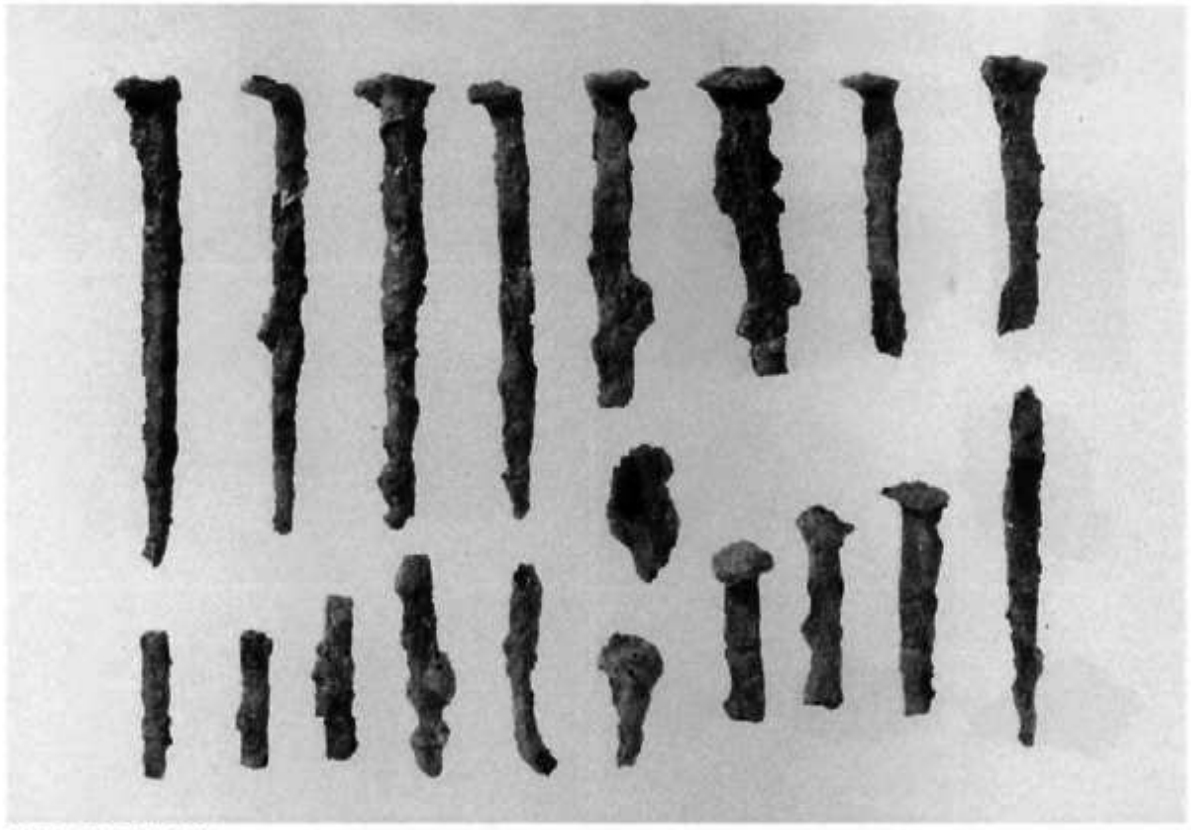
168-7

第27・29・32・36号土壙出土土器



C１・２等出土刀子，中原１号墳出土土器

中原 1 号墳出土鉄鏃



中原 1 号墳出土鉄釘

その他遺構出土土器・石剣・石庖丁・鞴の羽口・鉄滓・土錘・紡錘車・玉類
右下は治部ノ上A１号石蓋土壙墓出土管玉

(1) Ⅱ区発掘調査状況

(2) 発掘調査のオールスタッフ

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 10	登録番号 8

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

—54—

下巻

平成11年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　赤坂印刷㈱
福岡市中央区大手門1丁目8番34号